
グッラブ！

中川 健司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グッラブ！

【NZコード】

N5728E

【作者名】

中川 健司

【あらすじ】

山の麓にある小さな町、神乃崎に住む16歳の少年、やまなかけんと山中健斗の家に、同じく16歳の女の子、おおもりれいな大森麗奈が、ある事情で居候することになった。中々受け入れようとしない健斗と麗奈の遠い距離。16歳の心情を映した、青春のGood Loveな物語をぜひ読んでください。支えてくれる人が傍にいてくれる。それだけで人は、強く生きることが出来る……

50万アクセス数を突破いたしました ありがとうございます！

第1話 嬉しくなって出会い（前書き）

第1話あらすじ

16歳の少年、やまなかけんと 山中健斗の元に、ある一人の女の子がやってきた

女の子の名前はおおもりれいな 大森麗奈。

とても元気の良さげる性格に、戸惑う健斗……

「の団を境に、健斗のG o o d Loveな物語が始まる

グッラフ

本編の主な登場人物

やまなかけんと 山中健斗

本編の主人公。少し無愛想なところがある、神乃崎高校に通う一年生。突然健斗の家に麗奈が居候することになり、かなり戸惑っている様子……彼には実はある過去があつて……？

大森麗奈……本編のヒロイン。かなり元気がよく能天気なネコ型娘。健斗の家で居候することになり、その独特なリズムで健斗と深く絡んでいく。

真中ヒロ……健斗の幼なじみ。お調子者とは云いつのじとと言わんばかりのやつ。麗奈に会って思わず一目惚れするが……

早川結衣……健斗と同じ学校、そして同じクラスの女の子で、健斗の意中の人。とても優しく、周りの子にも気配りが出来る。

佐藤愛美……通称「マナ」。ちょっとガサツな面のある元気いっぱいの女の子。ヒロとのコント並みの絡みが好評。

第1話 嬉しくない出会い

五月になつても、この辺の地域は少し気温が低くかった。しかし全然半袖で過ごせる気温ではある。ブランケットを体にくるませるようとにかく、ベッドの上で健斗はぐつすり眠つていた。

静かに寝息を立てて、ブランケットにきちんとくるまつてはいるが、シーツは乱れていて、机の周りには雑誌だの教科書だのが山積みになつて置かれている。

しかし机の上はきちんと整理されている。といつのは、昨日の晩に片付けをしていたのだが……どうやらその途中に眠気に負けてそのままベッドで眠つてしまつたのだ。

机の横にはギターケースが一個ある。そして棚の上には古くて小さなテレビにラジオもあった。

もう朝と呼べる時間は過ぎているが、健斗は全く起きる様子を見せていなかつた。

最近、何かと疲れてるためである。高校の授業は難しくてつまらないし、朝早く行かないと学校には遅刻する。毎日毎日、同じような感じだつたけど、それが逆に健斗に疲れを感じさせついた。

そして今日は久しぶりの休日。だから今日はかなり眠つていいたい。何なら、このまま永遠に眠つてもいいくらいだ

部屋の外からは小鳥のさえずりが聞こえる。

昨日から開け放しにしてた窓から心地よい風が吹き込み、緑色の

カーテンを揺らしていた。

するとじだつた。

「ちよつと、健斗～？」

部屋の外から大きな声がした。と、思つたら突然ドアが開き、廊下から母さんが雑な動作で、ずかずかと部屋の中に入ってきた。

健斗の癪に触る甲高い声で、健斗が嫌がるように耳頬く怒鳴つくる。

「起きなさいよー。今日が何の日か、あんたも知つてゐでしょつ？」

その煩い怒鳴り声を聞いて、さすがの健斗も田を覚まし、薄々と眼を開けた。しかし健斗はわざと聞こえない振りをして、母さんの言葉を無視するように背を向けた

「起きなさいー！」

と言つて、母さんは無理矢理ブランケットを健斗から取り上げてきただ。

それをされると、心地よさが一気に消え失せた。健斗は「ううん」と息を大きく吐く。ゆっくりと起き上がり、仁王立ちする母さんを睨みつけた。

「……何で起こすんだよ」

健斗が眠そうに田を「すつながら不満そつこいつ」と、母さんは呆れ

るよつに大きくため息を吐いて言つた。

「だから、今日が何の日かあんたも知つてゐるでしょ？」

今日が何の日……？

確かに……知つてゐる。今日がどういつ日なのか。そして誰がやつてくるのか。知らないわけがない。

けど……

「俺には関係ない。俺は……賛成したわけじゃない……」

健斗がそう冷たく言い放つと、母さんは呆れ返るよつにため息をついた

「あんたは……新しい家族が増えるのよ？嬉しいことじゃない。」

「何が家族だよ。所詮は他人だろ？嬉しくも何ともないし、むしろすげー迷惑。」

健斗はそう言つと、興味なさそつにまたゴロンとして横になつた。すると母さんの怒りがついに頂点に達したらしい。母さんは健斗に向かつて、大きな声で怒鳴りつけた。

仕方なく、渋々健斗は母さんに起こされた。かなり不機嫌な様子で外出用の灰色のパーカーと黒いジャージに着替え、一階に続く階段

を降りていった。

「何で俺が……」

心の中で愚痴を言つものの、母親にこれ以上言つことを聞かなかつたら、今晚の晩飯は抜きだ。と言われては動かざるを得ない。

これから健斗は、車に乗り込み、ある人を迎えて行く。迎えに行くと言つてもそんな紳士的なものじゃない。もちろん嫌嫌で、むしろ非常にうんざりとしている。歓迎の意志などひとかけらもない。

その話を聞いたのは……一週間くらい前のことだった。

母さんと父さんに呼ばれて、突然その話を聞かされた。来週の休日に、この山中家の元へ新しい家族がやって来るということ……

母さんの言葉に我が耳を疑つた。突然過ぎて頭が大混乱をした。しかし、そんな健斗の反応をまったく気にせず母さんはゆっくりした口調で繰り返してきた

「だから、来週くらいにね、家に居候が来るの。女の子よ。」

意味が分からない。一体何故?

その2つの間に健斗は板挟み状態となっていた。話のプロセスが全く読み取れない。親戚の女の子が遊びに来るところのならまだわかるし、それなら健斗も分別がついただろ。

だが今言っている話は全く関係ない。都会からやってくる赤の他人がわざわざいんな田舎こ、せらに山中家に“居候”するのだといふ。しかも、相手は女の子だ。

「ちょっと……ちょっとと待つて？ 何？ 何かの[冗談]……だよな？」

健斗が焦る様子を全面的に見せながらそつ聞き返してみる。しかし父さんと母さんは顔を見合わせて、呆れるようにため息を吐いた。

「何で[冗談]でわざわざいそなこと話つのよ。」

「麗奈（れいな）ちひか（ちひか）んだよ。来週からひひでじひばりへ一緒に暮（暮）りす」とことなつた。」

母さんと父さんは全く冷静な態度でそう言つてくる。そんな態度とは反対に健斗の頭は大混乱の渦が渦巻いていた。

「名前なんかどうだつてこよつー！ 何で？ どうしてつー！？」

健斗は少し憤りを感じたように言つた。すると健斗の問いかけに、母さんは順を追つて説明してきた。来週から、東京に住んでいた女の子がある事情により、この神乃崎の町に来るらしい。

そこで頼る当てはこの山中家しかないところ。ところの、じつやあその女の子の両親と、山中家は密接な関係があるとか……詳しく

はよく知らないが、とにかく全くの赤の他人同士ではないということ。

そのためこっちの町で暮らす間、何と我が家でいつしょに暮らすらしい。つまり居候として我が家に迎えるということになる。

女の子といっしょに住むことになるなんて考えたこともなかつた……。やつ、小学生のときにはまったく「ウォーターボーグズ」のドラマのようだ

いやあれば男の子が田舎に来て、女の子の家に居候するという形だつたのだが、どちらにしたつて何も変わらない。

この「神乃崎」^{かののさき}は、山の麓にある町で、自然豊かに囲まれた小さな田舎町である。

しかしこんなところに、東京者が来るなんて……まあそこまで驚くようなことじやないけれど。でも滅多にいないだらう。隣町から越してくることはあるだらうが、数十キロも離れた町……健斗もイメージとしてしかしらない大都會である東京から、その女の子はやつてくるのだ。

健斗にとつては当然最悪のことだつた。男ならまだいいかもしけない。しかしょりによつて居候に来る子は女の子だ。そんなことは大反対だつた。

当然性別が違うのなら、その間には色々と面倒事が付きまとうに決まつてゐる。お風呂だつたりトイレだつたり、着替えだつたり……。全て性的な問題かもしけないが、やはりそういう部分が一番重要だ。健斗は他人に対して色々と気を遣うのは苦手な性格だ。

だからそれを踏まえて、健斗は田の前の母さんと父さんに向かって、ひっくり返つてしまつほど卓袱台を叩いて大反対した。

「お、俺は絶対嫌だぞっ！絶対反対だからなつ！」

しかしこういう話は子供の力は無力に等しい。結局何も出来ないまま、その女の子が来る日を迎えてしまつたといつわけだ。

健斗は玄関で靴紐を結びながら大きくため息を何度も繰り返していた。

「…………もう嫌だ…………本当に嫌だ…………」

「嫌々言つてないで早くこきなさつ！」

母さんがどんつと仁王立ちして、健斗にそう言つた。その言葉や態度を見て、健斗の不満はさらに募る一方だった。

「つーか何で俺まで迎えに行くんだよ？父さん一人行けばいいじゃん。」

靴紐を結び終わり、健斗は立ち上がりながらそつと立つた。すると母さんは凛とした偉そうな態度で物申してくる。

「お密さんを迎えて行くのは人として当然ですっ！」

「何がお密さんだよ。さつきは家族だつだつて言つてたくせことを

……

「つべこべ言つてないで早く行きなさい。」

「チエ……」

健斗は軽く叩打ちをして、かなり不機嫌で家を出ていった。

家を出ると、砂利が敷き詰めた道を通った。そしてその家の前には一台の車がとまっている。その傍で煙草をふかし、煙を吐きながら父さんが立っていた。

健斗に気がつくと、煙草を携帯灰皿にしまった。

「やつと来たか。」

健斗は父さんの言葉を無視した。明らかに不機嫌だとこいつことを全面に出して、健斗は車のドアを開け、雑な動作で後部座席に乗り込んだ。

「不機嫌だな。」

「当たり前だろ。何で俺まで……」

父さんも車の運転席に乗り込んだ。健斗は未だに納得出来ない気持ちを感じながら腰を落ち着かせてため息を吐いた。

「まあ、そういうなよ。女の子だぞ？女の子。しかも、ものすくく可愛いぞ。」

「あつそ。たいてい可愛い子ってのは性格が悪いよな。」

健斗がそういうと、父さんは何が可笑しいのか、プツと吹き出して高らかに笑った。

「カツカツカツ。お前もそういうことを言つよつになつたか」

父さんは車のキーをひねり、エンジンをかけた。そして車を発進させて、その例の女の子との待ち合わせ場所へと向かった。

車は一本道を通り、しばらくするとコンクリートの道へと変わる。車道を走り真っ直ぐ駅の方へと向かつ。二つ目の道は、建物が比較的多く建つところに出る。

健斗が高校に通うと、この道を使つ。ここから4、5kmくらい離れていて、そのさらに先に行くと駅がある。

父さんの話によると、女の子とはその駅で待ち合わせているらしい。

神乃崎駅には、「神乃崎商店街」がある。さらに「神乃崎神社」という少し大きめな神社もある。毎年初詣で賑わうのが特徴だ。

父さんは車を走らせながら、健斗に言つてきた。

「麗奈ちゃんは、父さんの友達の娘さんなんだ。確か……10年前だっただけな、最後に会つたのは、6年前にも会えるかなつと思つたんだが、会えなくてなあ……でもまあ、小さこときから可愛い子だつたからなあ……今は凄い美少女になつてるんだろうな」

父さんは一人言を言つみた的にそつとつた。健斗の方はどうかと言つと、相変わらずまったく興味を抱いていなかつた。

でも父さんは構わず、その子のこと色々話してきた。

「とてもいい子だつたなあ。元気いっぽいで明るくて、娘のように可愛がつたものだよ。それが本当に娘になるんだもんなあ」

車を走らせていくと、次第に建物の多くなってきた。この辺になると比較的人も増え、車線には他の車も走っている。

もう少しで神乃崎駅に着くみたいだ。そう思つと、さりげに憂鬱になる……

「ちやんと愛想良くしろよ? ジゃないと怖がるからな」

「どうかな」

健斗は深くため息をついて、過ぎ行く町を見ていた

家を出発して、20分くらい経つと、ようやく神乃崎駅についた。車は駅近くの路上に停車した。すると父さんが腕にしてある時計に目を落とした。

「ちょっと早くつたな」

「何時に約束してんの？」

健斗が訊くと、父さんは背中を伸ばしながら答えた。

「11時半。来てるかなあ？」

車についている時計は、11時20分だった。確かに少し早かった。

「健斗、ちょっと見てきてくれんか？」

「はあ？ 何で俺が？」

「そのために連れてきたんだがな」

「嫌だ。面倒くさい...」

健斗がふてくされるように言つて断固拒否をす。父さんはそれを受けて呆れるようにため息を吐いた

「つたぐ……じゃあ、父さんが行つてくれるから、ちょっとここで待つてろ。」

父さんはそう言つと車から降りて、駅の方へと歩いていった健斗はさうに不機嫌にするよつこ、そして苛々を溜めながら大きくため息を吐いた。

やつてられない……

何だか少し自分の行いが子供じみてゐるよつにも思えたが、それでも女の子が家に入り込んでくるという現実を、どうしても受け入れることが出来なかつた。

眠るつもりはなかつたけど、ただこつしていたかった

こつして眼をつぶつて心を落ち着かす。

今日の一日の流れでも考えよつ。

まず帰つたら昼飯を済まし、部屋の整理整頓を済ませる。

そしてその後、CDレンタル店に借りたCDを返して行つ。そしてしばらぐの間、辺りをぶらつこいつか……

そうだ、そうしよう。しばらく家から離れていいよつ。その間父さんと母さんが、勝手にその女の子の面倒でも見てるはずだ。

健斗がそんなことを考えていたところだつた。

ふと窓の景色に父さんの姿が見えた。駅のホーム辺りから誰かといっしょに車に近づいてきた。少しだが、声が聞こえた。

「健斗も車に乗つてゐるんだけ……悪いが仲良くしてくれ

「はー」とこひよつ、わわわわすみません。迎えに来てもうひつわやつて

耳に残る暖かい甘い声、そしてその姿……それを見た瞬間、健斗はさらに不機嫌になつた。すると父さんが車の後部座席のドアを開けた。

「失礼しまーす」

軽快で明るい声といつしょに、ふと甘い香水の香りがした。そしてサラッとした長い少し茶色のかかつた栗色の髪……

可愛らしい小顔に、はつきりした瞳……長い足……服の上からも分かる豊かな胸……

その女の子は、ゆつくつと後部座席に座つた。するとその女の子は健斗を見てきた。健斗は少し戸惑つ様子でその女の子を見返す。

整つた顔立ちが可愛いらしく……確かに……父さんの声の通り……一般的にはめちやくめや可愛らこんだと思ひ……認めたくないけど。

「……こんにちわつー!」

その女の子は元気な声で、健斗に笑いかけてきた。健斗は突然の声量に胸を驚かし、何も言ひ返すことが出来ず軽く会釈をしかえした。

その女の子はこつこつと可愛らしい笑顔を見せながら言つてきた。

「初めましてつ！私、大森麗奈おおもりれいなといいます。あ、名前で呼んでくれて構わないよ？」

何だいきなり……

いや、自己紹介なんだろうけど……それでも遠慮というか奥ゆかしさというか……そういう品性らしいものが微塵も感じられなかつた。見た目はこう、お嬢様つ！て感じなのに、どうも勝手が違うらしい。

「君は？」

名前を聞かれたので健斗は、戸惑い気味で答えた。

「え……あ……や、山中……健斗だけど」

「健斗くんねつ、よろしくつ」

と言いながら、にっこりと笑つてきた。しかし健斗の方はまつたく笑いもせず、ブイツと顔を剃らす。するとそんな健斗を見ながら、クスクスと笑つてきた。

「……何だか、スッゴク普通なんだね」

普通と言われて力チソと頭にきたが、健斗は何も言わず、ただ窓の外を眺めていた。

普通で悪かつたな……普通で……

すると父さんが運転席に乗り込んできて、すぐに後ろを振り向いて麗奈に笑いかけた

「ここへ、母さん」無理矢理起しだれて機嫌が悪いみたいなんだ」確かにそれもあるが、もちろんそんなの一パーセントくらいこの割合しか占めていない。

「フフフ、何か子供みたい」

またそう笑われて、健斗さらにカチンときた。せっかくから小馬鹿にするような言い方をしてくる。でも、怒鳴る氣にはならなかつた。あまり関わるのは「メンだ。最初から言つてゐるが、馴れ馴れしくするつもりは全くない。

しかもこの性格……普通なら少し緊張でもして欲しいものだ。元気過ぎてむかつく……健斗にとつて、大森麗奈は苦手なタイプだとそう判断した。いつもキャラピキャラピした性格は……無理。おじとやかで緊張していれば、まだ可愛いらしさと想い、氣が変わっていたかもしねえ。

しかし初対面のやつ」こせなり頭に来るよつな」ことを言つてくる……むかつく……

「これからこつしょに住む」になるけど……よしへね?・健斗くんつ

「……よしへくお願こしまーす……」

突然過ぎて、あまりにも自然に溶け込んできた……これが健斗と麗奈の最初の出会いだった。

ここから、健斗の日常が少しづつ変わっていくのだった

「…………」

健斗は顎を手に乗せながら、麗奈のことをじっと見つめていた。呆れるように、まるでこの世において奇妙な生物を見るかのように、麗奈のことを見つめていた。

最初から感じていた。最初に見て、最初に喋ったときから……

「こいつ……全然訳分からん……」

「初対面の相手の前で寝るか？普通……」

健斗は麗奈を見ながら、ボソッと呟いた。この奇妙な美少女は無防備にも、可愛らしい寝顔を見せていた。車を走らせて父さんと話をした後、十分くらいすると次第に目を閉じてすやすやと眠り始めたのだ。

「一体何なんだらか……こきなり人のことバカにしてきたり……

変なやつだ……

「こんなやつといつしょに暮らさないといけないのだろうか？」

「仕方ないさ。ここまで来るので半日以上かけてるんだぞ？」

父さんが笑いながらそう言つてきた。

「……どこから来たんだっけ？」

「東京だ。昨日の夜中から今にかけて来たんだ。長旅で疲れてるんだわうなあ……」

「あつそ……それでも普通寝ちゃう? 警戒心がゼロ過ぎんだり?」

「気が緩んだんだよ。それより、どうだ? 隨分と可愛いだろ?」

それを言われると、健斗は口を閉じてしまった。それは反駁できなかつたからだ。父さんの言う通り、大森麗奈はかなりの美少女だと思つ。学校にもここまで来るのはいるかいなか……

一番怖いのは、いつかこの可愛いことに気を許してしまつことである。それだけはダメだ。絶対ダメだ。

「うつこいつやつに限つて裏があるんだ。」

健斗は大森麗奈=裏がある=性格が悪いと勝手に決めつけておいた。すると父さんが可笑しそうに笑つて言つてきた。

「そんなことはないと思つけどなあ。まつ、お前も麗奈ちゃんを少しずつ分かつていけばいいわ」

「父もんだつてこいつの」と全部知つてんのかよ?」

「知つてるや。美少女だろ? 可愛いだろ? 寝顔が素敵だろ? あとは

「……」

「全部顔の」とかよ…… H 口親父……」

「カツカツカツ まあ、性格もすうぐこい子だから、安心しない。」

あつそつですか……と言わんばかり、健斗は不機嫌そうに鼻で息を吐いた……

それからしばらく経つと、車は家の前にいた。いよいよこの変なやつを家に連れてきてしまつたら、気が重くなつてしまつ。

父さんは家の敷地に車を止めた。そしてエンジンを止めて、車から降りる。

「健斗、麗奈ちゃんの荷物を運ぶから手伝ってくれ」

「ハイハイ……」

仕方なきやうに健斗は車から降りる。こつまでも愚痴を零していくも仕方ない。現実は変えようがないし、もうこの謎の生物をこの家に連れて来てしまつたのだ。切り替えを早くしなければ……

健斗は降りる前に麗奈を起しあつとする……が……

健斗は揺り起しあつとする手を止めて、麗奈をじっと見つめた。

「こつ熟睡してゐる……」

麗奈は寝息を立てて、すっかり眠り込んでいた。全く起きる様子が

ない。すると父さんが健斗に近づいて、麗奈の寝顔を見て微笑ましく笑った。

「もう少し寝かしてやれ。疲れてるんだから。」

「知るかよ。こいつにも手伝わせる。」

とは言つたものの、これほどまでに熟睡していると起こすのに気が引けてしまつ。しばらく考えたあと、健斗は舌打ちをして、麗奈を起こさず車を降りた。

健斗は車のトランクから、麗奈の荷物を持った。ずつしづと重量のある、大きなキャリーバッグを家の中へと運んでいく。

「一階の、空き部屋があつただろ? そこに運んでくれ」

「ハイハイ……」

健斗はゆっくりと荷物を抱えて、一階の空き部屋に持つていった。多分あの変なやつの部屋は元物置部屋のことだらう。

でも、この前家族で大掃除したときに、いらない物は整理が出来たから、残つた物は裏の倉庫に閉まつた。母さんがここを熱心に掃除してたから綺麗になつてゐるはずだ。

やはりその中に入ると以前とは見違えるほど綺麗になつていた。残念ながら、何もなく空っぽ状態だけ……

「綺麗だなあ」

健斗は荷物を置いて、空き部屋を見渡した。元物置部屋とは思えない広さに、綺麗さだった

この家は元々部屋が一つ空いてたみたいで、それを物置部屋にしたにすぎないらしい。

健斗は荷物を置いて、ふと気になつた点を見た。それは……押し入れだつた。健斗は恐る恐る、その押し入れに近づいた。

……押し入れも掃除してあるはずだ……

だがもしそれでいなかつたら、ずっと使ってなかつたんだから……もしかしたら蜘蛛の巣がいっぱいかもしない。

健斗はゆっくりと押し入れに手をかけた。そして恐る恐る開けてみる。しかし、何もなかつた。ちゃんと掃除されてるみたいだ。

健斗はほつと安心するようにため息を吐き、とりあえず居間へと向かおうと思つて階段の方へと向かう。

その階段を降りて、居間へ入るつとした。するとだつた。

「本当に可愛いくなつたわねー。スッゴク美人さん」

母さんの少し興奮氣味の声……

「そんなことないですか……それより……ありがとうございます。居候なんかさせてもうひりこになつちゃつて」

「何言つてんの？」麗奈は嬉しい限りなんだからつ

「何言つてんの？」麗奈は嬉しい限りなんだからつ

そんな会話を耳にしながら、健斗は居間へ入つていった。すると母さんと大森麗奈、そして父さんがちやぶ台を囲んで出して、座りながら話をしていた。

麗奈は健斗を見ると、にっこりと頬笑んできた

「健斗くん、荷物ありがとうね 私、ついつい寝ちゃつてたね」

と、言いながら「えへへ」と笑つた

えへへ～じやねえよ、と健斗が心の中で呟いていると……母さんがものすゞしい形相で健斗を見ていることに気がついた。父さんが健斗と田を合わせて頷いてくる。

健斗はコホンと軽く咳払いをした。

「イエイエ…… オキヤクサマニタインシテ、トウゼンゾコトヲシタマ
シタマリテ」
「デデス……」

慣れない敬語を使い、片言のよつとをう言つた。母さんの形相は收まらなかつたが、麗奈は可笑しそうにクスクスと笑つていた。

「あの……とこりで、飯は？」

昼飯を済ませて早く家を出たかった。健斗がそつとつと、母さんはゆつくりと立ち上がって言った。

「あう。ううと早にねじつまづか。麗奈りさとひかりまだでしょ。」

「まこーちゃん腰ペロペロなんやあ~

「……ちゅうとま……遠慮しないみな~

健斗は聞こえなことうごボンシと叫つた。するとやれさせ嬌じつひんにはじめ始めた。

「あひ、だいたい張り切つて作るからーうつと待つてね。」

「うやうまだ少し時間がかかるよつだ。健斗は飯が出来るまで、自分の部屋にこよつと思つて、腰間を後にしてついた。

健斗は一階に上がり、自分の部屋へと入っていった。そして、ドアを勢いよく閉めてベッドに寝転んだ。

正直気にくわない。大森麗奈……いきなりやつて来て、人のことをバカにして……この家に打ち解け込んでくるのが。

ちょっととは遠慮したり、気を遣つたりする仕草を見せて欲しいものだ。

健斗は不機嫌そうに立ち上がり、机の中から音楽プレーヤーを取り出した。

こんなときは音楽でも聞いてリフレッシュしよう、と耳にイヤホンをかけてまたベッドに寝転んだ。

最近自分の中でも、世間的にも流行つてこむ「AKB48」の曲を聞いていた。

「会いたかった~ 会いたかった~ 会いたかった~ Yes!君に~」

会いたくない人に会つてしまつたのだから、この曲は今の気分には不向きだ。健斗はそう考えて、イヤホンを耳から外した。

それにもしても、自分はちゃんとあの変なやつと暮らしていけるのか? ストレスがたまりにたまつて、いつか爆発しそうな気がする。

何せ今でもすでにスッ、ゴクいろいろあるから……

健斗は少し心を落ち着かせようと思つてゆっくじと田を開じた。そして再びイヤホンを耳につける。すでにサビの部分に入っていた。

好きならば好きだと言おつ。誤魔化さずに入らつて

ああいう可愛い子たちに言われても、妙に納得がいかない。みんなに可愛いければ、そりゃ誰にだって「好きっ!」って言えるだろう。何だか矛盾してるな……そんなことを思いながら、ぱちりと眼を開いた。するとだつた。目の前に麗奈の笑顔があつた。

「うわあっ!」

健斗はびっくりしてすぐに起き上がつた。心臓が飛び出るかと思つた。しかし、麗奈はクスクスと可笑しそうに笑つている。

「これでお相子だね!」

「は?」

「だつて、健斗くんも私の寝顔見たでしょ? 私も健斗くんの寝顔を見れたから満足!」

健斗はポカンと麗奈のことを見つめた。何が可笑しいのか、何を言つてゐのか……全然分からぬ。

「べ、別に寝てないし。というか……あの、勝手に人の部屋入らな

いでくれませんか？「

健斗が不服そうにそつとつが、麗奈はまったく健斗のことなんか気にしない様子で部屋を見渡していた。

「ふう～ん……いいなあ健斗くん。ずっとこの部屋使ってるんでしょ？」

「君もすぐに同じような部屋を使えますよ。分かつたらひわてどこの部屋から出て」

「でも結構散らかってるんだね～？」

「掃除中なんです。早く出て」

「ん～？」

と言いながら、麗奈は山積みになつた雑誌の前でしゃがんだ。健斗は何をしてるんだろうと思いつつ麗奈を見つめる。

「ムムム……ここが怪しいですな……」

「……何が？」

大森麗奈は健斗の方を向いて、ニヤニヤと笑いながら怪しい眼をしていた。

「UJの山積みの雑誌の中に、エッチな本があつたりしてえ～……？」

「バツ……なつ……そんなもんねえよつ！」

健斗は顔を赤くして叫ぶように言った。いきなりとんでもないこと

を言いやがる……しかし、大森麗奈はフフフと笑っている。

「隠さなくつてもいいのに……」

「隠してねえよつー俺はそんな男じゃねえーつーか早く出でけよ

」

「ん?」

麗奈は机の下においてある、奇妙な箱に手を触れた。

ゆっくりとそれを開けると、中には何がが……それは、多分靴だ。ただの靴じゃないとは思うけど……サッカーのスパイクだつた。まだ新しそうだが、少し傷や汚れが付着している。

「これ、サッカーのスパイク? どうしてこんなことに閉まってる

」

「それにさわるなつ!」

健斗が今までにない怒鳴り声をあげた。すると、さすがにその異様な怒り具合に麗奈は驚いたのか、それに従つてゆっくりとスパイクを元に戻した。

健斗は麗奈をにらみつけていたが、ふつと我に返つてきよとんとしている麗奈を見た。深くため息をついて気持ちを落ち着かせる。

「……それ……大事なものなんです。だから勝手に触らないでくだ

卷之二

「アーネストの娘」

麗奈は小さく頭を下げた。少し空気が重くなつたことに健斗は気がついた。決まり悪そうに健斗は頭を搔くと、ため息を吐いてベッドに寝こんだ。

「……ああ～！」

「今度は何つ？」

大森麗奈は健斗の机の横に置いてあるギターに興味を持つたのか、ギターの前に座りこんだ。

「健斗くんギター弾けるの?」

「……だったら？」

大森麗奈は手を合わせて、目を輝かせて、頬を赤く染めてなんとか興奮しているようだった。

「すごい。ねえ、何か弾いてみてよ？」

「...誰に？」

「もちろん私も」

やつは、と田舎つた。

「……丁重にお断りをさせていただきます。」

健斗はやつ言つと、興味なさそつに麗奈から視線を外し、また寝転んだ。すると麗奈は健斗に近づいてきた。

「えへ？ 何で何で？ どうして？」

「……」

「恥ずかしいから？ 下手だから？ ねえどうして？」

「……」

「もしかして…… 本当はまだ弾けないとか？」

「もひじやかしいつーちやんと弾ぬつーのつー。」

「えへ？ じやあなんで弾いてくんないの？」

「……俺は好きな人にしか弾いてあげない主義なんです。」

と適当なことを言つて、麗奈をあしらつ。健斗はまた横にゴロロンとなつた

まつたく…… 本当に口のひるむ女だ。黙つてれば可愛いのに……

「……好きな人にしか弾いてあげないの？」

麗奈がそう訊いてきた。別にそういうわけじゃない…… そんなかつこつけた理由があるわけないじゃないか。だが、面倒臭いので健斗

は適当に「ああ」と一言だけ答えた。

すると麗奈はそれを聞くと、「そつかあ～」と言しながら微笑んだ。

「じゃあ……健斗くんが私を好きになればいいんだよ

「……はい？」

健斗はガバッと身体を起こした。また突然意味の分からぬこと言つてくる。だが当の本人である麗奈は、これぞ名案だといつ頬をしていた。

「だつて健斗くん好きな人にしか弾いてくれないんでしょう？だつたら、健斗くんが私を好きになれば弾いてくれるつてことじゃない。」

「……あの……」

「うん？」

「一つ言つたことあるんだけど、いいですか？」

「うん。」

「あなたの話はわけがわからん。」

健斗はそう言い放つと、一以上相手にしてらんないと想い、立ち上がつて健斗の部屋を出た。がしかし、そのあとを麗奈が追いかけてきた

「え？だからさあ、ギターを弾いてくれるには私を好きになつても

「うわなわわ

」

「違うわー。やーじやなーつー。何なんだよー。あんたはーつー。」

健斗は逃げるよつにして階段を降りる。けど麗奈もその後をつこう。

「もしかして……健斗くんつてバカ?」

「……バカ?」

「カチン……

健斗は振り返つて思いつきり怒鳴つた。

「お前が言つなつ！」

また健斗の怒鳴り声に驚いて、麗奈はきょとんとして動かなくなつた。健斗は麗奈を睨み付けたあと、また前を向いて、居間へと向かつた。

「あら仲良くなつたの?」

母さんが居間から顔を出した。なんてタイミングで出てくんだこのオババは……

「お皿!」はとできたわよ。麗奈ちゃん食べてね

それを聞くと、大森麗奈はこつこつと笑つた

「はあ～い　いただきまあ～す　」

麗奈は嬉しそうに厨房へと入っていった。何でマイペースなやつなんだろ？。健斗のことなんてこれっぽつも気にしていない。

健斗ははあつと憂鬱そうに深くため息をついていた。

健斗は毎飯を食べ終わり、歯を磨いたあと、また自分の部屋へと戻つていた。時計を見ると、毎の一時を少しづつと過ぎていた。

何か……日曜日なのにすこしく疲れた……これもそれも、全部あの大森麗奈のせいだ。あにつがこの家にこるからやつくり休めないのだ。だからわざわざと家を出て、しばらくの間独りになろう。麗奈も今は下で母さんや父さんと談笑しているはずだった。

しかし健斗にはそのまえにやるべきことがある。それは昨日の途中だつた部屋の掃除だ。昨日は眠気に負けて雑誌だの何やらは全てそのままだが、今の時間を使ってその続きをやろうと考へた。

健斗は袖をまくつ、わざわざその活動に取り組んだ。まず、いろいろのところのものを分けて……

普段から掃除に慣れているためか、ものの三十分もかからずには部屋の掃除を終えた。雑誌などは全て棚にきちんと並べ、教科書類やベッドのシーツ、「ミミ」などもきちんと整理整頓をした。

こんなものだらつか……と思いつながら健斗が一息ついた瞬間……

「健斗くん。」

後ろから再び声をかけられた。聞きたくもない声だったが、健斗はゆっくりと振り返る。するとそこにはやはり麗奈が立っていた。健斗の部屋にまた勝手に入ってきて、健斗の部屋を見渡した。

「あれ？ さりきより綺麗になつたね？」

「……掃除したんですね。それより何か？」

健斗がうつむきを向いて、麗奈はやつくりと頷いてみせた。

「うん。 あのね、これから暇？」

健斗はうつ聞かれて少しの間黙り込んだ。暇かどうかと聞かれると、いひじとは向かしら面倒なことを押し付けられるに決まつてこる。

「いえ。 僕はこれから外出するんで。決して暇ではないです。」

「だつたらちよつとうべ良かつた」

「……は？」

面倒事を避けるつもりでうつむいたつもりだが、麗奈はむしろ都合が良いところうべ良かつた。健斗に向ってきた。

「これから外に行くんでしょ？ それだったらついでに、この町を案内してもらおうかなつて思つてたの。」

しまつた……

健斗は心の中で呟いた。まさかそう来るとは誤算だった。迂闊に外に出ると言った以上、つこでに麗奈もとこつ流れになりかねなかつた。

「こや、あの……俺今日は本当に忙しいんで……案内とかそういうのは……」

「えへ？ だつて外行くんでしょ？ だつたらつこでに私も連れて行ってよ。」

「いやーの……あ、父さんとかに頼んだらどうすか？ 父さんなら暇だし、この町の」とよく知つてゐるし……」

「えへ？ でもお母さんが健斗くんに案内してもらひなさい。」

「か、母さんが？……はつ……」

健斗は声にならない声を上げた。不思議そつに首を傾げて健斗を見つめる麗奈の奥に、その姿がはつきりと容認できた。健斗の部屋のドアの辺りに、母さんの顔が半分覗かれていた。ものすごい怒った顔で健斗を見つめている。健斗は冷や汗が流れるのを感じた。

「……健斗くん？」

「は、はい？ あ、ああ……そ、わうわうね。じゃあせつかく何で案内しますか……いえ、わせてください……」

健斗が心にもない言葉を口にすると、麗奈は一気に嬉しそうな表情を浮かべた。

「本当に……やつたあつーありがといつー。」

麗奈は嬉しそうに笑つてぴょんぴょんと跳ねた。健斗は口元で作り笑いを見せたが、田の先には母さんの姿を捉えていた。母さんはそれを聞くと満足そうにニヤリと笑うとそれからすつと身を引いて去つていった。

健斗はその緊張から解放されて安心したかのように大きくため息を吐いた。そして、嬉しそうにはしゃいでいる麗奈を見つめ……どこか憂鬱な気分に浸つていた。

「あつーあつー、あとな。お母さんが健斗くんと私に買い物を頼んできたの。」

「……買い物?」

「うそ。何か商店街までついでに行つてきて……ほり、このメモの中に書いてあるやつを買つてきてだつて。」

商店街の方か……

健斗はそう呟きながら、麗奈から一枚のメモ用紙を受け取った。確かに麗奈をどうせ連れていくのなら、そつちの方まで連れて行く必要があるだろ?。

「じゃあ……すぐ元に戻るから。何度もしてきてください。」

「はーー」

麗奈は「機嫌そうに返事をすると、健斗に背を向けて部屋を去つた。そういう健斗も準備をしなくてはならない。

健斗はため息をついて、面倒くさいついで頭を掻きながら下の階へと降りていった。

外は気持ちのいい晴れで、涼しくて過ごしやすい気候だった。

健斗は麗奈を連れて、家を出た。せっかくここから離れるために家を出るつもりだったのに……結局こいつが近くにいる。

いちいち齧してくる母をと、これから町を案内されることを嬉しそうにしている麗奈に苛立ちを覚えていた。

健斗は自転車を押し、堀の外まで出た。麗奈もそのあとについてくる。

「……自転車で行くの?」

大森麗奈が戸惑いながら訊いてきた。健斗はゆっくりと頷いた。ちゃんと説明してやらないとな……あとで母さんに説教食らうのはダメなんだ。

「一応バスはあるけど……一々金かけるのもつたいないし。でも歩くと一時間半くらいかかるから……チャリでいけば、三十分くらいか……そんくらいで街まで出れるんで……」

健斗はそう言つと、自転車に乗つた。

「わー、裏にあるから持つてきてください。」

健斗がそう促すと、麗奈はきょとんとした表情を浮かべた

「私……」じゃないんだけど

「……はつ？」

我が耳を疑つた

自転車を……

「自転車乗れないんだよね……」

健斗はきょとんとして大森麗奈を見ていた。自転車に乗れない?

「……まつたく?」

「うん」

そんなん

健斗は愕然とした。じゃあどうやって街まで出る?歩いていくなんて時間がスゲーかかるしまいか。

かと言つて、父さんに車を出してもらつわけにはいかないし……

とこり」とせ……せわか……

「わあ～ 気持ちい～」

大森麗奈が楽しそうに、喜んでいた。健斗は不機嫌そうに自転車をこいでいる。

大森麗奈が自転車をこげないと、いふことは、健斗の自転車に麗奈を後ろに乗せて行くしか仕方がない。何でこんなことになつてるんだわい。

まさか2ケツだなんて……

まるで……

「まるで私たち付き合つてるみたいだね」

「なつ～じゃかしい～変な～こといふ……いわないでください～」

健斗は顔を赤らめて怒鳴つた。しかし麗奈は可笑しそうにクスクスと笑つていた。

「冗談だよ～」

そう言つて笑う麗奈を見て、健斗は憂鬱そうにため息を吐いた。まさか、自転車に乗れないだなんて……考えもしなかった。東京者は自転車にも乗れないのか？本当に良い迷惑だ。

麗奈が自転車に乗れない「こう」と一つ大変なことが分かった。
麗奈を乗せて行くのは今日だけじゃないといつこと。

これから毎日、しかも麗奈がどこかに行く度に、健斗は麗奈を送り迎えしないといけないといつことだった。

学校や遊びに行くとき必ず……つまりそれは、常に麗奈に振り回されることになるのだ……

「マジでありえない。どうしてここに振り回されないといけない？
頭がおかしくなりそうだった。」

苛立ちが込み上げてきた。しかも……誰か知ってるやつに見られた
ら、麗奈と付き合ってるかのように見られるじゃんか……なのにだ。
ここには呑気に鼻歌を歌っている……

「気持ち良さそう」、足を「ブランブラン」させて……

オレンジ色の夕焼けに染まる横顔を見せていた。

「呑気なやつ……」

健斗は愚痴をこぼすやつに麗奈にこいつ言った。すると麗奈は町の景
色から健斗の方へと視線を向けた。

「何か言つた？」

「別に……何でもないです。」

「……あの……ずっと思つてたんだけど……何ですかと敬語なの？」

麗奈がそつこつと健斗はチラリと後ろを振り返って麗奈を見た。

「何でつて……あんたと俺はそこまで仲良くないし……赤の他人だから。」「

「……でも、同じ年だよ？ 同い年なんだからさあ、敬語使われると何か違和感感じるんだよねえ？」

「俺はそうでもないけど……つーか足をブラブラするの止めてくれません？ バランスが取りにくいです。」「

「あ、ゴメン。ほり、また敬語。もー？ ジヤあつ……敬語禁止令を発布しますっ！」

「……じやあ敬語禁止令の解禁令を発布いたします。」「

「むつーじやあ敬語禁止令の解禁令の禁止令を発布いたしますっ！」「それじゃあ敬語禁止令の解禁令の禁止令の解禁令を発布いたします。」「

「だつたら敬語禁止令の解禁令の禁止令の解禁令の禁止令を発布いたしますっ！」「

「それでは敬語禁止令の解禁令の禁止令の解禁令の禁止令の解禁令を発布いたします。」「

「だつたら、だつたら敬語禁止令の解禁令の禁止令の

「

「 もひいいわつ ！」

健斗が永久に続きそうなこの無限ループを食い止めるために、思わずそう麗奈に突っ込んだ。突っ込まれた麗奈は突然吹き出してケタケタと笑い始めた。

思わず突っ込んでしまった健斗ははつと我に返り、顔を赤くして前を向いた。いかん、いかん……思わずベースにつられてしまった。

「 アッハッハッハ 今の突っ込み面白ーい 」

「 …… よかつたな …… 」

「 アハハ もう、とにかくつ！ 私に敬語使つたらダメだからね？ 使つたら罰金一千万円～ 」

子供かつ！

と思わずまた突っ込みそうになつたのだが、寸前のところで一ひらえた。

これ以上そういう言い合ひをしていると、何だか距離が縮まつてしまつよくなつた気がした。

「 …… 分かつたよ …… 」

健斗がやつてぶやくと麗奈は満足気に頷いた。

「 あつ、あと、私の」とは名前で呼んでくれて構わないからね？ 」

「分かつた……大森……」

「あ、ほりあつー名前で呼んでってばあつー。」

すると麗奈は不服そうに体を揺らし始めた。健斗はそのバランスを上手く保とうと必死にハンドルを握った。

「おいつーちょつ……動くなつてー。」

「だつてーーーあ、分かつたあつー。」

突然麗奈がニヤニヤと笑つてそう言つた。

「……健斗くんつて……結構奥手なタイプ?」

「……いきなり何?」

麗奈は微笑みながら言つた。

「何か、そんな気がする。女の子苦手でしょ?」

「お前みたいなやつは特に苦手だよ。」

健斗がそう答えると、麗奈はクスクスと笑つた。

「アハハ 何それ?」

別に健斗は奥手ではない……いやそんなことは言えないな。確かに麗奈の言つとおり、かなり奥手かもしれない。

女の子に話しかけられたりすると緊張してしまつ。表には出れないけど。

でもそれはみんなそうなんぢやないのだろうか？それよりも、女子よりも、俺はこの大森麗奈がかなり苦手だ。それだけははつきりと言えた。

「健斗くんつて面白いね」

「やつやぢうも。つーか足をブラブリさせんな。やつやぢうたけどバランスが取りにくい」

健斗は街へ続く道を、ゆづくつといこでいった。

それから三十分くらい、自転車で行くと、段々と街に入つていった。

麗奈は感心するように周りを見渡していた

「ここの辺は建物が多いね」

「お前寝てたからな。もう少し行くと、やつきの神乃崎駅がある」

「ふうへん……でもやっぱ田舎って感じだね」

「東京はもつと多いのか?」

健斗が聞くと、麗奈はゆっくりと頷いた

「うん。車とか建物とかがいっぱい。人も多いし……」

「俺はそんなとこ嫌いだな」

「やつだね。私も田舎の方がいいよ。のんびりと出来るしさ」

健斗はそれを聞くと、不思議に思った

「東京者が東京を嫌うのか?」

健斗が訊くと麗奈は考える仕草を見せた

「うーん……どうかなあ？」

と言つて苦笑いを浮かべた。

自分の住む街をあまり好きになれないのか？

健斗にはよく分からぬい気持ちだつた。

俺はこの街が好きだ

例えば旅行とか行つてこの街に帰つてくると、妙な安堵感を覚える。

マイツにはそうこうのはないのか？

「私は……そんなこと感じたことがないかも」

麗奈はそう言つた

「ふうーん……」

しばらく沈黙が続いた。

「……感じたことがないつていつよつ……感じられないのかな……」

大森麗奈は、静かにそう言つた……

「え……？」

そのとき俺はゆっくりと麗奈を見た。すいとそのとき俺の胸の中がすいぐ……痛みを感じた

そのときの大森麗奈は……とても寂しそうな表情を浮かべていたんだ……

健斗は自転車である高校の校門に来た

「いじが“神乃崎高校”」

神乃崎高校は健斗の通っている高校であり、学力も部活も平凡な高校である。

通称、^{かみのじゅう}神乃高と呼ばれている。

「ふう～ん……」

大森麗奈さきヨロキヨロと高校を見渡す

ここつもここに入つてくんだよな……

何か嫌だなあ……

同じクラスにならないことを祈りましょう

同じクラスになつたら色々と大変そうだしな。

「結構広いんだね」

麗奈がそんなことを言つと、健斗は校舎の方から麗奈の方へと視線を向けた

「そうか？」

「うん。田舎の学校だから、もつと小規模なのがなあつて思つてたけど……思ったよりも随分大きいんだね」

麗奈がそう言つて、健斗はもう一度校舎の方を見た。健斗にとつてはあまりそういう感覚はなかつた。確かに、中学に比べれば大きいのかもしれないが……大して変わらない。

「田舎の学校の全部が全部小さいつてわけじゃねえよ。ほら、行くぞ」

「あ、ねえ、もつとだけ見ていかない？」

麗奈がそう言つてきたが健斗は、あまり賛成じやなかつた。思わず顔をしかめて麗奈を見つめた

早く帰りたかつたいというのもあるが、それ以上に心配なことがあ

つた

それはあまり校舎の近くにいると、同級生の誰かに目撃されて明日何かを言わるのがとてもなく嫌だったからだ。なるべく校舎に近づきたくないし、出来ることならぜ早く立ち去りたい

「帰りが遅くなるんだけど。明日見りやよくなない？」

「だつて、だつてー。今見たいんだもんっ！」

始まつた……こいつの我が儘だ。健斗は少しこいつを宥める方法を考えた。

「でもお前考えてみ？」

「……何を？」

「今慌ただしく校舎の周りを見るよりも、明日学校にどうせ行くんだから、そこでゆつくりと色んなとこ回つた方がよくないか？その方がワクワク感も違うだろ？」

健斗がそう言つと麗奈は少し考えるよつに空を仰いだ。健斗は祈るような気持ちで麗奈を見つめる。

来いつー！乗つかつてこいつ！

すると麗奈は再び健斗の方に視線を向けて、納得するよつに大きく頷いた

「それもそうかもね。じゃあ明日にするつ

ゲツツツ！健斗は心の中で大きくガツツポーズをした。これ以上我
が儘を言うようだったら、本気で置いていくつもりだったが……こ
いつにも人の言葉を理解するだけの頭はあるらしい

少しこいつの扱い方が分かつてきたりのような気がした

健斗たちはさつきもきた、神乃崎駅まで着いた。駅前の駐輪場に自転車を止めて、歩き始めることにした

「ここが神乃崎駅。さつき来たから分かるだろ? なんでもって、踏切を渡つたとこに神乃崎商店街がある」

詳しく述べると、神乃崎駅の踏切を渡つたところが、神乃崎商店街の入り口となつていて。神乃崎商店街には商店街とだけあって、事業で営む店が1kmくらいに渡つて並んでいる

健斗も幼い頃からこの商店街に立ち寄つているので、ある程度の店には顔も名前も知れ渡つてしているのだ

健斗は自転車に鍵をかけて、予め持つてきておいた布製の買い物袋を手にとつた。地球に優しくてエコロジーだろ? そしてすぐに麗奈を見て言つた

「頼むから、うぶうぶすんなよ」

すると大森麗奈はにっこりと笑いながら

「はあーい」

と答えた。この軽い返事をけやんと受け止めていいのか分からなかつたが……

健斗はポケットから母さんに渡されたメモ用紙を取り出した

豚肉500㌘に、大根にキャベツ、牛乳2本、その他色々……

結構買うなあ……麗奈を連れてきて正解だつたかもしない。

「大森、行くぞ つて、あれ？」

健斗が振り向くと、そこには大森の姿はなかつた。

いきなり問題発生かよ……

健斗は辺りを見渡した。うるちゅるすんなつつたのによ……

「……本当に迷惑なやつ」

健斗が踏切の方へと向かうと、大森麗奈は踏切の前で、何かを見て
いた

健斗は安心するかのようにほひと息を吐くと、麗奈に近づいていった

「おこつー何やってんだよ」

「ねえ、iji改札機ないの？」

健斗が麗奈に近づいてそつそつと、麗奈はゆつくつと振り返った

「はあつ？ ねえよそんなもん。第一、この駅使う人そんないねえん
だよ」

つーかそんなことで勝手にきえたのかよ。捜すのはいつしかなんだぞ！？

確かにこの駅には改札機がない。駅員が改札口について、乗客は出る際に駅員に切符を渡すか、箱に入れればいいのだ。それを珍しがるのか普通……

「へえ……そつなんだ。鎌倉と同じだねえ……」

「なあ、ここは東京と違つて都会じゃないから気のないことはたくさんあるだろうけど、頼むから勝手にいなくなるなつ！－！捜すのはこつちなんだよ。冒険したいなら一人のときにしてよな」

健斗は少しだまつと怒つたように踏切をさつさと渡つたて行った

大森麗奈は少し戸惑いながら、健斗の後を追つていいく。

「私、何か気に障ることした？」

自覚していないのかよ！？

「うひちよひするなつて最初に言わなかつた？」

「ああ～！－！ゴメン忘れてた！－！」

「……つたくよ……」

もつこつと歩くの本当に疲れる……

もう本当に帰りたいよ……

訳が分からぬし、疲れるし……せっかくの日曜日を返して欲しい

……

商店街は今日も人が多かった。いや混雑してる程ではなかつたが、結構の人がいる。それぞれの店が店前で人寄せをしている

そのためか、商店街はいつも賑やかだ

「賑やかだね~」

「そりや商店街だからな

「そういえば、この辺つて何でも“神乃崎”何だね？神乃崎駅とか、神乃崎高校とか、神乃崎商店街とか

「地名だから……」

「どうして神乃崎なの？」

「商店街の近くに、神乃崎神社つつう、神社があるんだけど……そこから通つているらしいぜ。何せその神社には昔、崎があつて、その崎に雨を司る神様が住んでいたらしいんだ。昔の人々はそれを尊い、奉つていたらしい。神を崇めれば、村は毎日豊作になるんだと。で、その神様が住む崎を人々は“神の崎”……それが時を隔てて、“神乃崎”になつたんだってさ。それがこの辺の地名になつたんだよ」

ということを、健斗は小学生のときに歴史の勉強で習つた

大森麗奈はなるほどと喜んでばかりに感心していた

「なるほど……す」にな。 良く知ってるね」

「小学生のときに習った。あと、その神社で毎年七月七日にその神様を奉るための祭があるんだ。まあ、今では“七夕祭”になってるけどな。スゲー規模のでかい祭なんだぜ？店とかもいっぱい並んでる」

「へえ～ す」に楽しみいへ 私お祭り大好きなんだあ」

と大森麗奈はにっこりと笑つた。

「よかつたな。多分スゲー楽しめると感づ」

健斗はいつも言いながらふうと息を吐いた

何か……調子に乗つてベラベラと喋つたなあ……

ちゃんと説明出来たかもしないけど……どうでもここことでも話しきたかも……

そんなことを思つと、何だか自分が悔しくなつてしまつ……

健斗たちは、豚肉500㌘を貰つたために、こつも使つて肉屋さんへ立ち寄つた。

「おばさん、こんちわ～」

健斗が挨拶するが、いつも元気なお肉のおばさんが店奥から出てきた

「あ～、じきにやけん健ちゃん。今日は何を貰つていへんかい？」

「ああ……あの豚肉500㌘欲しいんだけど」

「おばさん、じきにやけん」

健斗の後ろからひょいっと顔を出した女の子を見て、おばさんは驚いただらけ。

なんともまあ、おばさんは口をあんぐりと開けている。

「あ～……まあ……や～く可憐に子ねえ……じきにやけん」

「私、大森麗奈って言こまや～～今日から健斗くんとこっしょに住むことになりました」

「バツ……」

健斗が焦りを感じて、麗奈の口を塞ぐ
しかし遅かった……

おばさんせきらに驚くよつた表情を見せた

「あらあらまあ……健ちゃん、いつ彼女さんを作つたんだい？」

「こやつ……おばさん……違つんだって。これには訳が……」

「それに……いつしょに住む……」じつや大変だ……ちよつとあんた
……？」

おばさんは大声を出して、店の奥へと入つていった

なんだか嫌な予感がしてきた……

「何……？」

突然店の奥から驚くよつた声がしたと思つたら、突然おじさん
急いで健坊の元へやつてきた

「よお健坊つ……やるじやねえかつ……」

といつてながら元気な声で言つてくる

「いや……だからね？」

「その年で結婚とは……お前も出来るよつたか……くうつ

……おじさんは嬉しこわー……」

「あのわ……だから……」

「よお、お嬢ちゃん……」

「うんちわ～ 健斗くんがお世話になつてあります」

え？

何でここつりのりなの？

「可愛い子だなあ？ やるじやないか健坊つ……」

「あの……じゃなくつて」

「わうかわうか……よつしゃあつ……今日は健坊の結婚お祝いにして、サービスしてやうあ……お～い母さんつ……」

するとおばさんが「ハイハイハイ」と良いながら、何かを持ってきた

「はい、高級な豚肉500㌘サービスでこれも持つてきな

と語りて、袋に詰めたのは鶏肉と牛肉とも500㌘をこつしよこつめてくれた

「あのわ……あのわ……」

「もひー……お代なんか結構よつ……大丈夫大丈夫 気にしないで」

「こやぐ……あの……」

「何で」「なつちやつわけー?」

つーか何で勘違いがこんなに激しいわけー!?

これじゃあもう誤解を溶けないじゃんつー!?

「麗奈ちやん……だつは? 健ちゃんとお幸せにな?

「健坊つー……やねひとわせちやんとせれよつー!」

「あ……」

「ありがとうござります 健斗へさつ、行ひつよ

麗奈に導かれるように、健斗は放心状態のまま、肉屋から離れていつた

「お前どひすんだよつー? お前が余計なことばかり、訳の分からない誤解されちゃつたじゃんかよつー!」

商店街で麗奈に怒鳴りつけた。しかし麗奈は能天氣なのがバカなの

が、二三二二笑っていた

「良いじやん良いじやん 良い人だつたね？おばさんたち」

「良い人だけど、そういう」とじゃなくつて……どうすんだよこの肉……」

「もうえぱいにいじやん。サービスつて書つてたんだし」

「悪いだろ！？ただの居候なのによつ……？」

「大丈夫だよ 早く次行こつよ」

と、大森麗奈は楽しそうにこいつのであった

はつきり言つて最悪だ……

最悪の展開となつてしまつた……

もう嫌だ……こんなの……

それからだ。次々に買い物に行く店で健斗は誤解を広めてしまった

魚屋でも……

「彼女さんかい？ 可愛いねえ」

八百屋でも……

「いつしょに住むだつてー？ おめでとうー！」

スーパーでも……

「あら、あ、可愛い女の子ね……えつ！ いつしょに住むー？」

買つ店で、次々に誤解を広めではとこつと努力し、しかしそのHネルギーに負けてしまう……

結局誤解は広まつてこくのであった……

母さんから渡されたメモ用紙の物を全て買い物終わったころには、健斗は全力で疲れきつて、一言も喋らなくなっていた

一方大森麗奈とは言つて、楽しそうに周りを見渡したり、嬉しそうにはしゃいだり、元気100倍アンパンマン状態だった……

健斗は最強に不機嫌で疲労困憊のまま商店街を歩いていた

「ねえ、健斗くん」

大森麗奈が話しかけても返事をしない。

「健斗くん？ お~い？」

「……何だよ……」

「大丈夫？ すごい疲れてるよ？」

「……そうだな……」

本当なら、怒鳴りたい。

「お前のせいだろつつーーー！」

つて怒鳴りたい

けど、何も言う気がしない

帰りたい……

「健斗くん、ちょっと休もうか。神乃崎神社なら落ち着くでしょ？」

そう言って無氣力、無反応、放心状態の健斗を神乃崎神社へと導いていく麗奈であった

健斗は「神乃崎神社」にある、プラスチック製のベンチに座っていた。買い物袋を横に置いて、疲れた様子で座っていた。

敷地には小石が詰めてあって、そこを歩くとジャリジャリと音がなる。目の前には本堂があり、そこの中には神様を奉つてあるらしい。

でも今はそんなことどうでもよかつた……

「健斗くん」

大森麗奈が、健斗に走りながら近づいてきた

「はい、コレ」

と言つて、健斗に渡してきたのは250//リットルのコーラだつた。健斗は静かにそれを受け取ると、麗奈は健斗の横に座つた

「ふあ～ 賑やかなところだつたね～ 商店街つて、楽しかつたあ～

と大森麗奈はルンルン気分でそついた

どこが楽しいのか……

健斗が疲れたのは何も、店の人への対応だけじゃない

麗奈に振り回される方が疲れてしまった

早く家に帰りたいよ

健斗はハアっとため息をつくと、コーラの蓋を開けて少し飲んだ

「……私も、この街結構好きかも」「

麗奈は笑いながらそう言った

「そりやよかつたな」

「商店街の人も面白いしさ のどかだし……自然もいっぱい、み
んないい人そう」

「……そうだな」

しばらく沈黙が続く。健斗はそれに妙な感じを覚え、麗奈を見た

大森麗奈は少しうつむいていた

「好きだなあ……」

「……大森？」

「ずっとといたいなあ……」の街に……ずっと……」

健斗にはよく分からなかつた

「どうして……こんなに寂しそうな表情を浮かべるんだ？」

「……何があったのか？」

「……まあお前さ……」

健斗が静かに声をかけた。麗奈は健斗を見て、にっこりと笑う

「何？」

「そういえば知らなかつたことがあつた

「どうして……」の街に来たんだ？ 事情つて何の事情だよ」

すると麗奈は少し考える仕草を見せた

「ん…… そうだなあ。」の街つて、お父さんの故郷でね、面白そうだったから来てみたんだ 「

とにかく笑いながらそう言った

けど健斗には、それが逆に納得出来ず、違和感をもたらした

「そんな理由だけでか？ 变なやつだな……面白そうだから来ただなんて……」

健斗がそう言つと、麗奈はクスクスと笑いながら健斗に言つた

「そうかな？」

「いや、おかしいだろ」

健斗は納得いかない表情を浮かべて続けた

「ずっと東京にいたんだろ？それなら、そこに仲のいい友達とか、馴染み深いことかあつたはずだろ？なのに、そんな理由だけでこんな田舎に」

「いいから！」

健斗が言いかけている途中に、麗奈が遮るように言った

健斗は驚いたせいで口を閉じて、麗奈を見つめた

さつきも感じた、胸の痛みを感じた

「ここから……もうここはひとりよがり。ねつ？」

麗奈の言つた言葉

そしてそれと共に笑う表情……

けど、その表情は悲しそうな笑顔だった。

健斗は見間違いだと思つたんだけど、見間違いじゃない……

「の綺麗な瞳の奥に、たまつてゐる光る何かが……

健斗には悲しくみえたのだった……

だから俺は今でも覚えている。

「こつがどうして、あんなことを言つたのか

笑顔の裏には何を隠しているのか……

俺は何も言えなかつた……

何も、これ以上は訊けなかつた

「大森……」

「……なあ～んてねつーー？」

突然麗奈は元気を取り戻したかのように、イタズラな笑顔を見せた

「はつーー？」

「冗談だよーー そんな深刻じゃないつばつーーお父さんとお母さんのが外国で仕事をしてる間だけ、居候させてもいいだけなのつ

「え……ああ…… そうなんだ」

「 もう健斗くん真面目な顔してんだもん。 騙されやすいなあ君はー

と健斗の身体を押してきた。

「別に騙されたわけじゃねえよ」

「わう?完全に信じこんでみたいだつたけどねえー?」

「 るつせえなあ……つーかもう行くぞ。 暗くなる前に帰りたいからな

健斗は「一ラを飲み干して、ぐしゃっと潰して立ち上がった

「元気じゃない」とつも変だけど、元気過ぎるにつもひざつたいな

あ
……

健斗は麗奈を置いてじくじく歩いていった。

でも、健斗は気が付かなかつたけど、麗奈はその後ろ姿を、静かな笑顔で見ていた。

一つの買い物袋に収まつてよかつた……

健斗は買い物袋を買い物籠の中に入れる

そして大森麗奈を後ろに乗せて、ゆつくつとじきだした

「買い物袋持つてきてよかつたね」

「そうだなあ……」

「今夜はパーティーかあ。楽しみいー」

「そんな大げさなもんじやないぞ?」

と健斗は言つたけれど、麗奈は嬉しそうだつた

「どんなに小さくても、パーティーはパーティーでしょ？」

「それは…… そうだけど」

ずっと思つてたんだが、こいつはどんなに小さないとでも本当
にオーバーだよな

家でやるパーティーだなんて、別に大それたやつじゃないのに
こんなにはしゃいじゃつてさ……

まるで子供みたいだ

それはいいことなのか悪いことなのか……

俺には分からぬけれど

そして、健斗は自転車のあるロシヨップに止めた

それに困惑する麗奈はすぐに詰めてきた

「あれ?」レジも「SOTO-YA」があるんだ……つていうか、寄るの?」

「帰りたかつたら帰つてれば？」

健斗はやつぱり、買い物袋を持ってT-SUTAYAへと入つていつた

麗奈は口を尖らせて唇くちびるに唇ついた

「こじわるだなあ……」

わつかも説明したんだけど、ここから家まで歩いて帰ねると一時間半くじこかかる。

だから麗奈には選択肢がないのだ……

健斗はT-SUTAYAの中の、コロレンタルの「ナーへ向かつた

そして、田舎のCDを探し始めた

「いのこひじはま都合つぱいね」

「わつですか」

「どたな曲聞くの?」

健斗は麗奈の言葉を半分聞き、半分流していた。

「ん~……色々」

「色々つて?」

「色々は色々」

「健斗くん」

「ん~」

「私と会話する気ないでしょ？」

「ん~」

「……もう少しだけ…」

麗奈は少し拗ねた感じで、どこかに行ってしまった

健斗は麗奈がどこかに行つたのかなんてさえ気がついてなかつた

そのためか、

「あんまりうるさいすんなよ。捜すのが大変だから」

と、誰もいないのに一人で話していた

しばらく捜しているとお皿でのが見つかり、健斗はそれを取り出した

借りたかつたのは、Mr.Childrenの1995～1999年までのベストアルバムだった

「なんかに今聞きたい曲が入ってんだよなあ……

とつあえず田淵のものは見つかったんだけど……もう少し見てこつかなあ?

でも遅くなるし……また今度来るか

「うしつ。大森帰る あれ?」

「はじめて、健斗は麗奈がいなくなっていることに気がついたのだった

辺りをキョロキョロと見回す

「またかよ……うりちゅうすんなって言ったのに……」

いや、今回は八割健斗が悪い……

でも本人はそれに気がついてなかつた

CDらへんにはいないうことは、DVDの方にいるのかな?

健斗はそう思い、DVDの方を見に行つた

するとい、健斗の山勘は当たりだった

新作が並んであるといひ、麗奈は退屈そうに眺めていた

健斗はハヤつとため息をついた、麗奈に近づいていった

「おこひーーーうひひよひすんなつて言つたら」

健斗がやつ言つと、麗奈は健斗を見て口を尖らせた

「だつて健斗くんが夢中になつてたんじやん」

「夢中にならうがなからうが、勝手にうひひよひすんなつつてんの。搜すのは俺なんだぞ」

「何それ。私がお荷物みたいじやんつ」

「みたいじやなくつてそつなんだよ。第一俺がお前と好きでいつしょにいると思つうか？ 買い物だつて一人で行ければ行きたかったよ」

健斗がやつ言つと、麗奈は少し頬を膨らませた

どうやら少し怒つてこるやうだった

「ひどいーーー健斗くんのバカッーーー」

「バカで結構」ケ」。早く行くぞ」

健斗はそつ言つて、麗奈を置いてカウンターに向かつた

それを不機嫌そうについていく麗奈は、シンシとしていた

「健斗くんって絶対B型だよねっ！！！」

「お前だつてそつだろ」

「ううだけど何よつ！！」

「血元アヒーヴィングだよ」

「力チン。健斗くんに言われたくないよつー！一番自己チューなの
健斗くんじやんつー！」

一
ナ
ア
キ

「別に振り回してなんかないしつ！」

するだつた……健斗は見てはいけないものを……いや、会つてはいけない人に会つてしまつた……

その人を見た瞬間、健斗は全身の血が引いていつた

カウンターで何かを借りて いる女の子。

ミディアムヘアーに、可愛いらしい私服姿……に青いスカート。一
際目立つ、可愛い女の子……

そんな……………何である子がこじこじ

「お……大森」

「はい何ですか健斗様？」

「お前、ちょっと先外に出てろ。すぐ行くから」

「ううちゅうすんなつて言われたので、お荷物は動けません」

と言つてシンシとした態度を見せた

健斗は慌てて、麗奈を促す

この光景をあの子には見られたくないっ！！

「頼むからーーなつーー？」

「謝つてくれないと嫌」

そう言わると健斗は顔をしかめた

「ハアツーー何で俺が謝るんだよーー！」

「何で謝らないのつ？」

健斗はこの糞生意氣娘に我慢の限界を覚えてきた

「あのなつーー」つちだつて謝つて欲しいんだよつーーお前のせい
で商店街の人には変な誤解を受けるしつーーお前を乗せて何km自

「転車をこじだと思つて…？」

すると麗奈の方も負けんじと言わんばかりに反論してくれる

「自転車は悪いとは思つてゐるよつて…けど商店街の人は自分がちゃんと言い訳出来なかつたのが悪いんじやんつて…！」

「そもそもお前がおとなしく家で待つてればよかつたんだよつて…！」

「だつてこの街のこと知りたかったんだもん…！」

「そら見りーー！結局自分の都合だらつて…自「」チューが…！」

「違つしつーー！健斗くんのバカツバカツバカツ…！」

「んだとーー…？」

健斗たちはあまりの口喧嘩で熱くなつていたため、気づいてなかつたのだが、一人の声があまりにも大きいため、他の人の注目を浴びていた

すると、店員が騒ぎを聞いて駆けつけてきた

「あのお客様……店内でさわがれると他のお客様の迷惑となりますので……どうか…」

すると健斗と麗奈は声をハモりさせて言つた

「「「「「「」」」」」」」」

一人の恐ろしい剣幕に店員はたじろぎこどしちまつ……

麗奈がさりげに両量をあげる

「健斗くんのトンチンカン」

「何か悪口の言い方が可愛いですね……」

「お前」やつ……能天氣のネコ型女がつ……」

「それは誉めてるんですか?」

「するとだつた……

あまりにもこいつがむかついたから我を忘れてしまつていた……

あの子の存在を……忘れていた……

「あ……あの……」

「あんつーーーあつ……」

声をかけてきた女の子を見て、健斗は絶句してしまつた

「やつぱつ……山中くみ……だよね」

「あ……」

健斗は感じていました……

全てが終わった

見られて欲しくないとこを……

この中に見られてしまつた……

健斗と麗奈はCDを借りたあと、すぐに店を出た

そして、健斗がさつきから気にしていたあの女の子も、店からいつしょに出てきた

健斗の頭の中にはすでにごどく言訳しようか考えていた

「びっくりしたよ。騒いでる人がいるなあって思ったら山中くんだったなんて」

と言つて、その女の子はクスッと笑つた

健斗は恥ずかしそうに「『メン』と呟いた

「俺も……早川がいるとは思わなかつたわ」

本当に思わなかつた……まさか一番誤解を受けたくない人に出会つてしまつとは……

彼女の名前は、早川結衣。健斗と同じクラスメイトである。優しくて可愛くて……おしとやかで……成績はいいし、運動もできるし……

同じ人間とは思えない女の子だ

それに加えて性格はいいし……

「健斗くんの知り合いなの？」

ふと麗奈がにっこりと笑いながら訊いてきた

「ああ。あ～早川。」

「私、おおもりれいな大森麗奈です。よろしくね、えつと……」

麗奈が戸惑っていると、早川は最高に可愛い笑顔とともに、すぐに自分の名前を言った

「早川結衣です。よろしくね、大森さん」

「ええ～？麗奈でいいよお 結衣ちゃん」

「そう？じゃあ、麗奈ちゃんで」

と言つて、二人ともクスクス笑い合つていた。

「健斗くんと同じ学校なの？」

麗奈は健斗を見てそう訊いてきた

健斗は静かな声で答えた

「……ああ」

すると、早川が健斗に話しかけてくる

「仲良いんだね。従姉さん？」

「「ひひん。違うよ、健斗くんとは今田会つたばかり」

早川はそれを聞くと不思議そうな顔をした

よく意味が分からないうらし

「今日から健斗くんの家に」

「だあ～っ！～！」

健斗はすぐに大森麗奈の口を塞いだ

またこいつは「べりべり」と話をすると面倒くさいことになる

「えっと、こいつの父さんが俺の父さんの友達で……何かとある事情で」

「こっしょに住む」とになつたんだ

健斗が説明しかけてる途中に麗奈がそう言つた

「変な言い方すんなよ。早川、ただの居候だから。えっとだから別にオレつそいう関係じゃ」

「

「結衣ちゃんせせ、今何してたの？」

また健斗が話している途中に麗奈が遮るよつて喋つた

「私はちょっと口を返してたの。で、これから商店街に用事があるって……」

「そうなんだ。偉いな、わざわざ」

「商店街って賑やかなところだよね。さつき健斗くんと買い物に行つたんだ」

「…………」

「本当にってでもお祭りの日はもつとすいんだよ？」

「あー……七夕祭でしょ？」

「そう。そしたら今日の西脇は賑やかになるかも」

「そうなんだあ」

しばらくの間、早川と麗奈は「女の子」の会話を楽しんでいた

健斗は男だから、会話に入れずその様子をじらつとして見ていた

麗奈を見て、少し苛立ちを覚えていた

「大森……大森」

健斗は大森を呼ぶ。健斗は自転車に買い物袋を入れて、帰る準備をした

大森は振り返つて健斗を見るといつと笑つてきた

「あ、ゴメン。健斗くん忘れてた」

「あ、……つーかもつ俺は帰るわ」

麗奈に苛立ちを覚えていた健斗は、麗奈に意地悪く言った
「えへ……もつと結衣ちゃんと話したいなあ」

麗奈が残念そうに言つて、結衣はこいつと笑つて言つた

「私も用事あるから……また今度お喋りしようね？」

「うそ、あ、私明日から結衣ちゃんと同じ学校に通うんだ」

「やつなんだつ。同じクラスだといいね？」

いや……同じクラスだったら俺が困るんだけど……

と言つたかったけれど言葉に出せるわけがない

「じゃあまた明日ね。ヨウくんも」

と早川ははこつこつと可愛いらしく笑顔を見せってきた

健斗は照れる様子を見せながらゆづと頷く

そして早川は自転車に乗つて、商店街の方へといつていった

健斗は少し放心状態になりながらも、その去つていく後ろ姿を見つめていた……

「... 健斗くん」

麗奈が健斗の顔を覗き込むように言つてくれる。

「早く帰るんじやなかつたの？」

……分がつてゐるよ。早く乗れ」

落ち行く夕焼けを背に、健斗は麗奈を乗せてゆりへつとしたスピードで帰り道をこいでいた

「川がキレイだね」
「」

小道の側を流れている川の水面が、夕焼けによつて橙色に染まつて
いた

健斗も麗奈につられて見てみたが、確かにキレイなものだった

「夜道はここを歩いちや行けないね」

麗奈は静かにそう言った

「そうだよ。この一本道は電灯がないからな。日が落ちたら真っ暗になつて、周りがまったく見えなくなるんだ。間違つて川にでも落ちたら大変だからな」

健斗はそう言つて、夕焼けをまた見る……

哀愁……今ならふさわしい言葉だ……

しばらく沈黙が続く

今日は疲れた……本当に……

「結衣ちゃん……可愛いやだよな」

「え……」

突然麗奈がそんなことを口に出してきた

その瞬間、健斗の胸が高鳴る

「いい子だし……わざとモテるんだうひなあ」

健斗は何も言わなかつた

するじだつた……

「好きなんでしょう？ 健斗くん。結衣ちゃんの」と

「はつー？ わつわつー？」

麗奈が突然とんでもないことを言つてきたため、健斗は驚き、バランスを崩してしまつた

「わつ……ひよつとちやんと」ことでよ

「ひ、ひるせー。何いきなり訳のわからん」と

胸の高鳴りが止まらなかつた……

「わつかあ……まあいいけど」

そう言つてクスクスと笑う。健斗はそれ以上何も言わず、ブイツと前を向いた

麗奈の言つとおりだつた……

俺は……早川が……

早川のことだが

「ねえ健斗くん」

「何だよ。つるさんこなあ」

健斗は迷惑そうにうつむくはなつ

もちひん、照れ隠しも兼ねて……

「私を……この街に来れてよかつたよ

「はつ？」

いきなり何を言い出すんだ？

「今日来たばかりだけ……この街に来れてよかつたって思つてゐる
んだ」

「……よかつたな」

するとだつた

背中に暖かい感触を感じた

後ろを振り向くと、麗奈が健斗の背中におでこを押し付けていた

「あ……おい大森っ。あまりくつつくなよ
「今やい」

「私ね……」の街で楽しい思い出作りたい……」

大森はそう言ったあと、静かに続けた

「これから……色々とお世話になるかも知れないけど……よろしく
ね、健斗くん」

やつて麗奈はこうと微笑んできた

健斗はそれを見て……とっても不思議な感じを抱いた

ここの口から……出た言葉……

それと共に、夕焼けに染まる可愛いらしい笑顔……

それがなんだか暖かい、大切な存在にほんの一瞬……たった一瞬だけ、そう感じたんだ

健斗は自然と口元がゆるんだ

「何言つてんだよ今やい」

と健斗は微笑みながらそう言った

「あーーー！ 健斗くん今笑つてくれたでしょ？」

麗奈が嬉しそうに声をあげる。それを聞くと健斗はまた顔をしかめて、頬を赤くした

「べつ……別に笑つてねえよ」

「笑つたよお！」。始めて見たあ

「笑つてませんつ！！！」

「笑ったもん!! 健斗くんの笑った顔、始めて見れたもん」

と麗奈はについつと笑う。

健斗はそれを見て、カイツと前を向いた

けど、本当は……心の底から心地よい感じがして、麗奈に見られな
いように小さく笑つていたんだ

突然やつてきた、大森麗奈、

この日を境に……俺の生活が徐々に変わっていくだなんて……まだ
思いもよらなかつたんだ

第1話 嬉しくない出会い P・12(後書き)

これで第1話の終わりです。

続いて第2話をどうぞ……

第2話 始める学校（前書き）

第2話のあらすじ

少しずつ、麗奈に慣れていく健斗

結局のこと、麗奈は健斗と同じクラスになつた

健斗はこれから大変になると氣を落としていた

そして、ひょんなことからの麗奈との気持ちのぶつけあい……

そして健斗の憧れる早川結衣……

果たして……どうなるのか

そして次の日となつた。

いつもの朝が始まるはずだった。けれど……いつもこのわけにはいかない。

だつてあいつがいるから……

健斗はとこつと、まだ眠つていた。当然だ。まだ6時だから。

大抵いつも七時半くらいに起きて八時前にはである

そつすれば遅刻なんてのは絶対にしない。ギリギリだけど間に合つ。

だからあと一時間半は寝れる。

アラームだつて……七時半にセットしてある。

今日健斗は、自分の部屋で寝ていてない。一階の居間の床に転がり、タオルケットをかけて眠つていた

理由は一つ、麗奈を一階のベッドで寝かしているからである

まだ麗奈の部屋には、ベッドどころか……机も何もない。だから健斗なりに、女の子を床で寝させるわけにはいかないだろ?と思つ

麗奈を一階で寝させたのだ

別に居間の床だって、気持ちいいものだ。でも向でだらり……

何か寝苦しいんだよなあ……

わんっ！－わんっ！－

犬の吠え声が聞こえる

健斗はゆっくりと眼を開いた。すると、田の前ひせ、可憐な女の中の寝顔があった……

めじめくじめ顔が近かつた……

健斗はそれに驚いてびよびよと起きてしまった

「何やつてんのこつ……

麗奈が、健斗のようになにか寝そべって気持ちよさそうにしていた。

何かスゲー色っぽい……

足と足の間に手をはさんで、可愛い寝顔を見せてくれた。

つーか本当に可愛いな……おー

健斗はゆっくりとため息をついた

「何でここに寝てんだよ……一階で寝かせてやったの……」
面倒くさがり屋

しかも……健斗はチラリと麗奈の服装を見る

麗奈の服装は、短パンに、タンクトップだった。めちゃくちゃ軽い服装……そして、少し露出している、麗奈の胸……ノーブラ。なぜか？

健斗は顔を赤くして、麗奈の背中……は触り難いが、背中に触れて麗奈を揺さぶるようにして起した

「大森……起きるっ！」

「うーん……」

麗奈は眼を開いてゆっくりと身体を持ち上げた。そして眠そうにキヨロキヨロと見る

「あれ？ 健斗くん……おふあ～よお～」

と欠伸をしながら朝のあいさつをする

「おふあ～よお～じやねよ。何でお前がここに寝てんだよ」

「へ～ん……と、確かに五時くらいに田代が覚めて、健斗くん起きてるかなって思つたらす」こ気持ちよみかづいて寝てて……私もいつしよに寝ちかつてた

と言つて、えへへと笑つた

「……五時に起きるバカが七時になるとだよバカ……一階に戻つて寝てる」

健斗はそういうと、ゆうべりとタオルケットを持って、立ち上がった
そして庭の方に出て、タオルケットを干す

するとだつた

一匹の犬が健斗に近づいて甘えてきた

健斗の家には一匹柴犬を飼つてゐる、名前は「コンタ。

まだ一才の仔犬で、目がクリクリしてゐる純粋な仔犬だ。

健斗はコンタをゆつくつと撫でてやる

「コンタおはよー」

するとコンタは健斗に飛びかかつてくる。鳴き声を出しながら

きつと散歩に行きたいんだと思つ

「分かった分かった。すぐ行くからちょっと待つてろ」

「あ～っ！…」

麗奈が突然驚くような声を出した

「「」」犬飼つてたんだあ」

「一階で寝てろつつたろ」

「何て名前？」

健斗は微笑みながら、「ゴンタをなでる

「ゴンタだよ」

「ゴンタ？あはは 可愛いね」

と言いながら、麗奈は縁側のサンダルを履いて、ゴンタに近づいてきた

「ちょっと待て」

健斗は麗奈を止める、麗奈は素直に従つた

「何？」

健斗はハアッとため息をついた

「ゴンタは人見知りが激しいんだ。知らない人が近づいたら、すぐ噛みついちゃうんだよ」

「やつなの？でも大丈夫だよ」

「嘘まれたいなら勝手にしろ」

と言つて健斗はپイツと前を向いて、洗濯棒にタオルケットをしつ
かつと干していく

ゴンタの悪い癖……早く治せなことなあ

「ゴンタッ！…ほりつ、いい子いい子いい子つ」

「ん……？はつ…？」

健斗は我が目を疑つた。麗奈はまつたく心配せず、ゴンタに近づき、
しかもゴンタを撫でている

ゴンタも麗奈の匂いを嗅ぎながら、麗奈になつていていふに甘え
始めた

「ゴンタ可愛い ほら、大丈夫だつたでしょ？」

「うふ……まあ……」

健斗は苦笑いをした

悪い癖が治つたのかな？

「お前つて……本当に変なやつだよな……」

「えへへ 私、昔から動物に好かれるタイプなんだよね」
「変なやつ」

健斗はそうこうと、また家の中に入つていった

健斗は一階に上がり、自分の部屋に入つた。

何か……いい匂いがするなあ……

そつかあ、ここで麗奈寝てたんだもんな

健斗はそう考へると突然氣恥ずかしくなつた。

そつきの露出した胸を思い出してしまつ……

健斗はハーフパンツからシャカパンに着替えて、財布とケータイをポケットに入れて、また一階へと降りた

すると麗奈が階段の辺りで健斗を待つていた

「どうか行くの？」

「コンタを散歩に連れてくんだよ」

健斗は台所に行き、冷蔵庫からペットボトルに入ったコーヒーを取り出し、コップにつぶ。

「……お前も飲む？」

麗奈は首を横に振った

健斗はそのままペットボトルを冷蔵庫にしまい、コーヒーを飲む
「ねえ、私もついていい?」

「ダメ」

健斗はそのまま「コーヒー」を飲み干し、流し台に置いた

「え?」

「えへ、じゃねえよ。お前がいると学校に遅刻する」

「そんなん……ついていく、だけだよ?」

「昨日と同じ」と言つて、昨日大変な目にあつたからな。お前は上で寝てろよ」

「むう……健斗くんお願へい」

「嫌……だ……」

麗奈は健斗に近づいてきた

健斗の視線は、麗奈のはだけている胸の方にいつていた

タンクトップなので少し露出しているのだ

健斗は顔を赤くしながらタジタジとした

けれど、麗奈は健斗にぴったりとくつこいくる

「ねえお願ひ。邪魔しないからあ」

「じゃ……邪魔しないか？」

「...」

「……分かった……分かったから、くつつくなつ……そ、その恰好をどうにかしろ……」

「え……あつーー！」

顔を赤らめている

「……じゃあ、待つってやるから着替えてこいよ」

ハアつと健斗は安心したようなため息をついてそういつた

「うん」

麗奈は顔を赤らめたまま、一階へと走つていった

健斗はまたため息をついた

胸の高鳴りが止まらない

何だよあいつ……本当に訳が分からぬ

健斗はまた冷蔵庫から今度はペットボトルに入った水を取り出して、自分の熱を冷ますように一気に飲んだ

第2話 始める学校 P・2 (前書き)

健です

わずか一週間ちょっとでヨニーカクセス数が1000人を越えました

すごく嬉しいです

毎日200人以上のーが読んでくださってるおかげです

これからも頑張ります

健斗は家の外で、麗奈が来るのを待っていた。ゴンタを赤いリードに繋いで、しっかりと手を握つたまま欠伸をしながら暇そつこしていた

ゴンタはさつきからじりとお座りして待つていて。健斗はジロッヒとゴンタを見下ろすと、ゴンタも同じように健斗を見上げた

「なあゴンタ」

健斗はゴンタに話しかけた。ゴンタ健斗の言葉に反応するかのよつにじつと健斗の顔を見つめ、微かに首を傾げた

「お前どうしてあいつを気に入つたんだ?」

健斗はそのところが本当に不思議に感じていた。ゴンタの人見知りは健斗が一番よく知つていて。以前、ゴンタに触ろうとして近寄つてきた小学生の子の手を噛んでしまい、大事になつたのを健斗はよく覚えていた。ただ、一度覚えた人間に对してはとことん優しい。その男の子も今ではゴンタのよき友達の一人だ

しかし麗奈のようにいきなりゴンタに触れる人間なんて今までいなかつた

本当にあいつは動物に好かれるタイプなのだろうか……

「もしかして……あいつがエッティ恰好してたからじゃないだろーな?」

すると、「ゴンタは健斗を見て一回だけ吠えた。何だか必死に弁明しているみたいにも見える

「図星か？」

と笑しながら「ゴンタの頭をゆりへつと撫でてやつた

すると、だつた。家の引き戸が開き、中から麗奈が出てきた。さつきの服装を着替えて、お洒落なピンク色のTシャツ一枚に薄いパーカーを羽織り、下はショートパンツといった動きやすそうな服装だつた。健斗は麗奈を見ながら不機嫌そうに言つた

「遅えよ、帰るのが遅くなるだろ」

「『メン』『メン』 女の子は色々と準備がかかるんだよ。着替えとか、髪とか」

着替え……不意に健斗は思わず先ほどの露出度の高かつた麗奈の服装を思い出した。

「あーー今、わざわざのこと思つて出したでしょ？」

「なつー別にしてねえよー」

「鼻の下が伸びてるよ」

健斗はぱつと鼻を隠した

「伸びるわけないだろーー漫画じやねえんだから」

「アハハ 健斗くんつてピュアなんだね 」

そう言われて健斗の中で何かがブツンと切れた。完全に小馬鹿にされていることに非常に腹が立つたのだ

「つぬせこつーさつきから田舎者だと思つてバカにしやがつて……気が変わつたつーやつば連れてつてやんない。家で待つてろ」

健斗は憤りを感じながらゴンタを連れて、さつやと散歩に行こうとした

しかしだつた。急に力強い抵抗を感じて、健斗はその場を動けなかつた

慌てて後ろを振り向くと、ゴンタがまったく動こうとしないのだ

「ゴンタ、行くぞ」

健斗が引つ張つても、ゴンタはまったく動こうとしなかつた。健斗から顔を逸らして知らんぷりしている

「ゴンタ……」

「ゴンタは私といつしょに行きたいんだよね~?」

するとゴンタは甘えながら一吠えした。麗奈の方に自ら歩み寄つて麗奈に甘え始める。健斗はその光景に思わず愕然とした

「いい子だねえゴンタ~」

「ゴンタ……裏切りやがつて……」

健斗は泣きたい気持ちを抑えて、うつ向いた。

やつぱり「ハタ」……わざわざお出でにならねてしまつたのだ

「うん……朝早いのは気持ちいいねえ」

麗奈は気持ちよさそうに、体を伸ばしている。

小鳥のさえずりが辺りに響き、心地よい風、涼しい気温。そして傍を流れる川の音が、心を癒す……はずだった。

麗奈はかなり上機嫌だつたが、健斗は最悪に不機嫌だつた

「ねえ健斗くん」

健斗はいくら麗奈に話しかけられても無視していた。まつたく麗奈の方を見ようともせず、黙つて目を閉じて俯き加減でいた。そんな健斗の様子を見て、麗奈は可笑しそうに言つてきた

「やつらのまだ怒ってるの?」メソウ てばあ。ただの[冗談だよ]

「お前の[冗談はぜんつぜん、笑えん！】

と憤りを感じながら思わず怒鳴り声をあげた。すると「ゴンタはびつ」とくじして身体をビクッとさせて健斗を見つめてきた。麗奈は苦笑いを浮かべて健斗を宥めるような言い方をしてきた

「あ……まあまあ……といひでか、こいつの方向には何があるの？」

健斗はジロツと麗奈を見た。そろそろ許してやつてもいいだろ？。健斗だってそこまで心の狭い人間じゃないのだ。そこで少し考える仕草を見せた

「……別に何があるってわけじゃないけど……こつもゴンタの散歩コースは公園に行くから」

「公園？」

「うん。結構広い公園でさ、犬連れの人も多くて……子供のとき、いつもそこでよく遊んでた」

「へえ、ねえねえ今右に伸びてる道通つてるじゃん。左の道はどこに行くの？」

麗奈の「うとおり、健斗の家の前には、三つの道に別れている前に真っ直ぐ行けば、昨日行ったように街に出て、学校まで行ける道のりである

今右方向の道のりは、公園があつたり……住宅もあり、さうにまつと行くと車道に出る。実はその車道を渡つて少ししたところに、健斗が通つていた中学校がある。車道にはバス停もあって、そこから

駅近くまで行くことも出来ぬ。つまつそれは学校までも行けぬところだ

そして健斗の家から伸びてこの左の方向に進むと……

「あつは……何があるかな? 山……かな」

「山?」

「うん……あとその頂きにお寺があつて、お墓とか……あ、あつちもとお寺は家が立つてゐるんだけど……」

「向ひお寺?」

「何だつたつけなあ……でも結構由緒正しきお寺。初詣とかでみんな行くんだ」

「ふう~ん……」

「あつ……この向ひの海があるんだ」

「海?」

「とは言つてもずっと向ひの側だけな。」(これら辺は山や林に囲まれてんだけど、車で一時間半……一時間へりこかな?とこかくそんへりこ行けば、海に出るんだ)

「ふう~ん。夏が楽しみだねえ」

「ううだな。つーか元々はこの辺も海だったんだぜ」

健斗がそう言つて、麗奈が驚くよくな声を上げた

「ハハハがつ？ 嘘だつー。」

「本当だつて。昨日神乃崎の地名の由来の話しただろ？」

「あ、うん」

「あの神社の辺りが、昔は岬だつたんだ。本当にずっとずっと昔
だけどな。で、この辺は一面に渡る海だつたんだけど……大陸変動
や人が住みだした影響で、この辺が山と海で隔てられた場所になつ
たらしい」

「へえ……人つて関係あるの？」

「関係あるだろ。人が住みだすつていうことは、その場所を確保す
る必要がある。だから長い歴史を通して人がこの辺を埋みたてて、
家とかを立てたんだよ。で、今のような町になつたわけ」

「はあ……なるほど……」

健斗は麗奈に他にも色々と質問されては、答えながら歩いていた
麗奈にある程度、この辺の地理を説明していた。そのため麗奈もこ
の辺りの地理的状況が分かつてきたらしい

「ねえ健斗くん、いつも思つてたんだけど……あの川の名前つてあ
るの？」

「いや……名前があんのかどうかは知らないけど……」

「でも綺麗な川だよね。あの山から流れてるんだ」

麗奈は振り返りながら遠くに並んでいる山々を指しながら言った。健斗もそれを見てゆっくりと頷きながら言った

「まあな。つーかこの川は見た目だけじゃないぞ?本当に水が透き通つてるくらい綺麗なんだ。アコやマス、夏にはホタルとかが出てくるしな」

「ホタル?へえ、綺麗なんだうつなあ」

「そういういやこの川は、商店街の方まで伸びてるよ。ほら、昨日商店街の中に橋があつただろ?この川があそこまで伸びてるんだ」

麗奈はそれを訊くと、少し驚いた様子を見せた

「やうなの?じゃあ、この辺は川の源水に近いんだ」

「ん~……まあそれは言つてもあの山を登つたとこなんだけど……他の場所に比べたらそつなるだうつな」

健斗の説明を受けて結構麗奈は大分この辺のことを理解してきたみたいだった

何だか……思つたよりも麗奈に丁寧に教えちゃつてゐるな。今でもやはりまだ、麗奈に対する警戒心は拭えずにいた。それは当然だ。知り合つてからまだ日は浅い上に、健斗は麗奈のような人間は苦手……いや、むしろ嫌いだった

そのはずなのにこうして一人で散歩して話して、何だか徐々に距離が縮まり始めるような気がする。もしかすると自分は麗奈に気を

許し始めてるのかも……

何か自分が悔しくなる……健斗にとつてそれはものすごく不愉快な
ことであった

健斗たちは一〇分くらい歩くと、看板に確かに書いてある「神乃崎三丁目公園」の看板

「ルルの上が三丁目公園」

と言つて、健斗は指を差した。この少し長い坂を登れば、三丁目公園だ

「本当に～～早く行け～～」

と言つて、麗奈は元気いつぱいでその坂を走つていった

健斗は少し呆然として麗奈を見ていた

「……何であんなに元気なんだ？」

時々こいつがよく分からなくなる

健斗はふうっと息を吐いた

「分かつたよ……」

健斗はゆきへつと息を吐いた。

麗奈なんか、もう上り切りそうだ

「おい……大森……ちょっと待てよ」

健斗が声に出して呼ぶにも、麗奈はまったく止まらうとしない

それどころか、むしろスキップで坂を上つていて

この早朝にどこからあの元気さが出てくるのか……

麗奈は坂を上りきり、何だか感嘆しているようだ

そして振り返り、健斗に大声で叫んだ

「健斗くーんつ……ゴンタ～……早くう～……」

「待てっつたのにい　　うわあつ……」

突然ゴンタが麗奈に呼ばれたからか、この坂を一気に走り出した

健斗はゴンタに引っ張られながら、坂を全速力で上つていった。

犬に引っ張られる……人間の走力が犬に勝てるわけないのに……

そしてあつという間に、健斗は坂を上りきった。

いくら緩やかな坂でも、犬と同じくらいの速さで走ると体力が失わ

れ、さらに足がかなり痛くなってしまった

麗奈は健斗を見て、クスクスと笑っていた

「足、速いんだね？」

「…………はつ…………はつ…………はつ…………んぐつ…………」
「…………パンタのバカや
るい…………」

健斗は死にそうな思いになりながらも、ゆっくりと身体をあげた

「ねえ、こじるが三丁目公園? いいところだね」

三丁目公園は、人工的な木々に囲まれた、少し大きめな公園である。

滑り台やアスレチック、ブランコなどがそろっている

昼は子供が多いが、朝や夜は犬連れの散歩をしている人が多い

今日も犬連れの人が多いと思ったのだが……

「今日は人がいないなあ……」

今日の三丁目公園は静かな朝だった。決して早すぎるわけじゃない
と思ったのだが……

「静かなところだね」

「まあな…………こじるはゴンタのお気に入り　うわっ――」

また突然、ゴンタが走り出した

わらわのがトラウマになつたのか、それとも油断してたのか、健斗は反射的にリードを手から離してしまつた

「ゴンタは嬉しそうに、公園を駆け回つてゐる。

「アハハ、ゴンタ、嬉しそうだね」

「つたく、いつもいつもなんだよな」

健斗は微笑みながら、ゴンタを見ていた

「でも大丈夫なの？リード離してやつて」

「いや、こつものことだし……人もいないし、走らせとけばいいよ」

と言つて、健斗と麗奈は公園の中を歩き始めた。

「いいといへだねえ～」

麗奈は周りを見渡しながらつぶつと

「東京にもあるだろ……」

「けど、君の方が好きだなあ」

健斗たちは、大きな木の下に作られたベンチに座った

するとゴンタが健斗たちに駆け寄ってきて、健斗に「いっぱい甘えて
くれ

健斗は微笑みながら、ゴンタの頭をゆっくりと撫でてやった

「ゴンタ、健斗くんに甘えてるね」

「甘えん坊なんだよゴンタは」

すると今度はゴンタは麗奈に甘えてきた

本当に……珍しいことだと思つ

ゴンタが初対面の人に対するくなつぐだなんて……

麗奈は笑いながら「ゴンタの頭やあい、身体などを優しく撫でている。

「お前つて……変なやつだよな」

健斗がやつと麗奈はこいつと笑つた

「やつ？」

「ゴンタ、本当に人になつてくいんだ。なのにすぐにお前にはな
つこちやつてや……」

「だから動物には好かれやすいタイプなの」

「

「おやじ」

健斗は持ってきた袋から、緑色の野球ボールくらいのボールを取り出した

そしてゴンタの皿の前までやると、ゴンタはボールを皿で追つた

「ゴンタ……ほりや」

ボールを遠くに投げると、ゴンタはボールを追いかけた

そして口で加え、といふといふちに戻つてくる

麗奈はそれを見て、子供みたいにハシャイでいた

「…す」「…す」「…す」私にもやらせて…」

エンタから受け取ったボーナルを麗奈に渡す

麗奈はホーリー川を手にとった

「えいっ！」

麗奈は少々遠ざかるくらいのところまで、ボールを投げた

しかしゴンタはまたそれを追いかける

麗奈はそれを見て嬉しそうに笑っていた

「『コンタよく出来たね』

帰ってきた『コンタ』に『いい子』『いい子』と頭を撫でる

「それっ……」

健斗はその麗奈の様子をみながら、あることを思って出ししていた

昨日から引っかかるつていたこと……

昨日の時折見せた、あの寂しげな表情……

一体『いいつに何があつたんだろ』つ?

こいつはいつも笑つてたり、喜んでたり……嬉しそうにしたり……
毎日が楽しそうだ

けど……何でかな……

健斗には麗奈のそんな様子が変に感じていたのだ……

何かが違う……麗奈は何かを隠していく、笑つているような……不思議な違和感を感じるのだ

「……健斗くん?」

「ん……」

「どうかした？もしかして、私に見惚れてたりしてぇ……？」

「バツ……バカ……お前に見惚れるかっ！！ナルシスト」

健斗はそうこうとプライツと前を向いた

でも実際、麗奈は男の誰もが一度は振り返つてしまひほどの美少女だ

顔も可愛いし、スタイルもいいし……

きつと、前の学校ではスゲーモテてたんだろう……

それを考えると、健斗は嫌悪感を抱く

東京では男を使って楽しんでたのだろうか……自分はモテると分かつたやつは……調子に乗り、人を弄ぶようなやつになる

麗奈も……そんなやつなんだろうな……

だから俺は騙されない……こいつに恋愛感情なんて絶対に持ちたくない

「そりだよね～……健斗くんは、結衣ちゃんが好きなんだもんね」

健斗はそれを聞いて、麗奈を見て顔を赤くした

「なつ……誰もそんなこと言つてねえよつ……」

「隠してたってダメだよー 見てれば分かったもん」

「う……」

健斗はそれ以上言い返せなかつた……

麗奈の言つ通りだつたから……

俺は……早川結衣が……好きなんだ

中学に入つて、初めて見て……最初は……そりや麗奈と同じ」と思つたよ

早川は可愛いし……勉強もスポーツも出来て、スゲーモテてた

だから最初は、人を弄ぶようなやつだと思つてた……
けど……あのときから……

「結衣ちゃん可愛いもんねー そりや、健斗くんだつて好きになるよ」

「……別に顔で選んでねえよ」

「ねえ、どうして結衣ちゃんを好きになつたの?」

麗奈が微笑みながら、訊いてきた

健斗は答える気がなく、ブイツと眼を剥らした

「別に……」

「優しいから？優しそうだもんね それに可愛いくて、勉強もできそうだよね……優等生って感じ きっとみんなからモテるんだろうなあ……それにさ」

「おーい……」

健斗は麗奈を睨み付けた

低い声で、少し憤りを持った感じで言った

「人のことを見つなよ。ちゃんと人のこと分かってから物を言えよな」

健斗がそう言つと、麗奈は苦笑いをした

「別に……悪い意味で言つたわけじゃないよ。ただ、昨日の印象で言つただけ

健斗はそれを聞くと、何も言わず、『コンタが甘えてくるのをそつと麗奈に受け流した……

人のことを簡単に言つなか

……
よく言つよな……自分でつて、麗奈を見た田で決めつけてるじやん

健斗は自分の言つてゐる」ととつてゐるとの矛盾を口に取り、恥ずかしくなつた

麗奈は「コンタを撫でながら静かに言つた

「健斗くん……結衣ちゃんのこと、本気で好きなんだね」

健斗はそれを聞いて、またイラッときた

「お前は誰かを好きになるとき、軽い気持ちで好きになるのか？」

健斗は麗奈が次にいつ言葉を期待していた

けど麗奈は少し考える仕草を見せた

「どうだろ？…… そういうときもあつたかな……」

健斗はそれを聞いて、少し安堵感を覚えた

やつぱりこいつ、印象通りの女だつたんだ……

健斗は下をうつ向いてゆつくつとため息をついた

「……でも、人を本気で愛せない人は……本気で人に愛してもうえ
ないんだよね……」

「え……？」

健斗は麗奈を見た

麗奈は静かな口調で言った

「人をちやんと愛する」とって……難しいのかもね」

「……大森？」

何を……言つてるんだ？

するとじだつた

麗奈は突然健斗を見て、にっこりと微笑んだ

「でも、健斗くんは結衣ちゃんを本氣で好きなんだもんね
よつ……」

「はつ……？」

麗奈はさらに続けた

「健斗くんが本氣で結衣ちゃんが好きなんだから、結衣ちゃんもきっと健斗くんを好きになってくれるよ」

と言つて、にっこりと笑つた

健斗は意味が全然わからなかつた

何を言つてんの？

何で……」いつがそんなこと言つ？

ただ健斗は恥ずかしくなつて、ブイツとまた眼をそらした

「「ひるせえ……」

恥ずかしさを隠すため、健斗は手を開いたり閉じたりする
そしてチラリと麗奈を見ると、麗奈は微笑んみながら「コンタを撫で
ていた

「コンタいい子だねえ」

訳が分からぬよ

何だよ……」」いつ……どうして赤の他人が……俺のことをこんな風
に……

大森麗奈つて……

一体……何を考へてるんだ?

健斗はふうつとため息をついて東の空を見た

明るい太陽が、まだそこでちよつとずつ西へ傾いていた

健斗と麗奈は「ゴンタを充分遊ばせた後、公園内を一回りし、「ゴンタの散歩を終えたという形で、ゆっくりと家路についていた

「楽しかったあ 犬の散歩なんて初めてだつたよ」

「そりゃよかつたな」

「ねえ、明日も「ゴンタ散歩に連れていくの？」

麗奈がワクワクした様子で訊いてきた

健斗はブスッとした感じで答えた

「いつもは母さんか父さんが散歩するんだ。今日は何でか知らないけど、早く起きたから……」

「ふう～ん……」

健斗は麗奈を見て、少し困り顔を作った

「ふう～んじゃねえよ。お前のせいで早起きたんだぞ」

「えつ？私のせい？私なんかしたつけなあ？」
と麗奈は不思議そうな顔で健斗にいう

健斗は顔を赤くして戸惑いながら言った

「おっ……お前が……俺の隣で……寝てたからだらうが……」

「えっ？ あー……だつたけ？」

麗奈はそれを聞くとクスクスと笑い始めた

「そんなことで動搖するなんて……健斗くそつこばつぱつピュアな
んだね」

「おまつ……そんなことつて……」

健斗にとつて女のお子が隣でいつしょに寝てるだなんて大問題だった。

「こいつは恥ずかしくないのだらうか？」

昨日まで赤の他人だったやつとこいつしょに寝るだなんて……

「とつ……とにかくつ……もつ」一度と隣で寝るなよつ

「はあー、ピュアな健斗くん」

健斗はそれを聞いてまたカチンときた

「うわわわわ……」

健斗は麗奈を怒鳴りつけた。さつきから黙つてればいい気になつた
がつて……東京者が……

「……あれ？ おじひちやつた？」

健斗は麗奈を置いて早歩きで歩き出した。

「 もうひ…… 健斗くんって意外と短気? 」

「 お前がそいつをせんだるつーー。 」

家に着くと、健斗はまづゴンタを犬小屋の中へと入らせた

「ゴンタ、戻れ」

ゴンタは健斗から離れ、犬小屋の中へと入つていった

リードを杭に繋ぎ、これでオッケーと……

後ろを振り返ると、麗奈が感心してる様子だった

「 へえ~…… 「ゴンタ、仕付けちゃんとなつてるね 」

「 ああ。 どつかの誰かさんよりも礼儀正しいしな。 手懐けやすい 」

「それって私のこと〜？」

「『』答大森さん。よく出来ました」

健斗は心の声で、家中の中へと入つていった。

すると麗奈が健斗の前に立ち、また意味不明な行動をとる

「ワンッ…ワンッワンッワンッ…」

「……何やつてんの？」

健斗が引き戻し味で麗奈に訊くと、麗奈は微笑みながら言った

「ワンちゃんの真似つ！…麗奈ちゃんを手壊けてみなぞこつ…」

「…………」

健斗は首をかしげて、麗奈を無視しながら靴を脱ぎ、一階へと上がつた

麗奈は健斗を追いかけるように、そして煩く言った

「ちよつと無視しないでよ」

「うむ…なあ……つーかお前、自分の部屋行つて学校の準備して
こよ。 今日お前も学校行くんだろ？」

「うん…学校楽しみだなあ」

「そりゃよかつたな……」

健斗は自分の部屋に入ると、そこに母さんがベッドのシーツを持ちながら立っていた

「あ、お帰り。『コンタの散歩』に行ってきたの？」

母さんに訊かれて、健斗はゆっくりと頷いた。するとだつた

「『コンタの散歩』スッパク楽しかったです」

と後ろから麗奈が、機嫌そりそり言つた

母さんはそれを見てこくりと笑つた

「麗奈ちゃんも行つたの？一人ともすっかり仲良くなつちつておほか～」

「別に仲良くなつてねえし……つーかシーツ自分で洗つからこよ

と言つて、健斗は母さんからシーツを取り上げた

「あ、せつ？別にこっしょに洗ひ切らになさ～よ

「他のと洗つと、匂いがつくだろ」

「つかないわよ。強力な洗剤使つてるんだし」

「市販のは大体当てにならないの」

健斗は机の上にシーツを自分のベッドの上に置いた

「まつたく……細かこと」氣にしてやるよあんた……」

すると由也と麗奈を見つめ、微微笑んだ。

「じやあ麗奈ちゃん、朝一はん用意しておくから、着替えたら下降りてきてね」

「はあーー、あつがと」わこわこ

母さんには」と笑つと、今度は健斗を見てきた

「あんたも早く降りなさいよ」

「まだ早いんだけど……」

時計の針はまだ七時だった。

全然早いからこだ。

「だから今日は麗奈ちゃんが早く行かないといけないから、あんたも早く行かないといけないの」

「まつーー？」

「今日あたしと麗奈ちゃんは、校長先生にあこがれに行くのよ。だから早めに出ないと」

「一人で行けばいいじゃん。俺はあとで一人で行くから」

「車で行つた方が早いでしょ？」

「別にわざわざ車じゃなくたって……ガキじゃねえんだから一人で行くよ」

健斗がそういうと母さんは鼻でため息をついた。

「まつたく……ならいいけど、じゃあ麗奈ちゃん、支度しといてね。あつ、健斗。『ンタに』飯上げといてね」

母さんはやう言つと、部屋から出ていき、階段を降りていった

「……何つたつてんだよ」

健斗は立つている麗奈を見て言つた

「健斗くん後から行くの？」

「そうだよ。はいこれ」

健斗はそう言ってシーツを麗奈に渡した。麗奈は静かに受け取ると、首をかしげた

「自分で使つたんだから、自分で洗えよ。帰つてからでいいから」

健斗がそうこうと、麗奈はこうこうと笑つて言つた

「分かった」

「つーか、早く準備しろよ。一度も言わせんな」

「うん」

麗奈はこいつりと笑うと健斗の部屋から出ていった。

健斗はそれを見るとため息をついてから、ベッドに腰を下ろした

本当に……あいつがこの家に来てからスゲー疲労が溜まつて……うな気がする……

だから反対だったんだよ……女の子とこっしょに住むだなんて

しかも、性格悪いじゃねえかよ……

健斗はふとさつきのことを思い出していた

『人を本気で愛せない人は……本気で人に愛してもらえないんだよね……』

麗奈は遠くを見ながら、何かを見ながら……健斗に、そう言つた。けど、健斗にはその言葉の意味はわからなかつた

いや、言つてこむことはわかつてゐるんだけど……心つして麗奈が、

それあんな表情を見せてあんなことを言つたんだろ？

『でも、健斗くんは結衣ちゃんを本氣で愛せてるんだね すげーよ
つーー健斗くんが本氣で結衣ちゃんが好きなんだから、結衣ちゃん
もきっと健斗くんを好きになつてくれるよ』

何だよ……あいつ……本当に訳が分からねえ。

いきなりスゲーとかいいやがつて……

もしかして……俺のこと応援してんのか？

何で俺なんかを……

.....

健斗はベッドに転がつた

まだあいつが来て一日か……

あんな訳の分からねえやつと暮らしていかないといけないのか……

健斗は憂鬱な気持ちでふつとため息をつくのであった

健斗はいつも通り、ゆっくりと学校へ行く支度をした

ゴンタの散歩で汗を書いたのドシャワーを浴びて、タオルで髪を拭いていたときだつた

台所へ行き、冷蔵庫から牛乳を取り出し、コップについで飲んでいた。すると母さんが居間から顔を出してくれた。

いつも外に出るが少しお洒落をして……

「じゃあ今から行くから、家の正門までゴンタの」飯お願いね」

「大森は？」

健斗が訊くと、母さんは少し困った表情を見せた

「わの車に行つたわよ。あと麗奈ちゃんにひやんと学校のこと教えるのよへれつと色々不安だらうから、あんたを頼りにしてんだから

……

「どうだかな……」

あの能天気なバカが不安といつ感情を持ち合わせているのかわく、疑問だ

母さんは時計を見て、はつとした

「あら、いけない。もうこんな時間だわ。じゃあ、お願ひね」

母さんはさすがに健斗の田の前から姿を消した

ふと家のドアが閉まる音と、車のエンジン音が聞こえた

次第に車のエンジン音は遠くの彼方へ消えていった

健斗はそれに安心し、牛乳を飲み干して、居間の方へと行った

時計を見ると、七時半ちょっと過ぎ……そろそろ制服に着替えて、朝飯食つて……「コンタにて」飯をあげないとな……

健斗はそつ思いながら行動に移す

自分の部屋へと向かい、机の真っ正面に置いてあるクローゼットの中から、白いシャツと黒い学生服上下セットを取り出す

いわゆる、学ランというものだ。これを着ると、かなり暑く感じる。でも学校の校則上、五月の下旬まで冬服着用なので、着なければならぬ

らない

今は五月の中旬と言えよ。あと一週間の辛抱だ……

まあ、ズボンはこいつそり夏服を着ている。夏服の方が生地が薄く風通しもよいため、体感温度がかなり違つてくるのだ

またいつも健斗は学ランのボタンを2個外してるから、涼しさはア

健斗は着替え終わると、また居間へと向かう。居間にはひやぶ台が出来てあり、その上にはトースト2枚とコーヒーが置かれていた。そしてお弁当箱の入った袋……

神乃高は、学食がないからお弁当を持参である。まあ購買部で買つてもいいんだけど……品揃えが悪いから

これらは全て、母さんが用意していったんだと思つ

手際がいいなあ……

健斗はゆっくりと座ると、トーストを噛み締めてから、コーヒーを飲む。ほろ苦い味が朝をすつきりとさせ

健斗はテレビのつまごんを手に持つ、スイッチをつけた

みのもんたの、「朝ズバツ……」の「ニュースと天気予報をチェックする」のが田課だ

それにしても、みのわん……よくこんな年まで頑張れるよなあ

麗奈をみのわんの家に預けたいよまったく……

今日のニュースは、ニュースというよりも特集だった……

最近話題の、データロバについてだった

聞いたことはある。彼氏彼女の間で、卑猥な暴力が起る」と……
ドメスティックバイオレンス
DVの彼氏彼女バージョンってことだろつ……

健斗はそれを見ながら、あることをまた思い出していた

今朝麗奈と散歩に言つたとき……麗奈が何気なく言つた一言……

『人をちゃんと愛することって……難しいのかもね』

大森はあのとき、このことを言つてたのだろうか？

確かに……このトートロのように、間違つた愛し方つていうのは
数多く存在するような気がする

ただの性欲と、好きという感情を間違える人もいるだろつ

または……体面だの印象などを気にして、それを好きといつ気持ち
に置き換えたりと……

よく分からなうことばかりだ……

それを、俺は早川がマジで好きだと言えてるから……麗奈はすごい
と言つたのか？

でも……そう言わると、実際俺だつて……早川を本氣で好きなの
か？

そう思つと自信がない。100%早川が好きなのは自分でよく分か
るけれど……

しかしそれが、もしかしたら性欲なのかもしれない……または体面
だの印象だのをを気にしているせいなのかもしれない……いくら口
で俺は早川を本気で好きだと言つても、もしかしたら実際は違うの
かもしれない……

自分のこの気持ちが、果たして真実なのか偽りのものなのか……

それが分からないとなると、麗奈の言つ通り……人をちゃんと愛す
ることと、いうのは簡単なものじゃないと言える

しかし、恋愛つていつのまに理屈のこねた考えなんて必要な
のだろうか？

好きなら好き……嫌いなら嫌い……大それた言葉のいらない、シン
プルな気持ちだけでいいんじゃないだろうか？

どつちも正しく、どつちも間違つてゐるような気がする……

麗奈は何を感じてあんなことを言つたんだろうな……

わんつ！－！わんつ！－！

庭からゴンタの吠え声が聞こえた。この時間帯にこの鳴き方は、『
飯をねだつて』いる証拠だ

健斗はふうっとため息をつきながら、重い腰を持ち上げた

そしてゆっくりとした足取りで庭へと向かう。

縁側に置いてあるドッグフードを持って、ゴンタに近づいていた
ゴンタは甘えた声と、吠え声を出しながら健斗に餌をねだつてくる
健斗はゴンタがいつも使う器の中へとドッグフードを適量に入れた。

「ゴンタ待て」

「ゴンタに餌を待つよ」ついで命令すると、ゴンタは待ちきれないと言わ
んばかりにソワソワする

健斗はもう一つの器に水を汲んで、餌の横に置く

手を目の前に持つていって……

「よし」

健斗が許可を出すと、ゴンタは「飯に食らいついでへい」と食事始めた。

健斗はその光景を見ながら、ハアッとまたため息をついた

「お前は恋愛とかしないのか？」

健斗が訊いても、ゴンタは餌を夢中に食べる。

健斗は「ンタの身体をゆづくと撫でると立ち上がり、また家中へと入つていった

大森麗奈の言つた言葉が頭から離れない……

健斗は洗面所に向かい、自分の顔を見た

……俺が早川のことを本氣で好きなんだから……早川も俺のことを本氣で好きになつてくれる……か

一体何なんだよ……

あいつ……俺をからかつて面白がつてただけなのだろうか

何だか心の中がモヤモヤする。健斗はそのモヤモヤを晴らすように、元気よく水で自分の顔を思いつきり洗つた

そして時刻は八時前を指している。健斗はすでに、家を出る準備をしていた。

そろそろ家を出ないと、学校に間に合わなくなる。

こつもの時間帯に出るよつてこるのだ

この時間帯に出れば、早くもないし……遅刻することもなく学校に着くからだ

健斗はしっかりと家の鍵を閉めると、庭に回って自転車を動かす。その途中、ゴンタが近寄ってきて、甘えた声を出しながら健斗に甘えてくる

健斗はゆつくつとの頭を撫でてやつた

「ゴンタ、いってきます」

健斗は自転車を家の外まで運び、そのまま学校へと向かった

これから学校だなんて……かなり憂鬱だ

学校はあまり好きじゃない。……

授業はダリイし……
眠くなるし……

健斗は学校で目立つ立場じゃない。いや、むしろ地味で大人しくて、いてもいなくても変わらないような存在なんじゃないだろうか、と自分ではそう思つている。

当然、友達と呼べるような存在は何人かいる。ただ……健斗はもう誰かと話すようなことをほとんどしていなかつた。とこりより自ら誰かと関わることを避けている

それを自ら望んでいる部分があつた。誰かと関わるようなことはしたくはなかつた。一人が一番気楽だと思えたからだ。

健斗は誰かといつしょに行動したり、馴れ合つことが嫌いではない。むしろ昔は大好きだつた。友達とバカなことをしたり、はしゃいだりすることが好きだつたはずだ。

ただ……健斗の中であることを決めていた。自分が誰かと関わるようないことは避けなければならない。

健斗は自転車を漕ぎながら空を見上げた。今日はとても良い天氣で、雲一つない。普通ならば気持ちよく過じせる日だらう。

だが健斗は不快だつた。忌々しく感じる……ズキンと一瞬だけ頭が痛くなり、健斗は自転車を漕ぐのを止めて頭を抑えた。

……また……

健斗はゆっくりと田を開けた。こんなふうに天気がよい田は、どうしてもこうなってしまう。未だにあのことを思い出してしまったのが忌々しかった。

……もう昔のことなんだ……

健斗は自分にそういう言い聞かせるようにそり心の中で呟いた。そしてまた再び自転車をゆっくりと漕ぎ始めた

健斗はいつも通る坂道を下った。この坂道を下りきったら、学校に着く。

健斗は欠伸をしながら自転車をこいでいった。他の生徒たちも自転車で来る人や、歩きで来る人などたくさんいる。

でも大半は自転車だ

だって健斗と同じ地域に住んでる人が多いんだから……歩きでは一時間半もかかるてしまう

健斗は自転車を駐輪場に置いて、スクールバッグを持つて昇降口へと向かった

行き交う人々は、友達に「おはよう」などと声をかけている

いつもと同じような光景だ。何だけど……なんだろう? 今日はなぜに騒がしいような気がする

健斗は廊下を通りながら、他のクラスを見る。男子はグループで騒いでいて、女子は集まつて会話をしている

いつも見るように光景だけ……何かが違うなあ……

自分のクラスでも同じだった。1年A組では男子が教室内で騒いでいて、女子が女子の輪というものを作つて会話をしている

健斗は不思議に思いながらも、自分の席に向かつていた。そしてその際、近くを通る男子グループの会話をこいつぞり盗み聞きした

「……おいつ！あの可愛い娘、見た？」

「見た見たつ！朝練で見たしつ！めちゃくちゃ可愛いくなつ？」

そして健斗は今度は歩きながら近くにいる、今度は女子グループの会話をこいつぞり盗み聞きした

「あんなに可愛い娘つているんだねー？羨ましいなあ……」

「でもわああんな子入学式のとき、いたあ？」

健斗は彼らの話を聞きながら、自分の額に冷や汗が垂れるのを感じた

まさか……こいつらが騒いでる理由って……健斗はやつくつとため息をついて自分の席についた。一番後ろの窓際の席。

そうか……すでに麗奈のことが噂になつてるんだなあ……

やつぱり相当可愛いんだな……みんなこんなにも騒いでるつじ」と
は……

健斗はいよいよ、憂鬱になつた

麗奈が居候してゐなんて、言わない方がいいよなあ……

そんなことを悩みながらまたため息をついた。するとだつた

「山中くん」

突然声をかけられて健斗ははつとして顔を上げた。すると、目の前に早川が笑顔で健斗の前に立つていた

「おはよー山中くん」

「あ……おはよー……」

健斗は胸を高鳴らせながら齒くちづけに言つた。朝から早川がこんな風に健斗に話しかけてくるなんて、めつたにないことだつた。といふか、そもそも早川と会話自体あまりしたことがない

しかし早川はゆつくりと健斗の前の席に座つてきた。そして周りを気にするように見渡しながら、健斗に耳打ちするよつと小さな声で言つてきた

「大丈夫?」

「え……」

健斗はそう言われてはつと気づいた。そそだ……早川は唯一事情を知っている。詳しくは話してないけれど……麗奈といい、しっかりと会話をしたのはこの学校の中で早川以外誰もいない

健斗はそう考ながら小さく笑みを浮かべた

「まあ……えつと……やっぱりみんなが騒いでるのって……」

「うん。多分麗奈ちゃんのことだよ」

早川も小さく笑い返してそう言った。健斗はそれを聞いて困ったようすに肩をすくめた。もしクラスの誰かに、自分がその話題の美少女と深い関わりがあるなんて知られたら……考えるだけで恐ろしかった

「今日麗奈ちゃん、このクラスに入ってくると思つよ」

「はあつ？」

早川が健斗の不安をさらに煽ることにした。健斗は思わず驚いた声を上げた。その声にクラスの中の何人かの人間が健斗に視線を送った

健斗は肩をすくめながら早川を見た。早川は健斗の気持ちを推し量つたのか困ったように笑っていた

「……それ本当？」

「うん。クラスのみんなが噂してるから……多分そうなんじゃないかな？」

健斗はため息をつきながら肩を落とした。少し予想はしていた。母さんが余計なことを言つて、健斗と同じクラスにするように取り計らつてもらつたのかもしれない。しかしそれは健斗が最も避けたかった状況であった。

「そつか……」

「あ……そつか。麗奈ちゃん、山中くんの家に居候してるんだっけ？」

早川は確認するような言い方で健斗にそう聞いてきた。もちろん、周りの人間には聞こえないような声量で……健斗は小さく頷いてみせた

「まあ……うん。ちよつとした事情でなつ……あつーでも、別に付き合つてるとかそういうわけじゃないから」

健斗が慌てるよつこひつこひつと、早川は怪しむような視線を健斗に向けて笑つていた

「へえ～……」

健斗はそんな悪戯気な早川の表情を見てドキリと胸が高鳴らせた……やつぱり可愛い……麗奈のことでみんなは騒ぐだろうが、健斗からしたらこの早川の可愛さに感服したい

そんなバカなことを考へていると、早川がまた周りを見渡しながら健斗に耳打ちをするよつこひつこひつと言つた

「……居候のこと、言わない方がいいよね？」

そう言われて健斗はほとんど間髪を入れずに頷いた

「あ……なるべく……つーか言わないで欲しいかも」

健斗がそう言つと、早川はにっこりと笑つた。

「分かつた。もし何かあつたら、いつでも相談してね 出来ることなら力になるよ？」

と言つて、眩しい笑顔を見せる。健斗にとつてはすこく暖かく、嬉しい言葉だった

健斗はその優しい笑顔を見て、心が癒されるような感じがした。薄く笑いながらゆっくりと頷いた

「ああ……サンキュー」

健斗がそういうと、早川はにっこりと微笑んだ。本当に早川は優しい子なんだと健斗は思つていた

早川は覚えてないかもしれないが……あのときだつて……

「でも一つだけ不思議なんだよね」

早川がそう言つたので健斗は顔を上げて早川を見た。早川は何か腑に落ちないような顔をしていた

「何が？」

「うふ……どうして麗奈ちゃん、今の時期に来たんだうう？」

「え……？」

健斗の中にあつた違和感が広げられていくようだった。早川は考え込むように首を傾げながら続けて言った。

「だつて麗奈ちゃん、入学式にはいなかつたじゃない？ 一年の五月に編入なんてないとと思うんだけど……どうして今になつてからこの学校に来たのかなあ？」

「あ……」

早川がうつむいたと、HRが始まる鐘が鳴つた。早川はその鐘が鳴り始めたと同時に席を立つて健斗の方を見た

「あ、じゃあ……またあとでね」

早川はそう言つと、自分の席へ戻つていつた。しかし健斗の中では拭え切れない違和感が広がつたままだつた。早川の言つとおり、今の時期に編入なんて有り得ないと思う。元々こここの高校に入学するつもりだつたのか、だとしたら何故今の時期になつてからなのか？ そういうえば健斗はそのことを全く知らなかつた。

そして、健斗はふと昨日の神社内でのことを思い出していた

「いいからうーーー……うつこつーーーとこつしゅううつ……

あの言葉に何か健斗の知らない事情もあるのだろうか……だとし

たら一体何なのだろう。

「……まあ、いつか。」

そうだ健斗には全く関係のないことだ。別に麗奈がこの町にやつてきた理由なんてどうだつていい。どうせ大したことでもないだろう

それよりも早川だ。本当に早川の優しさには心が暖まる

実はこれが健斗の学校に来る理由だ……もし早川がこの学校に行かなかつたら、俺は100%の確率で中卒だつたろう

本当に最高の人だと思つ……

チャイムが鳴つてからしばらく経つと、先生が教室の中へ入つてきたので、みんなざわめきながらも席に座つた。健斗はチラリと教室の外を見る

すると麗奈の影らしきものが、窓から見えた。かなり戸惑いながら教室の中をチラチラと伺つてゐるのがわかる。あんなやつでも緊張するんだな…… そう思つと何だか可笑しくつとふつと吹き出した

「えつへん。えく…… みなさんおはよつゝぞります。今日は良い天氣で、風もこゝちよわそづですねえ…… いいですかあーみなさん。こつこつ天氣のいい一日には必ず決まって 」

「先生っ！」

一人の男子生徒が大声をあげる。眼鏡をかけて、髪が短く、お調子者の面をしている。健斗もよく知っているやつだった

「そんなことより早く、新しいクラスのお友達を紹介してくださいよっ！」

その可笑しな言い方にクラスのみんながびつと笑った。確かに転入生とかを紹介するときに先生がよく使うような言葉だつた。「今日はみんなに新しいクラスのお友達を紹介します。」みたいな……

クラスの騒ぎように先生はゆっくりとため息をついた。そんな光景を健斗は興味なさげにボーッとして眺めていた

「はい……じゃあ君、教室に入ってきて」

すっかり出鼻をくじかれ意氣消沈している先生は外に向かって声をかけると、教室のドアが開いた

そして静かにゅっくりと、一人の女の子が長い栗色の髪をなびかせながら歩いて入ってきた

健斗も、その女の子をじつと見つめていた

我が校の制服を身にまとっている

白に緑色のラインの入ったブレザーに、紺色のスカート。さらに赤色リボンをつけた制服……この可愛い制服を着た、一人の美少女が顔を赤く染めながら教室に入ってきた

どうやら少し照れてるようだつた

みんな、麗奈に呆気にとられている。特に男子は、じつじつとそれを曰がハートになつていいのというのか……頬を赤く染め、完全に見惚れていた

「じゃあはーい、今日から新しくこのクラスに加わる、大森麗奈さんだ。みんな仲良くするよ！」……じゃあ大森さん、軽く自己紹介してください」

先生がそう促すと、麗奈は小さくと頷いた。モジモジと照れてるよう

「えっと……今日から」のクラスでお世話になります、大森麗奈です
えっと、早く仲良くなりたいので、どんどん声をかけてください

何かスゲー普通な自己紹介だな……と思つた次の瞬間だつた

男子が一気に騒ぎ始めて、教室中がパニック状態に陥つた。突然の出来事に麗奈も驚いた。もちろん、健斗も同じように突然の大声にビクッとした

「ついに来た～！！！俺の青春だあつ～」

「待つてたぜマイハイーーー！」

「神様ありがと～～！女神様、ありがと～～！」

……健斗を除いて、皆（特に男子）が騒ぎ出した。まあ、一になるだろうというのは朝の時点で予測していたことだつた。健斗はゆつくじとため息をつきながら、麗奈をチラリと見た

すると……だった

麗奈は笑っていたのだが、あの……少し寂しそうな表情を浮かべていた。それは神社で健斗に見せた、意味ありげな寂しそうな微笑みだつた。健斗は少しの間、その表情を見入ついた

「……？」

みんなが騒いでる中……多分気がついたのは健斗だけだつた。麗奈のその寂しげな表情に気付いたのは……

教室中のざわめきは収まらない。先生もかなり困つてこるようだつたが、麗奈は平然とした態度でいた

「じゃ、じゃあ……はい。大森さんの席は……自分で決めてもらえむ~？」

先生がわざわざつと、麗奈はゆうくつと頷いた

「はい」

するとじだつた

他の男子共々が一斉にアピールをしそじめた。

「カムヒア~ツ……！」「……俺の隣つ……！」

「こやつ……俺の後ろつじょつ……てめえ場所ビナヨウ……！」

「はあつ……？ 何あんたつ……？ 最低つ……！」

「俺と話やうつ……！」

よくみんなやるよなあ……と考えながら、健斗はその光景をゆつくつと眺めていた

「じゅあ～……」

麗奈はキョロキョロと教室を見渡し始めた

いいから早く席決めよう……そんな風に心の中で茶化してみる

あるじだつた……健斗と麗奈が田代が合つた

「あつ……」

麗奈がまるで、「見つけたつ……」なんて言ひそひ、健斗に笑いかけた。

健斗はちゅうと顔をしかめる……不思議そつな顔をしながら

「先生……」

麗奈は先生に訊いてきた

「あの、あの一番後ろの窓側の席の隣に机と椅子置いてもいいですかつー？」

「あ～……構わんが……」

「やつたあ「

ん……一番後ろの窓側の席の……隣……つて……

健斗は自分の隣を見た。……」とかよつ！？

「ううつ……あ……」

健斗が前を見ると、男子たちが凄い剣幕をして健斗をこじらんできた

「何で……あこつの隣に……」

「羨ましい……麗奈ちゅやんと仲良くなりたい……」

「チクショウツ……」

健斗はみんなから鋭い視線を感じながら、苦笑いをした。ふと自分の「メカニ」の辺りに冷や汗を感じた

「あー……学級委員長。机手伝つてやつなさい」

学級委員長（女）は立ち上がり、麗奈の机運びを手伝つた
麗奈はありがとひ、と言しながら一生懸命健斗の隣に机と椅子を運び終わつた

そして健斗の隣に席を完成させてゆつくりと座つた。健斗はなるべく田を合わさないようしたが、チラリと見た瞬間に麗奈はにっこりと笑つた

「よつす 同じクラスになれたね」

「…………」

健斗はまたチラフと前を向いた

男子がスゲー怖いよ……睨むなよ……そんなにわ

不穏な空氣のまま、H.R.は終わった……

健斗は麗奈を、トイレの前まで連れてこさせた

「じつしたのっ急に」

麗奈は不思議そうな顔をした

「お前なつー！何でわざわざ俺と同じクラスで、しかもわざわざ俺の隣を選ぶんだよつーーー。」

怒鳴りつけた、健斗はさついた

麗奈は手を後ろに回して、口を尖らせながら言った

「えー、だつてこの学校健斗くんしか知ってる人いないし……」

「おかげでみんなから恨みを買つたんだよつーーー。」

ギヤアーッと健斗は一気に怒鳴りつけた

でもよくよく考えてから、健斗はゆつくりとため息をついた

「でも……お前を責めても仕方ねえよな……」

勝手に騒いでるのは、男子たちだ。麗奈は何も悪くないもんな

「私、健斗くんに迷惑かけやつたかな？」

と麗奈が苦笑いをしながらそう訊いてきた

やめりよ……そんな顔すんの……

「いや……とにかく、いいか大森」

健斗は麗奈によく言い聞かせるよつと言った。

「お前が、俺ん家で居候してるのは……しそうへ黙つていろよ」

「……なんで？」

「なんで……つて、お前さつきの反応で分かるだろ？ 男子たちの反応で」

健斗がやつこつと、麗奈はなるほどと呟わんばかりに、田を丸くした
「やつこつ……『メンハメン』 あの反応にすっかり慣れりやつして、
氣付かなかつた」

健斗はそれを聞いて、少しカチンときた

そりや そうだよな…… こつは可愛いくてモテるんだろうから、あ
あやつてもてはやされるのに慣れてるんだらつ。

だからあんなに平然とした態度でいられたんだ……

やつぱりやつこつ女なんだ…… 僕の大嫌いな性格……

「……とにかく言わないよつて坂をつけよ」

健斗がブスッとした態度でやつぱりやつこつと坂をつけた

「はあーい」

「……あと……学校ではあまり俺に馴れ馴れしちゃうなよ。変な関係だと思われるからな」

「…………麗奈はめいへいと頷いてから少しうえた
健斗がめいへいと、麗奈はめいへいと頷いてから少しうえた
係だと思われるからな」

「ん~……それは保証でないかも」

「出来なこじやなぐりでするんだよ」

健斗はめいへいと、めいへいと教室に床へいへいした

「ねえ、ビーハンナに会うの~」

健斗はめいへいと話かれ、イリッシュときた

「何を」

「めいへいと、周りに変な関係に思われるとか……ビーハンナに会うの~?」

健斗はそれを聞いて少し頭に来ていた

「お前には分かんねえよ。東京でもいいでも、常ともせやねえむお前にはな……」

健斗がめいへいと、麗奈は黙り込み、健斗を見つめていた

「けどお前がよくつたって、じつちは困るんだよ。変な誤解されて恨みを買われたり……早川に……誤解されたりすんのが……どうせお前にはどうでもこことなんなんだねうけど……」

健斗がそうこうつと、麗奈はゆっくつと頷いた。

「分かつたよ」

健斗はそれを見ると、ゆっくつため息をついた

何でよつこよつこよつなるんだろうつなあ……

「……でも、普通にしてもうれないかな?」

麗奈が静かにそつ言つてきた。健斗は不思議そつな顔をして麗奈を見た

「え……?」

「今は……健斗くんだけなんだ。普通に接してくれるのつて

「何? 何が?」

麗奈は静かに笑いかけた。

「ダメ?」

健斗は何も言えなかつた。普通に接して欲しいつて……それつて俺

を頼りにしているから？

何でそんなことを言ひ出すんだろ？

ただ健斗はこの麗奈の表情を見てしまつて、何だか周りの視線とか
どうでもいいと思えた

だから

「……ああ……分かった」

健斗がやつひ言ひつと、麗奈は嬉しそうに笑つた。

「やつひすが健斗くんつ！…頼りにしてますつ…」

と相変わらずの元気良さを取り戻し、健斗の肩をバンバン叩いてきた

「つるせえなあ……つーか、早く教室戻つてろよ」

「はあーい」

麗奈は健斗に手を振りながら、廊下を走つて教室に戻つていった

健斗はその場に佇んで、壁によりかかりながらゆつくりとため息を
ついた

マジであいつ……訳が分からねえな……

昨日といこ今日といこ……

何が普通にしてもうえないかな……だよ

健斗は麗奈の顔を思い浮かべていた。そして舌打ちをすると、軽く壁を殴つた

健斗もそのあとに教室に戻ると、また教室中は騒いでいた

「……あれ？」

健斗は麗奈がいないことに気がついた。

先に戻つてたんじゃねえの？

健斗は不思議に思いながらも、自分の席へ戻つた

「当中……」

健斗が席に戻ると同時に、突然男子たちが健斗の周りに集まってきた
何やら凄い剣幕をしている。

健斗はあまりの気迫にタジタジしていた

「な……何ですか？」

「お前つ……昨日大森さんといつしょに商店街を歩いてたつて本当
か？」

「いつー？」

健斗は何も言えなかつた。ズバリ凶星だし、どうじてこいつらが知

つてゐるんだろ？

「……いやあ……知らないなあ……」

「昨日、お前がとんでもない美少女といつしょに歩いていて、しかもけけけ結婚するって聞いたやつがいるんだよつ！？」

健斗はわらにギクシャクした。そつか……昨日商店街でかなり騒がれたんだ……だから、誰が健斗たちを疑つやつらが現れても仕方がないだろ？

「……えつと……それはお姉ちゃんだよ……やつ……お姉ちゃん……」

…

とつたに思いついた言い訳……しかしみんなはわらに疑い深くなつた

「何？！お前姉貴なんているのか？？……あつー！大森さんつ！？」

麗奈がやつと教室に戻つてきて、自分の席へ戻つてきた

突然男子に囲まれて、麗奈は微笑みながら不思議そうな顔をした

「どうしたの？」

みんな少し戸惑いながら麗奈を見る

「あの……」

「ん？」

「あの……昨日……山中と商店街行つたりしました?」

麗奈はゆつくりと頷きながら囁つた

「うん。 それがどうか」

「うおおお~こつこつ~!」

男子たちはショックな声にショックな表情……中には唖然としたやつもいるし、口をあんぐりと開けているやつもいた

健斗は呆れ返る様に頭を抱え込み、ため息を深くついた

何余計なこと言つてんだよ~こつこつ~

「ちよちよちよちよ……ちよつと待つて~?~どうして、いつしょに商店街に行つたの?~といつより~?~一人とも~?~お知り合い?~?~

健斗は少し落ち着いた感じでみんなに苦笑いをしながら囁つた

「いや……あのさ、別に深い意味なんてねえよ?~?~その~?~

「ちよつとお前は黙つてろ?~?~

「ねえ、大森さん?~?~

麗奈は質問攻めされて少し戸惑つていた

「う~ん……それは……」

麗奈は健斗をチラリと見た

明らかに「どうしよう」と言つて訴えている

もし正直に言えれば、居候のことがバレるし……

でもどう言い逃れるか……

「もしかして……一人とも……つ、付き合つてるとか?」

「はあつー?」

健斗はそれにかなり反応した。顔を赤くして、めいにぱいに反駁した

「いやつ……それは違うから……絶対ないから……」

「じゃあ一人はどんな関係なんだ? 山中……ちゃんと説明するんだ……」

健斗は男子たちにズイツと詰められた……

何で言えぱいいのか分からない……何で言い逃れよ?……

完全に頭の中がパニックになってきた

「……えつと……その……」

「イト」「セさんなんだよね？」

ふと後ろから早川が、微笑みながらそう言った。男子たちは一斉に後ろを振り向いた

「昨日から山中くんの家の近くに引越ししてきたんだよね？」

「そうなん？ つーかイト」「…」

男子たちが疑い深くそう聞いた

健斗は「クククと頷くだけだった

「でもイト」「つて結婚出来るんだよね……」

「いやっ……だからそういうこう関係じゃないからっ……」

健斗はまた顔を赤くして否定した

男子たちは何か腑に落ちない感じだった

「イト」「か～……つーか何で早川知つてんの？」

「えっとね……昨日山中くんに会つたから……」

「そつかあ……ならいつか……イト」「かあ……イト」「かあ……」

「うんっ。だから一人は親戚同士なんだよ。ねえ、山中くん？」

早川にそう詫かれ、健斗はゆっくりと頷いた

「や、やつ。ただの親戚だよ……」

「……やつこいつ」とか

「まだ理みはあるな……」

男子たちは少し嬉しそうに納得して健斗たちから離れていった

健斗は冷や汗を拭い、ほっと安心するようにため息を吐いた

「危ない」とだつたね

早川が微笑みながらやつと言つた

「ああ……マジありがとつ早川……助かつたよ

すると麗奈も少し苦笑いを浮かべていた

「ありがとうね結衣ちゃん。健斗くんと約束したこと破つちゃうだつた

「お前なあ……」

「約束?」

早川が訊くと、麗奈はこつこつと笑つた

「うふ。じょりくは居候の」とは話せないつて約束したの。ありが

とつ結衣ちゃん

「やうなんだ お礼なんかいいよ~」

と早川はフフッと笑つた

「いや、マジ助かったよ……ありがとつ早川」

健斗はゆうぐりと頭を下げながら、早川にお礼を言つた

「だつて言つたでしょ？ 困つてたら力になるつて」

早川はにっこりと微笑みながらそつと言つた

「……ああ。 ありがとつ早川」

健斗も笑いを浮かべて早川にお礼を言つた

早川は本当にいい人だよ……頼りになるし……あのときから……全然変わらない優しい笑顔……

俺はそんな早川を好きになつたんだ

健斗と早川は笑いながら話していた

ただ……麗奈はそれを黙つて見ていたことを健斗は気づいてなかつたんだ……

「麗奈ちゃん、同じクラスになれたね」

突然早川に話しかけられて麗奈は少し戸惑つた

「あ……うそっ……そうだね 私結衣ちゃんいてくれてよかつたあ
」

「やうだね あとでゆっくり話そうね? それじゃ」

早川はそう言つてまた自分の席へと戻つていった

健斗はしばらく呆然としていた……早川の魅力に改めて気がついた
からだ

「ふう……危なかつたあ。結衣ちゃんに感謝しなきや」

「つたく……」

健斗は呆れ返るよつにため息をついた

でも何でかな? 今のでバレても……どうでもこよつに思えてくる。

別にバレたから何?

みたいな感じで……

「つーかお前先に戻つてたんじゃねえの?」

海斗がやつこいつと、麗奈はえへへと言ひながら、笑いかけた

「ちよつと……迷つちゃつた ここ広いから」

「はあ？」

「どんだけ方向音痴なんだよ……つたく……

すると授業開始のチャイムが鳴った

今田の一時間目は現国だ。

先生が教室に入ってきた。みんなは騒ぎながら座った

「はい、田直号令」

先生がそつと口を開いて、号令をしてから先生は教科書を開いた

「じゃあ今日は昨日の続き……28ページを開いて～」

先生がそつと指示し、生徒たちは教科書を開く

もちろん健斗も開いた。ふと横を見ると、麗奈は少し困っていた

「そつか、お前まだ教科書渡されてないのか」

健斗がそつと口を開いた

「つたく仕方ねえな……ほら、机くつづけていいから見なよ

「あ、うん」

麗奈はいそいそと机をくつづけてきた

「ノートもないんだろ？俺のルーズリーフ分けてやるから……」

と健斗はルーズリーフを取り出して麗奈に渡した

麗奈はこいつりと嬉しそうに笑った

「ありがとう」

健斗はフイッとしたし照れるよつとして、前を向いた

「……健斗くんつてさりげなく優しいんだね」

「……別に……」

健斗が少し照れた感じで言つと、麗奈はまたこいつりと微笑んだ

「でも、私健斗くんのそつこつとい好きだよ」

麗奈が優しい笑顔でそう言つてきた

「はつー？ば……バカッ！－何言つてん」

健斗が顔を赤くして慌てた様子で大声で叫んだ

するとみんな、健斗を一斉に見てきた

「あ……」

「当中～？どうかしたか～？」

「いや……すいません……」

健斗は恥ずかしくなつて下をうつ向いた

恥ずかしい……いや、この胸の高鳴りは……いつたいなんだらう。

健斗はチラリと麗奈を見た。

麗奈は健斗を可笑しそうに見て笑つている

またバカにしているのか……からかっているのか

でも胸の高鳴りは、消えなかつた

そして授業は三時間目まで終わり、昼休みの時間帯へと入っていく。

三時間目は、数学だった。健斗はほとんど授業を聞かず、外を見ながらボーッとしていた。

やがて授業終了のチャイムが鳴り、みんなが騒ぎ始めた

「じゃあ今日やつたところは復習しておいてください

先生はそう言つて命令をし、教室を出でていった。

これから50分の昼休みだ。この間に、健斗たちは昼休みを済まさないといけない

「麗奈ちゃん」

一人の女の子が、麗奈に声をかけてきた

「もしよかつたらこしあお弁当食べよ?」

麗奈は少し睡然としていた

「……あ……うんっ……いいの?」

「結衣もこいつしょにお弁当食べたいって

とヒツヒツと笑った

麗奈は早川を見ると、早川はにっこりと微笑んだ。麗奈はその女の子を見てにっこりとまた笑った

「うん……ありがとう」

麗奈は嬉しそうな笑顔でそう言った

健斗も嬉しかった

何だかわからなかつたけど、何だか嬉しかつた……だから健斗は知らずに微笑んでいた

すると、麗奈がふとこちを向いて言った

しばらく健斗を見てから、いつもの可愛いらしい笑顔を見せてきた。

「健斗くんもにっこりに食べよつよ……」

「あつー？」

麗奈の思いもよらない突拍子なことを言つてきた

健斗はびっくりしたが、すぐに落ち着いた声に変えた

「いや……俺はいいよ。一人で食べつて」

「にっこりに食べよつよ。いいじゃん別に」

「いいつて。女子の中に男子が入つたら迷惑だろ? 早川も……」

「私は別に構わないよ？」

「ふと早川が微笑みながら近づいてきてそいつを囁いてきた

「大勢の方が楽しいし。いつしょに食べよつよ 山中くん」

早川はにっこりと笑いながら少しひそかに囁いて

はつきり言って……わざに驚いた……あの、早川が弁当を誘つてくるだなんて

一時の夢のような時間を過ごせるチャンスをくれるだなんて……

健斗は少し戸惑いながらも、ゆっくりと頷いた

そのときだった

「はい……はい……俺も仲間に入れて……」

と健斗の傍に近づいてきた一人の男子。ヒロがその仲間に入ってきた。

さつき健斗は友達がいないとは言つたが、まったくないわけじゃなく、このヒロこそが健斗の小学校時代からの古い付き合いである。
まなかひろ
真中比呂は、愛称はヒロと呼ばれている……

髪は短く短髪だ。黒瀬の眼鏡が良く似合つている。背が高く、また頭もよく、中学のときはかなりモテていた

お調子者だが、スゲー信頼の置ける存在。

「お前もいつしょに食いつのかよ」

健斗がそう言つと、ヒロはへへんと笑いながら言つた

「お前だけハーレム状態にするわけにはいかないしな～」

「何がハーレムだよ……」

「それに……麗奈ちゃんもいるし……」

「……」

健斗は呆れ返るようにため息をついた

五人は机をくつつけて、それぞれのお弁当を出した

「……えっと、麗奈ちゃん」

机をくつつけて早川は口を開いた

そして先ほど麗奈に話しかけてきた女の子を紹介した

「！」の子は佐藤愛美。^{あいとまなみ} 最近お友達になつたんだ

「 よりしへね。…………麗奈ちゃん…………でいいかな？」

と佐藤はこつこつと笑つていつた。

佐藤愛美…………ぶつちやけると、あまり話したことではない

背が小さく、赤いリボンで髪を一つに結いでいるのが特徴的な女の子だ。

麗奈や早川のよつなパツチリとしたクリクリした目も可愛い……

つーか可愛いんじゃないかな…………普通に…………
でも、たまに男氣で負けん気なところもある

「 愛美だから…………マナでいいかな？」

麗奈は訊くよつて言つた

「 うとうつてこつか、みんなからもやつ呼ばれてるから…………

「 じゃあハイハイハイ…………俺の血口紹介します…………」

ヒロが元気に手をあげて、自分をアピールし始めた
「 うなるともうわざいんだよなあ

「 俺は…………真中ヒロ…………ヒロでここよつて…………麗奈ちゃん

「うん まいじくね」

すると佐藤がヒロを見て、少し引いた田舎町になつた

「あんた、いきなり今まで呼ぶなんて……ひこうかせりやんづかー？」

ヒロはまた、ふんっと鼻で嘲笑うかのよつに叫ひた

「ここんだよ。早く仲良くなれるよつてね。ねえ麗奈ちゃん？」

「うそ。私は別に構わないよつ。」

「何か……真中キモー……」

「何だとーーー？」

ヒロと佐藤は言つて争ひのを、麗奈は可笑しそうに見ていた

健斗はそんな麗奈をじっと見ていた

「あ、麗奈ちゃん、部活とか入るの？」

佐藤がヒロを無視し、やう訊いてきた

「うーん……今はまだ考えてないなあ……どんな部活があるか分からぬいし……」

「やうなんだ」

「マナは何部に入ってるの?」

麗奈が訊くと、佐藤は少し照れながら答えた

「一応……」「道部」

「へえ～ かつこ～いねえ 結衣ちゃんは?」

今度は早川に訊く

「私はテニス部だよ。中学から続けてるんだ

すると麗奈は尊敬するように言った

「テニスかあ～ 面白いだよね～」

「俺はハンド部だヨ～～」

すると佐藤が少し呆れ気味に呟いた

「誰もあんたには訊いてないでしょ……」

「アハハ ハンドかあ～ かつこ～いね

麗奈が微笑みながら呟くと、ヒロは少し調子に乗り始めた

テンションを上げて、すく満面な笑みを浮かべている

「本当に～～じゃ、じゃあぜひハンド部のマネージャーやりや～～」

「マネージャーかあ……考えとくね」

この答えを聞いただけでヒロは満足だったのだろう。健斗の肩をつかみ、嬉し涙を流して田で訴える

（我が人生……バンザイ青春……）

「よかつたな……」

健斗は少し苦笑いをした。

「ねえ、健斗くんは？」

「え……」

ふと麗奈がそう訊いてきた。興味津々で健斗に笑いかける

「健斗くんは部活入ってるの？」

「俺は……入つてない」

健斗の答えに、麗奈は意外そうな表情をした。

「そりなのつー・じやあ、バイト？」

「……まあ……うん……」

健斗は少し恥ずかしくなつて下をうつ向いた。

何か、健斗以外は部活などに入つて、やりたい」とをひやんと見つ

けているのに……自分で部活に入らず、プライバシーしてこよと思つたからである

「んなじや早川に眼中になつて思われるよな……

「健斗くん、サッカー部だつたよね？」

「早川がやつて書つた

「サッカー……か……

「中学で、私すゞこ上手だつて聞いたよ？高校じゃやんないの？」

健斗は少しうつむいたまま、ゆづくつと頷いた。確かに、中学ではサッカーをやつてたけど……だけ……だけ……

「うん。ちよつと膝を痛めてて……高校はやめた

「やうなんだあ……」

早川は少し残念やうな表情をした

健斗はチラリヒロを見つめる。ヒロは健斗を見ると、ため息をついた。

「健斗くんがサッカーかあ

麗奈は健斗を見ると、ふつへんつと顔にながら、納得した

健斗は麗奈からすぐに田を剃らした

「……私、もう少し考えてから決めるよ」

と麗奈は健斗に笑いかけた。健斗は何も言わず、麗奈からなるべく田を剃らして、弁当のおかずをついたんだ。

「わいこえば、麗奈ちゃんのお弁当ついで、山中くんのお弁当さんが？」

早川が麗奈の弁当を見てそう言った

麗奈の弁当は山中さんによつて丁寧に作られていた
心なしか……若干俺より少しだけ寧のよつだ

でも、当たり前だが健斗のと麗奈の弁当は、だいたい入っている具材はいつもだ

健斗にとつて、それは少し嫌悪感を感じるものだった

麗奈は早川の問いかにゆきくり頷きながら答えた

「うそつ わざわざ朝早くから作つてもひつたんだよ

「ここのお母さんだね」

と早川は健斗に笑いかけた

健斗は少し困り顔を作った

「そんな……大森に優しいだけだよ」

健斗はゆっくりとため息をついた

「俺には口づけをこし、あれをしろ。これをして……こいつも命令していくわ……スゲー迷惑な母親だよ」

健斗はそう語って、深くため息をついた

「確かに……分かるぞ健斗。俺の親も

「そんなことないよつーー！」

突然麗奈が声を張り上げて叫ぶように言った。健斗やヒロ……早川たちは少し驚いて目を丸くした

麗奈はゆっくりと健斗に笑いかけながら、小さく語りかけるような口調で話した

「お母さんって、健斗くんが思つてこる以上に、健斗くんのことを
考えてくれてるはずだよ？ 本当は誰よりも愛してるはずだよ？ だか
ら……迷惑だなんて言つちやダメだよ」

健斗は啞然とした様子で麗奈を見ていた

その麗奈の表情はまた……あの寂しげな表情を浮かべていた

するとだつた。早川はクスッと小さく笑つた。

「そうだね。麗奈ちゃんの言つ通りだと想つよ」

と健斗ににっこり笑いかけてきた。健斗はその純粋な笑顔を見られず、田を剃らしてしまった

「そりだぞ健斗。親つてのは常に子供のことを考えてるはずなんだぞ?」

そつままで健斗と回りじことをこおつとしてたヒロも、都合良べゆつくつと頷きながらそり言つた

「あんただつて同じ」と言つてたでしょ?」

佐藤がヒロに突つ込みを入れると、早川と麗奈はクスクスと笑つていた

四人は楽しそうに笑いながら話している中……健斗は苛々が込み上げてきた。

麗奈に言われた言葉が重くつて一人では支えきれない。

早川の目の前で自分の言つた言葉を正されるだなんて……スゲー恥ずかしかつた……

その羞恥心が、自分を戒める劣等感へと変わり、苛々が込み上げてきたのであつた

偉そうに物を言つ麗奈に対し……そして情けない自分に対し……

我慢の限界だつた

健斗はゆつくりとお弁当箱の蓋をしめ、片付け始めた

「あれ？ もう食べ終わつたの？」

早川が不思議そうに健斗に問いかける

健斗はゆっくりと立ち上がり、早川に微笑みながら言った

「うん。俺ちよつと、自販機で飲み物買つてくるから……昼飯誘つてくれてありがとうな早川。ごちそうさま」

健斗はそう言つて、弁当箱を自分の鞄の中にしまつと、教室を出ていった

健斗が消えたあとに、四人は少し静まり返つていた

「どうかしたのかな山中くん……」

早川が少し心配そうにそう言つた

するとヒロが食いながら、口に食べ物を入れてゐるよう言つた

「ほつとけ。別に何でもないよ」

ヒロは健斗のことによく分かつてゐるから……健斗が何故自販機へ行つたのかが分かっていたのだ

麗奈は健斗の去つていった後ろ姿を思い、つかべながら、教室のドアを見た

そしてお弁当のおかずを口を開けて運んでいくのであった……

健斗は自販機で飲み物を買つと、憂鬱な気分である場所に向かつていた。

いつも何かモヤモヤするとあの場所に向かうのだ

健斗は飲み物を持って階段をゆっくりと上がつていった

向かう先は、屋上だつた。この学校の屋上は普段空いていない
なのにビリして健斗は学校の屋上に入れるのか……

簡単なことだ。鍵を盗んだからだつた

とは言つても職員室から盗んだわけではない。トイレに落ちていた
鍵をたまたま拾つただけである

以来健斗はその鍵を、屋上へ続く扉の下にある微妙な隙間に隠して
いる

あまりにも微妙過ぎて、絶対に見つかることはない。

また中からは鍵をかけられるから、絶対に開くことはないのだ

健斗が使わない限り……

健斗はいつものように、鍵を取り出し屋上に入った。ちゃんと中か

ら鍵を閉めて、やつと一人の空間を手にいれた

いつもなら、スゲー安心して、胸を撫で下ろしてたのかもしれない。

けれど、健斗が感じていたのは……羞恥心と劣等感だった

気に入らないことがあると、いつもここに逃げ込んでしまつ

そんな自分が嫌になつてゐる……

健斗はゆつくりとため息をついて、ひんやりとするコンクリートの上に寝転んだ

どうしてこんなことを思つんだろう?

一昨日まではそんなことを考へること何になかった

自分は自分だから……他人にどう思われようとどうでも

いつも恥ずかしことから逃げるよつた臆病で卑怯なやつでも構わない

そんな風に思つてたはずだ。なのに……どうしてつきかからこんなに胸が痛むのだろう?

健斗はゆつくりとため息をついた

風が気持ち良い……

風でなびく髪が、目にかかる。健斗はゆっくりと田を開いた。

何といつ素晴らしいほどの青空だ。そしてグランドからは、人の騒いでる声がする

グランドでは昼休み、人がドッジボールや野球……サッカーなどをやっている

健斗は空を見上げながら、麗奈のことを考えていた

何もかも、あいつが来たから……全てが苛々する

早川の田の前でることを麗奈に言われた。まるで俺が悪者みたいな形になった

あいつのせいで……

……でも逃げ出してきたのはそれだけじゃないような気がする

やつぱり……あんな風に大勢で話したりするのって慣れてないから……そういうのってあまり好きじゃないのかもしれない

こんなやつ……さつと可笑しいよな

普通なら、樂しつて思つのが普通なのに……

急にいなくなつて、早川は何て思つたんだろうつ

変なやつだつて思つたに違ひない。

せつかくみんなで楽しく弁当を食べてたのに、その雰囲気をぶつ壊したのと回じだもんなんあ……

嫌われたかもしれない……

健斗はゆっくりとため息をついた

早川に嫌われたら……もう学校に来る意味なんてなくなっちゃうよ。

とても今、教室に戻つて早川に会つ『気分じやない

つーより、会いたくない……

だから……午後の授業サボつといひ。

さつとヒロが適当にしてくれるだらう

健斗は全てのモヤモヤを無くすために田をつぶつた。そして……疲れを癒すように静かに眠り始めた……

それから何時間が経過しただろう。夢なんて見なかつた。

けど、気持ちよくつて……かなり眠つてしまつたような気がした

再び田が覚めたのは、どうやら放課後のようだつた

健斗はゆつくつと田を開いた

空はまだ青いけど、少し夕方に近づいてた

太陽の場所が変わつてゐる……

授業はもう終わつたんだろうなあ……ちゃんと出ないと単位がとれないといつけど、あまり気にしなくつていいかあ……

眠つたことによつて、少しモヤモヤが晴れたような気がする

健斗はゆつくつと息を吐くと、寝返りをうつた……と、するとじだつた……

また目の前に、可愛いらしい寝顔を見せる女の子の寝顔が映つた

最初は何があつたのか、そこで静止した状態でその寝顔を見ていた

……

…………十秒くらく述べてから、全てのことを把握した。

健斗はびっくりしてすぐ身体を持ち上げた。このパターン……朝と同じだ

「お、大森！？」

そこには麗奈が健斗の隣で、気持ち良さそうに寝っていた

制服のまま、スースーと寝息を立てながら……

「何やつてんだよ……ここつ」

マジで本当に……ここつがわけわからん

何でまた健斗の隣で眠つているんだろう？しかもこんな無防備な様子で……何を考えてんだろうか……

いや、それよりも……どうもつけてこの屋上に入ってきたんだがつ

鍵の在りかをみつけだしたのか？まさか……

絶対に見つかるはずがないって思つていたのに……

しかも……ここつの顔なんて見たくなかった

健斗をモヤモヤさせる原因の元で……

健斗はため息をついてから、ゆっくりと麗奈の身体に触れて、揺さ

ぶるよつに起^レした

「大森つ……起きりよー大森つーーー」

すると麗奈はゆつくりと畳を開き、またゆつくりと身体を持ち上げて、健斗をしばらく見るとニコニコと笑った

畳が半分寝ている状態で、眠れりに言つてきた

「あ……おはよう健斗くん」

「おはようじやねえよ。お前……なんでこりこりいんだよつー。」

麗奈は健斗の問^レに思^レい出しながり答えた

「えつと……健斗くんが昼休み終わっても帰つてこなかつたから、ヒロくんに居場所を聞いたりこりだつて」

そつか……ヒロも鍵の在りかを知つてるんだ……

「それで健斗くんを見つけて、健斗くん、気持ち良さそうに寝てたから……私もいっしょに寝ひやえつて、本当に寝ひやつた」

と麗奈はクスクスと笑つた

健斗は笑わず、頭を搔きながら困つたよつに言つた

「お前なあ……授業サボつたのかよ?」

「だつてどうせ健斗くんいなきや、教科書ないし……」

そりや……確かにそうだけじゃ……

「普通いつしょに寝るか？起こしたりしないよ。俺は悪いことしてたんだぞ？」

本当にわけの分からないやつだ……こつしょに寝るだなんて

「健斗くん一人悪い」とするのって寂しいでしょ？私も同罪だね」と笑つて麗奈は言った。健斗はそれ以上何も言えず、ブイツと田を剃らした

「……アハハハハ

麗奈は突然声を上げて笑い始めた

「何笑つてんだよ」

「分かんない 何か……アハハ 授業サボるのつて、初めてだつたから、何か可笑しくつて。アハハ お母さんに言つたら怒られそうだね」

「はあ？」

そんなんで笑つてんじゃねえよ……わけ分からねえ

「ふう～ よく寝たなあ～」

「……

健斗は黙つて、傍におこといた飲み物を口に含んだ
少しぬるくなつていたが、まだ飲める範囲だ……

「もういいからあつち行けよ。早川のことかわ

「結衣ちゃん、部活でしょ?」

「……そっか……」

健斗は納得してからため息を吐いた

「ねえ健斗くんはさあ

「あ?」

「どうして部活やらなかつたの? サッカー上手だったんでしょ?」

麗奈にやうやくわれて、健斗はブイックと目を剝らした

「まだ話の咲

「ねえ何で?」

「とある事情

「事情つけて?」

健斗は顔をしかめて少し声を低くして言った

「「つぜーなあ…………お前」」事情つて何だよ…………」

「私?だから、親が外国でお仕事してたから」

「ウソつけ。バアカ!—!」

健斗がやつ言つと、麗奈はきょとんとした様子で訊ねた

「「じつじつウソだと思つの?」」

健斗は少し黙り込んだ。

何でだらうつな……

「じつじつこつがウソついてるつて分かるんだね!」

時折見せる寂し気な表情に、何か秘密があるように思えたから……

「…………それは…………分かんねえけどそう思つからだよ」

健斗はフイッシュ田を剃らした。

何だか、今考へてることを麗奈な言いづらい気がした。そんなこと言つたら、麗奈はどんなリアクションを取るんだろう……

「健斗くん」

「何

「健斗くんつてが、どうしていつもみんなの傍に寄らないの？」

健斗はそれを訊いて、眉をピクッと動かした。麗奈は不思議そうに続けた

「何か、健斗くんつていつも一人でいたがってない？ 一人が好きなの？」

健斗は何も言わず、だ前を向いていた

それはさつき自分で考えてたことだ

「……別に……ただなんとなく

健斗がそう言つと、麗奈はふうへんつと言いながら、健斗を見た

「……分かんねえけど、やつぱり……変……だよな」

健斗がそう呟くやつと麗奈は健斗を不思議そうな表情をして視線を送った

「普通なら、ああいうのを楽しげって思えるんだろうけど……俺、小学も中学もそういうことなかつたから……だから、何か……一人の方が落ち着くっていうか……」

健斗はそう言いながら、ふと小さく笑つた。

「いや、自分で変だと思つてるよ。根暗なやつだつて」

健斗はそういう、また飲み物を飲む

自分でも分かつてゐるんだ

そんなやつ……誰にも相手にされないだなんて……早川にも、みんなにも……

麗奈は健斗をじっと見ていた。すると突然小さく笑い、空を見上げながら大きく言つた

「……私も、ネコ好きなんだ」

「は？」

突然何の話をしあじめたんだ？と思いつながら、健斗は麗奈を見た

「ネコつてさ、いつものんびりしてて、いつも自分の時間を楽しんでて、いつも好きなことを好きなだけやる……でも人はあまりなつけない。何て言つか……自分を信じてるんだ～ってみたまいか？そんな感じに思つんだよね」

「だから……？」

健斗が変な視線を送つていると、麗奈は笑いながら健斗を見た

「健斗くんつて、そのネコっぽいよね」

「は？意味分かんねえ。つーかお前だつてのんびりネコだら

健斗がそつ言つと、麗奈はクスクスと笑つた。

「私もネコっぽいかな？でも……私はネコはネコでも……ただの“飼い猫”だから……」

「…………？」

飼い……猫？

「私さあ、健斗くんが羨ましいよ。自分の好きなように生きて、何にこもどらわれない……自由な生き方……私も……」

健斗はそして見た……あの寂し気な表情を……また見れたんだ

「私も……健斗くんのよつな、自由な“野良猫”になりたいなあ……」

健斗はその表情に見とれていると、また健斗を見てにっこりと笑った

「だから変じやないよ。健斗くんみたいな立派な野良猫」

健斗はその言葉一つ一つが、何だか心に響くよつな暖かい気持ちにさせるような……そんな感じにさせられていた。だから、麗奈に見とれて、その言葉一つ一つをちゃんと聞いていたのだ

麗奈はにっこりと微笑んだ。可愛いらしいうんざりな笑顔を見せながら

……

「私は、ちょっと人に向き合つのが苦手で不器用だけど……本当はさりげなく優しくつて、自由で、しつかりと自分というのを持つている……健斗くんのそんなどころが……好きだよ？」

「え……」

そんなことを言つて、麗奈はにっこりと微笑んだ

健斗はその言葉を聴いた瞬間、胸の高鳴りが強くなつた

麗奈の微笑んだ……そう、いつもと違つ感じの笑顔だ

少し頬を染めて、嬉しそうに……喜んでいるように、心の底から笑つてゐる

この日、このとき……健斗は麗奈の「本当の笑顔」を見れたような気がした

胸の高鳴りは収まらず、ただ麗奈の綺麗な瞳に吸い込まれていた……顔の表面が熱い

俺を……好きつて……俺の劣等感が……好きつて言つてくれた

この麗奈が……すゞくすゞく……大切な人に思えた……

麗奈が健斗にとつて大切な……大切な人に思えた……

「……なあーんてねつ！？びっくりした？」

「え……」

麗奈は健斗のあよとんとした表情を見て、クスクスっと笑った

「冗談だよおー ドキドキしたでしょー?」

「なつ……ーーお前おちよくつひんのかよつーー?」

「アハハ もつと愛想良くしないと、結衣ちゃんに振り向いてもらえないぞー」

「べ……余計なお世話だバカつーー人をおちよくりやがつてーー?」

健斗は顔を真っ赤にしながら怒鳴るように言った

けど麗奈はクスクスと笑っていた

「アハハ ねえドキドキした? もしかして……私のこと好きになつちやつた?」

「なつーーバカーーお前なんか好きになるかつーー」 健斗はブイツと麗奈から顔を削らした。

でも、麗奈がそんなことを言つてくれたとき……本当は嬉しかつた。

心の底から勇気が出た。

自分の感じていた劣等感を……

こんなことを言つようやつは初めてだ……

健斗は麗奈を見た

麗奈は相変わらずクスクス笑っていた

それをみて、こいつは俺をからかってんじゃないかって思った

思ったんだけど……

「バカ……いつまでも笑ってんじゃねえよ。」

健斗も麗奈につられて、笑ってしまったのであった

「ねえ～、別にいいでしょ～？」

麗奈が不満そうに健斗に叫びてくる。しかしそれを健斗は何も言わず、無視をしていた

「別にいいじゃん？ 人に見られてもさあ～」

「ダメだ。誤解されると困るんだよ。つーかもつすぐだからちゃん
と歩け」

「え～……？」

麗奈はブスッとした表情を見せた。健斗はそれを見て、少し可笑しな気分になっていた

何をそんなに揉めてこるのかといつと、帰り道のことである

健斗は部活もやってないし、麗奈もまだ部活に入っていない
だからすぐに帰れるんだけど……麗奈が学校から自転車の後ろに乗りたがるのだ

学校の田の前で自転車に乗せてることを見られたら何て言われるか

しかも、未だに噂になつてゐる麗奈だから…… よりいつそつ噂が広まつてしまつ

だから、人目がなくなるコンビニまで歩いつと黙つてゐること……

「もう疲れたよおーーー！まだつかないのーーー？ねえつてばあーーー！」

「うるせえなあ……」

麗奈はわざわざからわめいてばかりである

健斗は深くため息をつきながら、自転車を押して歩いていた

まつたく……東京者は歩いたりしないのか？

「もう自転車に乗りたいーーー！乗りたい乗りたい乗りたい乗りたあーーー！」

「だあーーー！うるせえんだよさつきかいつーーー！ちょっとは黙れな
いのかよつーーー！」

健斗は怒鳴りつけるように麗奈に言った

麗奈を口を尖らせてツンツとした様子でいった

「大体わつーー！健斗くん周りを気にしそぎなんだよつーーー！いつつも
誤解されるとかさあ「

「お前は周りを気にしなさすぎなんだよ…… ももそもお前が自転車を乗れるようになればいいだろ？ そしたらわざわざこんな風に……」

「自転車とは無縁なんです」

「東京者はみんなそういうのかよ」

「やうひす 東京者は自転車を使わないんだよ」

健斗は呆れたようにため息を吐いた

自転車を使わないのはお前だけだらうが……

「…………こり辺なら人目につかないな」

健斗の隣に「コンビニ」があるところまで歩くと、健斗は自転車にまたがった

「えい。 やつあと……」

健斗は麗奈を見ると、麗奈は健斗の後ろにはってなかつた……

すると「コンビニ」の自動ドアが開く音がした

健斗は「コンビニ」の方を見ると、何と麗奈が「コンビニ」の中へ入つていくのが見えた

「おこ……」

健斗は自転車から降りて、後を追いかけるよつて「コンビニ」へと入つていった

入った瞬間、涼しい空気が健斗の顔を包み込むようなものを感じた。

「わあ～ 涼しい～」

「涼しいじゃねえよ。何してんだよ」

健斗がそういうと、麗奈は軽い表情を見せた

「いいじゃんいいじゃん ちょっと休憩ターケィム

「ふざけるな。おこでくぞ

「待つてよ～～！　あ～～私アイス買おうと～～！」

麗奈は健斗を無視し、アイスの方へと走っていった

健斗はその様子を見て、苛々とした。漫画でいつ……あれだ。怒りマークが頭につくような思いだ

「……………」

健斗たちはよつやく家へと続く一本道を通りていた。

何か今日一日がスグー疲れた。健斗は右手にもつたアイスクリームをペロッと舐めた

麗奈は「……」、後ろに乗つて鼻歌を歌いながらアイスクリームを食べていた

「今日学校楽しかったなあ～」

麗奈は意気揚々と「……」、健斗に話しかけてきた

「いい人ばかりで、友達も出来たし」

「よかつたな……」

「結局健斗くん、アイス買つてるし」

「ウルセえなあ……別にいいだろ」

健斗は頬を赤く染めながら後ろを振り向いた。

「お前、部活ビデオすんの?」

健斗が訊くと麗奈は少し考えるような仕草を見せた

「うーん……エリックがうかなあ……健斗くんはエリックバイトしてるの？」

「俺？俺は……商店街の中の喫茶店で」

「くえ～～？ビリビリ～？今度連れてついてよ～」

「嫌だ」

健斗がそうつぶやいたと麗奈は口を尖らせた。

「何でえ？」

「お前がこると邪魔だから」

「やうひ言つてや、私邪魔したことある？」

「ある。つーかこつも邪魔だし」

健斗がそんなことを言つて、麗奈が健斗の背中を平手でたたいてきた

「こつてえなつ……叩くなよ」

「私健斗くんのやつこつとこつ嫌こつ……」

麗奈は少し怒つてゐるよつだつた

「別に。嫌いなら嫌いではつきりしろよ」

「むう～……ふんつ……」

麗奈はツンツンとした態度でそっぽを向いた

頬を膨らませて、何だか可愛いんだけど……明らかに怒つてゐるよつた態度だった

「……つーか何、お前バイトする気かよ」

健斗が少し笑いながらそつと言つた

「…………」

「大森」

「…………」

健斗はゆつくりと振り返ると麗奈はさつきの表情と変わらず、ツンとした態度で健斗を精一杯無視しているような感じだった

健斗はそれを見て、また前を向いた

「勝手にしろよ……」

健斗はそつとくと、手にもつていたアイスを一気に食べた

健斗たちはよつやく血圧まで帰ることが出来た

西の窓を見ると、日は落ちかけていた。時計はもう五時を指している。

「ただいま～」

麗奈は元気良く家の戸を開けた。

家へ入ると同時に、晩飯のいい匂いがしてきた。今日は……カレーダナ、こりゃ

カレーとは母さんもたまにはやるじゃないですか

健斗がそんなことを考えていると居間の方から母さんが顔を出してきた

「あら、お帰りなさい」

麗奈は靴を脱ぎ、母さんに駆け寄った

そしてカレーの匂いを感じて、嬉しそうに笑った

「わあ～ 今日カレーですか？」

「やうよ。でもやう少しかかるから、よかつたらお風呂に先に入つ

てきなセコ

と母さんは麗奈に優しい笑顔を送った

「はい。やつをせんもうこます」

健斗と麗奈はとうあえず部屋へと戻った。健斗は自分の部屋に入り、鞄を置いた

麗奈はまだ何もない自分の部屋に荷物を置くと、健斗の部屋の前に立っていた

健斗は麗奈を見て、促すよひに言つた

「先入れよ。あとから俺は入るからさ」

健斗がそう言つと、麗奈は何も言わず一階へと降りていった

健斗はその様子を見ると少し嫌悪感を感じていた。もしかして……あいつ本当に怒ってんのかな？

健斗はため息をつくと、ベッドにむづくじと座つた

まったく……別にそこまで怒ることなんて言つてないだろ？……

しかも訳の分からないことばかり言つやがつて……

『私は、ちょっと人と向き合つのが苦手で不器用だけど……本当はさりげなく優しくって、自由で、しっかりと自分とくのを持つて……健斗くんのそんなどころが……好きだよ』

麗奈は俺に、そう言った。俺が野良猫みたいでそんな俺が羨ましいつて……

俺はずっと、自分がそんな風に思つたことはなかった

やつたことの見つからぬ、中途半端な生活……そんな自分に嫌気がさしてこた

そんな俺を、ビリして羨まじがるのだろうか？

こんな野良猫を……ビリして……

まだあいつに会つて、一日しか経つてないのに……まるで俺のこと

を昔から知つていたように見てくる

それとだ。麗奈は自分のことを、飼い猫だと言つたよな……

どうこう意味だつたんだろ？……

健斗は時折麗奈が本当に分からなくなる

あの寂し気な表情を見せてくるときなんて、一番よく分からぬことを見つけてる

だから俺には、本当のあいつがなんなのか……分からぬ。だから本当に気を許してゐわけじゃないし、かと見てそこまで仲良くな

る気はない

ただ……

健斗は考えるのをやめた。何か、最近麗奈のことを考へ過ぎてこの気がする。あまり深く考えなくてもいいよな……

あくまであいつは居候なんだから……深く考えるのはやめよう

健斗はゆっくりと皿を開じて、息を吐いた

「いただきまあ～す」

そして夕食時、上手そうなカレーが3つ置かれていた

麗奈はそのカレーを見てとても嬉しそうだった。

「美味しそう～ カレーなんて久しぶりです～」

「あひ～、もう遠慮なんかしなくビビビん食べやしあつてね？あ……でも体重も気にしなきやね？」

と由香さんが言つて、麗奈はクスクスと笑つた。

健斗はカレーを頬張りながら、テレビを見ていた
いつも母さんがつけているニュース番組。殺人事件や経済問題などが淡々と出でている

まあほとんどは都市の事件だが、こんな田舎ではこんな風に日常を壊すような事件なんて起きないんだろうなあ……

「学校はどつだつた？」

母さんがカレーを食べながら、麗奈の表情を伺いながら訊いてきた。
けれど麗奈はにっこりと笑つて言つた

「はいっ……スッ、ゴク楽しいです。友達も出来たんですね？」

「あら本当？ よかつたわあ～」

すると麗奈はクスクスと笑いながら言つた

「しかも健斗くんと」

「ちよつー？ 待てー！ それは言つなよつーーー！」

健斗はカレーを食べる手を止めて、麗奈の言葉を遮るよつて叫んだ。

「一体何を言い出すんだこいつ……」健斗は麗奈を見ると、麗奈はふふんと笑つた顔をしていた。その表情を見て、健斗は感じ取つた

「わざわざ……だな……」

「わざわざこいつに話つたことを根に持つてやがんのか……」

「あら、何、健斗、何したの?」

「え?…… つと…… 大森と、アイス買つたんだよ。帰りに……」

健斗がわざわざ話つと、母さんは納得するよつて頷いた

「へえ~? 一人とも仲良くなっちゃつて やつと健斗にも青春が訪れたのね~」

「訳分からねえよ」

健斗はそつ然くと、また麗奈を見た

麗奈はカレーを食べながら健斗を見ると、フンシと笑つぽを向いた

「母さんが安心するよつて話つた

「でも、麗奈ひやん楽しそうで何よつよ

「はい。わざわざ町にあつといたいです

「本当に? あ、わざわざ、部活は決めた?」

母さんが健斗や早川と同じことを訊いた。麗奈は少し驚くと、ゆっくりと首を横に振った

「まだ分からぬです。やつぱり、バイトかな……」

健斗はそれを訊くと、カレーを食べる手を止めて麗奈を見た

母さんはすうっと困り顔を作りながら、不満そうに言った

「あ～～……バイトなんかやらなくていいわよ～～？」いつだけで充分

と母さんは健斗を指す。けれど麗奈は少し苦笑いをした

「うん。でも、私がこの家に住む分……ガス代や水道代、光熱費や食料費とかが増えちゃうじゃないですか？だから、私働いて少しでも迷惑を減らしたいから」

その言葉を聞いて健斗は呆気にとらわれていた。びっくりしたのだ。麗奈がこんなことを言こ出すとは思ってなかつたから……

それにスッゴク意外だった。ここつが迷惑だとちやんと考へてているということだが……

色々考へてるんだな……」こつもこつで……

少し麗奈を、見直した気がした……

「ちよつと聞いた~？」

母さんが甲高い声で健斗に囁いてきた
「こそこそにしつかりしてゐる子つてこね~、あなたも麗奈ちゃん
を見習いなさいよ~」

「いや……別に……」

健斗は少し嫌悪感を感じていた。麗奈から皿を剃らして、カレーを
パクリと食べた

「でも気にする」とないのよ?」

母さんは麗奈に優しい笑顔を浮かべた

「生活のひとなんて気にする必要なんてないわよ。高校生なんて今
だけなんだから、あなたのやりたいことをやりなさい?」

母さんの言葉を聞いて、麗奈は嬉しそうに笑った。それは安心する
ような表情だった

「はい。ありがとうございます」

健斗はその表情を見ながら、カレーを一口食べた。そして、少しだ
け小さく笑った

「ふう～……」

健斗も夕飯を食べたあと、ちゃんと入浴をした。そして半パンと白いTシャツに着替え、バスタオルで頭を乾かしながら健斗はゆっくり息を吐いた

疲れた後の風呂とはいるものだ……健斗は頬をあかく染めて、冷蔵庫の中から水を取り出し、口に含んだ

居間では母さんがお茶を飲みながらテレビを見ていた

母さんの好きなマヤ遺跡だの、Hジプトの何とか何だからの……

母さんは歴史もんが好きだから……けど歴史は全然知らないけど……

健斗は水を飲みながら、居間へと入った

「今日父さんは？」

健斗が訊くと、母さんはお茶を飲みながら答えた

「今日は遅いわよ～。麗奈ちゃんの部屋のものをホームセンターで見てきてこなから

なるほど～……

健斗はそれを聞いてふと麗奈の「」とが氣になつた。麗奈は……何してんのかな……

健斗は冷蔵庫からもう一つ水を取り出した

麗奈にもあげるか……

ちよつと怒つてゐみたいだしな……

「母さん、大森は？」

「ん~……縁側の方にいるんじゃない？」

健斗はそれを聞いて、縁側の方へと歩き出した。

やれやれ……うひつて俺があいつの「」機嫌を伺わなければならぬのか……

いつまでも「」機嫌斜めだと、ちもいひちでやりにいくしな……

縁側を見ると、確かにそこには麗奈がいた。外をただ呆然と眺めていた

一体何を考えているのか、健斗は麗奈に近づいていった

すると麗奈は健斗に気がつくと、すぐ「」پイッと顔を剃らした

健斗は頭を搔きながら、麗奈に水を差し出した

「せ、」

麗奈はそれを見ると静かに受け取り、ブスッとした態度で小さく「ありがと」言つた。

「……なあ、まだ怒つてんの?」

健斗がやつ語くと、麗奈は健斗に不機嫌な様子を見せた

「別に……怒つてないもん」

「怒つてんじやんか」

「だから怒つてないじばつ……」

麗奈は少し声量を強めて健斗に怒鳴るよつと言つた

健斗はそれ以上何も言わず、ゆつとため息をついた

もつここや……健斗はまくらと反転すると自分の部屋へと戻つてこつた

麗奈はそれを見ると、少し皿を擗わせると、膝を抱え込んだ……

「健斗くんの……バカ……」

小さく、齒くよつと言つた

健斗は一階へ上がり、自分の部屋に閉じ籠つた。水を飲みながらため息をつき、ベッドの上に乗つて窓から外を見渡した

何だよあいつ……せつかく人が気にしてやつたのによ……それに別に大したこと言つてないだろうが……

勝手にしろよ……

でも……あいつも色々と考えてんだよな……

あいつがあんなこと言つなんて思わなかつた……

自分の食費や光熱費を負担かけたくないから、バイトを考えてたんだな……それを嘲笑うかのように笑つてしまつた……

やつぱし俺が悪いのかな……

でも麗奈も麗奈だ。いつまでも『機嫌斜めだから……

別に嫌われたならそれでいいし……あんな性格の悪い女……どうで

もこいよ……

人のことを好きって言つたり嫌いつたり言つて……早川のこと
を応援してんのかからかつてんのか分かんない……

いつも俺のことからかつてるだけじゃねえか……

健斗は水を飲み干して、モヤモヤを晴らすようにペットボトルを投
げ捨てた

まあ麗奈のことなんかより、早川のことだよ……明日なんて謝るつ
か……せっかく誘つてもらえたのに、悪いことしたよなあ

今早川にあえれば、すぐにでも会いたいのになあ……健斗は時計を
見た

もう八時か……こんな時間に早川がこいつへんを歩いてるわけない
か……

と思つていろといひだつた……

……ん? 何か、一人の女の子が、歩いている。しかも、健斗の家に
向かっていた

こんな近くだから分かつた。健斗は身を乗り出して驚きながら叫ぶ
ように言つた

「えつー? は、早川! ?」

そう、まさか本当に健斗ん家の田の前早川が歩いていたのだ。

しかもだった……間違いなく健斗ん家に近づいてくる。通りすがるわけではなさそうだった！！

「えつー…マジかよー…本当に…早川？」

健斗はテンパリながらも、すぐ二部屋を出て飛びようの一踏に降った途中、慌て過ぎて壁の角に左足の小指をぶつけてしまった。そのせいで足に激痛が走った！！

しばらく「痛い痛い」といながら左足で飛びながら、左足を押されていた

するとじだつた。ドアの呼び出し音がした

きっと早川が押したのだ。すると居間から母さんが顔を出してきた

「健斗出でくれるー？」

言われないでも出るつもりだった！！健斗は痛みを忘れ、すぐにサンダルを履き、家の戸を開けた

するとそこには早川が黄色のTシャツに短パン姿の可愛らじい恰好で、何かを持って立っていた

健斗が出てくるのに気がつくと、早川は少し驚いた表情を見せた

まさか初めから健斗が出てくれるとは思わなかつたのか……一番びっくりしてるのはこっちだけじゃ

「あ……山中くん。」んばんわ。突然「メンね」

「あ……うん」

健斗が微笑むと、早川は少し健斗の濡れた髪を見て笑つた

「お風呂上がり？」

「あ、ああ、今さつき入つたと」

健斗も濡れた髪を触りながら微笑んだ。すると早川は少し近づいてきた

「ふ~ん……フフッ、？でもちやんと乾かさなこと風邪引いやうよ？」

「あ……ああ。ちやんとあとで、乾かしちゃう」

と健斗は言った

「え？と……大森だる~今呼ぶかい」

と健斗が麗奈を呼ぼうとするが、早川がそれを止めてきた

「あ、ひひ。今日は山中くん用があつたの」

「え……俺に？」

健斗はそれを聞いて胸が高鳴った。俺に用事つて……？

胸が高鳴つていくな、喜びも感じていた

麗奈が……隠れて話を聞いていたことも気づかず……

「うん。今日、授業で渡されたプリント山中くんと麗奈ちゃんの分持ってきたんだ」

と早川は持っていたクリアファイルからプリントを一枚、健斗に渡してきた

健斗はそれを受け取ると嬉しそうにうつと笑つた

「ああ、わざわざありがとうな」

「へへん。今日の」と謝りたかたし……

「今日?」

健斗が不思議そうに聞くと、早川は少し苦笑いをしながら言った

「今日ゴメンね~お弁当の時間……迷惑だった……よね?」

健斗はそれを聞いて、自分も謝りうとしていたことに気が付いた

「いやつ……全然迷惑じゃないって……逆に感謝してるから」

「……本当に?」

健斗は微笑みながら続けた

「俺こそ『ゴメンな……こきなりどつか行ひやがつて』。あつがどつか誘つてくれて」

素直な気持ちを早川に伝えた。すると早川は安心するかのような可愛らしい笑顔を見せた

「よかつた……あのあと山中くん、授業も戻つてこなかつたから……怒つちやつたのかなつて思つてた」

「ああ……いやそれは……」

「麗奈ちゃんも途中でいなくなつちやつたから」

「うふ。『ゴメン。ちよつと氣分が悪かつただけ』

「そつか。今は平氣?」

「うふ。ちよつと寝たら元氣になつた。わざわざ心配してくれてあります」

「りがとう」

健斗がそつと微笑むと早川は嬉しそうに笑つた

「よかつた……おじく心配してたんだから」

と言つてフフッと笑つた。そんなに心配してくれたなんて……何て幸せなんだか

「うふ。ありがとうな

「うふん。あの……」

早川は微笑みながら健斗に訊くよつに言った

「明日もこっしょにお弁当食べなー?..」

「え……」

健斗は早川の言つたことがずいぶん驚きだった。早川は少し焦りながら言つた

「もしよかつたらだけ……明日もこっしょに食べよ?迷惑……かな?」

「……あ……うん。サンキュー……明日も、こっしょに食つていいな」

健斗がさう言つと早川は安心するかのように笑つた

「よかつた……じゃあ、私帰るね?」

「あ……うん。わざわざサンキューな

健斗は早川を壇の外まで送つた

「送りつか?..」

「ううん。山中くんの家とは5分くらいだし。大丈夫」

「やっか……あ、本当にありがとうございます。わざわざ……帰り、気をつけ
て」

「うん。じゃあ、また明日ね」

「ああ。また明日」

早川は手を振りながら、健斗から離れていった。健斗も早川が見えなくなるまでずっと手を振り続けていた

そして早川が見えなくなると、しばらくの間呆然として佇んでいた。
早川が……早川が俺のことをスグー心配してくれて……またお弁当
を誘ってくれた……

「……よっしゃああああ……」

健斗はその場で喜びの雄叫びを上げた

今日はスゲーついていた!! 嬉しい気持ちでいっぱいだった

わっかのモヤモヤした気持ちなんて忘れた!! なんて幸せなんだろ
ううーー

健斗はルンルン気分で家へと戻つていった

そして鼻歌を歌いながら、サンダルを脱いだ。
すると田の前に麗奈が立つていて、ことに気がついた

無表情で健斗を見つめていた

しかし健斗はそんなこと気にせず、超好機嫌で麗奈に言った

「 めりー……ちよひよかつた ほひ、早川がお前のプリント渡してくればわ」

と言つて、麗奈にプリントを渡すと、ルンルン気分でスキップで階段を上りつとした

すみと……だつた……

「 よかつたねつ……結衣ちゃんとこひまこ話せしやつ……」

「 あ?..」

健斗は不思議そつに麗奈を見た。麗奈は渡されたプリントをくしゃくしゃにするまで手に強く力を入れていた

「 よかつたじやんつ……結衣ちゃんにお弁当誘われてわ……もしかして、こひなむじとを予測して今日授業サボつたの?..」

「 ……何言つてんの?..お前……」

健斗は少し真面目な顔をして、麗奈を見た

麗奈は健斗を見ると、まくべつ健斗に近づいてきた

「 明日が楽しみだねつ……おやすみ……」

麗奈はやつらつと、笑いもせず、健斗の横を通り過ぎて一階へと走つていった

健斗は少し呆然としながら、麗奈の後ろ姿を見ていた

「……何だよあいつ……」

何を怒つているのか……まつたく理解できなかつた……

健斗はやつらの喜びが少し半減したような気がした

健斗はゆつくつと一階へ上がつた……

麗奈は何もない自分の部屋に閉じ籠つたようだつた……

「大森？」

健斗はその部屋の前で声をかけた

何だか、声をかけたかつたから……

「何怒つてんだよ……夕方のことどが？」

しかし麗奈は何も答えなかつた……

健斗はゆつくつとため息をついた

「……悪かったよ。悪かったから、機嫌直せよ」

しかし麗奈はまた何も答えない。今は……何もしない方がいいかな

……

「寝る時、俺の部屋、開けとくから……ちゃんとそつちで寝るよ」

健斗はやつ言つと、静かに自分の部屋へと戻つていった

麗奈は何もない自分の部屋で膝を抱え込んでいた。

健斗の言葉を聞いて、ただ膝を抱え込んでいた

そして静かに呟いた

「……健斗くんの……バカ……」

麗奈は寂しそうに、そう呟いた……

うへん……何か麗奈が何でこんなに健斗に対し怒っているのか……
自分でも分かりません……

何かこの作品、自分でも先が読めない作品になってしまった……

予測不能な物語です

みなさん、どうして麗奈が怒っているのか……分かりますか?

健斗は部屋で昨日の続きをしていた。

夜、麗奈のことも気になつたし……少し寝づらかった。結局俺が寝ようとするまで、あいつは部屋から出でなくなつた……

だから少し気になつた……

けれどだった。結局めちゃくちゃ爆睡してしまつた……

まあ、大体いつもるのがパターン的だらう……

しかももひ母さんは起きて、朝飯を並べていた

台所から顔を出して、困った顔をした

「ちよつと～あんた～い加減に起きなさい～？ 遅刻するわよ

「へへん……」

「ひねりやうてん元気返りをひつた。完全に熟睡してしまつてこむ……

ゆるじだつた

突然一階からバタバタと大きな音がした。誰かが階段をかけ降りてきているんだ

そして居間へ入ると、突然健斗に大きな声を出してきた

「山中健斗～！起きなさあ～～！」

「うわあ～～！」

突然の大声で、健斗は跳ね起きるよつに起きた。そして周りを見渡すと、麗奈が制服姿で健斗の傍で座っていた。いつも通り麗奈は栗色の髪をなびかせていた。

麗奈は呆れ返るよつにため息をつきながら、健斗に言つた

「 もう50分だよ～？早く用意してよ～～！」

「え…………ああ～～！」

健斗は時計を見ると、また跳ね起きた。時計は7時50分を指していた。完全に寝坊してしまつた！！

すると母さんも呆れ返るよつに言つた

「だから早く起きなさいって言つたじゃない……麗奈ちゃん、朝ごはん出来るから食べてね？」

母さんがそう言つと、麗奈はこつこつと笑つた

「はい。 いただきます 」

「あんたは早く準備 」

「わ～てるよつ……朝飯抜かしてたまるかつ……」

健斗は速攻に一階へと走っていった。麗奈はその様子をクスクスと笑いながら、「いただきます」とあこがれを済ませて、朝飯の味噌汁を飲み始めた

健斗は制服に着替え、すぐに居間へと向かつた

「朝ごはんは諦めなさい～

「うう～……」

健斗は居間の目の前で少し戸惑っていた。朝ごはんを選ぶか、学校を選ぶか……

時計を見ると、すでに8時を回っていた。健斗は仕方なく、朝飯は諦めた……

麗奈はすでに鞄を持つて、革靴を履いていた。そして戸を開けて、外に出ていた

健斗もすぐに革靴を履いて、外に出ようとした

卷之三

健斗はお弁当を受け取り、急いで家を出た

「いつにわがわい...」

母さんはそれを見ると、鼻でため息をついた。

健斗は自転車を堀の外まで出して、鞄をかごの中に入れた。麗奈は堀に寄りながら、健斗を待っていた

「おひもつ行くか」

ふと右を見ると、父さんがゴンタを連れて帰ってきた。タバコを吸いながら微笑んでいた。麗奈がにつこりと笑いながら言った

「おじやん、おはよー!」やがておまか。高校にこいつておまか。『パンタも
いひじきます』

麗奈はそう言つて、「ゴンタの頭をゆつくりと撫でた。『ゴンタは麗奈に一回吠えると、健斗の方に甘え出した

「分かった分かった。いつでもおます」

健斗もゴンタの頭をゆつくりと撫でてやつた。するとゴンタは健斗にも一回吠える

それはまるで、「いつてらりしゃー」と言つてくれてこむよつ……

あつとそつなんだろ？

「大森、行くぞ」

健斗は麗奈に声をかけると、麗奈は自転車の後ろに乗る

それを確認すると、健斗はゆつくりと自転車を漕ぎ始めた

「こつときまあーす」

麗奈は父さんとゴンタに手を振り続けた

後ろから、「ゴンタの吠え声がずつと聞こえていた……

「もひー、健斗くんつて結構ネボスケなんだね？」

麗奈が呆れ返るよつに、健斗に言つてきた。しかし健斗は何も言えないと……

昨日のことが気になっていたからだった

麗奈は昨日とはまったく正反対な態度をとつてくる。昨日の怒った態度はなく、いつもの能天気な大森麗奈がそこにはいた

馴れ馴れしく、健斗に話しかけてくる。昨日俺が何を言つても、ずっと無視してたのに……

健斗は逆にそれが違和感を感じさせ、小さく訊いてみた

「怒つてないのか？ もう……」

健斗がそう訊くと、麗奈はこいつひとつと笑つた

「何が？」

「昨日……俺に怒つてたんじゃないの？」

健斗がそう訊くと、麗奈はクスクスと笑い始めた

「だから怒つてないって言つたじやあ～ん 昨日はちょっと、苛々してただけ。ゴメンね、怒鳴つたりして」

麗奈はそう言つて、また可愛らしい笑顔を見せてきた。それを聞くと、健斗はもうそれ以上……何も聞かなかつた……

もう怒つてないよつだし、麗奈の機嫌が直つたなら直つたでいいか

……

あまり深く考えないとこにした

「せひ、そんなことよりも急いで急いでーー！」

「わーてるよーーーー！」

健斗は少しスピードを上げて、学校までの道のりを漕いでいった

本当は麗奈が機嫌を直したのを、どうとなく安心していたのだ

「健斗くん～、待つてよ～」

昇降口で麗奈が下駄箱に履き替えながら、健斗にそう言つてきました。しかし健斗はすでに上履きに履き替えていて、下駄箱の近くで麗奈を待つていた

「早くしろ。もひす鈴鳴つてんだぞ」

「う～ん」

麗奈は上履きに履き替えると急ぐよつと走つてきた

健斗と麗奈は少し汗をかいて、息をあげながら疲れたように机に座つた。けど、まだ先生は来ていない。健斗と麗奈が座ると同時に、本鈴のチャイムが鳴つた

「「間に合つた～……」」

麗奈も健斗の真似みたいなことをしてきたので、健斗は少し不快な

気持ちになつた

「何でお前まで疲れてんだよ。ただ後ろに乗つてただけだろ」

すると麗奈がふふんと笑いながら言つてきた

「健斗くんが間に合ひように祈つてたら疲れたの〜」

「何だそれ……」

健斗は呆れ返るよつに咳いた。まつたく相変わらず訳の分からぬことを言つやつだ……

健斗は息を落ち着かすと、ふと氣になる方を……早川の方を見た
早川は佐藤と楽しそうに会話をしていた。もちろん、健斗の方は見てこない。けどそれでもよかつた

昨日……早川が家まで来てくれたのって……夢じゃないんだよな……
未だに信じられない……

あの早川がだぜ！？あの早川が……俺のことを気にしてくれて……
また弁当を誘つてくれた。スゲー些細なことだけど、健斗にとつて
は例え親に月1万円のお小遣いを貰うことよりも、何千億倍も嬉
いことなのだ……

健斗は早川を見て昨日早川の笑顔を思い出していた

やべへよ マジで可愛い……

「麗奈ひや さおはよいへー」

すると、突然ヒロが健斗たちのところへ走ってきて、麗奈に話しかけてきた

麗奈を心配するようつい、優しい雰囲気を漂わせている

「昨日はびつした? 急にになくなつてた? 心配したんだせ?」

ヒロがやう言つと、麗奈は少し微笑みながら言った

「あ、うん。ありがと、心配してくれて」

「いや..... つーかお前が、また授業サボったのか?」

ヒロは健斗にやう言つてた。健斗は少し言ごづいたりやうな様子を見せた

「あへ..... まあな

「つたくよ..... 訳するのけりやうにもなれよな」

「ワコヤ。サンキュー、ヒロ」

「私ね、昨日健斗くんとこっしょに授業サボつひやつた」

麗奈が悪戯にやう言つた。あるとだつた。ヒロがかなりショックを受けているようだつた.....

「えつー? 一人 もん もんか そつこつ関係で?」

「いや、こいつが勝手に……」

「何か授業サボるのて楽しいものだから、クセになっちゃいそう」と麗奈は能天気に笑っていた。健斗はそれを見て呆れ返るようになめ息をついた

ヒロを見ると、ヒロは何だか自分に言い聞かせていた……

「大丈夫……一人はまだ……麗奈ちゃんは平氣……大丈夫……」

「……はあ……」

「あつ 健斗」

突然ヒロが少しうやつきながら健斗を見てきた

「昨日早川がお前のことスゲー心配してたぞ？」

健斗はそれを聞いて、突然胸が高鳴った

「だ、だから？」

ヒロはさらににやけ、肘で健斗をからかうように押してきた

「照れんなよ～ あとでちゃんと話しつけよ～」

「う、うるせえなあ！…」

ちなみに言つとだ。ヒロは健斗が早川のこと好きといつことを知

つていた。早川を好きになつたのは中学のときで、真っ先に感づかれたのが、常に行動を共にしてきたヒロだったのだ

以来ヒロは、健斗の恋を応援してくれてこる。

ヒロは早川をどう思つてゐるのか……

「早川は確かに可愛いけど……仕方ねえからお前に譲るわよ」

などと言つて来たことを覚えていた……

「ヒロひでち麗奈ちゃん。麗奈ちゃんつて東京から來たんだよな?」

「うん」

「東京つていいよなあ……スゲー憧れる」

「えへ? そんなことないよ」

……今ではヒロは、完全に麗奈狙いみたいだ……

しそひへヒロと麗奈は会話をしていた

すると、先生が教室に入つてきて、みんなが席に座り始めた

「じゃあ麗奈ちゃん後でな」

「うん」

ヒロはルンルン気分で自分の席へと戻つていった

健斗はそんなヒロを見て、少し羨ましかつた……

ヒロはぎりしてあんな風に……好きな女の子に話しかれるんだろうか……

いやヒロに限つたことじゃない。やっぱみんな、好きな人にはあんな風にアプローチをかけるんだよな

俺もやつてみようか、早川にアプローチ……でも……なあ……

そんなやつらの真似なんかして何になるつて言つんだよ

俺は俺だろ？自分なりに早川と仲良くなればいいじゃん……

自分は自分なりに早川と仲良くなつていきたいなあ

無理に仲良くなるよりも、自然と仲良くなる方が全然いいもんがあ
……

健斗は一人でそんなことを考えていた

欠伸をして、背中を伸ばしていた。

時間は退屈なまま、過ぎていく。つまらない授業は本当に退屈だ
健斗は授業中、べつすじと眠っていた。今は数学の時間……数学は
健斗の中で一番嫌いな教科だ……

だから、この時間は寝るに限る。このまま眠り続ければ、次は待ち
に待った弁当の時間だつたからだ。

こんなに弁当の時間が待ち遠しく感じるなんてスゲー久しぶりだ

初めて感じたのは、確か小学校一年生のとき、初めての遠足で以来だ
理由はさうりん分かっている。早川と話せるからだ……

早川とハイコニケーションをとれるだけで、健斗には幸せな時間に
感じれるのだった

そんな中だった……

麗奈はとくに、ただ先生の話を聞いていた。板書などは書いてい
ない。ただ先生の話をしっかりと聞いているだけだった

「……ふうへん……ああなるんだあ……ねえ健斗くん」

麗奈は授業を面白がりに聞いていたと突然健斗に話しかけてきた
けれど健斗は夢の中へと行ってしまい、麗奈の言葉が聞こえていない

麗奈は静かに軽く健斗の背中を触つて揺わがふつた

「健斗くん。健斗くんってば」

「ん~……ん~……」

「ねえ健斗くん~」

「何だよ~……」

麗奈に起しきれで、健斗は眠そうに麗奈を見た

麗奈は健斗の寝ぼけた顔に呆れるようにため息をついた

「もへ、大丈夫なの？ テストとか泣いてもじらなによ

「う~ん……」

「頭悪いのがバレたら結衣ちゃんに嫌われるよ~？」

「う~ん……」

「結衣ちゃんに嫌われてもいいのかな~？」

「う~ん……嫌だ……」

「じゃあ起きて聞かないと

「うへん……疲れてんだよ……寝かせないよ」

「……もひつ」

麗奈は呆れ返るなりにため息をつき、健斗の頭を叩いてきた

「うへんうん……」

健斗は相変わらず、まつたく起きよつとはしないにナビ……

それから何十分か経ち、チャイムが鳴った

チャイムが鳴ると教室中のみんなが教科書などをしまい始めた

麗奈は健斗の教科書を丸めて、健斗の頭を叩いてきた

「お~い、ネボスケ~。授業終わつたぞ~」

健斗はそれを聞いて、すぐに顔をあげた

「んあつーーじゅあ弁当の時間?」

「…………」

麗奈はわづら皿をつぶるしかなかつた

「麗奈わいわん」

すると健斗たちの田の前に早川が微笑みながら近づいてきた。今日も可愛いらしいうれしき笑顔である。いつも何だけど、早川を見る度に胸が高鳴るのは何故だろ?「

「お弁当ごはん食べよ?田中くんも」

「うそ 今そつち行くね~」

麗奈はじつじつと微笑むと、鞄からお弁当を取り出した

健斗もそのあとに続くかのよつよつ、鞄からお弁当を取り出して、早川や佐藤、あと一応ヒロが集まる場所に向かった

「昨日麗奈ちやんびついたの?急にいなくなつたやつて……」

佐藤が少し心配やうな表情を浮かべていた。しかしそれと逆に、元、麗奈は少し笑いながら、手を頭の後ろにやつて言った

「えへへ、昨日授業サボつちやつた……」

「え～？ 意外だなあ、麗奈ちゃんもやつこいつとやるんだね～」

それはやつと、悪い意味ではなく、麗奈もそのよつな学生「やつこ」
とをするんだといつ、驚きの意味で言つたのだった

「当中くんな?」

佐藤はふと健斗にそう聞いてきた。健斗はお弁当を開けながら答えた

「えつと……氣分が悪くなつて、保険室にいた

それを聞いてヒロセ吹き出すように笑つた

そんなヒロセを見て、佐藤は首を傾げた

「もつ平氣なんだよね?」

昨日と同じよつこ、早川が心配そうに訊いてくるのを、健斗は微笑
みながら答えた

「ああ。サンキュー早川」

「ねえ麗奈ちゃん? 今度は俺といつしょにサボつやけねつよ～」

ヒロセがまた訳の分からぬ誘いをした。麗奈は少し笑いながら、
謝るよつて言つた

「「ゴメン。もうサボる」とないかも」

「ガビーン」

佐藤はそんなヒロをみて可笑しそうに笑った

「わい、いただきまあ～す」

佐藤のかけ声とともに、健斗たちもお弁当を食べ始めた。今日の弁当はまた母さんが作ったので、麗奈と異材はほとんどござりしない

「わい～えば麗奈ちゃん、部活は決めた?」

早川がふとそんなことを訊いた。昨日は母さんにも聞かれた

「うん……私ね、昨日までバイトやひつかなあつて思つてたんだ

麗奈がそいつ言ひついで、ヒロが食いつぶやひ言つた

「何い? ハンド部のマネージャーは?」

「ちゅうとあんた黙つて」

佐藤が鋭くヒロに言ひ。早川は少し笑つて、麗奈を見てまた訊ねた

「じゃあ、バイトにあるの?」

「うーん……昨日の夕飯にね、お母さんも……あつ、お母さんつて健斗くんのお母さんなんだナビ……」

それを聞くと、佐藤とヒロは少し驚いたよつて言つてめた

「えつ？」

「健斗のおばさん? 昨日健斗ん家で晩飯食つたのか?」

そつか……」Jの一人は麗奈が居候してることを知らなかつたんだった

麗奈はしまつたといつよつて、健斗を見た

「「メン」……」

麗奈が苦笑いしながら謝つてきた。健斗は特に怒るJともなく、冷静であった

「いや、Jこつりには大丈夫だろ」

「麗奈ちゃんね」

早川が説明をするように少し笑いながら言つた

「麗奈ちゃんね、本当は山中くんのイト「じやなくつて、山中くんのお父さんの友達の娘さんなんだ。それで、今とある事情で、山中くんの家に居候してるんだって」

早川がすらすらと説明をすると、麗奈は申し訳なさそうに、肩をすくめた

「黙つてて「メンね」

「やうだつたんだ……」

佐藤は少し驚いていたようだっただけど、そこまでではないようだ。ただ健斗と麗奈の事情を知れて納得するだけだ。

問題なのは、ショックと驚きのあまりに口をあんぐりと開けたままのこのバカの方だ

「……居候……健斗と麗奈ちゃんが……いつしょに……」

「そつかあ……大変だね」

麗奈は少し笑つと、佐藤とヒロに請つよつと言つた

「ここのこと、他の人には言わないでくれる?」
と言つて、麗奈は健斗を見た

さつと健斗のことを見遣つてゐんだらう

佐藤はゆつくりと微笑むと、どんつと胸を叩いた

「任せて……私口割らない方だし」

佐藤は大丈夫だけ問題は……

「嘘だ……健斗と麗奈ちゃんが……そんな……」

「……はあ……」

健斗は呆れ返るよつにため息をついた。

「ま、まあこんなバカはほつておいて、で、さつきの続きは?」

佐藤が笑いながら訊いた。麗奈はゆつくりと頷くと、そのままの続きを話し始めた

「うん。でね、お母さんにも訊かれたんだ。でもさ、ほら私が居候してる間、私が使う光熱費とか、食費とか余計にかかるでしょ？だから私バイトして、迷惑かからなによつにしたかったんだ」

麗奈がそんなことを言つと、健斗以外みんな感心するよつに麗奈を見た

「偉いね麗奈ちゃん。私も今親戚の家に住んでるんだけど、そんなこと考えたことなかつたよ～」

と佐藤が感心しながら言つた

「本当。ちゃんと考へてるね」

早川も麗奈を感じていた

麗奈はゆつくりと微笑んだ。

「じゃあ麗奈ちゃんはバイトかあ～……」

とヒロが残念そうに言つた。けど麗奈はそれを少し否定した

「うん……それがね、お母さんがね、高校生は今だけなんだから、そんなこと気にしないで、やりたいことをやりなさいって言つてくれたんだあ。すく嬉しかつた」

「そう……でも難しいね」

早川がそう言つて、麗奈はゆつくりと頷いた。

「うん。お母さんの言葉は嬉しいけど、でも……って感じ。悩むんだよね~」

と少し笑いながら言った。

健斗はそれを黙つて聞いていた。改めて麗奈の考えを聞くと、麗奈に対しすゞく申し訳ない気持ちになつた

麗奈はこんなにも深く考へてゐるんだと思つと、あのとき麗奈を嘲笑つてしまつた自分にすぐ嫌悪感を感じてしまつ。

麗奈はもしかしたら、そのことに対する怒つてたのかもしれない……

健斗はそんなことを思いながら、麗奈を見ていた

「でも、よく考えた方がいいよ。せっかくお母さんもやつ置いてくれてんだしね」「

早川がそう言うと、麗奈はにつこりと笑いながら頷いた

「そうだねっ！…とりあえずもう少し考えてみるよ」

と麗奈が言うと、早川もにつこりと笑つた

しかしだった……そんな麗奈を見ていたり、健斗は、ふと口から言葉が出てしまった

「……そんなに気にする」とねえよ

健斗が話すと、みんなふと健斗の方を見てきた。健斗は弁当を食べながらゆっくりと続けた

「母さんの言うとおり、自分のやりたいことをやれよ。絶対に部活をやれってわけじゃないけど……もし、バイトをやりたかったらバイトをやればいいし……部活をやりたかったら部活をやればいい。ただ、お前次第なだけだよ」

健斗がやつ言いつい、みんなは呆気にとらわれるよつて静まり返った

特に麗奈がそうだった

まさか健斗がそんなことを言つてへるとは予測だにしてなかつたんだろつ

自分でつて何でこんなことを言つたのかさえわからなかつた

ただ、自分の昨日嘲笑つてしまつたことに対する羞恥心からか……素直な気持ちをただ言葉にしただけだった

早川がクスッと笑つた。健斗を見て、優しい目をしていた

「やつだね。山中くんの言つ通りだと思つよ」

早川にそんなことを言われて、健斗はさすがに恥ずかしくなつて目を下に向けた

麗奈はしばらく健斗を見つめていた

そして、頬を赤くして、口元が喜びの表情に変わっていた……

健です

ユニークアクセス数が4000を突破しましたっ!!

みなさんありがとうございます

これからも応援よろしくお願いしますっ!!

また、評価感想等もよろしく

健斗とヒロは弁当を食い終わったあと、残った昼休みの時間、屋上に続くまでの階段にいた。

「どうしてだー？」

ヒロは少しキレ氣味で健斗に詰め寄つてきた。鋭い眼光がまるで刃のように、健斗の心に突き刺さつてくる。健斗はその視線に耐えきれず、ずっとヒロの顔を見れないでいた

「いや……だからわ……」

「お前、ただの親戚だつて言つたよな？言つたよなつー？」

「一応……親戚だろ？父さんの友達の娘なんだから」

「全然チゲーだろーー！」

ヒロは怒鳴りつけのよつて健斗に言つた

「まさか……お前麗奈ちゃんとあんなことやうなことを……？」

「んなつー…バカ言つてんじやねえよつー…そんな関係じやねえつー…」

健斗は真っ赤になつてそれを否定した。ヒロはいつも事を大袈裟に解釈する

「わつわせ麗奈ちゃんの前でかつしにことと聞こやがつてよ……」

ヒロは拗ねるなりて口を捨てた

「こや……別にあれば……」

「へへへ……何でも前ばつかつてつて……」

ひがむヒロを見て、健斗は深く息を吐いた

「実際……あいつ全然訳分からねえよ……昨日、あいつずっと俺のこと怒つてたと思つたら、今日ケロッとした態度に変わつてて……本当に意味分からねえ」

健斗がそつ言つてヒロは少し不思議そうな表情を浮かべた

「何? ケンカか?」

「こや……めく分からねえんだよ……本当に」

健斗はため息をつきながら、そつ言つた。するとヒロは腕を組みながら、目をつぶつ向かを考えるかのように言った

「本当に怒つてんじやないか? 女は中で溜めるもんだからな」

「わづなのかなあ

「わづ?」

ヒロの曖昧な答えに健斗は困惑した。

女は中で溜める……か。確かにヒロの言つ通りなのかもしれない。
もしかすると麗奈はまだ本当は怒つてゐるのかも。

「…………やつこやれ」

健斗は話題を変えるまい、ヒロに言った。ヒロは健斗の話題の転換に振り向いた

「昨日や、早川が家に来た

健斗がそつと口を少し驚き氣味の表情をした

「家に……？」

健斗はゆきへりと頷くとヒロはえへつとため息をついて驚いた

「で、何だつて？」

「いや、何か…………昨日は「ラメンねつて…………迷惑だつたよねつて…………」

ヒロはそれを聞くと吹き出しながら肩を震わせて笑つた

「何だそれ。迷惑なわきやねえくせに

「早川に氣を遣わしちやつたみたい……」

健斗は苦笑しながらやつと言つた

「で、お前は何で」

「本当に嬉しかったよって……ありがとうって……そしたら、またお弁当にいっしょに食べよって言ってくれた」

「マジかよー？お前好かれてんじゃねえの？」

ヒロが簡単にそんなことを言つてきたので、健斗は首を横に振つた。

「違つよ。自分……」

本当は自分でもそう思つたかった。早川に好かれてんじゃないかって……でも、期待したくはない。期待して裏切られるときショックを受けるのは自分だから

「まあ、お前が早川に誘われるおかげで、麗奈ちゃんもいっしょに誘われて、俺もいっしょに食えるからいいんだけどな」

とヒロはククッと笑つてきた

「いや、麗奈が誘われて、俺はそのつどだら……」

健斗がそう言つと、ヒロは健斗の腕中を呂つて始めた

「消極的考えはやめえ。もつと前向きに考えへんのか？」

「けじなあ～……」

健斗は天井を見上げて早川のことを考えた。確かに、麗奈が来てから早川と突然仲良くなりはじめたような気がする……

でも何でだろ？

それから一日が過ぎて夜になり、健斗は風呂上がりの状態でバスタオルで頭を乾かしていた

「ふう……」

結局、今日は早川のことを一日中考えていた。早川が何故、自分を誘ってくれるのか？何故自分をこんなに気にしてくれるので……ずっと疑問に感じていた、少し嬉しい気持ちに浸っていた

ふと頭を乾かしながら、健斗は縁側に向かった。そしてゆっくりと戸を開けて涼しい風を吹き込ませた……

そんなことをしながら、麗奈の言葉を思い返していた

「俺が本気で早川が好きだから……あつとも好きになつてくれる……か……」

少し蘇生^{よみがへ}る、都合のいい妄想^{おもかげ}……

まさか早川は自分に好意を持つて居るんじや……何で少し變^かつ氣持^きちもあつた

静寂な闇に鳴り響く虫の声……もつずぐジメジメした季節がやつてく^{ゆく}のを感じていた

早川ともっと仲良くなりたいな……

「健斗[…]！」

ふと居間の方から母さんの声がした。健斗はそれを聞くとゆつくりと立ち上がり、静かな足取りで居間へと向かった

居間に入ると、母さんが夕飯の支度をしていて、父さんが風呂上がりのため、タオルを首にかけて、ランニングを来てビールを飲んでいた

けれどここには麗奈の姿はなかつた

「健斗、実はな頼みがあん^んだ」

父さんがビールを飲みながら、枝豆を口にしていた

「何?」

健斗は座りながら用件を聞く

「実はな、今度ホームセンターに行つて麗奈ちゃんのベッドとタンスと机を買いに行くから、お前ついてきてくれ」

「うん……分かった

健斗が素直に頷くと、父さんは少し意外そうな表情をした

「意外だな。素直に頷くか」

「断つて欲しいの?」

「いや……」

隣で目や口をぱぱぱと出しながら、母さんはクスクスと笑っていた

正直、もう麗奈のことで面倒臭くはならなかつた。まだあいつが来てから三日しか経つてないけれど、なんだかもう慣れてしまつたような気がしたのだ

「健斗、『お』飯にするから麗奈ちゃん呼んできてくれる?」

母さんがそう言つと健斗は向も言わずに立ち上がり、一階へと向かつた

その様子を見て、父さんは肩を震わせて笑った

「あいつ、何だかんだですっかり慣れてるな」

「フフフ……ちやんと仲良くなってるみたいね」

健斗は一階へ上ると、ドアが開け放しの麗奈の部屋を覗いた

すると麗奈は窓際に座り込み、景色を眺めていた

青いTシャツに、ビニール製のシャカパン姿だった

またちやぶ台が出されていて、その上にはノートが一冊……ペンが一本置いてあった

「大森」

健斗が名前を呼ぶと、麗奈はすぐに健斗を見た

しかしひつものように微笑むことはなく、無表情で健斗を見つめた。

それが少し健斗にとつて不安を感じさせた

「飯……だから降りてこいよ」

麗奈は健斗の言葉にゅうへりと頷くと、立ち上がり部屋を出ようとしました。

あるとすれ違ござまに、健斗はある場所に目をやった

麗奈の右肘の関節の辺りに、擦り傷があつた……

「お前……その傷どうした?」

健斗が聞くと、麗奈はぱっと肘を隠した

肘だけじゃなかつた。左膝の関節の辺りにも同じような擦り傷があつた

またその擦り傷は、まだ膿んでもなく、痴になりかけている……つまり新しい傷であることが分かつた

「膝も怪我してんじやん」

「何でもないよ」

麗奈はやっと健斗に微笑むと、そのまま一階へと降りていつた……

健斗は少し胸が痛んだ……何だか……昨日から麗奈らしさがなくなつているような気がした。

いつもの能天氣なあいつは朝だけだつた。

不意にヒロの言葉を思い出す……

本当はまだ、怒ってるのだろうか……

女は中で溜めるひじいから……な……

健斗はそんなことを考えるのが嫌になり、麗奈の傷を考えた

いつできた怪我なんだろう? 昨日か?

今日か? でも今日も昨日も体育はないし、まだ部活に入っていない麗奈は運動してるわけがない

男子のように追いかけっこはしていない。昼休みや休み時間はずつと早川や佐藤と会話をしていた

でもまだ新しくできた傷だといつのは明らかだった……

健斗は首をかしげながら、別に何でもないなういいかと自分で納得した……

けれどだった。次の日の朝、健斗は麗奈の傷が増えてることに気が

がついた。右の脛の辺りに、左足にもまた擦り傷が出来ていた。

手にも同じような傷が出来ていた。健斗は訳を聞いても、麗奈は何も答えなかつた……

だからそれ以上聞かなかつた。ただ、不思議なことがもう一つ……健斗の自転車のギアが外れていたこと……昨日は外れてなかつたのに。

麗奈に理由を訊ねても、知らないと言い張る……本当に?と訊ねても、自転車には触つてないという

だから、結局麗奈の傷と自転車のギアが外れていたことは不明のままにならうとしていた……

傷のことは、さすがにみんなにも気付かれた。一番最初に見つけたのは早川だった

でも麗奈は、ちょっと転んだだけと言つ。だからそれ以上疑いのない。健斗でさえ、そう思つたのだから……

ただ疑つてたのはヒロだ。健斗が麗奈を襲つたのではないかと、勝手な妄想を膨らませている……

結局健斗も麗奈の傷のことはあまり気にしないでいた

麗奈がこの家に来て、1週間を過ぎよつとしていた朝のことだった。この日は健斗は自分の部屋で久しぶりに寝ていた

麗奈が、たまには自分が居間で寝ると微笑みながら言つてきたからだつた……少し気になつてたが、麗奈がそう望むんだつたら……と健斗は何も言わず了解をした

やつぱし自分の部屋は風通りがよくて涼しかつた。健斗はほとんど爆睡状態でいた……

と、そんなときだつた……

わんっ！－わんっ！－わんっ！－わんっ！－

ゴンタの吠える声が、健斗の部屋に入つてきた。ゴンタは健斗の部屋の真下にいるから……吠える声がうるわしく、健斗はゆっくつと目を覚ました

「ゴンタつるせいなあ……なんて思つてはいたがだつた……

「ゴンタつー静かにしてつー！」

ふと耳に、誰かの話し声がきこえた。ケビン・ンタは吠えるのを止めず、その話し声は少し大きめの声になる

「この声は……麗奈？」

健斗はゆっくりと身体を持り上げて、窓からぞうと顔を出した
するとどだつた。

麗奈がゴンタをたしなめながら、健斗の自転車を持ち出そうとしているのが見えたのだ

健斗はすぐにケータイを手にとつて時計を見た

時計はまだ、五時半だった……

こんな朝早く何をしてるんだ？

麗奈に声をかける気はおきなかつた。けど麗奈は自転車をゆっくりと押しながら、家の壙の外まで運んだ

「……何だあいつ……

健斗はふうっとため息をつべと、またベッドに横になつて寝ついてみた

……が、やはり気になつてしまつた起き上がり、頭を搔きながらケータイをポケットにしまい、麗奈のあとを追いかけてみることにした

家を出ると、もう麗奈の姿は見えなかつた……

「どう行つたんだ？ あいつ……」

朝早いからか、少し寒さを感じた。草むらには朝露がついていて、小鳥たちのさえずりに、虫の鳴き声を聞いてると少し気持ちよかつたけど、まだ太陽は昇りかけているため、まだ少し薄暗かつた……

「…………ん？」

ふと下を見ると、自転車の車輪が通つたあとが見えた

右の方向に進んでる…………ってことは…………

「あいつ、三丁目公園に行つたのか？」

でも何しだ？ 考えるよりも、健斗は少し小走りで麗奈のあとを追いかけた……

それから十分くらい歩くと、公園に着いた

麗奈の姿はまだ見えなかつたが、きっとここにいるんだろう。健斗はそう思いながら、坂を少し小走りで上つていった

坂を上ると共に、太陽が眩しく感じられた

橙色の日の光が、目に染みた。また息も上がる……

坂を上り切ると、健斗は息を荒げて麗奈を探した

するとたまたま健斗はそこで、ある光景を見てしまつた……

「…………ハア…………ハア…………大森？」

麗奈はグランジにいた。何をしているのかと思つたら、自転車に股がついている。けど、すぐにフラフラと蛇道を描くと、すぐにバタンと倒れてしまつている。それを、何回も、何回も、何回も繰り返していた

健斗は息を整えながら、あまりの驚きに言葉も出でこなかつた……

一体何をしてんだよ…………麗奈は何で……自転車を乗る練習をしているんだ？

それを、いつから続けてたんだろう？自分の知らないところで、あいつは頑張つてたのか？

「…………あこつ…………」

麗奈は一生懸命、自転車を漕いでいた。どんなに転んでも、少し痛がってからすぐに前を向いた

そしてゆっくりと自転車を持ち直すと、また股がって……蛇行運転を繰り返していく

そんな麗奈の姿を見ていると、健斗は可笑しさと共に、麗奈の寛大な姿に心を打たれていた。

どうしてこんなにボロボロになつてもやめないのか……

麗奈のイメージとは全然違つた……

理由は分かつていた。どうしてこいつがこんなことをしているのか……

しばらくの間、健斗は麗奈を見守つていた。いか止めるだひつと期待するのは無駄なことだつた。

麗奈は止めたりはしなかつた。いつまでもおんなじことを繰り返して、けれどいつか乗れるようになると自分を信じていた……

次第に、健斗は身体が疼いていた……今にも麗奈の元に走り出しそうになつていた……

「…………あつ…………」

麗奈が約五秒間の間、自転車をフランフランと運転していた。けれどそのときの倒れ方が少しひどかった……

健斗は気がつくと麗奈の元に走り寄っていた

麗奈は少し痛そうにしてたが、またすぐに自転車を起して再びチャレンジしようとしていた

けれど、健斗の駆け寄つてくるのに気がつき、驚いた表情で健斗を見つめた

「ハア……ハア……何やつてんだよ……バカッ」

健斗は息を切らしながら、麗奈にそう言った。

「……えつと……自転車の……練習?」

と健斗に微笑みかけてきた。

「傷だらけじゃねえかよ……」

「……まあね 別にすぐ治るから」

健斗は真剣な表情をして、麗奈の手足を見た

麗奈はそう言つと、また自転車に股がつた。

「あつ……」

「バカッ！」

しかし麗奈はすぐに倒れ込んでしまった。健斗はそれを瞬時に対応し、麗奈を庇うようにして、麗奈を自分に引き寄せた

自転車はすゞい音を立てて倒れ、前輪がカラカラと回っている

麗奈は健斗にもたれかかるような体制になっていた。頬を赤く染めながら、健斗を見つめていた

「あ……ありがとう……」

「……別に……」

健斗は恥ずかしそうに言い捨てるが、麗奈の身体をゆっくりと持ち上げた。そして自分も立ち上がり、自転車を起こした

「……自転車とは無縁じゃなかつたのかよ」

健斗がそう笑いながら言つと、麗奈はさつきの微笑みは消え沈んだ表情を浮かべていた

「……だつて……」

麗奈は座り込みながら、呟くように言つた

「だつて……健斗くんの荷物になりたくなかつたんだもん……」

ふとこぼれる本音の言葉……健斗は黙つてそれを聞いていた

「健斗くんの邪魔になりたくなかつたから……だから……」

やつぱり……あのときの言葉を、ずっと気にしてたんだ……と健斗は自分に後悔するよつて思つてこた

「あんときせ……悪かつたよ……俺が悪かつた……」

健斗は謝ると麗奈は上目使いで健斗を見た。少し涙目で、怒つたように頬を膨らませていた

「謝りないでよ……」

「じゃあ何で言えぱいいんだよ」

健斗がやつぱり、麗奈は再びつづつに向いた

その表情が、健斗はすく嫌だった

「……大森……」

健斗は麗奈を見つめて言つた

「俺が、少しお前のこと……誤解してたかも……」

素直な気持ちを麗奈にぶつけたかった。麗奈はつづつ向いたままだつたけど、健斗はゆっくりと続けた

「俺が、お前つて自分勝手で、能天氣で、何も考えてない、性格の悪い女だと思つて……お前が嫌いだつた……けど」

健斗は息を吸いながらまた続けた

「でも、本当は色々考えてるんだなって思つたの。何かスグー意外で、俺びっくりしてた。うん……」

伝えたいことが上手く言葉に出来ない……こつもこつなんだ

健斗は一回、自分の頭の中を整理した

「正直……見直したよ。俺……」

本当だった……麗奈は本当は実際迷惑にならないように色々考えてるんだって、考えるようになつてから、麗奈に対する意識が自分の中で少し変わつていた。

「だから……あんとき、お前のこと邪魔だとか、お荷物とか言つて悪かったよ……本当に『メン』。『メン』な」

麗奈はうつ回いたままだつた。うつ回いたまま、手をいじくつていた

「……違つよ」

「ん?」

麗奈はうつ回いたまま、呟くように言つた

「違つよ……健斗くんが謝る」とないよ。私が、この前怒つてたのはね……健斗くんよりも……自分が嫌だつたから……」

「え……」

麗奈は静かに健斗を見た。目を涙目で必死に涙を堪えていた

「何か……何も出来ない自分が嫌だったの……健斗くんがいなきや、何も出来ないんだもん……私……」

それを聞いて、健斗は少し胸が高鳴った……早川とは違う胸の高鳴りだった

麗奈はそれから黙り込んでしまった。

健斗は麗奈の言いたいことを、言葉じゃなくつても……分かっていつもりだった

だから……今こいつにしてやれることは何かと考えたんだ……

「大森っ」

健斗は麗奈の頭に手を置いた。麗奈はゆっくりと健斗を上目使いで見てきた

「立てよ。練習するんだろう？自転車乗れるよ！」

「え……」

健斗は笑いながら麗奈を立たした

「ほり、自転車に股がれよ」

麗奈は健斗に促されるまま、少し戸惑い気味で自転車に股がつた。

健斗は自転車がフラつかないよう、自転車の後ろでしつかりと支えた

そして微笑みながら麗奈に言った

「いいか？両手でハンドルをしっかりと握つて、しっかりとバランスをとれ？ そんで、ゆっくりと足で漕いでみろ」

「ウル」

一 ちせんと博されてるから、ほら!!

健斗の掛け声と共に、麗奈はついぐらりと遷也始めた

フラフラしてるが、健斗はしつかりと後ろで支えてるため、倒れはしなかった

「最初はゆつくりでいいからつーーゆつくり、確実に漕いでいけつ

「ウニ」

「前輪は真っ直ぐ！　真っ直ぐ漕げ！？」

健斗はポイントなどを言いながら、大きな声で麗奈に自転車の乗り方を教えて言った

次第に麗奈も元気を取り戻していく

「足は漕ぐだけでいいからつ！－バランスに集中しろつ？」

「わっー・わっー・やっー・」

麗奈は一生懸命バランスをとりつとじてくる。健斗も一生懸命になつて支えよつとした

それからどのくらいが経つただろ。健斗と麗奈は朝日が完全に昇るまで、ずっと自転車の練習をしていた

笑いながら、励ましながら、何度も転んでも何度もチャレンジした。その時間が、とても大切に思えて、まるで永遠のように感じぬ」とさえもあつた

そして麗奈は徐々にスピードに慣れていった。健斗も少しスピードを上げながら、大声で言つた

「離すぞっー・・・・」

そつとひつて、健斗は静かに両手を自転車の後ろから離した……

するとひだつた……麗奈は蛇行運転ではなく、真っ直ぐとスピードをつけて漕いでいた

健斗はそれを見て、はしゃぐよつに喜んだ

「麗奈つー・・・漕げてゐるがつー・・・ちゃんと漕げてゐつー・・・」

思わず健斗は名前で呼んでしまつほゞの興奮と驚きだつた。麗奈も驚きと興奮が隠せないでいて、すゞく嬉しそうに笑顔であつた

たつた10秒くらい。10秒くらいだつたが、確かにあのとき麗奈は自転車を真つ直ぐ漕いだのだった

「わっ……」

不意にバランスを崩してしまつて、麗奈は自転車と共に転んでしまつた

健斗はすぐに麗奈のもとに駆け寄つた

麗奈は頭を押さえながら痛がつていた

「大丈夫か?」

「いつたあ～いつ～！でも乗れたよ～ちゃんと見た～！？」

健斗はそんな風に子供みたいにはしゃぐ麗奈を見て可笑しさが込み上げてきた

健斗は吹き出しながら笑つた

「プツ～～アツハハハハハ～～！」

「何で笑うの～？」

麗奈も笑いながらそう言つた。健斗は腹を抱えながら首を横に振つた

「分かんねえつ！！何かつ！！アハハハハハ……お前可笑しいんだ
もんつ！！アツハハハハハ……！」

「そんなことないよ～ アハハハハハ

次第に麗奈もつられて笑いだした。

朝田に照らされながら、健斗と麗奈は声を出して笑いあつていた……

その帰り、健斗は麗奈を自転車の後ろに乗せて走つて帰つていた

「ねえ、健斗くん

麗奈が後ろで「機嫌悪うに」言つてきた

「何だよ

健斗が訊くと麗奈はにっこりと微笑んだ

「ありがと～。来てくれて……」

「……お前が外で騒いでるから田が覚めただけだよ」

と健斗は恥ずかしそうに言つた

「でもありがとう」

麗奈はこつこつと微笑んだ。久しぶりに見た麗奈の本当の笑顔だった
「……お前も、邪魔になりたくないとか荷物になりたくないとか言
つたけど……」

健斗は照れながら前を向いて静かに言つた

麗奈はゆつぐりと頷いた

「うん」

「……荷物なつていいんだよ……つーかなれよ」

「え？」

健斗は大袈裟に声を出して言つた

「もう俺はこの生活に適応しあじめてるんだから、今さら無理され
たら困るつってんだよ。バカな」としてないで、お前は黙つて俺
の後ろに乗つてればいいんだよ」

と健斗はそう照れ隠しこそつと言つた

随分と遠回りな言い方になつてしまつたが、麗奈はその意味に気づ
くとクスッと笑つた

「素直じゃないなあ～？煙草の匂、どうぞどう俺に頼れってことでしょ～？」

「わあな……」

すると麗奈はまた可笑しそうに笑った

「でもあつがどう 健斗くん」

「…………うるせえな、バアカ」

「もつ本当に素直じゃないなあ～」

「別にう～～つまりだな、俺がいないとお前は本当に何も出来ないんだからな～～！俺といつ人間に感謝ししなよな～～！」

健斗の言葉を聞いて麗奈はしばらく黙り込んだあと、クスッと笑った
ゆつくりと自転車を漕ぎながら、健斗たちの声は静かな朝に溶け込んでいた……

このとき俺は感じたんだ……俺はこの日、麗奈の本当に姿を見て、自分が麗奈に心を許し始めていること

俺らの距離は、少しづつだけど縮まってきたこと……

第3話 想い（前書き）

第3話のあらすじ

二人の遠かつた距離を次第に縮めていく、健斗と麗奈……

そんな中、健斗はヒロからある噂を耳にする……

それは、早川がサッカー部主将を好きだという噂……

落ち込む健斗の傍にいたのは、麗奈だった

次第に想いが募りに募つて……あの日、辛い過去のこと、早川を好きになつた理由を健斗は自然と話し始める

全てを聞いた麗奈は……

ある日の土曜日、そろそろ蒸し暑くなつてきた。ようやく五円の下旬に入つてきたから

「健斗くん、早く早く」

せつかくの休みの日、健斗は少し季節早いポロシャツとジーパンを着て、面倒臭そうに家を出た

麗奈は可愛らしい私服姿で、車の前で健斗を呼んでいた

麗奈の田舎に置いての必需品を買いに行くのだつた。

あのときに何も考えてなかつたにと
今は正直面倒臭がつた

かと書いた、今田は画おでやねい」と云なつて、ついあえず着いてこへりとした

父さんも母さんも、ゴンタも連れて家族そろって買い物に行くのだ

健斗はゴンタをリードに繋いで、ゆっくり歩いていた

「健斗くんつたらあ～」

「うるさいなあ……」

つたく、元気過ぎるんだよなあ……いつもこいつは

車まで歩くと、コンタを車の中へ入れた

あとは母さんが来るのを待つだけだった

麗奈は車に寄りかかりながら、嬉しそうにドアを開けていた

「……嬉しそうだな」

健斗がそう言つと麗奈は健斗に笑いかけた

「ううつ 私、ううつ的好きなんだよな」

「あそ」

「今日健斗くんも付き合つてくれるんだね？」

「他にやる」とがないからな……」

すると車の中から父さんが出てきた。父さんは車からタバコを取り出し、火をつけた

「この前な、ホームセンターに行つたんだがいいのがなくてな……でも知り合いがベッドや机を提供してくれるつて言つから、それを取りに行くんだ。気に入つてくれるといいんだけどなア」

父さんが麗奈に言つと麗奈はにっこりと微笑んだ

「はーつ……あ……お金つて大丈夫なんですか？」

麗奈が訊くと、父さんは肩を震わせて笑った。

「大丈夫さ。ただでくれるらしさから。まあ、君のお父さんからお金も預かってるんだけど……なるべく使いたくはないしな」

父さんがそうこうと、麗奈は少し寂し気な表情を浮かべた

「やつですか……」

「お父さん……今度君に電話するって言つてたよ」

「…………」

麗奈は何も言わず、父さんの言葉を聞いて頷いただけだった

健斗はただそれを黙つて見ていた

麗奈のお父さん……か……麗奈はここがお父さんの故郷と言つて、今は外国で働いてるって言つてたな

この表情には多分にか理由があるんだろうけど、健斗は特に気にする」とはなかつた

すると母さんが家の戸の鍵を閉めて、家から出てきた

父さんはそれを見ると、タバコの火を消し、笑いながら言つた

「ああて、そろそろ出発だな」

もちろん父さんは運転席、母さんは助手席、そして真ん中に健斗で右端が麗奈、さらにゴンタが左端といつ配列で車は出発した

ちやんと窓を開けるとゴンタはすぐに窓から顔を出した

なびく風がゴンタは好きらしい。また過ぎ行く景色も好きらしい

意外にゴンタも人間らしいところがあるのだ

犬なのにね……

「これからビルに行くんですか？」

麗奈が父さんにそう訊いた。

「市内まで出るんだ。あの辺ならビルも立派に立ち並んでるんだ。車道に出てから、一時間くらい走ると着くよ」

父さんが言つと麗奈は感心するように言つた

「一時間かけて買い物つて、毎回だと大変ですね」

「それでもないさ。食事の材料とかは此処で買つからな。年に二回程度しかいかないよ」

「へえ～

「でも、東京ほどの都市じゃないんだけどね」とゆうんが可笑しそうに笑った

「でも楽しみだな～……健斗くんも行ったことがある～。」

不意に麗奈がそういう顔してきた。健斗は甘えてぐるぐる、タマの頭を撫でながら答えた

「そりゃ……な。服とか買いたい……」

「ふう～ん。ねえ、あつち着いたら案内してよ」

「案内出来るけど詳しきねえよ」

健斗がやつ言つてゆうんが後ろを向きながら言つた

「いいじゃない。麗奈ちゃんの服も買つに行くのよ～。一人で行つてきなさいよ」

それは……別にそれでも良いけど……

「ゆうんたちは？」

「父やんたちは麗奈ちゃんの勉強机を見てくるよ。やねどベッドとタンスをもつてくる」

父やんがそう言つて、麗奈は健斗を見てこいつと笑つた

「じゅあこつしょ うけいじの健斗くん」

「ん……ああ」

健斗が了解すると 麗奈は嬉しそうに笑った。

ゴンタは健斗の膝に頭を乗せて、虚ろな目をしていた

「一人ともすっかり仲良くなっちゃって 青春んね～

とオホホと母さんは笑った

健斗は脇へと戻った

「別に仲良くなっていないし……」

でも母さんの言つ通りだった。確かに麗奈とはあの日以来、距離が
だいぶ縮まつたような気がする

つーか、本当に一日中こつしょうにいるから……」こつしょっかり慣
れてしまったのだ

そんな自分が時々恐ろしい……でも仲良くなつたからと言つて、こ
いつの全部を知つているわけじゃない。あの寂し気な表情の意味は
何なのだらうか? 本当に事情とは?

疑問が浮かんでくる。ナビそれを麗奈から今聞くつとは思わなかつ
た。いや、むしろ思おつとはしなかつた

「……『ゴンタ』……お前酔ったのか？」

健斗はゴンタの頭を撫でながら、ゴンタにそう訊いた。ゴンタは鼻で高く鳴いた

「ああ。眠いのか」

ゴンタが鼻で高く鳴くときは、大体が眠いかお腹が空いてるのかどうかだとこいつことを健斗は知っていた

けど、『』飯は出る前にあげたからお腹は満腹のはずだ。だから、多分健斗に甘えている内に気持ちよくなつて眠くなつたのだろう

何だかんだで、子供だなまだまだ……

次第にゴンタは目を閉じて眠り始めた。健斗はゆっくつと安心させるよつてゴンタの身体を撫でてやつた

「『ゴンタって、健斗くんによく甘えるよね?』

と麗奈は眠るゴンタの鼻を触つて言つた

「わうか?」

「うん。何か、健斗くん父親つて感じ」

麗奈がそんなことを微笑みながら言つた。その言葉を聞いて、健斗は口元が緩んでしまつた

父親か……案外麗奈の言つ通りかもしれないな……

でも、父親よりゴンタは兄弟だと……そして心からの親友だと思い
たい。息子であり、弟であり、友達なんだゴンタは……

「甘えん坊なだけだよ」

健斗はそう言って静かに笑つた

「なあ～んか、私も眠くなっちゃつたなあ～……」

と麗奈は言つと静かに目を閉じた。

健斗はちよつと困つたような表情を作りながら怪訝な言ひ方をするなよな？」

「寝てもいいけどさ、ソリ……俺に寄りかかつたりするなよな？」

と健斗は言つたけど、麗奈は軽く頷くだけで、何も言わなかつた。
すでにあれだ。爆睡モードに陥つてるとこだ。このわけだ
ここが軽い返事をするときほこつも……

こうなるわけだ。結局麗奈は何回も健斗に寄りかかってきた。健斗はその度に身体を起こすが、すでに爆睡モードに入ってる麗奈は車の揺れで健斗に寄りかかるてくる。

一回起こうつか……と考えたのだが、あまりにも気持ち良さそうに寝ている麗奈を見て、気が引けた

つーか……いつも想うんだナゾ、無防備過すぎるだろ……こいつは

これで麗奈の寝顔を見たのは4回目だ。普通女の子って、寝顔を見られるのを嫌がるもんなんじやないのかって思つ

つーか、そんなもんだろ？一応俺も男だ

こんな無防備で寝られると、男の性さがといつのも反応してしまつ。麗奈は豊かな胸でスタイルもいい……性欲が沸き起ころのが普通だ

けど、健斗は自分をマインドコントロールしていた

こんなやつに負けてたまるか……

もつと女の子らしくなれば可憐かれんいのになあ……と健斗は思いながら深くため息をついた

何回身体を起こうとしても、麗奈は何回も健斗に寄りかかるてくる

それがもう面倒臭くて、そのままの状態にした。甘い香りが麗奈の綺麗な栗色の髪から流れてくる

香水もつけているようだ。アロマティックな良い匂いだ……きっと

彼女になつたら最高のショーションなんだりつなかつて俺は何をバカな」とを考えているんだ

「どうだ健斗」

「……何が」

父さんが突然主語もなしに訊ねてきた

今この車の中は健斗と父さんしか起きていない。どうやら母さんも眠つてゐるようだつた……

「麗奈ちゃんだよ。あんなに嫌がつてたのに、気に入つたか?」

「……別に気に入つてはないよ

「好きにはなれたか?」

「それもない。……ただ……」

「ただ……嫌いじゃない。それだけは言えた

「でもいい子だろ?」

「……いい子……かどうかは知らないけど」

健斗は麗奈をじばりく見つめていた。相変わらず安心そうな表情を浮かべていた

「……なあ父さん」

「ん? 何だ」

健斗は呟くよひに訊いてみた

「ここつひにわ、東京に住んでたんだよね?」

「ああ」

「じゃあ何で居候する?」とになつたの?」

「あねといふせんせはしげねりへ何も答えなかつた

「……麗奈ちゃんから聞いてないのか?」

「……一応……何か、ここつの親が外国で働いてるから、その間だけ此處で居候するつてさ」

健斗がやつひにわと、父さんは高らかに笑つてきた

「やつひだよ。あこつは今頃、ニューヨークで大事な取引をしてるんだわうなあ

「――ヨーク――?」

健斗はやつひにわの疑問が湧いてきた

「麗奈ちゃんのお父さんは、貿易会社の社長なんだ」

「社長？」

父さんの話によると、麗奈のお父さんはある貿易会社の社長さんらしい。麗奈のお父さんが営む貿易会社は世界を股にかける大企業らしいのだ。

今回は、米国との関税がどうのこうのについての会議と、重要な取引のため、ニコーパークで働いているらしい

まず、取引成立は一体いつまでかかるか分からないといつていたといつ

そのため、麗奈は健斗の家に居候することになったのだ

「ふう～ん……でもおかしな話だよな」

健斗は不思議そうに呶つた

「何が？」

「いや、いつまでかかるか分からないうことは、逆に言つとすぐには成立するかも知れないってことだろ？・わざわざいそな田舎に来る」とあるかな？」

「それがだな」

父さんは少し苦笑しながら言つた

「まだ麗奈ちゃんには言つてないんだが、今度は中東で石油問題に

ついての会議があるらしくてな。やつぱりそれも時間がかかるらし
い。そのあとも仕事がどんどん入ってきて、まだまだこっちに戻れ
そうにないんだと」

「はあ～……スゲーなこいつの父親は……」

感心してしまう。本当に世界を股にかけてる大企業の社長なんだな
……バリバリの働きマンだ。まさに自慢の父親とも言えよう

「父さんはどんな関係?」

健斗が訊くと、父さんは赤信号を待ちながらタバコに火をつけた

「友達って言つたろ? まあ、友達というより、幼なじみと言つた
方がたましいけどな」

「幼なじみ……」

「幼稚園、小学校、中学校、高校が同じでな。よく一人でつるんだ
ものだつたよ。けど大学で、あいつは東京の大学に行つちまつてな
あ～……それから……最後に会つたのが10年前。ちょうど麗奈ち
ゃんが小学校に上がるときだつたよ」

「その割にはいきなりだな」

健斗がそう言つと父さんは可笑しそうに、肩を震わせて笑つた

「そうだな。この前電話がかかってきたとき、そりやびっくりした
さ。けど、まあ迷惑な話ではなかつたしな」

「迷惑だろ……こきなりだぜ？まあ俺にもちやんと電話しりつてんだよ。初対面のやつを送り込んだきやがつて」

と健斗は鼻で息を強く吐いた

「かつつか。やうか~、健斗は覚えてないのか~」

父さんがふとそんなことを言つてました。健斗はそれに驚きと反応した

「何を？」

「お前、麗奈ちゃんに会つた」とあるの、覚えていたりとか

「え……」

健斗はそれが、あまりにも衝撃な事実に思えた……

俺は……麗奈に会つたことがある？

「えつー？嘘だあーーこつ俺こんなやつに会つたーー？」

健斗が少し混乱気味で父さんに訊いた。するとだつた。麗奈がゆつくつと扉を開いて、起き上がってきた

「ん……どうかしたんですか？」

なんでバッダタイミングで起きるんだ！」こつせ……

しかし父さんは高らかに笑つていた

「だから10年前だよ。お前が小学校に上がるとき、大森家が帰つてきたんだよ」

「……え？ 嘘、マジで？」

父さんの言葉が信じられず、健斗は頭を抱えた。全然覚えてない……麗奈は何があつたのかまったく理解しておらず、不思議そつな表情を浮かべていた

「お前喜んでたじやないか。『麗奈ちゃんと友達になつたよ』なんて言つて言つてきたり」

「全然覚えてない……じゃあこここのお父さんにも会つた？」

「ああ。あつちひやんとお前のこと知つてるよ。この前電話かかってきたときだつて、お前のこと元気かつて聞いてきたぞ」

「……え……」

健斗はまた頭を抱えた。本当にまったく何も覚えてなかつた

ここに会つた記憶など、これっぽつも残つてなかつた

「ねえ、健斗くん？」

頭を抱えている健斗を見て、不思議そつに麗奈は訊いてきた

「……お前が、覚えてる？」

「何が？」

健斗は軽くよいひに言った

「俺とお前って……前も会つたことあるんだと

麗奈はそれを訊くと、また不思議そうに健斗を見た

やつぱり覚えてないんじゃん。こいつも……

「うん。覚えてはないけど……お父さんから聞いてたよ」

「え？ じゃあ、最初から知つてたのか？」

麗奈はゆつくりと頷いた

「健斗くんを最初に見たとき、何か懐かしい感じはしたんだよね。
まったく覚えてないけど……」

と軽く、麗奈は可笑しそうに笑つた

意外な事実に、健斗はまだちゃんと受け入れていなかつた……

「俺、こいつと仲良くした？」

健斗はそう呟くと、父さんが笑いながら答えた

「そりゃあもう。たつた1週間だつたけど、ずっと一人ともいっし
ょだつたぞ？ ハハツ、麗奈ちゃんが帰るときなんか、お前鼻水垂ら

して大泣きしたぞ？『嫌だ～！～ずっとここにしてよ～つ～』って言つてな。だからてつきり麗奈ちゃんが戻つてくるのを聞いたら、喜ぶかと思つたんだが、まったく反対な反応をしたから……』

父さんがそんなことを暴露すると、麗奈は吹き出して笑つた

多分、鼻水垂らして大泣きしたつてことに笑いが込み上げてきたのだろう

麗奈が大笑いしたので、父さんも大笑いをした

健斗はそんな自分の哀れな姿を思い浮かべてみた

考えられなかつた……

「嘘だ。父さんたち嘘ついてるんだ。大泣きするかよ、この俺が……つーかお前笑つてんじゃねえよつ……」

「クツ……アツハハハハハ……鼻水垂らしてだつて 健斗くん可愛い……」

「嘘だつて！～絶対ないからつ～！」

健斗はそんな事実を知つて後悔した……聞くんじゃなかつた……健斗は悲しくなつて、深くため息をついて目を閉じた……

そしてそれから時間が経つとよつやく、市内についた。高層ビルなどもたくさん並び、いかにも都会らしい町だった。麗奈は窓から顔を出して、町を眺めていた

「へえ……ビルがいつぱあ～い」

「でも東京ほどじやないだろ」

健斗がそう訊くと、麗奈は健斗を見ながら言つた

「うん。神奈川県の、本牧つてところに似てる」

「本牧……？」

あまり聞いたことのなさそうな町だった……

「何か、お前神奈川のことも詳しいんだな」

健斗がそう言つと麗奈頷きながら笑つた

「うん。だつて前は神奈川に住んでたから」

「え？ 東京じゃねえの？」

「東京は前に。神奈川は前の前」

健斗ははあつと納得するよつて感心した

「お前大変だつたんだな～」

「まあね」

さすがは社長の娘とこつとじだと想つ

車はとあるデパートの駐車場に入つていった。

車は適当な場所に車を止めた。周囲にも車はこつぱこ。ビルやら今日も込んでこりよつだ。

車はバックして、停車した。さて、降りるとするか……

健斗はゴンタを先に下ろし、そのあとに続いて降りた。駐車場は地下なのでひんやりとした空気が身体を包んだ。

リードを父せんに渡した

「じゃあどうすつやあこい？」

健斗が訊くと、母さんは腕時計を手にやうにながら答えた

「やうね……11時半ここにいるのホールドマーナで」

健斗はケータイを取り出して、時間を確認した。現在9時半ちょい過ぎ……一時間くらいはある。

「はい麗奈ちゃん」

父さんは封筒から3万円を取り出した。きっとこれが麗奈のお父さんから預かったお金だろ。麗奈は「ありがとうございます」と言いいながら、そのお金を受け取った

「じゃあ11時半にね」

健斗は了解して、麗奈と共にデパート内へと向かい、父さんたちはここから少し歩いたところにあるホームセンターと、その知人のところへと向かった

駐車場にあるエレベーターで、健斗たちは4階へと上がつていった。4階に洋服のお店が並んでいるのだ

エレベーターに乗つてこるのは健斗と麗奈の一人だけだった

「何かデートみたいだね」

麗奈が可笑しそうに笑つた

「バカッ！つまんねえ」と言つてんじゃねえよ……」

健斗はそつ恥ずかしそうに言い放つと前を見た

高い鐘のような音が鳴り、エレベーターの扉が開いた

それと共に、何だか最近流行つてゐる音楽のBGMが聞こえた

そして色々な店が並んでゐるショッピングモール。健斗たちだけじゃなく、色々な人がいる。家族連れや、友達同士。それと……恋人……

健斗はふと麗奈を見た。可愛いらしい私服姿の麗奈は少し女の子らしさが上がつている

「ねえ、行こうよ~」

麗奈が健斗にそつ促すよつて言つた。

「ん……ああ」

健斗と麗奈はエレベーターから降りて、とりあえず店を見回るといつにした

半ば心なしか……少しみんなの視線を感じた……

「なあ、どこで買つんだよ」

健斗は麗奈にそう訊くと、麗奈は少し洒落た洋服店に入った。店の名前は……多分英語なんだうけれど読めない……

麗奈はWOMEENのところに向かい、服を眺めていた

どの服も可愛いらしい服に思えた

「……つーか、服ならこっぽいあるんじゃないの?」

健斗が麗奈についていきながらそういう弦くようと言った。でも麗奈は奥の服を見ながら楽しそうに選んでるだけで、何も答えなかつた
どうやら夢中になつてゐるらしい。健斗はため息をつきながら、苛々するみづて頭を搔いた

「つたく……」

健斗はこのままどこかへ行きたかつた……

つーか、女の子と服を買いに行くだなんて生まれて始めてのことだから……自分は何をすればいいのか分からない……

ただ待つてればいいのだろうか?

「あつ……ねえねえ健斗くん。これ可愛いよね」

と言つて、健斗にシャツなどを見せてくる

「ん~……可愛いんじゃね?」

「ねつ？でも……なつとデザインがあれかな……」

「派手？」

「つよ」

それは確かに健斗も感じた。それからも麗奈は色々な服を探索しあじめだが、どうやら気に入つたものは見つからない様子だった。健斗はとりあえず、見せられた服を見て素直な気持ちを伝えた。でもふつちやけるとだ……麗奈が例え、どんな服を着たとしても、どうせ可愛く見えるんだろうつと思つ

「ちよつと試着してもいい？」

と言つて、麗奈はとりあえず候補のものを全部手にとつて組み合わせてみる『気らしさ』

健斗にちよつと聞くと、健斗は『わざわざやつく』と頷いた

女性の店員に試着室まで促され、健斗は試着室の前で立ち止まつた。麗奈は試着室に入り、カーテンを閉めた

と思つたら、突然顔を出して、怪しい顔をして『やつこ』と言つてきた

「覗きたい？」

「なつ……ーーー！」

健斗は顔を赤くして怒鳴るよつと言つた

「変な」と言つてたじやねえよ、バカッ……わつわと着ひよなつー！」

健斗の反応を見て、麗奈はクスクスと笑つて顔をしました

カーテン越しで笑いながら

「冗談なのにいへ やつぱり健斗くんつてピュアだね」

と言つて、多分着替えながら言つてきた

健斗はそれを聞いて、舌打ちをした

お前の感覚がおかしいんだよ……そつ心の咳きをするだけで、ただ試着室の前で待つていた

「健斗くんつてさあ～」

麗奈は着替えながら、また話しかけてきた

「あ？」

「健斗くんつてさあ～、こんな風に、誰かと服買いに来たりしたこ
とつてある～」

突然何を聞きますか? どうして?

「やつや……誰だつてあるだの……」

健斗がやつ言ひついで、麗奈は驚いたよつな声を出し、また顔を出しきれた。

「嘘つ……誰誰？」

「べつと……ヒロヒ。 たまに来る」

健斗がやつ言ひついで、麗奈は可笑しそうに吹き出した

「違ひよ。 女の子と来た」とはあるへ。

健斗はそれを聞いて、麗奈の顔を見ず呟くように答えた

「ねえよ……」

麗奈はそれを聞いて、声に出して笑つてまた顔を引っ込めた

「やつぱつね～～誰かと付合つたこととかは？」

「向でそんな」と聞くんだよ……

「いいじゃん。教えてよ～」

「……別にいいだり……想像にお任せしまーす」

健斗がやつ言ひついで、麗奈はため息をつきながら言つた

「そつかあ……まあ、結衣ちゃんをゲット出来るように頑張って」

健斗はそれを聞いて、少しカチンときた

「別にお前みたいな何人の女と付き合つようなやつじやないんだよ俺は」

健斗がそう言つと、麗奈は少し口を尖らせるように言い返してきた。

「何それ？私がまるで軽い女の子みたいじゃあん」

「ほへ、じゃあお前こそ何人の男と遊んできたんだ？言つてみるよ」

健斗はそう言いながら、少し憤りを感じるように鼻で息を強く吐いた。大方、5人とから6人とか……10人とかだろ？

麗奈はしばらく黙っていた。着替える手を止めて、寂しそうな表情を浮かべながら呟くように言つた

「……1人だよ」

「あ？」

健斗は聞き取れずに聞き返した

「1人だよ。今まで付き合つたことがある人……」

「え？お前が……？」

1人つて……スゲー意外だつた。麗奈みたいな人、きっと東京では

す」／モテてただろうに……それなのに、1人が……

びっくりして、それ以上言葉が出てこなかつた

「ね？私は、1人の人をちゃんと好きになるような純情な女の子つてわけですよ」

と麗奈はクスクスと笑つていた

「自分で言つなよ……バアカ」

健斗がそつ呆れた感じで言つと、カーテンが不意に開いた

そこには少しボーカルカッショク氣味な服をきた麗奈がいた

「どう？」

「……いや……いいんだけど……悪くはないんだけど……多分却下」

健斗がそういふと麗奈は口を尖らせた

「やつぱり～～ちょっとボーカルカッショク過ぎかな～？」

「それもあるけど……少し派手。他の着てみれば？」

いや、派手といつより少しヒロード……

太ももを露出させるジーパンが、何だか色っぽかつた……

こんなで歩かれたら、多分行き交う人が振り向くだらうけど……

それからじいじばらく経つて、またカーテンは開いた

「……ふざけてんの?」

「えへへへひよつと面白がりだつたからつこ……」

めちゃくちゃ派手な服装である……真っ赤なドレスに身を包んでいた

「お前はパーティーにでも行く気か? つーかそんなもんがこいつに置置いてあるか? !?」

そして次は……

「……俺帰るね」

「嘘嘘つ……ちやんと選ぶからあ~!~」

今度は「こつ……ピカチュウのぬいぐるみを着やがった……

はつきり言つて……めちゃくちゃ可愛い……けど、何でこんなものがあるんだろう?

それから麗奈は色々な服を健斗に見せてきた。完全にふざけていた。

「いい加減にしないと帰るからな……」

健斗は半キレ状態で麗奈を待っていた

するとまたカーテンが開いた

「じゃあこれは?」

「…………」

麗奈は纖細な黒の総レースが光沢地に美しいワンピとネックレスをつけた姿で登場した

下の部分をちよつとヒラヒラさせながら笑いながら言つた

「ちょっと派手かなあ?」

「…………いやあ…………」

健斗は目を見開いてそれを見た

正直な感想……

「可愛い……」

「本当に……じゃあこれにしようかな」

健斗はそう呟いてから口を塞いでしまった。でも、めちゃくちゃ可愛いかった……

今日麗奈が着てきたのは、最愛ピンクの裾ひらカシュクールとレースが可憐なキャミに、ティアード裾からふんわりチュールが覗く黒の花柄スカートを着てて、さらに黒レース×つぶつぶパールが華やか可愛いツイードパンプスを履いて、めちゃくちゃ女の子らしくて可愛いかった

でもワンピの方は、サテン素材が裏地だから纖細なレースがとびきり映えるワンピで、透ける袖と胸下切り替えの絶妙バランスが品よく美しかった

まるでお嬢様のようだ

「でもちよつと派手じゃないかなあ？」

「いや、いいんじゃねえの？多分……スゲー似合つてると感づ

多分大人が着るような服だつたけど……麗奈には充分似合つていた

「そつかあ じゃあこれは健斗くんとデート用にしようと」

「はあっ！？な、何訳の分からなこと言つてんだよ」

クスクス笑いながら麗奈はまたカーテンを閉めた……

健斗は自分の鼓動を確かめるように押さえてみた。さつきから鼓動が早い……

麗奈のいきなりの女子らしさアップに戸惑つてしまつたからだつた。

健斗は頭を搔きながら、深くため息をついた。

「ありがと「ハ」ゼ」こました」

店員からのお決まりの挨拶をされ、健斗と麗奈は店を後にした
麗奈は「」機嫌そうに、ビニール袋に入れたさつきのワンピを持って
いた。

健斗はその様子を、見つめながら麗奈の一個後ろで離れて歩いていた
つたく……バカみたいにはしゃぎやがつてつて感じだ……

でも……本当は未だにドキドキしていた

早川とは違う、胸の高鳴りだった。

また、麗奈に対し嫌悪感も抱いていた……

何が俺とのデート用だよ……バカにしゃがつて……

「健斗くん」

麗奈は不意に振り返つてきた

「何だよ」

「これからどこか行く?」

「……いや、俺はお前についていくだけだし」

「そつか。じゃあ、これから本屋に行こうよ」

「……何で？」

「教科書。買いたいからさ」

健斗は納得するように頷くとケータイの時計を見た。そして見てかなりびっくりした

もう一時だ。あんなとこ、1時間以上もいたのかと思つと驚きだつた

「健斗くん？」

「ん？あ、ああ。分かつてるよ」

健斗は麗奈と並んで再び歩き始めた。

このショッピングモールにももちろん本屋はある。書店が5階に… 健斗たちはエスカレーターで5階に行くつもりだった

「ねえねえ」

「ん？」

麗奈を見ると麗奈は少し照れながら健斗に言つてきた

「私もね、男の子と買い物するの初めてなんだよ」

「…………だから？」

「初めてが健斗くんなんだなんて、ちょっと複雑う～」

と麗奈は少し不満そうに健斗に言ひてきた

その表情を見て、健斗はふんつと顔を剃らした

「俺で悪かったな」

健斗がそんな風に言ひつと、麗奈はクスッと笑つた

「冗談だよ～。健斗くんでよかつたなあ」

と健斗の背中を叩いてきた。健斗は背中を擦りながら、少し顔をしかめた

「絶対お前付き合つた人一人つて嘘だろ」

健斗がそういうと麗奈は不思議そうに訊いてきた

「どうして？」

「そんな風には見えない…………」

よくいるじゃないか。軽い女として見られたくないから、自分の本性を隠すようなやつ……

「嘘じやないって。つていうか私そんなに軽そう?」「さあな……じゃあそいつどういうやつだつたんだ?」

健斗がそんなことを訊くと、麗奈は少し考えるような仕草を見せてきた

「そりだなあ……分かんない」

と言つてえへへつと笑つた。健斗はそれを聞いて、鼻でため息を吐いた

「やつぱし嘘なんじやねえかよ」

「だつて本当に好きな人のことなんて分からぬものでしょ?」

と麗奈がにつこつと笑つてきた。

「そりかあ?」

「そりだよ。健斗くんは結衣ちゃんをどんな人だと思つてる?」

麗奈はエスカレーターに乗りながら、そんなことを訊いてきた。健斗はそれを聞いて、少し考えた

「早川が……どんな人か?そりやあ……優しくつて……可愛いくて……性格のいい人……」

だけど、それは本当に早川といつそのものなのだろうか?

もつと俺の知らないところにひょとしたら早川がいるのかもしけ

ない

そう思うと分からない……

「ね？ 分からないでしょ？」

エスカレーターをさらに上つていぐ。麗奈は笑いながら穏やかに言った

「人はね、その人を本当に好きなった理由も、何も分からぬもんなんだよ。なのに人は人を好きになるの」

「……よく分かんねえ」

健斗は麗奈の言つていることが本当に理解できなかつた

けど、何か上から物を言われてるみたいで少し嫌悪感を感じた

「健斗くんにはまだ早いかあ」

「うるせえ。お前だつてたかが一人なんだろ」

健斗はそう言つたけども、健斗を見下すようにフフンと笑つた

そして5階に着くと、すぐ目の前には書店があつた。

「予約してあるんだけど……どうで受け取るのかな？」

健斗にそう訊いてきた

「控えみたいのは持つてるの？」

麗奈は財布からそれらしきものを持っていた。控えとレシートだった

「それをレジに出せばいいんだよ」

健斗は麗奈にそう促すと、麗奈は健斗に言われるままレジへと向かつた……

麗奈はどうやら前払いをしたようだった。レジに出すとすぐさま教科書が積み上げられた

サインをして、紙袋に入れられた教科書を麗奈は持とうとした

けど、知ってる？教科書って束になると意外に重いんだぜ？

女の子の麗奈には持け上るのはやつとで歩くことままならなかつた

健斗はため息をつくと、麗奈の教科書を持ってやつた

「わあ、力持つーー！」

「てめえが非力なんだよ」

と健斗はさりげなく言ご捨てると、わざわざ書店を後にした

時計を見ると11時10分だった。別に行くところなんてないし、フードコートに行くか……

「麗奈、もう行くところないんだろ？」

「うん」

「じゃあもうフードコートへ行くだ」
と囁いて、健斗はさりげなくスカーレーターに乗った。

あの日以来、健斗と麗奈は少しずつ距離が縮まっていた。

そして日常にも変化が起った。健斗は麗奈を名前で呼ぶようになった

つていた

自発的に呼んだわけじゃない。あのとき、ついつい興奮して麗奈を名前で呼んだことから、麗奈は自分のことを名前で呼んで欲しいと言ったのだ

「名前で呼んでくれないなら、私だって“山中さん”って呼んじゃうからね」

と訳の分からなこと言つてみた

でも最初は拒否した

名前で呼び合つなんて、付き合つてて誤解がさらに進んでしまつ

だから絶対呼びたくない……

けど、麗奈はしつこかつた。健斗が名前で呼ばなこといちいち口を出してきた

仕方がないから、みんなの前では大森で、一人や家では名前で呼ぶことにしようとしたのだが……

何だか麗奈と言つ名前が案外呼びやすいことに気がついてしまい、最近じやまつたく気にすることなく名前で呼ぶようになってしまった

ヒロや早川、佐藤は最初一人が付き合い始めたんじゃないかつて怪しみできた

けど健斗が熱心に事情を説明すること、何とか誤解は解いていた。

早川に誤解されたまんまだなんて、死んでも死にきれないからだ

でも早川はにっこりと笑つて納得した。本当に優しい子だと思つ……

佐藤は未だに怪しんでる。ヒロは信じたくないみたいだ

でもあいつだつて麗奈のこと名前で呼んでるよな？

それから、麗奈とは関係ないのだが、この前めがけやくじや嬉しこ」とがあった

何と……早川のメールアドレス番号をゲットしてしまったのだ……

時を遡る」と「日前……弁当の時間……きっかけはヒロの畠葉だった

「ねえ麗奈ちゃん」

ヒロは弁当を食べながら麗奈に話しかけた

「なあ」「…」

相変わらず甘い声で麗奈は答える

「あの人、俺とメールアドレス交換しない?」

健斗はそれを聞いて、軽く息がつまりむせてしまつた

びっくりしたのだ。とんでもないアツタクだなあと思った……

でも麗奈は能天気に、頷いた

「うふ。いいよ~」

「麗奈……やめとけ。あとで後悔するわ」

と麗奈に向つて、ヒロは顔をしかめた

「あ、ねえ、みんなでメルアド交換しようよ」

と佐藤がこれぞ名案だと喜んでばかり、そつと口を開いた

すると早川もそれに賛成するように急にテンションが上がった

「いいね、私ヒロ君のは知ってるけど、山中くんの知らなかつた

」

「え……」

「山中くん教えてもらつてもいい?」

健斗は早川の笑顔に戸惑つていた。

あまりに突然の喜劇に、動搖を隠せなかつたのだ

何度も見たことだらう……早川のメルアドをゲットすることを……
それが、それがついに叶つたのだ

健斗はあまりの喜びに我を忘れていた

だからそれ以上のことは覚えてない……

健斗たちは、7階のフードコーナーに向かった。フードコーナーは少し混んでいた。当然だろう。けど、いくつか席は空いてるから、健斗は四人席に座った。

「……少しまだ時間あるな~」

健斗はケータイを見ながらそう言った

「何か食べる?」

健斗は麗奈の言葉を聞いて少し考えていた。多分、母さんが「集合をかけたのは」飯を食べるためだと思つ。

だからちよつと早めに食べても、別にいいか……

でも……

「俺はいいや。お前何か食つてこよ」

健斗はそのままつと、麗奈は首を横に振つた

「健斗くん食べないんなら、私もいいや」

「そつか?俺は、バイト先で食つからいらぬだけだぞ?」

健斗がやつ言つて、麗奈は少し困惑いながら言つた

「今日バイトなんだ」

「今日から……またな」

「でも最近、バイト出てなかつたみたいだね」

麗奈がやつ言つて、健斗はゆつくつと頷いた。そして何も言わずにゆつくつと立ち上がつた

「何か飲むか?」

「うん」

「何飲む?」

「じゃあ私は……クリーミーソーダ

と言つて、麗奈はファーストフード店を指して言つた

健斗は了解すると、そのファーストフード店へと向かつた……

「まじめ

クリームソーダを買って健斗は一つ麗奈に渡した

何か……スゲーオレラ付きましたみたい……周りからもそう思われてんのかな？

「ありがと。おじいちゃんもひらひらしゃった」

「別に」

「ねえ、健斗くん今日からまたバイト行くんだよね？」

「ああ。今までは、店休みをもうひいてたんだ」

健斗がそう言つと、麗奈は不思議そうな表情を浮かべた

「お前が居候に来て、何かと色々あるだろ？とりあえず落ち着くまでつて……店長に事情話したら、すんなりオッケーされた」

「そつかあ……」

「別にお前のためじゃねえし。気にすんなよ」

と健斗はクリームソーダを飲みながらそう言つた

「お前は毎から何か予定でもあるのか？」

健斗が訊くと、麗奈もクリームソーダを飲みながら首を横に振つた

「そっか……暇だな

「うん。何しようかなあ……」「……

「早川、うど約束でもしたら?」「……

「結衣ちゃんもマナも、今日は毎から夕方まで部活だって

「じゅあヒロは?」「……

「健斗くんいなこと無理だよ……」「……

と麗奈は寂しそうな表情を浮かべた

「……まあ、今日は俺バイト6時までだから……相手してやれないから」「……

「別に相手してもうわなべつてもいいもん

と麗奈は子供みたいに顔を剥らした。健斗はそれを見て可笑しそうにクスッと笑つた。

「部活やつたら?」「……

「……うーん……」「……

「まだ悩んでんの?」「……

健斗が聞くと、麗奈は少し答えたくなさそうな表情を浮かべた

「だつてまあ……」

「気にする」とないつて。母さんも言つてただろ？高校生活なんて一度しかないんだから……自分のやりたいことをやれよ」

「……健斗くんは部活には入らないの？」

麗奈にそう聞かれて、健斗は甘いクリームソーダの堪能しながら答えた。

「ん~……まあな」

「え~? 何だかもつたいなくない?」

「別に他にやりたい」ととかねえもん」

麗奈はそれを聞いて、ふう~んと言ひながら、健斗と回じよつてクリームソーダを飲んだ。アイスクリームが溶けて、メロンソーダの部分が黄緑色に染まった。

「健斗くんはサッカーやつてたんだよね?」

麗奈にそう聞かれたとき、健斗はピクッと眉をひそめた。

「……それが何?」

麗奈は少し苦悶の表情を浮かべて歎息をついた。

「高校ではサッカー部に入らないの?」

麗奈にふとそう聞かれて、健斗はクリームソーダを飲む手を止めた

「……膝を痛めてるって嘘でしょ？」

「……」

健斗は何も答えなかつた。その変わり、またクリームソーダを飲み始めた

「ここの前なんか言つてたじやん。ちよつと事情あるつて。事情つて何？教えてよ～？」

「別にいいだろ？お前には関係ない。とにかく俺はサッカーは辞めたの」

麗奈はそれを聞くと、寂しそうな感じで言つた

「……冷たいんだから」

「それよつもお前の話だろ。テニス部は？早川もいっしょだぞ」

健斗がやつ言つと、麗奈は首をかしげた

「テニスやつたことないもんなあ

「初心者歓迎らじこけど……」

「でもなあ～」

健斗は悩んでいる麗奈を見て深く息を吐いた

「お前がよつと歎み過ぎだらへもつと樂観的に考へろよ。いつまみ
たいにア」「ア

「やうだな～

麗奈はまた考えるよつな仕草を見せた

別に深く考える必要なんてないのにな……と健斗はやう思つた

でも、気持ちは分かるよつな気がした。部活つてスゲー悩むものだ。
俺は、もしあんなことがなかつたら……迷わずサッカー部を選んで
た。

でも、サッカー部を止めることを決めたとき、正直他の部活をやる
かバイトがで悩んだ

でもサッカー以外に何かをやるだなんて……俺には考えられなかつた

「何か……夢中になるものを使つてナ、ば、こ、さ、……やつこべんえろ

「ア

健斗はやう言ひながらまたクリームソーダを飲み始めた

麗奈はその言葉を聞いて、ゆつくつと頷いた……

クリームソーダはすでにアイスが溶けて、メロンソーダと混ざつて
いた

それからしばらくが経ち、約束時間の15分くらい過ぎたときに、健斗たちのもとに母さんと父さんが戻ってきた

特に大きな荷物とかはない、父さんが右手に袋を持っていた

「すまんすまん。待つてたか？」

父さんがそう訊いてきた。でも健斗はそんなことせずに、別のことを訊いた

「机は？あとベッドやタンスとか……」

「あると母さんがよつしりせと座りながら答えた

「机はもつ車。ベッドやタンスとかは、運んでくれるって

「ふう～ん……」

「腹減ったか？何か食つか」

と父さんが麗奈に訊いた。すると母さんがすぐに健斗を見た

「あなたはまだいるの？」

「俺は……あつちで多分食つと酔つ」

「あ、ひやつ。麗奈ちゃんはびひつある？」

母さんも麗奈に訊いてきた。麗奈は少し微笑みながら答えた
「私も、お家に帰つてからでいいです」

「わ、わ。じゃあ、帰りましょっか」

と母さんが言つたので、健斗たちはフードコーナーを後にした

そして健斗たちは駐車場に戻り、今度は麗奈が真ん中、健斗が左端。
そして最初から乗つっていたゴンタは右端だった。

ゴンタは麗奈が乗つてくるにすぐに甘えてきて、麗奈はゴンタの頭
をゆつくつと撫でてやつた

健斗はその様子を見て、可笑しさが込み上げてきた

机は確かに車のトランクの中に置かれていた。かなりギリギリの状
態で……この車が軽自動車じゃなく、ヴァンで本当によかつたと思
う……

そして、山中家の車は駐車場をあとにして、また一時間かけて神乃崎に戻るのだ

「麗奈ちゃんどんな服買ったの？」

母さんが助手席からさりげなく訊いてきた。麗奈は躊躇ついたこともなく笑って答えた

「ワンピです」

とさりげなく、母さんに例のワンピを渡した。母さんは例のワンピを受け取り、袋から出すと口ひげを引いて感嘆するよつと頷いた
「素敵つ……夏にはいいわね～♪」テート用にもパーティ用にも使えそうね♪

「はーつ。でもちゅうと派手じゃないですか？」

麗奈がそんなことを訊くと、母さんは首を横に振った

「全然いいわよ。さつと似合つと思つわ」

健斗は母さんの言葉を聞いて、うんうんと頷いた。

麗奈は照れながら、クスクスと笑っていた

「健斗くん

「ん？」

麗奈が突然、健斗に話しかけてきた

「「！」のワンピ」、健斗くんとデート用にするからね」

「はっ！？ 何で……」

「だつて、初めて買った服だもん。何かいい記念じやん？」

と無邪気に笑う麗奈を見て、健斗はため息をつくしかなかった

「別に大した記念じやねえだろ」

つーかわいいの言葉は本氣かよ……

健斗はもたれかかるよつこ、座席を少し低くした。なんか……こいつに付き合わされたら、疲れてしまつた

健斗はゆっくりと目を閉じて、しばらくの間目を開じた……

夢を見た。

あれは寝ていても分かる。夢だった

健斗は家の近くの川原で寝そべって、空を見ていた。

するとどだつた。遠くから声が聞こえた

「健斗くーんーーー！」

ふと声のする方を見ると、そこには麦藁帽子を被り、白いワンピー
スを来た小学校に上がる前くらいの小さな女の子が、健斗に手を振
っていた

そしてだんだんと近づいてくると、それは……見覚えのある女の子
になっていた

健斗は驚いて跳ね起きてしまった

「れい……ーーー？」

「健斗くふりじぱー」

健斗はゆりくつと田を開けた。田の前にまつもの麗奈の顔があった。困った表情を浮かべて呆れていた

「 もひ。家に着いたよ。早く起きなよ」

「あ……ひこ」

健斗は少し頭がぼやーとしていたが、ゆりくつと顎いて、車から降りた

確かに田の前には我が家がある。健斗はうへんと背を伸ばした

「 健斗」

ふと父さんと呼ばれて、健斗は振り向いた

「 もひバイトに行かんとまざいか?」

健斗はケータイをポケットから取り出し時間を確認した

「 うそ……でも別にいこよ」

健斗がそつ言ひと、父さんは謙譲するよひに囁つた

「 いやいこよ。帰つてからで」

「 分かつた」

健斗は家に入り、自分の部屋へと向かった。そして、そこの喫茶店の制服一式を、クローゼットの中から取り出し、少し洒落た鞄の中に入れた

そして、髪型を整え鞄を持って、また外へと出た

自転車を塀の外まで運び、自転車に股がると麗奈が近づいてきた

「あ～あ、健斗くんになると暇だな」

と麗奈はつまらなそりと声をあげて言った。その様子が可笑しくって、健斗は軽く微笑んだ

「残念だつたな。まあ6時くらいには帰るから」

健斗はそう言い、自転車を漕ぎ始めて商店街へと向かった

「こつてらつしゃーい

麗奈が手を振りながらつづいてのを聞いて、健斗は何も言わず手を挙げてそれに応えた

川の流れの音が健斗の心を癒すようだった

……ふと、やつれの夢を思い出した

少し暑い、真昼間の中、風が心地よいのを充分感じながら、健斗はいつもの道を漕いでいた

あの小さな女の子……多分あれは間違いない麗奈だと思つ
確かに、あんな子に前会つたことのあるようなそんな気がして
それにも、未だに驚いている

麗奈とは前々から接点があつただなんて……
それを知らなかつた自分が少し悲しかつた……

「あんなやつと……なあ」

健斗は深くため息をついた。

そして久しぶりに乗る一人での自転車を、ただ長い一本道を漕いで
いた

健斗は鼻歌を歌いながら、神乃崎商店街へと自転車のまま入つていった。

いつも賑やかだここは……相変わらず、今日も活気である途中八百屋のおじさんや、魚屋のおばさんなどと挨拶を交わしながら、健斗は奥の方へと進んでいった

そして、とある喫茶店の前に自転車を止めた。ここが、健斗の働いてる喫茶店だ

「カフェレストラン Ryu」

これがこの喫茶店の名前だ。少し洒落た喫茶店で、ここのは店長とは昔からながらの付き合いである

健斗は自転車を邪魔にならないように端に置くと、欠伸をしながら中へ入つた

「ちわ～す」

挨拶しながら中に入ると、中々賑やかな声が飛び交つていた

客も結構入つてて、家族連れや友達同士などが多くつた

「あら健ちゃん」

入ってすぐ田の前席から、おばさんとおじさんが話しかけてきた

おじさん知り合いだ。商店街の……

「」とこちわつす

「今日もバイト?」

「ええ……まあ」

「偉いわね~」

と言しながら、おばさんはタバコをふかし、灰皿にトントンと灰を捨てた

「店長は？」か知つてますか?」

健斗が聞くと、おばさんは少し首をかしげた

「多分……あ、ほらカウンター席にこいるわよ」

健斗はお礼を言つと、カウンター席に近づいた。

確かにそこには白い切れ毛の髪を生やした50歳くらいのおじさんが、カウンター席の机をふいていた

健斗が近づくのに気がついて、店長はこいつと笑った

「おう来たか

「ここがちつちつ」

健斗は挨拶をすると、鞄をカウンター席に置いた

この人がこの店の店長で、梶本竜平さん。年齢は今年で51歳、ちゃんと家族もいて、15年前からこの店を営んでいます。健斗とも幼いからの知り合いで、よくこの店に来たものだ。田にちよび髭を顎と鼻の下に生やしているのが特徴的だ

「悪かつたな。今日はちょっとだけしきなつさうなんだ

店員は苦笑しながら言った

「いや、もう落ち着いてきたんで大丈夫です」

「ちうか。何か食つか？食つてきてないんだろ？」

と店長は小さなオープンキッチンへと足を運んだ

健斗は恐縮そうに席に座った

「こつもすんません」

「何、これくらいい……何食べる？」

「じゃあ……ナポリタンで」

健斗がそつと言つと、店長は髪を寄せて笑つた

「好きだなあナポリタン」

「店長のは大好物です。昔から変わらないもんですから、店長の味
は」

「ハツハツハ」

と店長は声を上げながら笑った

健斗は店を見渡した

「今日は結構いますね」

「だろ？特に学生が増えてきたよ」

と言つて、店長は指指した。確かにその方向には、学生がいた

多分、神乃高の人だ。でも顔は知らない。

学生の多くは勉強をしていた

「ひやつて、彼らの勉強してる姿を見るのもいいものだ」

と言つて、店長は軽く笑つた

「どうだ最近。その女子の子……えつと……」

「麗奈です」

「ああ、そうだ。如何せん、最近物忘れが酷くなってきたよ

「そんな、まだそんな歳じゃないでしょ」

健斗は可笑しそうに笑った。

「まあな……しかしなんだ。見てみたいものだな……可愛いのか？」

健斗は少し苦笑いをした。

「うへん……可愛い」とは可愛いんですね……」

健斗は出された水を頂いた。ゅくつと口に運ぶ。ふとあの可愛い
らしさに麗奈の笑顔を思い浮かべていた

「でも、何を考えてるのかまつたく分からないよつなやつです」

と健斗はそう言った。すると、店長は笑いながらナポリタンを健斗
に出してきた

「女なんてそんなもんさ。逆にまたしかり……ってな。それが面白
いんじゃないか」

「そうすかね?……でも、結構意外な面もあるんですよね

健斗は出されたナポリタンをフォークを使つて一寧に食べた

「うん……マジで美味しい。

店長は少し興味が湧いたのか、健斗にその話をついて聞いてきた

健斗はナポリタンを食べながら、今までの麗奈のことを話した

特に、あの自転車のことを詳しく店長に話した。

全てを聞いた店長はお皿を拭きながら、感心するように語ってきた。

いい子じゃないか

「まあ……でも、あいつはあいつなりに、色々考てるんだなって思つと……何かスゲー申し訳ない気がしました」

「お前ら二こな」

「でも、まだ麗奈のことよく分からないんですね」

健斗はそう言いながらため息をついた

「あいつ、たまに寂しい表情をするんですね。今はそれが気になつてるんです」

あの寂しそうな表情には何が隠れてるのか……何を考えてるのか、それがずっと気になっていた

店長はしばらく黙り込んでいたが、不意に訊いてきた

「その子、東京から来たんだつけ？」

「ええ……まあ」

「色々あつたんぢやないか？前の学校とか、家族の間でとか

その言葉に、健斗は残り少ないナポリタンを食べる手をとめた

「色々つて？」

「ああ？色々だよ。もしかしたら、その頃麗奈ちゃんことつて辛いことがあつたのかもしれん」

「あいつに？」

健斗が聞き返すと店長は手際良くコップや皿を拭いていく

「人間は誰しもやつや。過去に何か辛いことを経験した人間は、その傷が癒えるまで心の底から笑えなくなつたりする。それを、一生気にしていく人間だつているんだ」

健斗は麗奈の顔を浮かべた……たまにあいつは、寂しそうな表情を浮かべたり、苦笑したり……でもほとんどは笑つていて

その笑顔は……麗奈の本当の笑顔なのだろうか？

麗奈は毎日、心の底から笑つていてるのだろうか……健斗はそれが気になつて仕方がなかつた

「……まあ仮にやつだつたとしたら、麗奈ちゃんの傷を癒してあげるのは、お前だぞ」

店長はそう言いながら、笑いかけた

「人は人に助けられるもんなんだからな

健斗は少し首をかしげた。店長の言つてゐる言葉は全部正確のこと戀つ。けど……それが想像できなかつたのだ

本当に麗奈は……

「それ……」

店長はしばらく手を止めた。そして、健斗を見つめて静かに言つた
「お前だつて、そうひだりつ?」

健斗はその言葉を聞いて、思考を停止した。何も考えたくなかつた。今何かを考えると、あの日のことが思い出されてしまふからだつた。その代わり、残り少ないナポリタンを一気に口に運び、水を飲み干した

「えりやひきまつ」

健斗は目を店長に渡すと、ゆっくりと立ち上がつた

「俺、着替えてきます」

健斗はやつぱりと、鞄を持つて店の奥へと歩いていった

店の奥で、健斗はポロシャツに手をかけて手を止めた

あの日……少しでも忘れようとした自分がいた。自分の人生の中で最も悲しい日だったと思つ。思い出したくない。思い出したくない。そうやって弱くなるのはいつも自分ひとりだった。

そんな自分が少し嫌だった……健斗はむしゃくしゃし、ポロシャツを一気に脱いだ……

第3話 想い P・7 (前書き)

ふと自分で気づいたんですけど、第3話の題名「想い」ってぴったりです

この「想い」というのは決して早川への想いだけじゃなく、ちょこちょこ気にする麗奈への素直じゃない想いや、健斗の言つていた「あの日」への「想い」とか、他にも色々な「想い」を感じてるんですね……

あ、それとユニークアクセス数が5000人を越えました

本当にありがとうございます

毎日400人以上の人気が読んでくれていてるわけです

なのに……感想や評価が一件しかないのは何故?

もし疑問に思ったことやアドバイス、気に入らない部分があればぜひ書いてください

また、作品への感想や自分の文章能力の評価等もお願いいたします
励みになりますので、どうかよろしくお願いします

「こりひしゃー」

「こりひしゃー」

店に密が入つてゐると店長が声をかけた

制服を着た健斗は、入つてくる密に席を喫煙席と禁煙席かを訊く
ついで……「」の店に入つてるのはほんとんど知り合ひだった

商店街のおばさん、おじさん……

「あり健ちゃん」にさわ

「こりひしゃーおばさん」

「まあ、あんたが着ると」の制服もかつ「こりひわね」

おばさんが健斗の背中を叩きながら笑った

それを聞いて店長は「」を入れながら苦笑して言つた

「おこおこ、そつやうちの制服はダサいと言つたみたいのかい」

「アハハ。どうかしらね~」

「タバコ吸つよねおばさん。あの席にどうぞ。何頼みます?」

「あらどうせ。暖かいレモンティーお願ひね」

「はい。店長、ホットのレモンティー、一つ」

「はいよ」

店長は笑いながら、コーヒーをカウンター席に出す

「健斗、カフェモカ一つ入つだぞ」

「はい」

健斗は店長から「コーヒーを受け取ると、ゆっくりと溢れないように」
小さい女の子を連れた若い夫婦に「コーヒーを運んだ

「カフェモカです。暑いので気をつけてください」

若い夫婦はお礼を言いながら、健斗に笑いかけた

どつちも知らない人だ……けど女人がゆつくりとわらいかけてきた

「こつも」「苦勞様」

「ありがとうございます」

「いいとこだね〜ここ」

と、男の人が見渡しながらそう言つてきた

健斗は一回お辞儀をすると、連れの女の子を見た

健斗をじ～っと見ていた

「」さちわ

健斗が微笑みながらさりげなく、女の子はぱくッと頭を下げた

「お前何で言つの？」

健斗がその女の子に訊くと、女の子はまだ慣れてない喋り方でやつくつと話した

「さつしまれい」

「れいちゃんか……」

健斗はさつまくと、女人にこいつと微笑んだ

「可愛いですね。何歳ですか？」

健斗が訊くと、女人がその女の子を撫でながら答えた

「3歳です」

「へえ～……あ、れいちゃんこれあげるね

と言つて健斗は制服のポケットから飴を取り出し、れいちゃんにあげた

「ありがと」

健斗はこいつりと笑つて、れいちゃんの頭を撫でてやつた

ふと店長から呼びかける声がした

「健斗、ホットドッグとアメリカン入つたぞ」

健斗は振り向き、返事をした

この店で働き始め、まだ約一ヶ月程度……高校に入る前の春休みから、店長からのお誘いで働いていた

幼いころから、この店は大好きだった。店長は人が良くて、とても居心地のよい場所だとずつと感じていた

店長は健斗の事情を知っていた。高校ではサッカーを止めると言ったとき、もしよかつたらここで働いてみないかと心良く誘ってくれたのだ

本当に感謝していた

いつか恩返しをしたいと思っている。血は繋がってはいないけど、もう一人の父親だ

健斗はふと手を止めた……

やつくりと皿を開じてあの日の後悔を身にしみていた

「健斗」

ふと店長に浮ばれて健斗はまた振り返った

「せり、ナポリタンだ。摘まみ食いするなよ?」

「しませんよ」

健斗は笑うとまた仕事に戻つていった

それから時は経ち、客足も少なくなつてこりだつた

知り合いのおじさんたちと笑いながら話していた。

「健斗」

店長に呼ばれ健斗は振り返った。店長は皿を拭きながら言った

「今日はもう上がりついでぞ？」

健斗は時計を見た。時計は五時半少し過ぎていた

「いいんですか？」

「ああ。そろそろ客足も少なくなってきたしな。麗奈ちゃん一人に
させるのも寂しいだろ」

さすがは店長だった。何て言つか……人の心を見透かすような人だ
った

「じゃあ俺先上がりります」

と言つて、健斗は店の奥へと進み、また制服を着替えた

着替え終わると、とりあえず店長の元に行く

「明日は定休日で……火曜日空いてるか？」

「あ、はい」

「じゃあ火曜日にまた来てくれ」

「はい。じゃあ先に失礼します」

健斗はお辞儀をして、さらにおじさんたちにもお辞儀をして、店を後にした

商店街は人が減っていた。昼よりは活気が少なくなっている。中にはもう店を閉めるところもあった

何だか寂しいような気分になりながらも健斗は自転車に股がって、活気の少ない商店街を通りいった……

帰り道の一本道、色々な想いを健斗は背負っていた

時折、店長の言葉を思い浮かべる。

麗奈の寂しい表情の裏には何か過去に辛い思い出があるのだろうか……もしそうなら、自分にはよく分かる

俺だって同じだ。

麗奈は心の底からちゃんと笑えてるのだろうか……すりへたりになつ

た。

また、健斗はあの日のことを振り返っていた。

……もしあの日、いつもの平常な日々だったのなら、俺は今とは違う生活を送っていたのかな……

大好きなサッカーを続けて、あいつとこいつに……

ふと寂しい想いになり、健斗は自転車を止めた

また思い出してしまった。一人になり、こんな風に夕暮れのような寂しい雰囲気になるといつもこんな風になってしまつ

あの日が来なければよかつたのに……神様っていうのは、残酷なものだと思つ。

幸せな日々を送る人と不幸な日々を送る人とで分けるんだから……

健斗は再び、自転車を漕ぎ始めた。唇を噛み締めながら、寂しさに堪えていた

それから10分程度、漕いでいると家が見えてきた

目を凝らすと、誰かが家の目の前から走ってくる。あれは麗奈だ……次第に麗奈は健斗に近づいてきた。

はつきり見えたとき、健斗はびっくりして思わず自転車を止めてしまった。そしてゆっくりと自転車から降りた

「お帰りつ……」

「お前つ……」

健斗は麗奈の恰好をよく目を凝らして見た

麦藁帽子を被つていて、白いTシャツと青い短パンは泥まみれになつていた。手や足……顔も泥まみれで、いつも綺麗になびく栗色の髪はとろとろ跳ねていて、ボサボサになつていた

「お前、じつしたんだよつ……アロアロじゅんか」

健斗が驚きを隠せないまま訊いてみたが、麗奈は嬉しそうに微笑んでいた

「今日ね、お父さんといつしょに畠仕事を手伝つたんだ。すつじく楽しかったよ」

と言つて子供みたいにはしゃいでいた。

健斗は納得するようにため息をついた

健斗の家には確かに畠がある。家から一kmくらい離れた山の中にだ。

そこには野菜畠などがあり、この季節は畠を耕して種を撒く時期だつた。

麗奈のドロドロな姿からして、相当頑張つたんだと思つ……

本当に……変わったと感づ

「つたぐ……まあお疲れさま」

「健斗くんもね。……あつ、むつかぐ」飯だよ。早く家に帰れ

と言つて、麗奈は微笑むと楽しそうに家に戻りついた

健斗はその笑顔を見て、少し寂しくなつてしまつた

だから、ふと口から出た言葉があつた……

「麗奈……」

健斗が呼ぶと、麗奈は足を止めて振り返つた。そしていつと笑つた

「どうしたの？」

健斗は田舎者ぽい言葉で聞いた

「お前……や、今……樂しいか？」

「え？」

麗奈はキョトンとして、健斗を見つめた。不思議そうな表情を浮かべていた

「どうしたの急ご？」

麗奈は可笑しそうに笑つたけど、健斗は笑わず、苦悶の表情を浮かべていた

麗奈はそんな健斗を見つめて、またにっこりと微笑んだ

「うとう……ゅうぐく楽しそう……毎日がスッゴク」

その麗奈の言葉を聞いて、少し安心するように口元が自然と緩んだ

「やつが……ならこいや」

健斗はやつ言い領へとまたやつくりと自転車を押していくた

麗奈はそんな健斗の表情を見て少し心配するよつて聞いてきた

「何かあつたの？」

「いや、別に」

健斗は何も言わず、ゆつくりと家まで自転車を押しながら麗奈と並んで帰つていった

自転車を庭へ置くと、深くため息を吐いて家の中へと入つていった。

すると、突然びっくりしてしまつた……

何と玄関に泥だらけの足を濡れタオルで拭いてる、泥だらけ汗まみれのヒロがいたからである

ヒロは健斗を見ると声をかけてきた

「 よつす。 バイトお疲れ」

「 何でこりゃんだよ……」

健斗がそつこいつとヒロは顔をしかめた

「 失礼だな。 麗奈ちゃんのベッドやタンスや机を運んだの誰だと
思う?」

なるほど、と健斗は納得した

「 悪かつたな。 サンキュー」

「 分かねばよろしく」

ヒロはそつと頷くと、また足を丁寧に拭き始めた

「 煙仕事だったのか」

「 もう。 麗奈ちゃんといつしょにな」

ヒロと家の煙は、隣だからな……

「 もつか…… 風呂入つてけよ」

「 もつかねえもんつわ。 サンキュー」

健斗は振り返つて、麗奈に言った

「お前も足を拭いて、先風呂入れよ」

健斗がそういって麗奈はゆっくりと頷いた

「分かったあ」

「まつとくさんかやんと拭けよ~」

「分かったわ~」

すると奥から母さんが水の入った洗面器とタオルを持って玄関までやつてきた

「あ~り、お帰り」

「ただいま」

母さんはまつとくさんと、麗奈に笑いかけた

「麗奈ちゃんこれで足拭いてね。あとヒロくん今日はありがとうね?
?」

「こや、これくらっこいつすよ。長い付き合ひじゃないですか」

ヒロは愉快そうに笑った。母さんはクスッと笑つと微笑みながら言った

「よかつたら」」飯食べてくれ~もつすぐだから

「マジっすか？じゃあいただきます」

健斗としては何の悪い気はしなかった。別にヒロだし……何の問題もない。

健斗は靴を脱いで、自分の部屋へ戻り、息を吐きながらベッドに横になつた

今日も疲れたなあ……ケータイを見る。メールは一件もない……

健斗はケータイを放り投げ、ゆっくりと目を閉じた

ヒロはルンルン気分で肉を食っていた

「今日お前部活なかつたのか？」

健斗も肉を食いながら、ヒロに話しかけた

ヒロは肉の旨味を充分に感じながらゆくつと頷いた

「んああ……今日は定休日だからな」

「そつか

「今日は畠仕事をやれつて親から言われててさ、お前もいんのかな？つて思つたら麗奈ちゃんだけでもうつとびつくりした

「！」こつちやんと出来てたか？」

健斗はちよつとバカにするような感じで言つた

「失礼なつー！私は私なりで頑張つたもん

「でも、何回も転んでたよな」

ヒロは可笑しそうに笑つた。それを聞いて、父さんも母さんも健斗も吹き出して笑つた。

「鍬使つたことがないらしくて、最初はすく危なつかしかつたよ」

「ちよつとヒロくさ～……恥ずかしいから言わないでよ」

と言つて、麗奈は恥ずかそうに頬を赤くして、膨らませていた

「かつかつか。でも、麗奈ちゃん頑張つてたよな」

と父さんがビールを飲みながら笑つてそう言つた

「明日は筋肉痛になるべく？」

「あ～確かに……もう身体中がガツタガタですう」

と言つて、足とかを自分で触つていた

確かに、きっと明日は筋肉痛でほとんど動けないと思つ

畠仕事つて思うつよつ大変だから……

「でもスイカが楽しみです」

と麗奈は嬉しそうに笑つた

健斗ん家の畠は、スイカや人参、じゃがいもなどを育てている

特に夏はスイカがメインだつた。夏には出来るスイカを冷たい川で
冷やして食べるのがたまらない

夏の楽しみの一つだつた

「じゃあスイカを頑張つて育てろよ」

と健斗は笑いながらそう言った

「健斗くんも手伝つてよ」

「分かつてるよ」

「今日バイトだつた?」

母さんが「飯を口にしながら訊いてきた

「今日は……いつもより人が多かつた」

「そり。結構繁盛してるのね竜平さんも」

「まあね」

そんなことを話しながら、健斗たちは夕食を楽しんだ

何か分からぬけど……いつも以上に楽しい夕食だった

けど健斗は複雑な想いだつた。本当に色々な想いが飛び交つていて、自分でもよく分からぬ……変な気分だつた。

夕飯後、健斗とヒロは縁側に行き涼んでいた。自販機で買つてきたペットボトルの「コーラ」を飲みながら、話し込んでいた

「んまじかよつーー？」

ヒロは驚いた様子で健斗に聞き返してきた。健斗はゆつくつと頷いた
「だつてさ。父さんが言つてた」

健斗は今、自分は昔麗奈に会つたことがあることについてことをヒロに話したところだった

「ううしてこんなに驚くのかはわからなかつたが、ヒロは田を丸くしていた

「お前はそんな昔からあんな美少女と知り合つたのかあ……羨ましごとせじらつ」

健斗は呆れるように「コーラを一口飲んだ

「別に……昔は可愛かつたかは限らないだろ」

「いや、あんな美少女だぜ？昔だつて可愛かつたに決まつてんじやん。つーか覚えてないのかよ」

ヒロは可笑しそうに笑った。健斗は脳間に見た夢を思い出した

もしあの小さい女の子が麗奈なら、確かに可愛かった……

自分は昔、やつぱり麗奈に会つたことがあるんだなと感じていた

健斗は急に複雑な気分になり、またコーラを今度は一気に飲んだ
炭酸が鼻をつんつとさせた

「俺がお前だつたらなあ……くそ……、どうして俺はお前じゃないんだあ……！」

「知るかよ」

健斗は苦笑した。

「なあ、お前この暮らじ羨ましがつてる？」

健斗は不意にそんなことを訊いた。するとヒロは健斗を睨み付けた

「何、嫌味ですか？」

「チゲーよアホ。お前が思つてるよりもうちは色々と大変だつてことだよ」

と言つて、健斗は「一ツを口元した。ヒロせすこいつと顔を近づけてきた

「ほへ……どんなことが大変なんだよ」

「それせ～……朝は毎日あこつを乗せて走らなこと行けない……」

「ここじゃん。おぬで付きたがつて見られたじゃん」

ヒロは不思議そうに言った。やつてから、ヒロはつと
氣がつくやつて言った

「やつか、お前は早川だもんな」

「やつ……うるせえなあ」

健斗は恥ずかしそうに顔を剃らした

「それ」「……風呂とか鉢合せしたうとこでもなことになるだり
？」

「お前鉢合せになるよつに仕組もつと考へないの？」

健斗はそれを聞いて、顔を赤くして怒鳴るやつて言った

「はあつーー考えるわけねえだろ、バーカ！ー！」

健斗はこの言葉を考えてふと気がついてしまつた

「こつと俺とでは、感覚そのものが違つのである。だからこつと
何を言つても無駄だといつことだつた

「俺は麗奈ちやんとこつしょに暮らせるだけでじやんなに幸せなこと
か……」

ヒロはそんな風に妄想劇を繰り広げていた

健斗はもつとも言わず呆れ返っていた

「なあ麗奈ちゃんつてさ、好きな人とかいんのかな?」

「……いや、いないだろ」

健斗はそれを確信するよつと云つた

するとヒロは怪しげな顔付きになつた

「何で分かるんだよ」

「だつてまだ一ヶ月来て、2週間だぜ?」

健斗がそんなこと云つとヒロは深くため息をついた

「分かつてないなあーお前……女つてのは一回惚れとかしやすいもんなのよ」

健斗はそれを聞くと、少しの間黙り込んだ

確かにヒロの言つ通りだと思つた。

結局女つてそんなもんだろ?

かつこいいやつがいたら一回惚れ……優しくされて騙され……騙したり……

麗奈も東京でそんなことをしてきたのだらうか。……自分では、色々否定してたけど

ヒロはまた怪しそうに疑つ田付きで健斗を見てきた

「麗奈ちゃん……まさかお前を好きになることなんてないよな？」

「はあ？」

健斗はヒロの言葉に可笑しさが込み上げてきた

今までの麗奈の行動を思い浮かべてみた

「ねえよ。あいつはただ……俺をからかつてるだけだし」

その通りだ。麗奈はいつも健斗をからかつていてるだけだ。人の気持ちを知つておいて

そんな麗奈にたまに嫌悪感さえ抱くこともある

ヒロは「一リラ」を口に含みながら深くため息をついて外を眺めていた。

「なあ、俺も麗奈ちゃんとメールのやり取りたまにするんだけどさ」

それはもううん健斗も知つていた

「うん」

「麗奈ちゃんってさ、どうこう話が好きなのかな？」

健斗はそれを聞いて少し意味がわからなかつた

「どうこいつって？」

「例えば、音楽のこととか映画のこととかが、ファッショントとか俳優とか色々あんじゃんか」

確かに麗奈とはいずれも話したことはある。でも多分それは特別好きな話とは言えないと思つ

「わあ」

健斗は分からないので首をかしげた

ヒロはそれを聞いて、軽く舌打ちをした

健斗は外を眺めながら、麗奈のことを思い浮かべていた

麗奈が初めて学校に来た日のことだ

「……そんな」と氣にする必要はねえよ。何も氣にしないで自然と話された方が、麗奈も嬉しこと思つぜ」

健斗がそんなことを言いながら、コーラを飲み干して空になつたペットボトルをゆっくりと床に置いた

ヒロはそれを聞いて、同じよつとコーラを飲み干しながら言った

「そんなんじゃ麗奈ちゃんにつまらない男と思われんじゃん。ボキ

ヤブラーなじつてや」

「ヤレヤレでやれるよつなやつじやねえよ」

あんな能天氣バカ女がいちこすんなことをやれるよつなやつだと
は思えなかつた

ヒロは少し腑に落ちない感じだつたが、健斗はありのままの事実を
伝えただけだつた

「お前はどつなんだよ」

ふと突然ヒロがそんなことを訊いてきた。その瞬間、胸が高鳴つて
表情が強ばつてしまつた

「な、何が?」

「早川だよ。メールとかしてんの?」

「痛いところをつかれてしまつた……

健斗はヒロと田を合わせ歯ぐきで答えた

「いや……まだ」

健斗の小さな言葉を聞き逃さないヒロは口をあんぐりと開けていた。
完全に呆れ返るよつに嘲笑しながら詰つてきた

「お前まだしてねえの? とつてくとしてるかと思つてたわ

「うねりこな……」

「最近麗奈ちゃんに『氣をとられすぎじゃない?』誤解されても知らねえぞ」

実際のところ、健斗が未だに早川にメールを送れないのに、やつぱり勇気がないからである。早川のメールアドレスをゲットしてから一日が経つた

もちろんヒロに言われる間でもなく、自分でメールを送るつもりだった

けどどんな文章を送ればいいんだり? どんな話をするばいいんだり? いきなりメールされて迷惑じゃないか?

色々な疑問と不安が走馬灯のよつて巡つてくるのだ。

『今日も学校楽しかつたな』

『最近うねりこな』

『急にゴメンな。ちよつとメールしたかつたから』

何を考えても、片言のような意味のない言葉……こんなメールじゃ、よく分からぬいだら? ……

何を考えても、結局破棄してしまうメールの内容……

メールを送れないまま、健斗は早川への想いを募らせていく。時間が経てば経つほど、あんなにも恋しくなるのはどうしてなんだらうか

結局自分はヒロと回じだつた。だから、ヒロにそこまで偉そうなど
とは言えない

いや、すでにメールを送つて「ヨコハマケーション」といふとしてい
るヒロより全然ダメなやつだ俺は……

「俺つて意氣地なしだよなあ～」

「ああ。気が弱すぎる」

「ちよつとほ励ませよ」

「人のこと言えんのか?」

健斗は一旦、深くため息をついた

「……早川は……俺のことどう思つてんのかな?」

誰かに訊いたわけじゃない。ただ素直な気持ちが言葉として出てき
たのだ。高校に入つて……それも麗奈が居候に来てから、早川とは
よく喋るようになった。それは健斗にとって、すごく幸せなことで、
妙な期待を持たせてしまつ。早川は少しでも自分に興味があるんじ
やないかと、淡い期待をしてしまう

「あ……ただの友達?」

「やつぱじ?」

「つーか、お前さ」

ヒロは突然真面的な表情をして言つてきた

「早川に誤解されんのはマジ避けろよ~」

「何が

健斗が素つ氣なく聞き返すと、ヒロは深くため息をついた
「この前の弁護のときもや、お前に麗奈ちゃんを名前で呼ぶよつ
になつたら? あいつのを続けたり、そのつづけ誤解されるつて言つ
てんの」

健斗はそれを聞いて黙り込んでいた。そして呟くよつて言つて返す

「別に……麗奈を名前で呼ぶよつになつたのは……ただ呼びやすい
つてだけだし。それだけで怪しむことなくね?」

「お前はそういう思つても、他人からすれば付き合い始めたんじゃな
いかつて思つに決まつてんだろ?」

「早川は……ちゃんと理解してくれた」

「さあ分かんねえぞ? さう思つても、本当はまだ誤解されたまん
まかもしんねえ」

健斗はそれを聞いて、戸惑いを隠せなかつた。ヒロの言つことがあ
まりにも正しく思えたからである

「別に、麗奈ちゃんと話すなと仲良くするなとかじゃないんだけ

「……誤解されるような真似はやめろよ？これ、別にこれは何か狙つてゐるわけじゃなくて、マジでお前のため思つて言つてんだからな」

ヒロの健斗を想つ気持ちがよく感じられた。だから健斗は何も言わず、静かに頷いた

全部ヒロの言つ通りだ。時候とは言え、あまり突発的なことをしたら、誤解されるのが落ちだ。

それは本当に困る。そうなつたら最悪の展開だ。それだけは絶対に避けなきやいけない

それよりももつと早川との距離を縮めることを考えていきたい

健斗は早川に……ヒロは麗奈に……互いに想いを募らせる日々が続く

そんな日常がスグー嫌だった。

自分から何かを行動起こしたい……

「もつと早川と仲良くならなきやな

と健斗は改めて決意を入れ直した……

それから一時間近くたつたとき、ヒロは突然立ち上がった

「ああ、そろそろ帰りましょつかね」

健斗は座つたままヒロを見上げるようにして言った

「泊まつてけよ。じうせ家近くじやん」

「こや、今日はこいや。親父がうるさい」

ヒロと健斗は玄関まで歩いた。途中、ヒロは随分に父さんと母さん挨拶をした

玄関でヒロはサンダルを履いていた

健斗は見送るよつて、玄関でその様子を見ていた

「麗奈呼ぼつか?」

「こや、こじよ。また明後日なつて言つといつて」

健斗はやつくりと頷いて了解した

「今日は悪かったな。色々と……麗奈の部屋のやつ運んでもらつたり、烟手伝つてもらつたりしてさ」

「いんや。別にいいや。麗奈ちゃんのためなら」

ヒロの冗談に健斗は可笑しそうに笑つた

「じやあまた明後日な」

「うー。じゃあな」

ヒロはやつ言いひし、家の戸を開けて自分の家へと帰つていった

健斗はヒロが帰つてこゝのを見届けたあと、ゆっくりと息を吐いた。ふと麗奈は何をしてこゝのかが気になり、ゆっくりと一豊くと上つていった

もうひとよつ麗奈は自分の部屋にこゝるよつだ。麗奈の部屋のドアは閉まつていた

健斗は麗奈の部屋の前まで行き、軽くノックをした

「麗奈」

しかし、呼びかけには何の返答もなかつた。

そのあと二回くらこ続けて呼びかけてみる。しかし結果は同じだつた。

健斗は恐る恐るドアを開けた

すると、開けた瞬間に驚いてしまつた

あの、何もなかつた部屋が今はベッドが窓際に、タンスやクローゼットが隅つこに、さらに机はその横に置かれていて、ほとんど健斗の部屋とは変わらない配置だった

ピンク色のカーテンが窓についていて、女の子らしい部屋へと変わっていた

麗奈はとこりうと、椅子に座り、机に上半身を預けて眠っていた

寝息を静かに立てて、ぐつすりと眠っていたのだ。

机にはシャーペン、ノートが置かれている

眠ってしまったのには無理はない…… 番仕事でクタクタに疲れてしまつたんだうつ

健斗はふうっとゆつくりと息を吐いて、麗奈に近づいた

相も変わらず、無防備な寝顔を見せていた

「麗奈。 麗奈」

身体を揺さぶるが、麗奈は起きよつとはしなかつた。

仕方がない…… 健斗はゆつくりと麗奈の身体を椅子から持ち上げた。さすが、スタイルがいいため軽い。

そしてそのまま、女の子らしい水玉模様のベッドに麗奈を静かに寝かせた。

全然起きる気配はない。

「つたぐ…… 変わつてゐよな、本当に……」

健斗はクスッと笑うと、静かにタオルケットをかけてやつた

そして、電気を消して、健斗は囁くよつて
「おやすみ」と声をかけて麗奈の部屋をあとにした

自分の部屋に戻ると、床に放つておいたケータイを拾つてアドレス帳を見た

早川結衣

健斗はこの小时前を見ると、ため息をつきながらケータイを閉じた

そして机に置くと、自分のベッドに寝転んだ

早川への想いは募るばかりだった……

早川と仲良くなるために、どんなことをすればいいのか……

まったく思いつかないのを知つていて、健斗は考え込んでいた

「ふあ～……」

朝から大きな欠伸を後ろから聞きながら、健斗はいつも一本道を自転車で漕いでいた。麗奈がさつきからもう一〇回は欠伸をしていた

「欠伸し過ぎだろ」

健斗はちょっと呆れたように後ろを振り返つてそう言つた

麗奈は眠そうに手を擦りながら言い返してきた

「だつて眠いんだもん～……身体中筋肉痛だし……」

「慣れないことをやるからだろ……つたく……ちゃんと後先考えろよな」

どうやら麗奈の疲れはまだとれていないようだつた。まあ、無理はないと思つ

健斗も中学校から畠仕事を手伝つたが、最初のときは麗奈と同じようになつたのをよく覚えていた

簡単に疲れが取れるような仕事じゃないのだ。なのにいつもこいつは、後先を考えないから……

それに……

「昨日お前一日中寝てただけ」

健斗がやつぱり、麗奈はむつとした感じで言い返した

「一日中じやないよ。午前中だけじやん

「とにかく。そんだけ寝たんなら大丈夫だろ? もう少しあんと
しあみ、しゃんと」

「そんなこと言つたつて……眠い……」

ふと背中に、暖かい感触を覚えた。後ろを振り返ると麗奈が健斗に
もたれかかるようにしてしているのが見えた

「ちよ……麗奈。もたれかかんよ」

健斗は恥ずかしそうにやつぱり言つたが、麗奈はもたれかかるのを止め
なかつた

多分……眠つてるんだと思つ

「……あ~つ……」

健斗はイライラするようになつた。いつなつたり、もつぱりしよう
もない……もたれかかるのは嫌だけど、健斗は我慢しながらひた
すら漕いで行つた

- おはよう -

健斗と麗奈が校門の辺りまで来ると、ふと後ろから声がして、健斗と麗奈は振り返った

すると佐藤が走りながら健斗たちに手を振っているのが見えた

「おふあ～よ～」

「おせよー……つい、麗奈ちゃん、どうしたつー?」

佐藤は麗奈の表情を見るなり、驚くように固まった。

「一生気が感じられないよー!?

佐藤がそんなことを語つてると、健斗はため息をつきながら答えた。

— こいつ、昨日畠仕事を手伝つて、全身筋肉痛なんだつて」

「ふうん……大変だつたね？」

と佐藤が苦笑しながらそう言つた

「もう疲れたよお～……（泣）」

まったく……東京者は貧弱過ぎるよな……

「お前、先佐藤と教室行つてろよ」

「うん……ありがとう……」

麗奈はフカフカしながら佐藤と共に教室へ向かつた。最後までその様子を見て、健斗は次第に可笑しさが込み上げてきて、一人笑つてしまつた

そして健斗は自転車を駐車場へと運んで行つた……

結局昨日も、早川にはメールを送ることはできなかつた。あんなに決意した結果がこれだ。どんな内容を送ろうかから迷つてしまつてこんな自分に腹立たしくなつた。

ついかメールすら普通に送れない自分つて一体……麗奈の言つ通り、超奥手なタイプなんだつて改めて実感してしまつたとき、悲しくて物が言えなかつた

でも、ぶつちやけるとやうなるのは目に見えていた。だつてあまり女の子とメールなんてしたことがないから……

ヒロが言つていた。男慣れしてゐる女の子は、まずメールをしてて楽

しいかで、恋愛対象として見極めるつて。本当にやつなのかな?と疑問に思つたが、あながちそうだとも思えた

もちろん早川が男慣れなどと云つてゐる品のない言い方はないと思つていても少なくとも、女の子ってそつじゃないかな?

やつぱり面白くない男の子より、面白く男の方がいいだろ?

けれどももちろんそんなに急ぐ必要はない」とへりこ、よく分かつていた

別に、そんなに急がなくても……でも急いでるわけじゃなかつた……

ただ純粋にもつと仲良くなりたいといつ素直な気持ちが、ただ健斗を焦らせているのかもしれない

それに、昨日ふと思つたことがあつた

ヒロが一昨日、麗奈は好きな人はいるのかと聞いてきた

それに対して、健斗は確信していないと答えた。

それはヒロを安心させるためでも何でもない。ただ麗奈はまだたつた2週間余りしか経つていないから……

実はこの2週間で麗奈に対して薄々感じたことがあつた

だが、早川はどうなんだろう？

この学校に入学してすでに1ヶ月以上経っている早川は、好きな人……とかいるのだろうか

あまり考えたくない

つーか、いないで欲しい……

でも早川はあのルックスでの性格だ

もし早川が好きじやないとしても、早川自体を好きな人がいるかも
しない……

それで早川も惹かれて……次第に俺なんか相手にされなくなる……

健斗はその考えを捨てるように、頭をブンブンと揺らした

何でいつもこう消極的な考えしかできないかな俺は……

俺だつて男だ、いざとなつたら早川を奪い取つてやるつ……

「ま、あのサッカー部の主将とかだつたら勝田なんてなさそうだけ
ど」

と、一人でそんなことを思つて笑つていた

予鈴が鳴つたのを見て、健斗は少し急いで昇降口へ向かおうとした

……と、するとどうだった……

校門を見ると、人生史上最悪な光景をこの目に与してしまった……

信じたくないけど、見てしまったのだ

健斗はあまりに驚きでそこでたたずんでいた

校門から、早川が歩いてきたのが見えたのだ。けど……その横には

あの、サッカー部の主将がいた……

相変わらず爽やかさを放つていて、背も高く、速水もこみち並みのイケメン……

その主将が、早川といっしょに歩いて、楽しそうに笑っていた

早川も頬を赤くして、主将と楽しそうに会話をしていた

他人から見れば、他人から見れば……あれは幸せそうな、校内一のベストカップルに見えた

すると、サッカー部主将は、早川に手を振りながら2年、3年専用の昇降口に……早川は嬉しそうに笑うと1年専用の昇降口へと入つていった

最初は夢じゃないかと思った……

多分、よく似た人が主将と歩いていただけだと思った

けど、本鈴が鳴つても、健斗は教室に行こうとはしなかった

「ふあ～……う～ん……」

1時間目……麗奈は未だに眠そうに欠伸をして、机に伏せるように眠りうとした。

国語の時間、芥川龍之介の代表作である「羅生門」。何て言つが、つまらない小説だ……

「……ん?」

麗奈は健斗を見ると、健斗は何とも言えない雰囲気を漂わせていた。

健斗も机に伏せながら、ぼーっと景色を眺めていた

間違いなく、落ち込んでいるというのが分かった

「……健斗くん？」

麗奈が健斗の様子を見て、不思議そうに話しかけた

しかし健斗は反応しなかった

「何か……あつた？」

「……何にもないよ……何にもないよ……見てねえよ俺は」

「……健斗くん？泣いてるの？」

麗奈はちゅうと笑いながらそう言った

「分かった。結衣ちゃんと何かあつたんでしょ？」

麗奈は可笑しそうにそう言った。図星をつかれた健斗は何も言わず、麗奈を見た

麗奈はそんな健斗を見て、ゆっくりため息をついた

「……俺つても、魅力ねえ意氣地なしで、どうしようもないくそつたれな女々しいやつだよな……」

「な、何？」

麗奈は少し引き気味で健斗を見た

健斗はそれ以上何も言わなかつた

そのかわり、ふと早川を見る

何事もないよ、早川は眞面目に授業を受けていた

早川は……早川は本当にあの主将が好きなのかな……

あの主将と付き合っているのか？

健斗はそれ以上、考えるのをやめた。

もう何にも考えたくなかつたから、ただ早川を見ていただけだつた。

「あー、マジで？」

今朝のことを休み時間に、屋上へ続く階段でヒロに話した。「これは誰も来ないから、秘密の話をするのには持つてこいだ

もつと驚くと思っていた。跳ね上がるくらい驚くと思っていた

けどヒロは意外にも冷静で、一人頷いていた。

「俺さ……もつ……学校来ねえかも」

健斗は深くため息をつきながら、静かにそう呟いた

今まで学校に来たのは、早川に会えるからだった。

でも今となつては……何も意味がない

「……つーかお前やつぱ知らなかつたんだな」

ふとヒロはそんなことを健斗に言つてきた。健斗はそれを聞いた瞬間、顔を上げてヒロを見た

「……何が？」

ヒロは少しため息をつきながら、ゆつくつと言つた

「早川、最近サッカー部の主将となつてゐらじこぜ？」

さうに健斗の精神を追い詰めるような事実だった。健斗はそれにまるで餌に群がる魚のよつて食いついた

「マジかよつー? いつからつー?」

ヒロはそれを聞いて、少し考えて答えた

「俺が聞いたのは……3日前。よく一人で放課後とかいつしょに帰つてんの見たつてやつがいてさ。まあ、あの一人同じ委員会りしこから

それを聞いて、さりに愕然とした。

健斗はしじまいく何も言わず、ただ前を見つめていた。そんな様子を見て、ヒロは深くため息を吐いた

「だ～か～ら～、言つただろうが。いつもお前は後先考えないよな」

自分が麗奈に書つたことをヒロに言われて、さうにショックを受けてしまつた

「……まあ、所詮噂は噂なんだけどな」

「……でもあれば……完全に恋する乙女の瞳だつたぜ……」

健斗がそんなことを言つと、ヒロは可笑しそうに吹き出しつて笑つた。

「お前がそんなこと書つなよ」

「でもマジだよ……」

「そんなに気になるなら聞いてみたら?」

ヒロがそんなことを言つてきて、健斗は少しうカツとした

「訊けるわけないだろ……そんなこと」

健斗は深くため息をついたあと、ふと階段の窓から見える空を見た

……

すうい複雑な気分だつた……すうい……複雑な……

そして昼休み、弁当の時間。健斗は弁当を持って立ち上がつた

麗奈も弁当の時間が楽しみだったのか、元気を取り戻していた

「あれ? 健斗くん」

立ち上がつて教室を出ようとする健斗を見て、麗奈は不思議そうに訊いてきた

「お弁当、みんなと食べないの?」

「……今日は屋上で一人で食つよ」

健斗はそう言つと、うつ向きながら教室を後にした。とても早川といつしょに飯なんて食つ氣分じやなかつた……

「麗奈ちゃん」

早川が麗奈に話しかけてきた。麗奈は振り返ると、早川は少し心配そうな顔つきだつた

「大丈夫？筋肉痛」

「あ、うん。平氣平氣 ありがと」

麗奈がそう言つと、早川はにっこりと微笑んだ。

「あれ？山中くんは？」

早川は健斗を探すよつこやつ言つた。

けど麗奈は、健斗が出ていったあとをただ見つめていただけだつた
……

「はあ～……」

もう弁当すら食つ氣分ではなかつた。寝そべつて、空を眺めていた。何となく今は一人になりたかった

健斗は悩みがあるとき、大抵こうする。今日の空は曇りがかかつてゐるが、その雲と雲の間から微かに日が指していて、見ていくと何だか微笑ましい氣分になつた

「……早川は……主将と付き合つてんのかな……」

健斗は呟くよつと呟つた

「なあ、俺はビビりすれぱいいのかな?」

誰かに語りかけるように、健斗はそう呟いた。あいつの大好きだった、この空を眺めながら俺はそう呟いた……

今でもあいつは、この空のどこかにいるよつな氣がしたから……どうしてこんなに胸が苦しいんだるうか
ビビじてこんなに哀しい氣持ちになるんだうか……

「……翔……」

「誰と話してんの?」

ふとやう声が聞こえて、田の前には麗奈の顔があつた。健斗は驚くよつて身体を起こして、ため息をつきながら麗奈を見た

「何でつこつくるんだよ」

健斗は睨み付けながら麗奈に囁いたと、麗奈は微笑みながらお弁当を指指した

「だつて、お弁当の感想を聞きたかったからさ」

健斗はお弁当を見ると深くため息をついた

今田のお弁当は、母さんが作ったものじやなかつた。今田母さんは仕事のため朝早く出てこつた。たまにやうつこつじがあつて、そういうときには自分でお弁当を作つた

でも麗奈は自分がお弁当を作ると囁いたのだ。いつも自転車に乗せてもらつてゐるんだから、これへうこのことせつなかせよと、微笑みながらやうつ言つてきたのだ

別に悪い気分じやなかつたから、健斗は心配せねさせた

「……ワコヤ……今飯食つ氣分じやないから……」

健斗はやうつ言つと、また「ロロ」と寝そべつた。しかし麗奈は健斗のお弁当を持って、ふたを開けた

「健斗くん」

「ん……ふがつ……」

麗奈は箸を使って、何かを健斗の口に突っ込んだ。健斗は驚いて一瞬息がつまってしまってむせてしまった

しかしうつくりと口を動かし、その味を確かめていた

「お前……何すんだよいきなり」

健斗がむせて咳をしながら言つと、麗奈はにっこりと微笑んできた。
「どう? 美味しい?」

そう訊かれて、健斗はしばりく口を動かした。

多分これはワインナーだ……

「……美味しい」

素直な感想だつた。普通に美味しい……

麗奈はそれを聞くと嬉しそうに頬を赤くして微笑んだ

「本当に? 筋肉痛で頑張った甲斐があつたよ~」

健斗はそれを聞くと、麗奈がもつてているお弁当箱の中を見た

筋肉痛のためか、少しグシャグシャだった。多分筋肉痛で上手く段取りができなかつたんだと思う

それなのに一生懸命、おにぎりを作つて……朝早く頑張つたんだな

……

健斗はそう思いながら、ふつと笑つた

「やつと笑つた

麗奈はやつとクスッと笑つてきた

「何が」

「健斗くん、今日ずっと沈んでたんだもん。やつと笑つたなあ～つて」

健斗はそれを聞いて、また笑つた。

「余計なお世話だよ」

そつ言いながら、お弁当箱からおにぎりを取つて口にした。すいべふわふわした感触がして、本当に美味しかつた

「お前、料理上手いんだな」

健斗が感心するよつと麗奈は照れるよつと

「まあね。お母さんが早くに死んじゃつて、夕飯とか自分で作つてたから」

麗奈がそんなことを笑いながら言つてきた。健斗は、驚きを隠せず、目を丸くしてしばらく何も言えなかつた

風の吹く音が聞こえる……

「……お母さん、外国で働いてんじゃないのかよ

「やう言つたけ？」

「……亡くなつたんだ……」

健斗がそう訊くと、麗奈はゆっくりと頷いた。

「うん。私が……小学生のときにな……」

麗奈は少し寂しそうな表情を浮かべていた。健斗は何も言わず、その様子を見つめていた。

「見る？」

麗奈はそう言いながら、ポケットからピンク色の財布を取り出した。そして、そこから一枚の写真を出して、健斗に渡してきた

そこには、あの夢で見たような少女と男の人……そして、とても美しい太陽のように微笑む女性、白いワンピースに麦藁帽子を被つて写っていた

これが……麗奈のお母さん……そして、この眼鏡をかけてちょっと頑固そうな人が……お父さん……

少し覚えていたようだ、覚えていなかつた……

「私が6歳くらいのときの写真だよ」

と麗奈は微笑みながら笑った。健斗も、それにつられて笑った

「綺麗な人だな」

健斗がそう言つと、麗奈は「そう?」と聞きながら笑った

「お前にそつくりだな」

健斗の言つ通り、今の麗奈と麗奈のお母さんの面影が一致していた。太陽のような微笑む、その笑顔がそつくりだった。また身に纏う雰囲気もそつくりだった

「それって私が綺麗ってこと?」

麗奈はからかうように健斗にそつ言つてきた。

「お母さんね、身体の弱い人だったんだ」

麗奈は静かにそつ話した。健斗はその写真を見ながら麗奈の話を聞いていた

「身体は弱いけど、でも、心は強い人だった」

「……そつか」

「お父さんもそこに惚れたつて言つてたよ」

と麗奈は可笑しそうに笑つた。

「優しくて、でも時には厳しくて、子供のようで大人らしくて……血縁のお母さんだったよ」

「……うん」

「ずっとこっしょにいたかったけど、私お母さんとは一年しかいられなかつたね。もつといっしょにいたかったなあ～」

自分のお母さんと、一年……

健斗には想像できなかつた。健斗にはお母さんもお父さんもいる

あの一人がいなくなるだなんて想像できなかつた。でも麗奈はそれを今経験してゐる人間なんだつて思うと、すごく哀しい気持ちになつた

健斗は写真を麗奈に返すと、麗奈は苦笑しながら言つた

「結衣ちゃん、サッカー部の主将さんのこと好きらしいね」

ふとそう切り出してきた麗奈を見て、健斗は苦笑しながら訊いた

「早川から聞いた?」

「うん。1週間くらい前にマナと結衣ちゃんと話したときに、結衣ちゃん言つてた……黙つて『ゴメンね』」

「……そつか」

知りたくない事実だつた。噂が否定された瞬間だつたから……

ショックだった

健斗は空を見上げると、深くため息をついた。

「恋つて……上手くいかないもんだよなあ……」

健斗は苦笑しながら呟いた。

「俺、バカみたいだよな」

さりと苦笑したまま、自分に言い聞かせついた

麗奈はそんな健斗を、真剣な表情で見つめていた

「ちよつと仲良くなつて、ちよつと昼飯誘われたからつて、妙な期待しちゃつてさ。そんな上手くいくはずないつてのに、妙に浮かれてしまわ……」

健斗ははあつとため息をついた

「やつややうだよな。こんな情けないやつよりも、かっこいいサッカー部の主将に惚れるよなあ……何か、スゲー自分が情けねえよ……何にもやりたいことがなくて、ただ暇こいて生きてるだけの自分が……スゲー情けなくつて嫌になつちまつよ……」

健斗は寂し気な表情を見せると、またため息をついた

「本当に……好きだつたんだよな……」

そう駄くと、早川を好きになつたのはあの日がきっかけだった……

健斗が早川を好きになつたのはあの日がきっかけだった……

「俺さ、中2のとき……親友亡へじゅやつたんだ」

「え……？」

麗奈は少し驚くように健斗を見ていた

健斗はそんな麗奈を見て、苦笑しながら続けた

あの日の光景を思い浮かべながら、麗奈に自然と話していた

「事故でさ……俺とそいつがいつしょに帰つてたんだ……そんで俺……車道にいる子犬を見てさ、今にもトラックにひかれそうなのを見つけて、飛び出しちゃつたんだよ、俺……」

今でもはっきり覚えている。あの日の光景を……

「そしたら……そいつが……俺と子犬の代わりに……」

俺は子犬を抱きながら死を覚悟した。ここで俺の人生は終わりなんだって……

けど、そのとき……あいつが俺を押して……俺を助けて、そいつはトラックと……

『翔……翔！』

足がすくんで立てなかつた……トライクにはねられて、あいつは空中で何回転もしたら、数十メートルとばされると頭から落ちて、血だらけになつて倒れていた……

俺は震えながら、涙を流しながら、あいつの名前を叫んでいた

通りかかりの大人たちに介抱されながら、俺はそれでもあいつの名前を叫んでいた……

『翔！放せつ！放せよつ！翔！……翔～つ……』

「翔とは、小学校からの付き合いです。同じサッカーチームで同じサッカー部だつたんだ……お互いにライバル視してて、親友だと思つてた。高校に行つても、ずっと同じサッカーをしていくんだと思つてた……」

「……それが、健斗くんがサッカーを辞めた理由？」

麗奈がそう訊くと、健斗は苦笑しながらゆつくりと頷いた

「ダセーだろ？今でも、足が震えるんだよな……サッカーをすると……怖くなるんだよ」

サッカーを楽しめなくなつたから、俺はサッカーを辞めた

何より、同じ目標を持っていた大切なやつを自分のせいで失つて……俺は……バイクを捨てたんだ……サッカーを……棄てたんだ

「翔の葬式のあと、誰でもいいから……慰めてくれるのかと思つてた……けど、聞こえるのは……非難の声ばっか」

『知つてゐる? 翔くん……山中くんのせいで死んじやつたらしくよ

『ちよつとそんな言い方ないだろ?』

『でも事実そうだろ?』

「誰でもよかつたから……優しい言葉が欲しかつたんだ……誰でもよかつたから……そんなときは」

『山中くん』

ふと後ろから声がした

そこには早川が寂しそうな表情をして立つていた

また非難の言葉を言われると思つたから、無視しようと思つた

けど早川は……

『山中くんは悪くないよ』

そう言つてきた。俺が求めていた優しい言葉で……俺はその場で立ち止まってしまった

『山中くんは悪くないよ。だから……』

『つむぎさん……』

早川の言葉は嬉しかつたんだ。涙が溢れるほど……けど俺は、逆に腹立たしくなつちゃつて……

『お前に俺の気持ちが分かるかよ』

そんなこと言つて帰るつとした

けど早川は……

『それでも……山中くんは悪くないよ……』

つて、最後まで言つてくれたんだ……

早川と翔が、恋人同士だったことを知ったのは……それからすぐのことだつた……

「それから、早川が気になつたんだ……普通憎むはずのやつを、早川は悪くないつて……最後まで俺にそつ言つてくれて……普通の神経じゃ、そんなこと言えないのにな……それで俺は、早川が……スゲー好きになつた。翔の代わりに、俺が早川をちゃんと守つてあげなきやみたいなさ、勝手な使命感が出てきてさ……でもそれは結局俺のただの妄想だつたんだけどな。……カツコ悪いな……俺つてば」

健斗は苦笑しながら、麗奈を見た

麗奈は真剣な赴きで健斗を見つめていた

「何か、どうでもこい」と話しかやつたな俺……悪い……忘れてください」

健斗はそつ言つてから、つづ向いた

素直な気持ちが……今までの辛い過去が……麗奈の誘惑に誘われよう自然と出てきてしまつた

翔との過去を、麗奈に言つてしまつはなかつたのに……

早川を好きになつた理由を、麗奈に言つてしまつはなかつたのに……

想いとともに、自然と出てきてしまつた……こつまでも引きずつて……カツコ悪いなあ俺……

結局、早川との恋もこれで終わりなのか……

「まつ、でも早川に好きな人が出来て、それで幸せならそれで満足だし。俺なんて別に」

健斗が話している途中だった。ふと自分の唇に、暖かく柔らかい感触がした

ふと、見ると……田の前田を瞑つた麗奈の顔があつた……

何が起じてんのかわからなかつた……

でも、この感触は……麗奈が……

麗奈とキスをしているんだつてこに『気がついた……

麗奈はゆつくりと唇を離して、頬を赤くしながら健斗を見つめていた
健斗はあまりの突然さに、驚きを隠せないでいた……何も言えず、
目を見開いて麗奈を見つめていた……

麗奈はこいつらと笑うと静かに言つてきた

「カツ『悪くなんか……ないよ』

麗奈は穏やかな表情でそつ言ひつと、健斗に何も言わせず続けた

「カツ『悪くなんか……ないよ……』

麗奈はそう言い残すと、お弁当を持って静かに立ち上がつた

そして、健斗から離れて屋上から出ていった……

何が起じたのかわからなかつた……

ただ呆然として、前を見つめていた

麗奈が……麗奈が俺に……キスしてきた？

何で……何で急に？

訳がわからなかつた……ただ残つてゐるキスした感触が、今もはつきりと感じる……

柔らかい感触……暖かい感触……

目を瞑つていた麗奈の表情……頬を赤くして笑つた麗奈の表情……

全てを思い出しながら頭が混乱していた

「何……なんだよ……」

健斗は呆然としながらそつ呟いた

まだキスした感触が、残っていた

うわあ～……何かスゲー意外な展開になつてきました

何か、本当に自分でも予想外です

本当はこうなるはずじゃなかつたのに……

ちなみにあらすじを変えてしました

この物語、普通に思いつきで書いてるのであらすじが変更すること
があるので、あらすじチェックは数回した方がいいと思います

授業は全て終わり、健斗は帰る準備をしていた。

午後の授業や休み時間……健斗は麗奈と話すところが田中わすれることができなかつた

あのキスは何らかの間違いだと思ったかつた。けれど、あの感触は今でも感じる

あきらかに、あいつは故意にキスしてきたのだ……

麗奈も健斗と同じよつと話しかけてきたり、田舎を含むやうとはしなかつた……

一体何を考えているのか、どうにいつもりであんなことをしたのか

それが気になつたから、聞き出したかつた

けれど、あんなことをされては話しかけられなかつたのだ……

健斗が帰る準備ができたとき、不意に早川と麗奈が健斗に近づいてきた。そして麗奈が……健斗にいつもの調子で話しかけてきたのだつた

「健斗くん」

健斗は何も言わず、麗奈を見つめた

「私今日ね、テニス部見学する」とになったの。帰り結衣ちゃんと
いつしょに帰るから、健斗くん先帰つても大丈夫だよ」

すると早川がにっこりと優しい笑顔をして言つてきた

「ちやんと麗奈ちゃん送るから、安心して任せてね」

しかし健斗は一人の表情など直視しなかつた。何も言わず、鞄を持
つて立ち上がり、そのまま教室を後にした

そんな様子を見て、早川と麗奈はしばらく佇んでいた。健斗の後ろ
姿を見ながら、早川は不思議そうな表情を浮かべる

「健斗くん……どうかしたのかな

「別に何もないんじゃない?」

早川はそんなことを言つ麗奈に對して、また不思議そうな表情を浮
かべた

「麗奈ちゃん……健斗くんと何かあつたの?」

麗奈は一瞬躊躇つた

けどすぐに首を横に振る

「へ、ひひ……何もないよ。つてこつか早く部活いーーー」

麗奈がそう言ひて、早川は少し可笑しさが込み上げてきた

帰り道、健斗は自転車を漕いでいた。なるべくあの「ことは考えない」とは考えないようにしたかった

けれどやはり脳裏に浮かんでしまう、あの麗奈の顔……そして柔らかく暖かい感触……

それらを思い出すと、ふと自分に戒めを感じてしまった……

好きでもない女の子とキスをしてしまった……

それは自分で早川に対する裏切りであり、自分に対する羞恥心を感じさせた

麗奈は本当に何を考えていたんだ？。そう考えると不意にヒロの言葉を思い出した

『麗奈ちゃん……まさかお前を好きになることなんてないよな』

いや……ないだろ

そんなこと……万に一つの可能性でもないはずだ

あいつが俺のことを好きだなんて……絶対ない

じゃああいつは……別に好きでもないやつとキスをしたってことなんだからつか……

そうでなければ、あんな風に容易く話しかけてきたつするだらつか……

今日の昼休みのせいで、麗奈という人間が分かりかけていたのに……
…また分からなくなってしまった……

そして健斗は家が見えるようになると、ゆっくりと自転車を押し始めた

自転車を庭まで運び、ため息をつきながら鍵を開けて、戸を開けた

「ただいま……」

まだ誰もいないことは承知で健斗はそういうながら、ゆっくりと自分の部屋へと戻つていった

自分の部屋に入ると、健斗は鞄を放り投げてベッドに寝転んだ

……これからどうすればいいんだろうか

麗奈と何で話せばいいんだろうか

といあえず、どうしてキスをしてきたのか。その理由だけちゃんと聞いておこう

麗奈に対し嫌悪感を抱きつつも、健斗は一人でにそう決めた……

風呂から上がり、健斗はバスタオルで頭を拭きながらまた自分の部屋に戻ろうとした

さつぱりしたくて早めに風呂に入つてみたものの、結局何の解決にもならなかつた

ため息をつきながら、階段を上ろうとしたそのときだつた

突然家の戸が開く音がした。

健斗は少し驚きながら振り返ると、そこには麗奈が少し疲れたように息をはいていた

ふと健斗を見ると、ヒーリングと微笑んでいた。

「ただいま」

「…………」

健斗はやはり何も言えず、田中も口をわざと口ができなかつたけど麗奈はまつたくそんなことは気にしていないく、笑いながら言つてきた

「テニス部や～、結構楽しそうだつたよ～」

麗奈はやつと鞄を脱いで続けた

「先輩もいい人だしさ、テニスつて難しそうだなつて思つてたけど……案外やつて見ると樂しこしさ。それに」

「あ……あのや」

健斗は勇氣を出しつゝ、麗奈に聞いかげようとした

麗奈を睨み付けるように見た。麗奈は不思議やうな表情を浮かべていた

「どうしたの？」

「…………お前が、何であんなことしたの？」

健斗は低い声でやうに訊ねた

麗奈は可笑しそうに笑った

「何が？」

「とほけんなよ……何で……急にキスなんかしてきたんだよ」

胸が高鳴っていた。一体何て答えるのか、すこく気になっていた

思ったよりも落ち着いて聞けた

といつよりも、麗奈に對して苛立ちを覚えていた

まるで何もなかつたかのように話しかけてきて、笑つてくる麗奈に苛立ちを覚えていたのだ

でも麗奈の答えに對して……健斗は麗奈に對し激しい怒りを覚えることになった

「あ～……あれね。健斗くんが元気なくしてゐるから、元気つけようと思つて」

「……は？」

麗奈は可笑しそうに笑いながら続けた

「それにしてもショックだよね～……結衣ちゃん健斗くんのこと好きになるつて思つてたのにさ～？残念だつたね～。でもさ、別に結衣ちゃんが他の人好きでも健斗くんが

「

「ちよつと待てよ」

健斗は麗奈の態度に対して、ふつふつと怒りが込み上げてきた

「そんな理由でしたのかよ……」

「え？」

「そんな理由でしたのかつて聞いてんだよ……元気づけたかった？
俺が落ち込んでたから？ふざけんなよ」

健斗は次第に握った拳を強く力を入れていた。

「健斗くん……私別に……」

「人をバカにすんのもいい加減にしろよ！……」

健斗はバスタオルを投げ捨て、ついには麗奈に怒鳴りつけてしまった

感情が押さえることが出来なくって、健斗は麗奈を睨み付けた

麗奈はビクッとして、健斗を見た

怯えていた

「調子こいてんじゃねえよつ！…お前は最初っから俺をからかってるだけなんだろうが！？」

最初から思えばそうだ。初めてこの家に来たときも、自分を好きになればいいって……訳の分からないことを言いやがった

そして健斗が早川に対する気持ちに気がついたとき……あいつは励ましてきた……

それだけじゃない。今まで励ましてたり、けれどわざと胸を高鳴せたりしてくる

バカにしたりバカにしなかつたり……その繰り返し……

どう考えても、からかってるようになにしか思えなかつた

「う、違ひよつ……私はただ健斗くんが　」

「違くねえよ！お前が東京でどんだけ男を弄んできたかは知らないけど、俺は簡単にお前に弄ばれるようなやつじゃないんだよ！！」

それを聞いた麗奈は、ショックを受けたのか……目を見開いていた

……

「そんな……私そんなことしてなによ……」

「だったらキスなんかしてくんじゃねえよバカッ！お前の性格は訳分からねえんだよ」

健斗は一息ついてから冷たく言い放つた

「はつきつぱつて……迷惑なんだよお前

感情が収まつてきたが怒りは変わらなかつた。

「幻滅したわ本当に……」

麗奈は下をつついていた

「うつヒートをつついていた

健斗は何か言い返してくるかと思つたけど、何も返して来なかつた

健斗はもう相手にするのもいやになり、階段を上りうとした

「バカ……」

麗奈は顔を上げて健斗を見た

健斗も麗奈を見るために振り返った

すると……麗奈は涙を流していた。けれども強く、健斗を睨み返していた

「健斗くんのバカッ!! 健斗くんなんか、大嫌い!!」

麗奈はそう呟ぶと泣きながら、階段を一気に上つていった

ドアの勢いよく閉まる音が聞こえた

健斗はしづかく佇んでいた。麗奈の涙が、階段に溢れていた

「何であいつがキレんだよ……」

健斗はせりて憤りを感じ、壁を思いつきり蹴った

そして、不機嫌そうにバスタオルを拾つと健斗も自分の部屋へと戻つていつた

少し言い過ぎたのかもしない……

あいつの話をちゃんと聞かないで

でもこのときの健斗は怒りを麗奈にぶつけていた

だから何も考へるひとはできなかつた……

何も……何も考えられなかつた……

第4話 過去（前書き）

麗奈とのキス事件により健斗と麗奈は口もきかなければ、顔も合わさないといつ喧嘩をした

そんな健斗は、ふと翔との
「過去」を思い出す……

大雨の夜、麗奈の帰りが遅いことに健斗は徐々に不安を募らせていく

素直になれない気持ち……押さえられない気持ち……

そして……

麗奈はいつたい？

朝になつても、健斗は麗奈と口を交わさうとも顔を合わさうともしなかつた

麗奈も同じだつたのか、健斗を見ると逃げるよつに健斗から離れていつた

はつかり言つてどうでもよかつた。麗奈の性格がよく分かつたから……結局、あいつは人を弄ぶよつな性格の悪い女だつたことだ
……

健斗はベッドから起き上がると、ゆっくりと着替えた

いつもより30分早く起きていた。どうやらまだ麗奈は起きていないようだ

それでいい。麗奈とは顔を合わせたくない

健斗は音を立てないよつに階段を降りて居間に向かつた

台所には母さんが起きていてコーヒーを飲みながら朝のニュースを見ていた

健斗に気がつくと驚くかのよつに口を開けた

「早いわね～……元うかしたの?」

「こや……今日用事があるから」

健斗はやつぱりと冷蔵庫から牛乳を取り出した。

「お弁当作つてないわよ～?」

「ここよ。『ンビ』で買つかひ」

健斗はやつぱりと、居間を後にして、洗面所で歯を磨くと、また自分の部屋へと上がつた。

充電しておいたケータイを手にかけると、アドレス帳検索してヒロの名前を検索した

そしてヒロに電話をかけた。

じぱりくわんとヒロはすぐ電話に出してくれた。

「もひもお～ひ……」

明らかに今起きたばかりの声色でヒロは電話に出た

そんなヒロに健斗は可笑しが込み上げてしまつて、ふつと笑つた

「俺だけど」

「なんだよ～……麗奈ちゃんかと思つた

「んなわけねえだろ…………」

「つーか何の用?……まだ30分くらいこは寝れるんだがど…………」

ヒロは迷惑そうにドアを開けてきた

「あのやひ、今日……麗奈とこつしょに学校行つてくんない?」

「あ～?……あ!-?」

突然ヒロの声量がでかくなつた。ビリヤリ驚いていたヒロだった

「何で!-?俺が!-?お前は!-?」

「今日俺早くに学校行くから。麗奈頼むわ

「あそひ……ならいいけど!-?」

ヒロはヒトコトでも嬉しいことだつたんだと思つ

快く解してくれた

「じゃあ、8時に麗奈迎えに来とこ。じゃあな」

「ねつ」

ヒロは「機嫌をつけて電話を切つた

多分今頃、あまりの嬉しさに動搖を隠せずにいるんだろうな

健斗はケータイをポケットに入れると、鞄を持ってまた階段を降りようとした

ふと立ち止まって麗奈の部屋を見た

……健斗はすぐに前を向いて、階段を一気に降りていった

「こっそり

健斗はやつと家の戸を開けて、家を出でていった

本当は麗奈は起きていた。ベッドから起き上がり、窓から健斗の様子を覗いていた。自転車を家の壇の外まで運んでい

れつものの健斗のヒロとの会話だって少し聞こえていた……

用事なんてないくせに……

麗奈を避けているのだ。

麗奈は自転車に股がつて漕いでいく健斗を見て哀しい気持ちになつた

「……健斗くん……」

自転車を漕ぎながら、健斗は憂鬱な気分になっていた

……これからどうじよつか……

本当は用事なんて何もない。ただ麗奈と顔を合わせたくなかったから、早めに出てただけだった

特に何もすることなんてあるはずがない

こんなとき部活に入つてれば、朝練とか行つてゐるのにな……と健斗はため息をついていた。

でも例え翔のことが忘れられたとは言え、サッカー部には入れないよ
だつて……憎き相手がサッカー部の主将だろ？

氣になつてサッカーを楽しめないよな……

健斗は自転車を漕ぎながら、空を見上げていた。今日も曇りだ……
天気予報を見てなかつたけど、今日雨降らないよな

どうして最近晴れないんだろ？

翔の大好きだつた空……今でも翔は、この空のどこかで生きているん
だと思つ

だから翔……最近元気じゃないのか？

ふと翔の顔を思い浮かべていた

教室に入るとまだ誰もいない。みんな朝練などに行っているのだろうか……健斗はゆっくりと歩いて、自分の席に座った

そして、ため息をつくとそこからまた空を見上げた……

『健斗』

ふと呼び声がして、健斗は振り向いた。

中2の夏……半袖Tシャツにエナメルバッグをショット、翔は健斗を呼んだ

「何ぼーっとしてんだよ。早く部活行こいぜ!」

「分かってるよ

健斗も歩き出して、グラウンドに向かった

と思つたら、また立ち止まつてしまつた

「何だよ」

翔はちょっと苛々するように言つてきた

「…………」

校舎の隅にある草むらから鳴き声がすると思つたら、そこに鳥の雛がいた

苦しんでるのか、鳴いている

健斗は手で拾つてあげると、翔が覗いてきた。

一
・・・
鶴曲じやん

「そこに落ちてた

健斗がそういうと、一人は近くにある一本の大きな木を見上げた

「あれか

健斗が呟くように言つた、翔が健斗の手から離を取つた

と思つたら、エナメルバッグを置いてヒョイヒョイとゐるみるみるひつちに、木を上つていつた

そして翔はあつとこいつ間に頂上まで上るとなつて巣を覗いた

そこには一匹の雛がいて、翔に向かつて鳴いていた

「せり」

翔はゆつくりと雛を巣に戻すと、雛はじやれ合つよつにそして喜び合つよつに鳴いていた。

「……お、健斗……！」

突然翔がすごい大きな声で叫んできた

「ちよつと来いよ……！」

「あ～！？何で！？」

「いいから……！」

翔に言われるまま健斗もエナメルバッグを置いて木を早いペースで上つていった

そして頂上まで上ると翔は指指した。その方向を見ると……

その頂上からは、グランドを全体を見渡せながら広大な青い空が広がつていた

とつても広大な景色に、健斗は少し驚いていた

「スゲーな」

素直な気持ちを健斗は言葉にした

吹いてくる風が心地よかつた……

「……俺さ、空好きなんだよな」

「え?」

翔はそう言いながら、空を見上げて笑っていた

「何か空っぽい色んな表情があつて人間みたいで面白いよな。晴れてるときは笑つてて、曇りのときは落ち込んで、雨のときは泣いている……何か、空見てるとこいつも同じ気分になるんだよな……」

…

健斗はそんな翔の言葉を聞いて、吹き出すよつに笑った

「んなつ……何笑つてんだよつ」

翔は顔を赤らめて、怒鳴りながら言つた

「別に……お前らしいなつて思つてさ」

「何だよそれ」

俺らはそんなことを話しながら笑つていた

青い空に見守られながら……楽しくつて、笑つていたんだ

お前は覚えてるか……?

「んとき俺は笑つたけどさ……そんな風に言つお前が、スゲーかつよく見えてさ

お前といつしょに見た空が、スゲー好きになつたんだ
お前らしげ青い空が……お前の宝物だつたように、俺の宝物になつたんだ

「なあお前を……」

ある日の帰り道……翔は何を考えているのか、少し苦笑いをして言つてきた

「何だよ」

「……いや、あのを……」

健斗は不思議そうな表情を浮かべた

すると、翔は顔を赤らめながら言つてきた

「好きな人とかいるか?」

「はあつー?」

突然何を言い出すのかと思つたら……

「いねえよ。別に彼女とかいらねえし

そんなことよりもサッカーの練習をめいいつぱいして、絶対に全国大会に出場したい

女の子とイチャイチャしてる時間なんてなかつた……

翔も当然そうだと思つていた。けど翔に少し違和感を感じて、健斗は少し驚いた

「お前……」

「ん？」

「好きな人いんの？」

健斗がそう訊いたとき、翔は少し戸惑つていた。もうそれだけで充分だった

「マジかよつー?えー?誰々ー?」

「お前せつてえ誰にも言わねえか?」

「言わねえよ。つーか聞いて欲しいんだろー?」

健斗がそいつ言ひと、翔は軽く舌打ちをした

「……同じクラスの早川」

「早川?……誰だつけ」

健斗は思ひ出せりとしたが無駄だった

翔は呆れるよつこため息をついた

「お前つて、本当に女の子興味ないのね」

「つーか誰?」

「あれだよほり……テニス部の……スゲー可愛い子」

健斗はそのテニス部の女を思い浮かべた

「…………ああ…………あの子か」
確かに、テニス部にめちゃくちゃ可愛い子がいた

健斗にとつてもかなりタイプで、翔の好きになるのも分かった。でも健斗は早川のことなんてあんまり知らないし、正直興味は抱けなかつた

健斗は空を見上げながら少し考えて言つた

「ああ…………ああ確かに可愛いけどな。少なくともひの学校でねん力一かも」

「当たり前だよ」

と翔がやつて健斗は首をかしげながら苦笑して言つた

「まあ、確かにめちゃくちゃ可愛いけどな……可愛いやつに限つて裏があつそうだよな」

健斗がそういふと翔は口を尖らせながら言った

「早川はそんなやつじゃねえよ」

「やつか~? 可愛いやつは調子こいて色んな男と遊んでるかもよ~」

「お前はなんでそんなことしか言えないかな……」

翔は呆れ返っていた

まあ、確かにそういう女ばかりではないとは分かつてゐけど

「ヒロが言つてた。女は男が思つてるよりも深い生き物だつて」

「あいつだつて色んな女と付き合つてんじゃん?」

「ヒロをそんな風に言つなよ。友達だろ」

「別に悪い意味で言つたわけじゃねえよ。だつたら人の好きな人を
悪く言つなよ。それに……早川は……」

翔は少し憤りを感じながら健斗にそう言つてきた。途中言葉を詰ま
らせて、何かを考えているようだつた

健斗はそんな翔を見て可笑しそうに笑つた

「本気なんだな……」

「本気になんだな~」

翔が鼻で息を強く吐いた

健斗はそんな表情も、翔らしくって可笑しさで笑った

「つたくよ～……まあどうでもいいけど、サッカーへの熱意を忘れ
んじゃねえぞ」

と健斗はさつと翔は笑いながら「当たり前だろ」と答えた

「……山中くん？」

健斗はふと呼ばれすぐに振り返ると、やけには早川が口直口説ひしきものを持って健斗の顔を覗き込むようにして呼びかけてきた

健斗は驚いて身体をビクッとした

「あ……お、おはよー……」

前まではまだ普通に話せるよくなつたのに……また逆戻りになつてしまつたような気がした

けどそんな健斗に何の氣にもしないでにっこりと笑ってきた

「おまよー。今田早いんだね」

と言つと、鞄を自分の席に起きながらそつと走ってきた

「まあね……早川は?」

「私は今田田直だから」

と言つて口誌口誌を見せてきた。そんな表情がめちゃめちゃ可愛いと思えた

「やつか……」

健斗はやつと走つと、早川は田直口誌を机に置いた

健斗は早川を気にしつつ、チラチラ見ていた。

サッカー部の主将が好きだといつ早川……

麗奈は言つてたけど、早川はそつなんだよな……

ふと麗奈の名前と共にあのキスをした感触が思い浮かべいた

健斗はブンブンと頭を揺らした

「昨日……」

早川は自分の席に座りながら健斗にやつと笑つておいた

「昨日、麗奈ちゃんと何かあつた？」

「え？」

早川はゆつくりと笑いながらやつと健斗に言つておいた

「昨日ね、テニス部の体験で、麗奈ちゃんちょっと様子が変だつたんだよね」

「…………」

「なあ～んか、ほとんど上の空だつたんだよねえ……」

麗奈の意外な言葉に健斗は動搖を隠せなかつた

そんな健斗を見ると早川はクスッと可笑しそうに笑つておいた

「やつぱり。何かあつたんだ」

「いや……別に何もないよ」

健斗がやつと笑つて、早川また可笑しそうに笑つておいた

「麗奈ちゃんと同じ」と言つてゐるし

健斗はそれ以上何も言えなかつた……まさか早川に、麗奈とキスをしたなんて言えるはずかなかつた

「……昨日麗奈とひみつと喧嘩した……そんだけだよ

「喧嘩？」

早川は不思議そうに聞いてきた

「何か……麗奈が意味分かんねえから俺がキレて。そしたらあいつ逆ギレしてさ」

早川はまた不思議そうに表情を浮かべた

「どうこう」と

健斗はまたそれ以上何も言わなかつた

早川はそんな健斗を見て笑いながら少しため息を吐いた

「よく分からぬいけど麗奈ちゃん、本当は健斗くんと仲直りしたいと思つてるんじゃないかな？健斗くんもね？」

「……そんなことねえよ。あんなやつ

健斗はフイッと顔を剃らすと、早川はクスクスと笑つていた

「素直じゃないんだから」

早川のそんな言葉を、健斗は聞かないような振りをして顔を叛けた

……

学校で麗奈に会つても、健斗は無視していた。つーか、もつ麗奈なんてどうでもいい素振りを見せていた

麗奈も麗奈だつた

休み時間も健斗に口を聞いてこよつとはしなかつた。早川や佐藤と楽しそうに会話をしている

そんな様子を健斗は嫌そうに見ていた

ちよつとは俺を気にするような仕草を見せよう……

まったく何も気にしてないんだな……

最低なやつだ……

さらに麗奈に對して、健斗は怒りを込み上げていた

するとただつた。ヒロが健斗のところにやつってきた

「何かあつた？」

ヒロが不意にそんなことを訊いてきた。

健斗は不機嫌そうにヒロを睨み付けた

「何が……」

「こや……何かお前妙にピロピロしてなー?」

ヒロはちゅうと苦笑しながら囁いてきた。

「別にしてねえよ……楽しかったか?お前のずっと願つてた、れい……大森麗奈との結婚は」

健斗は意地悪く少し憤りを感じながらヒロに向かって話した

もつ驕れ驕れしへ前で呼ぶのもやめた

「何意地になつてんだよ?」

「何も意地になつてねえよ……」

「今朝麗奈ちゃん、スゲー元気なかつたんだけど……喧嘩したのか?」

健斗はそれを聞いて、ちょっと安心するような感じを覚えた

「別に……知らねえよ……あいつが勝手にキレただけ」

健斗は不機嫌そうに顔を剃らした。

そんな健斗を見てヒロはため息を吐いていた。

「お前なあ~」

「……元気ない振りしてただけだら~お前の前でやうごうキャラ作つてただけだよ」

健斗はそうこういひ、首をくじりとして麗奈を指した

「見ひよ。今はスゲー元気そだぜ?お前も騙されやすい男になつたな」

と言つて健斗は嘲笑するよつて笑つた

「ちよつと麗奈ちゃんに対して冷たくないか?」

「あんなやつに優しくする必要なんてあんの?」

「何があつたんだよ。ちよつと酷いぞお前……」

「何で喧嘩したかは聞かないけど……ちゃんと麗奈ちゃんの話を聞いてあげたのかよ?」

「喧嘩のとき、一方的にお前だけキレたりしなかつたか?自分の話ばかり押しつけたりしなかつたか?」

「あ?」

「喧嘩のとき、一方的にお前だけキレたりしなかつたか?自分の話ばかり押しつけたりしなかつたか?」

健斗はそれを聞いて、ちよつと自分の行動を振り返つていた

「確かに……ちよつと麗奈に言つて過ぎた感はあつた。あいつ……

そういうふうに何か言おうとしてたけど、健斗は何も聞こえませんでした……

それであいつは……

『バカ……健斗くんのバカッ……健斗くんなんか、大嫌いっ……』

健斗はそんな言葉をふと思いついたが、すぐに首を横に振った

「別に何でもないよ。特にそんなことなんてさ」

「本当か?」

「お前は大森麗奈の肩でも持つてれば? けどそのうち分かるよ。あいつが最悪な女だってこと」

「おー、そこまで言つてないだろ?」

「別に大したことと言つてねえし」

「…………お前ちよつと意地張りすぎだよ」

「だから…………意地なんか張つてねえよつ……」

健斗はだんだん苛々てしまい、机から立ち上るとそのまま口に怒鳴りつけた

ヒロは少ししごりくつして健斗を見ていた

ヒロだけじゃなかった。クラス中のみんなが、健斗を見ていた……

早川や佐藤も田を見開いていた

突然大声で怒鳴って、驚いているようだ。

麗奈も健斗を見ていた……しばらく田が合つた

健斗は軽く舌打ちすると麗奈から田を剃らし、静まり返つたこの教室から出ていった……

健斗が去つたあと、みんな驚きを隠せずヒロの元に集まつたり、話をした

健斗の不機嫌さは一日中直りはしなかった

ヒロに話しかけられても無視をした

麗奈と顔を合わそうとか話そうとかしたりしない

早川ともいっしょに弁当は食べず、健斗は一人屋上へ行き、みんなを避けた

健斗は屋上で空を眺めていた

やはり……久しぶりの一人ぼっちはいいものだつた。最近は麗奈に付きまとわれて、一人になる時間は少なかつた

常に誰かといっしょにいるといつ生活を送っていた……

だからたまにはこうこう一人も気持ちいいものだつた

誰にも邪魔されずに一人の時間をゆつたりと過ごすのが大好きだった

けどなんだか……この胸に感じる違和感は……妙に切ないような気がしてきた

健斗は戸惑いながらも屋上のドアを見た

いつもいつもの中にいつにか……本当にいつの間にか麗奈はここにいる

いついつもの中にいつにかついてきて、色々な話をしていた

あいつがこの町に来て……もう一ヶ月近く経つ。

最初はあいつ……俺が面倒臭くって授業をサボって寝てたら、いつの間にかいつしょに寝ていた。びっくりして、いきなり可笑しそうに笑い始めた

訳が分からなかつた

そしたらあいつ……こんな俺を野良猫みたいで羨ましいって

そして自分はただの飼い猫だつて……

訳が分からなかつたけど……

そして次はまたいつの間にか付きまとわれていて、ここにあいつの母さんの話をしてきた。

そして早川がサッカー部主将のことが好きだつて聞いて……落ち込んでた俺にキスしてきた

第一あいつがわざわざキスなんかしなければ、こんな面倒臭いことにはならなかつたのに……

健斗は深くため息をつきながら、何かをふと待っていた

麗奈…… 今日は来ないんだな……

そんなことを思つて、はつとした

何を考えてるんだよ俺は…… 今あいつと喧嘩中だろ？

健斗はまたため息をつくりと控を眺めた

あいつが本当に訳が分からない

あいつて、本当は何を考えてるんだろうな？

色々な麗奈がいて、どれが本当の麗奈かわからなかつた

何を考えているのか、麗奈は何を考えているんだろう

ふと口の言葉を思つ出した。そりや、少し言こと過ぎたかもしだい…… あいつ何か言おひとしてたけど…… ちやんと聞いてやねー」とができなかつた……

ただ感情的になりすぎて…… 麗奈を怒鳴りつけてしまつた……

健斗は深くため息をついた

だんだん、麗奈と仲直りをしたいといつ気持ちが湧いてきてしまつ

てこねとこいつことを、知りたくなかった

健斗は田を睨り、田ヤモヤを睨むため睨りついた……

そして放課後になると、健斗はすぐへ帰る準備をした

これからバイトだ……

憂鬱なのは、麗奈をどうするかだった

健斗はチラリと麗奈を見ると麗奈は相変わらず早川と佐藤といつしよに楽しそうに会話をしていた

元気がない様子なんてまったく見られない

やつぱし向も思ひてないんじやん

それが健斗を少し苛立せた

するとじだつた

「山中へ」

ふと早川と佐藤が健斗に近づいてきた。麗奈は遠くから健斗を見て
いる

「な、何？」

健斗が少し戸惑つように訊くと、早川がこうして微笑みながら言
つてきた

「今日ね、私とマナ部活ないから、麗奈ちゃんといっしょに町に遊
びに行こうと思つんだけど……いいかな？」

健斗はチラリと麗奈を見た。3秒聞くといつが合いつと、健斗は田を
剃らしてしまった

「うふ。ああ、いいよ。俺も今日バイトだし……」

「わうなんだ。じゃあ帰り私が責任持つて送るから」

「ああ。サンキューな。麗奈よろしく……じゃあ、じゃあな一人と
も」

健斗はいそいそと鞄を持って、教室を出ていった。早川様々だった。
気まずい雰囲気で帰るのを避けることが出来た

健斗は軽くガツツポーズをすると、昇降口まで向かった

麗奈はすっとそんな健斗の様子を見ていただけだった

本当はすぐに仲直りしたかった……けど健斗が自分を避けていることは分かっている

だから素直になれずにいた……

そんな気持ちに健斗は気づいているのか、わざと無視しているのか、それとも気づいていないのか……

麗奈には分からぬ……

「山中くん……やっぱり様子が変だつたね……」

とマナが不思議そうに麗奈に向ってきました

麗奈は微笑みながらゆっくりと頷いた

「変な人だよね つてこいつが早くいこー」

「あ……ちよっと待つて。私口説先生に出していくから

と、結衣が口直口説を持ってそいつに向ってきた。すると、マナは少し怪しげな目をして言った

「そんなこと言つて……彼氏に会つてくるんじゃないの？」

マナがそう言つと、結衣は顔を赤くして必死になつて答えた

「ち、違つよ。まだ松本さんとはまだそういう関係じゃないし！」

「え～？ 付き合つてないの～？」

「…… そのうち頑張るもんつ！.. 変な噂とか立てないでね」

結衣は心うめきつゝと、たつたと恥ずかしそうに教室を出ていった

麗奈はちよつと嬉しいような、でもちよつと悔しい気持ちを感じていた

嬉しいっていっては、まだ結衣がサッカー部の主将さんとは付き合つてないという事実、健斗くんにもまだチャンスはあるってことだ

で……多分悔しいっていっては……

「……今日麗奈ちゃん、月中になると話してないね?」

「え？」

マナが突然そんなことを言つてきて、麗奈は一瞬戸惑つた

「そんなことないよ。今日朝とか話したし」

「え？ 麗奈ちゃん今朝はあの女好きときたんでしょ？」

ギクリ……多分女好きってヒロくんのことだ。

「うへんつと……まあちゃんと今日も話したし。ちゅうと健斗くん最近落ち込んでるだけだからさ」

「そっかあ……でも今日はびっくりしたよね？あの山中くんがだよ？あの山中くんが、今日真中に怒鳴ったんだから。本当にびっくりしたし」

「う……ん」

麗奈は苦笑した

多分、自分のことで話してたんだと思つ

だから複雑な気持ちだつた……

やつぱりまだ怒つてるんだ……

「私山中くんつてもつと温厚な人だと思つてた～」

「うん……こや、健斗くん、しょっちゅう怒鳴つたりしてるよ」

と麗奈がちゅうと苦笑しそうにうつ語った

「私がちゅうと好きなことするともうで鬼みたいに怒るからねあの
人」

「え～？想像できないなあ」

「健斗くん猫だから、普段は猫被つてるわけ」

麗奈がそんなこと言つた、マナは声を上げて笑つた

「猫みたいって……確かに山中くんは猫っぽいよね」

「マナはさう言いながら笑つていた

麗奈も猫になつた健斗を思い浮かべていた

今日健斗くんは、バイトかあ……

早く仲直りしたいと思つ

それは、麗奈の気持ちだった

健斗はちょっと憂鬱な気分のまま、バイト先であるRyuに向かつていた

最近何かと面白くない……いや、今まで面白くはなかつたけど……何だか胸に大きな穴が空いたような気分だった

間接的とは言え、早川にフランクたようなもんだからなあ……しかもヒロの話によると早川は付き合つてゐるらしい……

あのときは麗奈のことで氣を取られてたけど、やつぱりかなつショックだった

失恋つてこんなに儚いものなんだな……

ヒロが失恋したとき、かなりし�ょげてたけど……やつと氣持ちが分かるような気がする

こんな気分のせいか、今朝もそつたたけど……頭の中には翔との思い出が蘇る

何で今更……つて感じだ

自分でもよく分からぬ……

神乃崎商店街に入ると今日も賑やかだった

健斗は変わらないこの風景で気分を変えようとしていた

本当にいつ来ても、みんな元気そうだなあ……

Ryuに着くと、健斗は自転車を止めてゆっくりと店の中へ入つて
いった

「いらっしゃ……おう健斗か」

「こんなにちわっす

店長が微笑みながら健斗に言つてきた。健斗は挨拶をするとため息
をつきながら、鞄を机に置いた

今日は客が一人もいない……

「学校どうだった」

「……いつも以上につまらなかつたです」

「いつも以上?」

店長は不思議そうな顔をした。健斗はちょっと苦笑すると、深くため息をついた

そんな健斗を見た店長は息を吐きながら、紅茶をついでくれた

「ま、飲みなさい」

「あ……どうも」

健斗はカウンター席に座り、店長オリジナルブレンドの紅茶を頂いた
バイトなのにも関わらず、気前よく紅茶を出してくれる店長の優しさには、本当にこつも感謝していた

「学校で何かあったか？」

まるで父親のように語りかけてくる。健斗は一応頷いた

「まあ……半分は……学校でちょっと……」

「半分は？」

健斗は少し戸惑っていた。この心のモヤモヤは多分……失恋したからだと思つ

それは自分の中で一番の渦みだった

けど、麗奈のことも何故か気になつていた

ヒロの言つとおり、麗奈の話をろくに聞かず、感情的になりすぎたことに対する、一種の罪悪感らしきものを覚えてたからだ

確かにあんな軽い気持ちで麗奈は自分に対してキスをしてきたという事実に対しては、怒りを感じている

けど何故だか、やっぱし仲直りしたいところ気持ちが徐々に湧いてくるといつのもまた事実

素直になれば、果たしてどうちが本当の気持ちなのか

自分でよく分からぬ……失恋による悲しみ、安心感……麗奈による怒り、罪悪感……これらが自分の中で周り回っている

そういう複雑な心境なのだ

「……少し休んでいいぞ？ 今客来てないし。学校でちょっと疲れてるだろ？」

「え、いや……これ飲んだらすぐ手伝いますよ」

「いいや。嫌なことあつたら、紅茶を飲んで心を静かにして」「……そして嫌なことを振り返って、忘れるとい」

店長は静かにそう言つて、カウンターからいなくなり店の奥へと入つていった

一人になつた健斗は店長の優しさに感謝しながら、ぼーっとしていた

少し目を瞑り……心を落ち着かせようとした……

翔が早川のことを好きだと聞いてから……翔はよく早川といった同じ委員会だからかもしれないけれど、それでもよくいっしょにいた。

放課後……翔はちょくちょく部活に来なくなつた

理由は……委員会の係りの仕事を終わらせないといけないから……けど、健斗は部活が終わつたあと教室を覗いてみると……早川と楽しそうに会話している翔がいた

翔はサッカーを捨て、早川を選んだんだと……自分の中でそう解釈した

それは翔に対して怒りを感じ、そして……

悔しかつた

健斗は翔といつる時間はなくなつてしまつたかのように、翔と話すことが少なくなつてしまつた

「……翔は……サッカー辞めんのかな」

「何で」

昼飯を食いながら、ヒロにそう話した

「いつもはここに翔がいたんだけど……あいつと顔を合わせたくない
つて、教室抜け出して中庭で食べていた

ヒロは翔が変わったことに気がついていたので、けど返はして
なかつた

「最近あいつ……早川結衣とべつたりだから……サッカー部にもい
ないし……」

「委員会の……んぐつ、仕事だろ？ 仕方ねえよ」

と弁当のおかずを飲み込みながら、ヒロはそう言った

「仕事が終わればまた部活に来るつて。サッカー大好き少年のあい
つが辞めるわけねえだろ」

「……どうかな」

健斗はそんなこと思えなかつた……委員会の仕事が終わつたとして
も……永遠に翔はサッカーをしないような気がしてならなかつた

「お前が思つてるほど、翔は変わってないよ。つーかお前だつて女
の子と関わり持てば？」

「嫌だ。俺はサッカーで忙しいんだよ……女なんかとイチャイチャ
する暇ねえもん」

「か～つ……硬派なやつ」

ヒロは若干呆れていた。健斗は顔を叛けた

「まあ、好きな女の子には男は夢中になるもんだよ。お前だつて好きな人出来たら、そつと夢中になるんじゃね？」

「サッカーより夢中になるもんなんてねえよ」

「つたく……お前と翔はいつもサッカーだな」

「翔はチゲーよ。翔はサッカーより女だ」

「あつそうですか」

そんなつまらない日々が続いた

相変わらず翔はちょくちょく来ない……いつも活気溢れていたように見えたサッカー部は健斗だけには、ただの球遊びにしか見えなかつた

翔といつも、二人組を組んで基礎練をやる

けど今は翔じやなく、後輩が相手……

翔のDFは最強だった……

でもゲームで健斗と張り合えるやつはいなかつた……

本気で自分もサッカーを辞めようかと思つた

翔のいないサッカーがこんなにもつまらないとは思つてなかつた

そんなある日のことだつた

休み時間、移動教室のことだつた

健斗は教室を出て廊下を歩いていた

すると前から早川が女の子たちと歩いてくるのが見えて、健斗はなるべく早川を見ないように歩いた

が、しかしだつた。早川は健斗を見ると微笑みながら突然話しかけてきた

「山中くん」

健斗は立ち止まると早川を見た

早川は友達を先に教室に戻らせていた

「何」

健斗は低い声で、早川にそう言つた

すると早川は笑いながら言つた

「「これ、図書室に忘れてたよ。はー」

と言つて渡してきたのは、国語のノートだった

健斗はそれを受け取るとやうくつと頷いた

「……サンキュー」

「「ひへん。山中くんのノート、綺麗だね~ちょっと見ひやつた」

その綺麗とは字が綺麗つうことなのだろうか……。一つ一か人のノート
勝手に見るなよな

「山中くんつて、クールだから字も綺麗そうだしね」

「人の性格と字つて関係すんのかよ」

健斗がやうやく言つと町川はちよつと考へていた

「どう……かな?あまり関係はしなそつかな」

と早川がクスクス笑つてゐるが健斗はため息をついた

「ねえ、山中くんつてさ……翔くんと仲良いよね?」

早川の突然の問いかけに健斗は少し不機嫌になつた

「だつたら?」

早川は少し恥ずかしそうにして、顔を赤らめていた。そんな仕草も

可愛いく見えたけど、不機嫌だったから何も思わなかつた

「翔くんって、サッカー部ではどんな人なのかな？」

「は？」

訳の分からぬ質問に健斗は声を上げた

「ほら、翔くんって普段はすげく優しいんだ……すげくすげく……でも翔くん、サッカーやつてどんなん感じのかなって……ちよつと思つただけ。『ゴメンね、気にしないで』

と早川はゆつくりと微笑んできた

健斗はそんな早川を見て、口を合わすことを止めた

早川の言つ通り、翔は普段は温厚で優しいし、強い人間だ。けどサッカーのときはさらに強くてかつこいい……そんな雰囲気を漂わせる

「知らねえ。別にあいつと仲良いわけじゃないし……それにあいつサッカー部辞めんだから知つても仕方ないんじやない」

健斗がそう言つと、早川は少し驚いていた

「翔くんサッカー部辞めるのー? どうして?」

「……翔に聞けば。俺トイレ行くから」

健斗はやつ言ひつい、早川を通り過ぎてゆくつと歩っていた

振り返ると早川は去っていく健斗を見つめていた

健斗はそれを見ると顔を叛けて、それ以上何もしなかった……

今日はバイトを遅くまでやつた。そのあと密は入ってきて、現在7時半だ。

健斗がオーダーを取つたアイスコーヒーとサンドイッチをセツトを運んだときだつた

「おひ健斗。今日はずいぶん働いてくれたな。もう上がりてもいいぞ」

「やつすか？じゃあ、お先に」

と言つて、健斗はお盆をカウンターに戻し、店の奥へと歩いていった
Ryuは8時には閉店するから……だからやつ大丈夫なのだ

健斗は店長に挨拶をすると、店から出ていった

それについても、店長特性オリジナルブレンドの紅茶は本当に美味しい……嫌なことなんて忘れそうになる。

店から出ると少し冷たい風を感じた。健斗は自転車に乗り、ゆっくりと商店街を抜けようとした

と、するとどうだった

「おひ、健斗くん」

いつものハ丘屋のねばねが健斗に話しかけてきた。ビーチや砂の
ハ丘屋ももう閉めるようだつた

健斗は車を止めてお辞儀をした

「えー、

「今日もバイト、偉いわね~」

「いや……あ

「おひ、今日は麗奈ちゃんいないのな」

「あ……いや、あいつは今日友達と遊んでるから

健斗がやつ言つて、おばさんは残念そうになつた

「あひあひ……やうだ、ちよつと待つてね」

おばさんがあいつはと、店の奥へと入つてこつた

数分が経つと、おばさんは戻つてきた。手に何かを持つて……

「」の前麗奈ちゃんがね、お使いを頼まれてくれたのよ。おはね
礼だつて渡しておこしてくれるかしら

と語つておぼれんは健斗に、かの有名なヒロミタジゅうを渡して
あた。

八田屋のおばちゃんのお手伝いを……こつしたのがすこじく疑問だった

「本當に麗奈ひやんはこ子ね……よろしく歸つておいてね」

「あ……はい。あつがとうござります」

健斗はお礼を言つてヒロミタジゅうを鞄の中に入れて、商店街を
抜けといった

麗奈のやつ……結構この商店街にも慣れてきてるようだ

まあ、初田にいきなり騒ぎを起したから……みんなに知れていんだ
ひとつ

今頃麗奈は……家かな

健斗はそんなことを考えながら商店街を抜けようとしていた

がするどだった

いつの間にか外は雨が降つていた。商店街の中は屋根があるから、
雨には気が付かなかつた

健斗はそんな雨を見ながら深くため息をついた

そつこえぱさつも雨雲が広がつてたつけ?

雨が降り出しそうなのは分かってたけど……本当に降っちゃうなん
てな

「傘持つてもいいね～♪」

健斗は憂鬱そうに語り、また雨を見た

まあ、まだ雨は弱いし……急いで帰れば大丈夫か

そう思い、健斗は自転車を急いで漕いで雨の中家に帰つていった

びしょびしょになりながら、家についた

自転車を庭に置き、走りながら家の戸を開けた

「ただいま」

すねと母さんが居間から出てきて、健斗に駆け寄ってきた

「お帰り～……つてあんたびしょびしょじやない」

「雨が降つてた」

「んなもん知つてるわよ。バカね、電話してくれればよかつたの
に」

それもそつだと健斗は額きながら、鞄を玄関に置いた

母さんは風呂場からバスタオルを持ってきて健斗に渡してきた

「頭拭いて、早くお風呂に入っちゃいなさい」

「ほーい」

「返事は、はい!!」

「はーはー」

「はー、はー回ーー」

「はーー」

健斗は玄関で身体や頭を拭いた。まったく……別に返事なんてどう
こう言われるような歳じゃねえのに……

そんな風にブツクサ呟いていた

「ねえそれよりあんた、麗奈ちゃんは?」

母さんがそう聞いてきて、健斗は手を止めた

「帰つてきしないの？」

「まだよ～。あたしあんたとこっしょにこらのかと思つてたし……」

健斗はそれを聞いて、深くため息をついた。

「あいつ、畠川と佐藤と遊びに行つて……もつあべ帰つてくさじやない？」

健斗がそんなことを聞くと、ゆれさせ心配がついた

「やうかしら～……」れから瘤も強くなつてくし……

「あいつも子供じゃないんだから大丈夫だよ」

健斗はやうつ面つて、髪を拭きながら風呂場に向かつた

風呂から上がり、タオルを肩にかけ、健斗は自分の部屋で窓を開けて涼んでいた

六月に入つたから……だんだん蒸し暑くなつてくる。そろそろ扇風機を出すことになるだろつ

これから夏かあ……

わざわざ天気予報で見ると日本はもう梅雨に入るらしい

麗奈がこの家にせつてきり、もう1ヶ月弱が経つ。早いもんだと思う……

いつの間にか時は流れしていく……本当に自分が気付かないつむに激流のように流れしていくのだ

丽奈は母さんの言つ通り、さつきより強くなつていた

麗奈はまだ帰つてきてないらしい。一体何をしているのだろうか……まだどこかで遊んでいるのか……

健斗は暗闇で見えない道を見ながら、少しづつ不安を感じていた

麗奈に自分で言つた言葉を思い出していた

この雨だから、多分川は増水してると想つ

そしてこの暗い道……足でも滑らせて川に落ちてたら？

いや、まさか……だつて早川と佐藤もいっしょなんだ。そんなことが起こるわけがない

と健斗は一人でに安心感を持たし、静かに目を瞑つた

こつして聞いてると……雨の音しか聞こえない……

そうこえは……あの田もりんな感じの雨だつたけ……

雨が強く降る夏の日……こんな雨では部活も中止。グランドを荒らしてはいけないから、らしく

納得の出来る理由だけど、サッカーはやりたかった

けど最近サッカーがつまらないせいが、部活が休みで嬉しかったのはこの日が初めてだつたのかもしれない

健斗は傘を指しながら、帰路を歩いていた

相変わらず隣にいるのがやつがいない

また早川と何かしているのだろうか……

健斗はなるべくそんなことを考えないように早く帰ろと思つた
が……あるとだつた……

「健斗……」

突然後ろから肩を叩かれ懐かしい声に健斗は即座に振り返つた
するとそこには健斗と同じように傘を指しながら笑つている翔がいた

それを見て急に安心感が湧いてきて、涙が出そうになつた。けど力
ツ「悪いのは嫌だから、健斗は頑張つて無視をした

「んあれ？無視……か」

健斗は何も言わず、ただただ、車道の横を歩いていた

翔は苦笑しながら健斗の後を追いかけた

「やつと委員会の仕事が終わつたよ～？明日からは部活にちゃんと
出られるぜ～」

「あつや」

健斗が冷たく返事すると翔は口を尖らせた。

「なんだよ~、怒つてんの?」

「いつも早川とイチャイチャしてたんだり? よかつたな彼女出来て
る……」

「まだそんな関係じゃねえって」

そんな風に弁明する翔の言葉なんて健斗は無視をした

そんな健斗を見て翔は深くため息をついた

「お前が、早川に変なこと言ひなよ」

「何を?」

翔が健斗を見ながら呆れるよつて言つた

「俺がサッカー部やめるつていいつ話。早川にかなり訊かれたぞ」

「事実なんじやねえの」

「やめねえよ。やめるわけねえだら」

それを聞いて、健斗は本当はすぐ安心していた。翔はサッカーを
辞めない……まだいっしょにサッカーをやつていけるんだ

だから本当はすぐ嬉しかつた

「俺とお前はずっとサッカーをやつてく。そう約束したべ?」

「…………」

健斗は素直に頷けなかつた。

そう、素直になれなかつたんだ

「信じられないかよ…………」

「ん?」

健斗は足を止めた。翔も同時に足を止める

健斗は翔にだんだん怒りが込み上げてきた

素直になれずに、苛々が募つてきた

「どうせお前なんか、サッカーより女なんだろ!ー? 一生早川ヒイチ
ヤイチヤしてろよ!ー!ー!」

「え…………」

「お前なんかもう友達でもなんでもねえよ!ー!ー!俺に話しかけんな
つ!ー!ー!」

たわいのない喧嘩のつもりだった

こんなこといつていつかは仲直り出来るはずだつた

だつていつもこんな感じに喧嘩をしてきたから……だから……

感情的になつてゐた俺は……俺は……

健斗に怒鳴られた翔は真剣な表情になつて健斗を見つめていた
知らぬ間に健斗の足元には涙が浮かんでいたのを、翔は見つめていたのだ

健斗は翔の胸を押すと、さつさと翔を置いて歩いていった

あいつを見返してやる……あいつが足元に及ばないくらい上手くなつてやる……

悔しさか感じていなかつた健斗はふと足を止めた

これが運命のときだつた

前を見ると、一匹の子犬が何かを口に加えて車道を見渡していた

多分、パンだと思つ……どこからか盗んだんだ

もしかして……渡ろうとしてんのかな?

けどちゃんと横断歩道を使わないと渡れないはずだ。だつて……この車道は交通量が多いから……

すると子犬は、普通に走つて渡り始めた

犬だし……大丈夫かな……

とちょっと安心していたその瞬間だった
なんと犬がもうすぐ渡り切れるところで、口にくわえていたパンを
落としてしまったのだった

しかもそのパンを拾おうとしているのだが、上手く、くわえられな
いのか……ジタバタしていた

健斗の直感的に……危険だと思っていた

犬の目の前からは、トラックが……

犬は逃げようとしなかった

健斗は……いつの間にか鞄も傘も捨てて、走っていた

犬を助けなきゃ という思いだけが、頭に巡っていた

足が早い健斗は犬の元に行くのにそう時間はかからなかつた……

そうかからなかつたのだ……しかし、犬を抱き抱えたそのときには、
トラックが目の前まで来ていた

逃げられない……でも動かなきゃ……！

けどどうして？

足が動かない……頭が真っ白になつていいく

酷いクラッシュ音が鳴り響く……怖くて、怖くて足がすくんでるんだ

怖い……

怖い……

死ぬ……

けどまだ死にたくない……

周りがゆっくりに見えた

トラックも自分に近づいてくるのがゆっくりと見えた

それと同時に、真っ白だった頭のなかに走馬灯が走った

悟った……自分はここで死ぬと

人間の直感だ

健斗はぐつと目を瞑り、犬を抱き締めた

恐怖で何も考えられない……

自分は死ぬんだ……

それだけが分かった

ふと、強い力が加わって自分は横に押された。健斗はゆっくりと押された方向を向く……

そこには、必死な顔をした……びしょびしょな髪……歯を食いしばつて健斗を右手で強く押して……

翔がいた

この表情が……翔を……翔を見る最後の翔だった……

それからは覚えてない

最後に覚えてるのは鼓膜が破れそうになる程の大きなブレーーキ音……そしてまるで高層ビルが爆発するような音……それだけだった……

目を開くと、激しい痛みが右手を襲った。自分の右手を見てみると、手首から先が変な方向に曲がっていた。かなり赤く腫れていた……

身体も激痛を走って、あちこちすりむいていた。やがて脳を突き抜く……氣を失いそうになりながらも、周りを見渡した

健斗の傍には、前の部分が凄い形になつて停車したトラック……人がたくさんいた……

そして健斗の数十メートル先に倒れてる少年がいた

血だらけになつて倒れている、少年が……

健斗は顔を苦しみながら上げた

貫く痛みに耐えながら、健斗は叫ぶように言つた

「…………しょ…………う…………」

声がしゃがれていた……けど倒れている翔に健斗は声を上げた

「しょ…………う…………」

けれど聞こえてないのか翔は動きもしなかつた……

健斗は涙を溢れだしてきて、息を荒くしながら翔を見た

はあ……

はあ
……

はあ
……

健斗の身体に激痛の他に暖かい感触を感じた

周りにいた大人が健斗を介抱しているのだった

健斗は一気にパニック状態になった

出ない声を必死になつて上げた

「翔……翔！？」

健斗が暴れるのを、大人たちは必死に止める

他の大人も翔の元に駆け寄つていた……

健斗の身体は震えていた

大人たちを振りほどいて、今すぐに翔の元に行こうとした

「翔つ！！放せつ！！放せよつ！！翔つ！！……

けどだんだん翔は離れていく

本当に……今度は本当に手が届かない場所に……いなくなってしまう

身体中に悪寒が走った……

「……翔……つ……！」

……

第4話 過去 P・7 (前書き)

健です!!

ユニークアクセス数が10000人を越えました

本当にありがとうございます!!

毎日300人以上がこの小説を読んでくださっています

これからも応援よろしくお願いします

また評価感想等もよろしく

健斗は部屋を出て、一階へと降りていった

早く晩御飯が食べたい……腹ペコだ。居間に入ると母さんがお膳を出して座りながらため息をついていた

健斗はその様子を見て、少し困ったような表情を浮かべた

「麗奈……まだ帰つてねえの？」

母さんは時計を見ながら、ゆっくりと頷いた

「遅いわよね……大丈夫かしら」

健斗も座りながら少し不安になつっていた

「電話は？」

「繋がらない……」

「……あいつ……傘持つててないんだよな……」

健斗が訊くと、母さんは静かに首を横に振つた

健斗の不安は徐々に肥大した。母さんも黙り込み、居間は静かだった

時計の針の音だけが聞こえる

健斗は時計を見た

もうすぐ8時半を回る……

辺りはもうすっかり暗くなつていて、灯りなしではまともに歩けない
また雨が強くなつていて、さっきもせきはまく川が増水している
雷も凄いし……もし……

走つて帰つたとして、途中で足を滑らせて川に落ちてたひ……

健斗はだんだんと不安が押さえられなくなってきた

健斗は立ち上がり、母さんを見た

「母さん、俺麗奈探してくるよ

健斗がやつと、母さんは驚くよくな表情を浮かべた

健斗は軽く頭くじきして、顔から汗がこぼれた

玄関に置いてある傘を持って、健斗は靴を履き始める

「いのちの半分……」

そんな健斗を慌てて追いかける母さんは、玄関で立ち止まると叫び始めた

「大丈夫なの？」

「うん……すぐ戻つてくる。あ、懐中電灯ある？」

母さんは叫び声と、母さんはまた居間へと歩いていった。しばらくすると母さんは懐中電灯を持って戻つてきた

「すぐ帰つてくれるのよ」

「分かつてるよ」

健斗はそのまま戻り、戸を開けて走つていった。

外は本当にすいごん雨だった。さつきの弱い雨とは比ではないから不安はさらに募つていぐ。雷を怖がつてどこかで立ち止まつたり……または川に落ちて流されてたら……

いたことがあった

だから不安はさらに募つていぐ。雷を怖がつてどこかで立ち止まつたり……または川に落ちて流されてたら……

麗奈に対する蟻りなんて忘れていた

健斗は学校へ行く道を走つていぐ。本当に真っ暗で何も見えないここにもちゃんと電灯をつけるべきだと想ひ。けどなにものは仕方がない

懐中電灯をつけて先の方を照らしてみるが、結局は何も見えない

辺りを照らしてみる。三の方、草むらへん……慎重に照らして、麗奈を探してみる

出来ればこなすこと願つて……

「麗奈……麗奈……」

もしかしたら、草むらに滑つてじつとしてるんじゃないかな?

色々なパターンを考えながら声に出して呼んでみる

けど、返事は返つてへんことなかつた

健斗はため息をつくと、電話を取り出し麗奈に電話をかけてみた

「…………ダメか…………」

やはり電話が繋がらない……

それがさう不安を募らせた

「麗奈……麗奈……」

声に出して呼んでみるも、やつぱり返つてしまつない

とつあえず、先の方までどんどん進んでこく

この強い雨では、傘を差していても雨がかかつてしまいびしょびしょ濡れてしまった

それでも健斗は麗奈を探し続けた

麗奈への怒りは忘れていた……どうしてだらつか……

あんなにもあいつが嫌いだつたのに。

こんなに心配してしまひ血分が不思議だつた

あいつの、笑つてゐる顔を思い出す。あいつの寂しそうな顔を思い出す。あいつの怒つてゐる顔を思い出す

これはまるで、あの田と回り合ひだつた

翔が死んだあの田……走馬灯のよつて蘇つてくる麗奈との記憶

それが健斗にものすゞい不安を抱えていた

れつかまでの心配が、不安で押し潰されそうなほど苦しかった

麗奈の顔が見たかった……

別に麗奈が好きだからとか、そんなんじゃない。

ただ、麗奈がいなくなるところを考へたくなかつただけだつた。

焦りからか、だんだん小走りになり健斗は息を切らしていた

服やズボンは濡れてしまっている。しかしまつたく構うことはない。

不安と戦いながら、麗奈を探していた

「くそっ……麗奈……麗奈……いるなら返事しろよ、バカッ……」

すると、田の前から誰かが走ってくるのが見えた

制服を着た女の子……？

それを見た瞬間、頭に浮かんだのが麗奈だった

「麗奈っ！？」

安心感と共に、その人の元に駆け寄る

が、それは麗奈じゃなかった……健斗を通り過ぎて暗闇の中を走つていった

健斗はその女の子を呆然として見て、しばらくの間佇んでいた

それから30分くらいが経過しただらうか

麗奈は見つからなかつた……まだどこかで遊んでるのか……

そつ思ひたかつた

氣を落としながら、家へと帰つていぐ。服はすでにびしょびしょだ。
帰つたらまた風呂に入らないといけない

健斗は深くため息をついた

家が見えてくるとまた立ち止まって、辺りを見渡してみると

けどいなのは分かつてゐるのだ

健斗はゆっくりと家へと帰つていった

「ただいま……」

小さな声で戸を開けた。

傘と懐中電灯を置いて、びしょびしょになつた靴を脱いだとした、
そのときだつた

ふと前を見ると、風呂上がりしき類をあかく染めて、一シヤツと
長ズボン姿の麗奈がいた

田を丸くして驚くつて健斗を見ていた

健斗はしづらしく何も言えなかつた……とこつより、あまりの安心感にしづらく意識が飛んでいたからである

「……健斗くん……」

久しづりに聞いた麗奈の声だった。麗奈は苦笑しながら小さく言った

「『メン』……心配させちゃつて……」

「……はあ……」

健斗は深くため息をつきながら、その場で座り込んでしまつた

目の前に麗奈がいるといつ事実に、嬉しさ半分に自分が情けなく感じたからであつた

「……大丈夫？ びしょびしょだよ……」

健斗を気遣うように、持つていたバスタオルで健斗の身体を包ませる

健斗はそれを受け取ると何も言わず、靴を脱いで、身体を拭きながら一階へと上がつていった

安心しそつて、何も言えない……

自分が情けなくつて何も言えない

健斗は深くため息をつくと着替えを持って、風呂場へと向かつた

そのあと、母さんから聞いた話に寄ると……

早川や佐藤とフアミレスで、飯を食べていたら、つっこみ話が弾んでしまい、7時半になってしまったところ

帰る途中に雨が降り出しじゃんけん宿りしたが、まったく止む気配がなく……仕方がないので、走って帰つていったところ

家に帰る前に、早川がタオルと傘を貸してくれてそれで遅くなつたつて。

健斗が出ていったあと少し経つと、麗奈は帰つてきたらしい

結局自分は無駄足で、こんなびしょびしょになつて帰つてきたのだ

……

あんなに麗奈のことを心配していた自分が恥ずかしく感じた

麗奈らしさと言えば麗奈らしいが、まったく……心配をせんなよつて感じだ

健斗は眠くなつて、ベッドに寝転んでいた

でもよかつた……麗奈が無事で本当に安心した。

安心感からか、疲れがどつと来て眠くなってしまったのだ

健斗はゆっくりと田を瞑つた

じつして田を瞑つていると、何だか癒される。

そして、思に出される……最後のシーン……

健斗は病院に運ばれ、右手と擦り傷の処置を施され、集中治療室の前にある長椅子に静かに座つていた

集中治療室には……翔がいる。田の前でガラス越しに医者たちに処置を施されている

無惨な姿に変わっている翔を、健斗は直視することが出来なかつた

……

ただ静かに自分に対する怒り、後悔……悲しみ……不安……多々の気持ちが健斗を放心状態にしていた

と、するとだつた……

廊下から、誰かが走つてくる

「健斗つ……」

健斗は自分の名前を呼ばれ、ゆうべつと顔を上げた
ゆると走つてくるのは、母さんと父さん……そして翔の両親だった。
母さんと父さんがすぐに健斗に駆け寄つた

「健斗つ……大丈夫！？何ともない？」

母さんの必死な呼びかけに健斗はゆうべつと小走り頷いた

母さんはそれを見て、涙を流しながら、安心するよつて言つた

「よかつた……本当によかつた……」

「だから言つたろ？」いつがそんな簡単に死ぬわけねえつて

と父さんも嬉しそうに笑つた

健斗は素直に頷けなかつた。健斗は翔の両親を見ていた。翔の両親
は、翔の無惨な姿を見て絶句していた

それから、母親が大きな声で泣き崩れた。父親の方も自分の妻を抱
き締めて、泣いていた。

そんな様子を見て、健斗は心が痛んだ

母さんが、優しく静かに健斗を抱き締めてくれた……

身体が震えていた

恐怖で頭がいっぱいだった。母さんにしがみつき、苦しみに耐えていた

父さんがそんな健斗の様子を見て、暖かく「大丈夫」と声をかけてくれた

「健斗……大丈夫だ。翔くんは大丈夫だ。心配すんな」

父さんの暖かい言葉が、不安を支えられてくれた

けど、震えは止まらなかつた

健斗は母さんに寄り添い、一人を怖がつていた

そう

怖かつた

一人になるのが

すごく怖かつたんだ

今でもはっきり覚えてるんだ

「……の…せいだ……」

健斗は震える声を必死に出した。その言葉に母さんと父さんが静かに耳を傾けてくれた

「俺の……せいだ……」

健斗は次第に涙を流していた。

「俺……犬がひかれそうなのを見て……飛び出しちゃつたんだ……俺が飛び出さなきや……翔は……翔は……俺のせいだ……俺……俺……」

健斗がパニックを起しちゃつとしたとき、母さんはまた静かに抱き締めてくれた

「もういいの。もういいのよ健斗」

「母さん……俺……俺……」

絶望に浸っている中、母さんは健斗の身体を擦つてくれた

「あなたは悪くない。悪くないわよ? 犬を助けたかったのよね……分かってるから……あなたは何も悪くないわ。だから眠りなさい……」

「……」

母さんはもう言ひ続けてくれた

それから何時間が経つただろう……

健斗が母との懐で眠つてみると、集中治療室のドアが開く音がして健斗は目を開いた

中から年配者の医者が出てきた

マスクを取つて暗い表情を浮かべた

翔のお母さんとお父さんが、すぐさま医者に聞いた

「先生つ……翔は！？翔は助かるんですかつー？」

両親の問いつて、医者はしばらく黙り込んでいた

最悪な展開が頭をよぎる……

健斗も母さんから離れ、立ち上がった

医者ははつと顔をあげた

そして……

「…………最善は御くしました…………しかし、非常に残念な」と……

医者は一息つくと、両親の目を見て静かに言った

「お子さんの翔くんは……たった今、脳死が確認されました……

……の、……し？

「まだ息はしますが、かるい感じです……やがて息も……引き取
ると思います……」

悲痛の叫びが健斗の耳を貫いた

翔が……のう……し？

脳死つて……

何だよそれ……

翔が……翔が……

泣き声が廊下に響き渡る……健斗は医者を見ず、翔を見つめていた。

「そんな……」と……

健斗は翔に向かつてあるきはじめた。医者を通じこして、集中治療
室の中に入った

翔を見る

翔の表情は、白かった。

そう、生氣がなかつた

まるで人形のようだ、そこに横たわっていた……

「翔……起きろよ……翔……」

健斗の呼びかけに、翔は反応しない

健斗は歯をくいしばつた

「翔！…ふざけんなよつ…！死ぬなよ…！死ぬなつて…！行くなよ
つ…！何でだよ…！」

健斗は翔を揺さぶつた。ぞうぞうした感触……

包帯を触つてゐるから

「死ぬなよ…！サッカーやるうぜ…！…ずっと続けてくんだろ…！？約
束しただろつ…！…起きろよつ…！…翔…！…翔…！」

「君……やめなさい」

医者が健斗を止めようと身体を押せんでくる。けど健斗はそれを振り
り払つた

大声で呼びかけた

「お前……好きなんだろ……？」

健斗はテレビのドラマで見た、心臓マッサージをしながら叫んだ

医者の手を振り払ってでも続けた

「早川結衣が好きなんだろ……？お前言ってたじゃんっ……せつかく
……せつかく良い仲になつてたんだろ……？だから起きあがみつつ！
！翔……こんなところで死ぬな……死ぬなつ……！翔……！」

「やめなさい……翔くんはね……」

「うめせえ……」

健斗は涙を流しながら、止めようとする医者を睨み付けた

「まだ息あんただろ……？生きてるんだろう……？あんた医者だろ……？
助けるよ……？……何で……何で諦めんだよ……？翔を……翔を見捨て
てんなよ……！」

健斗は息を荒くして、医者を睨み付けた

医者は何も言わなかつた……

自分でも本当は分かつてた

「わざわざよつもないんだつて……」

「翔……」

翔の両親も集中治療室に入つてきと、翔を見た

「翔……翔……」

両親はその場で泣き崩れた……

その様子を見て健斗はそれ以上何も言えなかつた……

自分以上に一番悲しみを感じているのはこの人たちだ……なのに、俺は……俺は……

「……くそつ……」

健斗は咳くと、集中治療室を走つて出でていった

「健斗っ……！」

涙を流している母さんを通りこして、健斗はそのまま走り続けた

廊下を走り抜け、病院を走つて出でていった

冷たい雨が降り続いてる中、健斗はその中を走り続けた

町の中を……ただ走り続けたんだ

行き交う人……変わる景色……ただ、悲しみを抱きながら走る健斗
は……哀れだつた

走りながら走馬灯のように思い出されるのは、翔との思い出……

初めて会つたのが、6歳……サッカークラブに入つてきた翔……

『俺、翔つてんだ!! お前なんてーだ?』

笑いながら、そう握手を求めてきた翔……

サッカーがめちゃくちゃ上手くつて、この日から翔とは親友でありライバルだった

楽しかつた……翔といった日々が……

いつしょに公園でサッカーをやつた

翔の家でゲームして遊んだ……

喧嘩もした

何回も、何十回も……

けど最終的には、前よりももっと仲良くなつてた

翔と笑い合つた日……いつしょ川に釣りしに行つたとき、健斗が足を滑らせて川に落ちたことがあつて、二人で笑い合つたつけ?

翔と泣いた……

小学校の卒業式とか……試合に負けて悔しかった日とか……

翔が……その翔はもういない

『俺とお前はずつとサッカーをやつてく。 そつ約束したべ?』

翔はあのときそつ言つた……

サッカーをずっと続けていく。 高校でも大学でも社会人になつても……サッカーを楽しみ続けていくつて決めた。

健斗は息を荒くしていた……翔の言葉を一つ一つ思に出していく

『なあお前さ……好きな人とかいるか?』

翔に好きな人がいるつて聞いて、びっくりしたけど
何だか嬉しかつた……

翔の恋が……上手く行くようなと思ってた

あの日……翔と広大な青い空をこっしょに見た

『……俺さ、空好きなんだよな』

『何か空つてさ色々な表情があつて人間みたいで面白いよな。晴れてるときは笑つてて、曇りのときは落ち込んで、雨のときは泣いている……何か、空見てるとこっちも同じ気分になつてくんだよな』

「……うわっ！」

健斗は町の中を走つていると、足をつまづいて転んでしまつた……

そのまま健斗は起き上がらなかつた……

翔の言葉を思い出し、翔の表情を思い出し……翔との日々を思い出す

翔はもういない

翔は……もういないんだ……

俺……翔と喧嘩したまんまだつた

翔に……酷いことに……俺……

「翔……翔……う……うわああああつうつ……」

健斗はおしゃべられなに感情を一気に爆発させた

雨の中、うつ伏せになりながら健斗は……

泣いていた……

次の日……翔が死んだことは、教室中に広まっていた
みんなひそひそと健斗に聞こえなこようつに話していた
いや、それでも本当はちゃんと聞こえていた。

「ねえ……翔くん、交通事故で亡くなつたつて

「知つてゐる。山中を助けようとして、身代わりになつたんだね?」

「おいバカッ！…そんな言い方はないだろ」

「でも、事実そつなんでしょ？」

誰でもいい

誰でもいいから……暖かい言葉が欲しかった。

けど聞こえてくるのは、非難の声ばかりだった

苦しかった……

自分を責め続けた

「健斗」

ふとヒロが健斗に近づいてきた

ヒロは周りを見渡すと悔しそうに歯をじりをした

「……教室出よつせ……めい……」

ヒロは健斗の味方になってくれた

俺を……気遣つてくれた……

「大丈夫か？」

中庭で、ヒロは健斗に話しかけた

けど健斗は何も言わなかつた……ただ黙り込んでいたのだった

しばらく沈黙が続く

「……俺……や」

健斗が言つてヒロは静かに健斗を見た

「俺や……あいつと喧嘩したんだ……」

「え？」

健斗は虚ろになりながらも、そう言つた

「あいつがサッカーをずっと続けてとか言つてきて……本当はス
ゲー嬉しかったのに……素直になれなくて……俺、あいつにお前
なんか友達でもなんでもないつて……なのにあいつ……俺……なん
であんなこと言つたんだろ……俺……」

健斗は頭を抱え込み、自然と流れの涙を隠していた

ヒロは静かに健斗の背中を擦ってくれた

何も言わずに……静かに……

翔の葬式、翔の家族はみんな泣いていた

翔の家族だけじゃない。翔の友達や、クラスメイトも……焼香をしながら泣いていた

ふと健斗が焼香をし終わると一人の女の子が目に[写]つた

早川だつた

友達に抱かれて泣いている……

あのとき早川は、健斗に翔のことを聞いてきた……

あれは何のために聞いてきたんだろ?つか

葬式が終わり、健斗は翔の仏壇の目の前で佇んでいた

翔の笑つてゐる[写真]が飾られてゐる

もう翔の身体は……灰になつたことだらつ

健斗には耐えられなかつた……だからここで翔の顔を見ていたかつた

するとだつた

「山中くん

ふと呼びかけられて健斗は後ろを振り返つた。するとそこには、早川結衣が喪服姿で健斗を見ていた。さつきまで泣いていたのが嘘のようになんでいた

「……何してゐるの？」

「……別に」

健斗はフイッと顔を剃らした

すると、早川は健斗に近づいてきた

「翔くん……氣の毒だつたよね」

「…………」

健斗は何も言えなかつた……

早川は翔の遺影を見つめていた

「……翔くんね」

早川が口を開き、健斗はそれに耳を傾けた

「翔くんね、委員会の仕事やつてるとか、こつも山中くんのこと話してたよ」

「え……？」

健斗が聞き返すと早川は笑いながら続けた

「山中くんは凄いやつだつて、サッカーがすっげー上手くつて、最強のライバルで最高の親友だつて……本当にこつも……山中くんのことを嬉しそうに話してたよ」

健斗は何も言えなかつた……

その代わり、健斗は翔の遺影を見つめていた。

「みんな……翔くんは健斗くんのせいで亡くなつたつて言つてるみたいだけど……私はそつ思つてないよ。だから……」

早川は静かに笑つた

「山中くんは悪くなつたよ」

「…………」

早川は確かにそう言つてくれた

本当に嬉しかつた……

優しい笑顔で俺にそう言つてくれた早川は、とても優しい女の子だ
ということが分かつた。

暖かい気持ちになつて、本当に嬉しかつた

涙がでそうになるくらいに、凄い嬉しかつたんだ

けど……それと同時に何だか苛々が募つた……何故か……分からな
いけれど

「山中くんは悪くないよ。だから……」

「うぬせえみ……」

健斗は苛々して、思つてもいないことを口に出してしまつた

「お前に俺の気持ちが……分かるかよ

翔の好きだつた早川結衣……早川には、優しい言葉をかけて欲しく
なかつた

責めて欲しかつた

健斗のせいで翔は死んだんだって

責めて欲しかった……

だから自分に腹立だしくなって……

健斗はそう言つて、早川の前から立ち去り去りとした

もつ何も聞きたくなかったから……

そのまま帰り去つとした。

けど……

「それでもつ……」

早川は健斗に必死に叫んできた

「それでもつ……山中くんは悪くないよ……」

早川は最後まで俺にそう言つてくれた

最後まで……

「早川が？」

ヒロはそれを口にすると、ヒロは驚いたような表情を浮かべていた。
「さすがに、ヒロは笑った

「優しい子だな……早川」

「え？」

ヒロは少し困惑っていた

「あいつも、翔のことが好きだったんだって」

それを聞いて健斗は驚きを隠せなかつた。早川も、翔のことが?
だつたら……何で?

少なくとも健斗よりかは辛い思いのはずだ

一番憎むはずの相手なのに……

「きっと、今も凄い辛いんだろうぜ……けど、それでもお前に元気になつて欲しかったんじゃない？」

健斗は何も言えなかつた……

それから、健斗は早川のことが気になっていた

翔の好きだった早川結衣は……いつの間にか、自分も早川に惹かれていた……

そして、大好きだったサッカーを辞めた……

今でも震える……翔を思い出すと……足が震えてしまう

楽しめないサッカーをやつても仕方がないから……スペイクを……
サッカーを……捨てたんだ

健斗は空を見上げると、いつも翔を思い出す。翔の好きだった空……
翔の大好きだった空を思い出す

翔は空になつて、今も俺を見ているんだ……

だから生きよつと思つた。

翔の分とか、そういうかつこつけた理由じゃない

ただ翔が見ているなら、いつまでも泣いてるわけにはいかないと思つたから

だから強く生きよつと思つ

翔にバカにされないよう」

笑って生きたいと思った

だから翔 お前はいつも、青い空の中で 笑つてな

笑つてるよ…… 翔 翔

ふとドアがノックされる音が聞こえ、健斗を田を覚ました

自分の田元に濡れた感触がした……涙が溢れていた

健斗はすぐに涙を拭き、ドアの方を見た

一体誰だらうか？母さんか？父さんか？

けどそのどちらでもなかった

ドアのノックする音と共に声が聞こえた

「健斗くん……」

麗奈の声だった。やけに元気のない沈んだ声だった。麗奈らしくない感じがした

健斗はふと麗奈に対する蠟りを思つ出しだが、それはもう『眞にしないことにした

だつていつまでも氣にしたらい、身体がもたない……

ふとドアが開き、麗奈部屋に入ってきた

少々戸惑つて健斗を見ている。何の用だらうか？

健斗を見ると麗奈はドアを閉めながら言つてきた

「『ラメン』……寝てた？」

「…………いや…………どうした？」

健斗は優しくそう詰き、ちよつと笑顔を見せた。麗奈に対する躊躇つなんて消えていた。麗奈も軽く頷いて、ゆづくつと健斗に近づいてきた

「あの…………今日『ラメン』ね…………心配かけちゃって…………雨降つてゐるのに、わざわざ探しに行かせちゃって」

「ああ…………別に。早く晩飯が食いたかっただけだから」

と健斗が恥ずかしそうに顔を叛けながらそう言つた。麗奈は少し笑つてくれた

何だか…………それでも麗奈らしくないような気がしてやりこくかつた。

しづらへ氣まずい雰囲気が、部屋の中を流れた

「あ、そうだ」

健斗は鞄からペーパーホル袋に包まれた、ヒラヒラおんじゅうを取り出した

「せひ、八百屋のおばさんがお前にだつて」

健斗がそうこうと麗奈はゆづくとそれを受け取つた

「……ありがとう」

「 もう自分の部屋に行けよ。全然氣にしてないから」

と健斗が言つと、麗奈はちよつと困惑つていた

まだ何か話したことあるのだろうか？

健斗はしばらく麗奈を見ついた

「 健斗くん……あの……」

「 何だよ？」

健斗が聞くと麗奈はちよつと恥ずかしそうにためらつていた

健斗はちよつと苦笑いしながら言つた

「 何か……いつものお前らしくないんじゃない？あのウザイめの元氣をせどりに行つたんだよ」

健斗がやつと言つと、麗奈はやつと頷いた。

こんな風に普通に接してやる健斗だが、やはつちよつと眞ままで眞まではした

すると麗奈の弱々しい声は強く輝きを取り戻すよつた声になつた

「あの、ゴメンね」

「だから『氣』にしてねえって」

「違うわ。あの……」

また麗奈は言い詰まつた。麗奈が何を言おうとしているのか分かつて健斗は真剣な表情を浮かべた

「昨日……あんなことしちゃって……」「めんなれー」

麗奈が頭を下してきた。

本当に反省してるからこそだった。この能天氣でおバカな麗奈が、頭を下げるなんて思つてもなかつた

もうキスのことは怒つてなかつたから、逆に可笑しさが込み上げて
きた

しばらく沈黙が続いた。

「……それ」

健斗が指差しながら言つと、麗奈はふと顔を上げた

「ユリイちゃんじゅう分けてくれたら許してやるよ。」

すると麗奈はヒヤヒヤまんじゅうを見た。健斗はそれから頭をかきながら息を吐いた

「本当に怒つてない？」

また麗奈に「そう訊かれて健斗はゆっくりとうなずいた

「別に、ファーストキスつてわけじゃない」

そう健斗が言つと、麗奈はすく驚いたような表情を浮かべた

「健斗くん……意外とやるんだね……」

「まあな。ファーストキスが父さんだって知らなかつたら、まだお前のこと怒つてたかもしない」

「……」

「……」

麗奈は健斗の返事に畳然としていた。しばらく沈黙が続くと、麗奈が吹き出してきた

「ブツ……クスクス……アハハハハハ」

「なあに笑つてんだよバアカ」

健斗もつられて笑いながら麗奈に言つた

麗奈は可笑しそうにお腹を押されて笑つてゐる

「アツハハハハ だつて！！アハハ」

「笑い過ぎだよ」

こんな感じでしばらく一人は笑い合っていた。さつさまで感じていた二人の蟠りは完全になくなつたような気がして、また全てが元通りになつたような気がする

麗奈といつもどおりの関係になれたことに健斗はとても安心していた

「ふいーつ……もう健斗くん」

麗奈は涙を拭きながらまだ笑っていた

「私本当に氣にじてたんだからねー！一健斗くんずっと怒つてると思つたから」

「いや……最初はあれだつたけど、何かもひどいでもよくなつたから」

健斗は頭を搔きながら恥ずかしそうに続けた

「たかだかキスされたくらいで……そんなに怒ることもないよな。だから、あのことはなしつ！！水に流すつてことで」

健斗がそう言つと麗奈はふと笑顔を見せて、何も言わなかつた

すると麗奈はゆつくつと健斗に近づいてきて、健斗のベッドに座つた

「えつと……今日どうだった？」

「何が？」

「遊びに行つたんだね。ビームで行つたんだよ」

健斗が聞くと、麗奈は思つて出すよつて答えた。

「えつとね……神乃崎商店街を抜けた方まで。何か車道があつて、そこ近くにあつたファミレスで、飯食べてた」

「そつか……」

健斗がそんな風に言つて麗奈はそりと聞つてきた

「ほとんどが結衣ちゃんの恋バナだつたけど」

それを聞いて、健斗はまた違つ心の痛みを覚えていた

「あつ……ゴメン……」

「いこいこによ……俺はどいつもからついた身ですから……」

と健斗は深くため息をついた。すると麗奈が少し笑いながら言つてきた

「でも、結衣ちゃんまだ主将さんと付き合つてはないみたいだよね？」

それを聞いた瞬間、健斗は過剰に反応した

「マジでつーへ？ 口から付き合つて聞いていたけど……」

「何か噂ではそつなつてるみたい。でも本人は違うって言つてた」

「それって隠してるだけなんじゃねえの？」

健斗が疑わしい目で見ると麗奈は首をかしげた

「さあ……多分違うと思つたけど」

「何で言い切れんだよ」

「だつて結衣ちゃんつて嘘つくような人に見える?」

健斗はそれを聞いて少し呆れた

「そつは見えないけど、人間そつこうのは隠したいもんだろ」

「そつかなあ？」

「お前だつてそんな噂が学校中に広まつてたら、嘘ついてでも否定するだろ?」

健斗はそつ言つてからまた深くため息をついた

「事実を隠そつとするの?」

麗奈は首をかしげていた

「本当に好きなら堂々としてればいいじゃん」

健斗はそれを聞いてしばらく麗奈を見つめていた。それと同時に少し可笑しさが込み上げてきた

麗奈らしさを考えと言えば、麗奈らしさを考えである

「……あつ、そつこえばたあ

麗奈が何かを思い出すかのように呟つてみた。

「結衣ちゃんね、中学のときにすゞぐ好きだった人がいたんだって。もしかしてそれって健斗くんのことじやない?」

健斗はそれを聞いてふと心を沈めた

早川の好きだった人……か……

「それ……早川が話したのか?」

「マナが結衣ちゃんに付き合つた入つて何人くらいって訊いたら……そう言つてた」

「そつこ

「健斗くんじやないの?」

健斗はゆつくりと首を横に振つた

「俺じやねえよ」

健斗は麗奈から離れ、窓から外の景色を眺めていた

そんな健斗にまた大胆に近づいてきた

「何で？ 健斗くん知ってるの？」

「…………知ってる」

健斗がやうやくいつと、麗奈は驚くよつと叫びついた

「ウソ～？ ね、誰々？ もしかしてヒロくん？」

健斗は麗奈を見ずに空を見上げた

雨がしつこく降っていた……

「…………翔だよ」

しばらく沈黙が続いた。健斗の言葉に麗奈の表情は、笑いから哀しみに変わっていた

雨の音だけが、聞こえる……

「…………しようつ……って、健斗くんの…………」

健斗はゆづくと頷いた。

「」の前話したやつだよ。俺の親友……

「…………」

謝る麗奈を見て、健斗は笑いながら言った

「謝るなよ。別に悪いとしてないだろ？」

「でも……」

「お前がそんなし�ょげた顔すんじゃねえよ、全然似合つてねえ」

健斗はやつ言いながら、麗奈の額を小突いた。

しばらく麗奈は何も言つて来なかつた

多分自分が容易に誤いてしまつたことを後悔してゐるんだろう

まさか翔だとは思わなくつて……

「……俺さ」

健斗は降り続ける雨を見ながら呟くよつと言った

「俺さ……今日、翔のことばかり思つて出した」

「え？」

健斗は笑いながら今でも翔の顔を浮かべていた

「時々そつなんだ。あいつが死んで、もう2年は経つのに……何回も思ひ出すやつ……」

麗奈はふと健斗に詰めた

「健斗くん……翔くんは自分のせいで死んだって言ってたよね？」

「……そうだよ」

「今でも？」

「……うん」

今でも思つてる

自分のせいでの、翔は死んだんだって……

「翔を殺したのは……俺だよ」

健斗はそんな風に寂しそうに呟いた

翔を殺したのは……俺なんだ……

翔の家族は、今はこの神乃崎には住んでいない

この場所にいるのには耐えられない……だから引越しと書いて、泣きながら引越してしまった……

俺が翔を殺したせいで、翔の家族の幸せも奪っちゃったんだ……

あの日から、たまに迷つときがある

強く生きようと決意した日から……

俺はこんな風に、普通の生活を送つてもいいのかつて……

人の人生を奪つた俺が、生きてる権利なんてあるのかつて……

そう後悔することが多かつた……

「もし過去に戻れるなら……俺はあの日に戻りたい……もしあの日をやり直せるなら、俺は……」

ふと麗奈を見ると、健斗は少し驚いてしまつた

麗奈は泣き声をあげながら、泣いていたのだ。

「麗奈……？」

麗奈は涙を拭いながら、下をうつ向いていた。健斗は優しげな声色で麗奈に語りかけた

「バカ、何でお前が泣くんだよ。泣くなよ」

初めて見た麗奈の泣き顔……

するとじだつた……

突然麗奈が健斗に抱き締めてきた

健斗の胸に顔を埋め、押さえられない涙を流していた

健斗は訳が分からなかつた……

一体何が起きてるのか……理解するまでに時間がかかつた

「お、おい……ど、どつしたんだよ」

意外にも冷静に麗奈に言つ

けど麗奈はずつと泣いたままだつた

心臓が高鳴る……顔も熱くなる

ヤバいつてこれは……

「離れろつて……麗奈」

けど麗奈は離さないとはしなかつた

健斗は力づくで麗奈を止めようとはしなかつたけど、かなり困惑していた

「…………して……」

「…………え…………え？」

麗奈が何かを言つてゐるが上手く聞き取れなかつた

「…………？」

「な、何がだよ……」

「うつむかが訊きたいよ……どうして泣いてるんだよ

「どうして……そんなこと聞くの？」

麗奈はグスグスと泣きながら、静かに続けた。

「みんな…………みんな…………哀しいんだよ？みんな、同じくらい哀しいんだよ？」

健斗はじぱりく黙つていた

「みんな同じだよ…………健斗くんだけじゃないよ…………」

「麗奈……」

「みんな同じくらい哀しいのに…………自分が殺しただなんて…………言わないで……」

麗奈はせりて健斗の胸に顔を埋めた

しゃがれた声で健斗に言つてくる

「…………過去をやり直したいだなんて…………言わないで。そんな寂しい

「……言わなこでよ……」

健斗は何も言えなかつた……麗奈の暖かい気持ちが健斗に伝わつて
きた

すると麗奈はゆつくりと健斗から離れた

鼻ですすり、涙を拭う。しゃがれた声で、健斗に叫つた

「そんな健斗くん……私嫌だよ……」

麗奈の短い言葉で健斗は胸が暖まつた気がした

嬉しかつた……泣いている麗奈が……「こんな俺のために泣いている
麗奈に、感謝の気持ちでいっぱいになつた

「「ゴメン……」

麗奈は泣きながら、顔を赤らめて健斗の胸を指した

「「」、濡らしかつた」

「え……いや、大丈夫」

「惑つてる健斗を見て、麗奈は可笑しそうに笑つた

「えへ、「ゴメンね。何か、健斗くんや結衣ちゃんがすごい辛い思い
をしてるんだなあつて思つたら……何か急に悲しくつて……」

「……せつか……」

するとひふと麗奈は涙を拭いながら微笑んできた

「IのIとも、水に流して」

「え……あ、ああ」

するとひふと麗奈はベッドから降りて、ゆっくりと立ち上がった

「私……もう寝るね。おやすみ」

「あ、うん。おやすみ」

麗奈はゆっくりと部屋を出ていった。

出ていったあと健斗はしばらく無然としていた

まだ身体中に麗奈の温もりが残っていた

そして泣いている麗奈の顔を思い出した

突然過ぎてびっくりした。けど、何だか救われたような気がした

翔が死んで2年経った……今初めて、心が軽くなつた

第4話　過去　P・9（後書き）

すみません……また第4話のあいすじをつまひとつ変えました

そして次の日の朝、雨は止み……空から雲は消え気持ちのいい晴れになっていた

健斗はまだ寝ていたから気付かなかつた

気持ちのいい朝に、窓から吹き込む優しい風が心地よかつた

時計の針は7時半を指していた。そろそろ起きるべき時間だが……
健斗は全然起きよつとはしてなかつた

と思つたら、健斗はゆっくりと目を開けて身体を持ち上げた

じまじくの間まくつとする。それから朝だといつことに気が付いた。

健斗は欠伸をしながらベッドから降りて、ゆっくりと立ち上がる

早く顔を洗つて支度しないとな……

一階へ降りていって、居間に入ると味噌汁のいい匂いがした

健斗がキッテン覗くとそこには……

制服姿にエプロンを着た麗奈がいた

健斗が起きたことに気がついてゆくと微笑んできた

「おまえーー！」

「あ、おひ……おはよひ」

健斗は少々困惑の気味で麗奈を見ていた

「母さんは？」

「お母さん、今日朝早くから仕事だよ」

そつか……今日は△勤だったつけ？

麗奈は味噌汁をかき混ぜながら、健斗に囁いてきた

「すぐ朝(はんこ)するから、先に顔と着替え済ませてもらひ。」

「うそ……」

健斗はギョキマギしながらおひで居間から出ていった。

ちよつと驚いてしまつた……昨日あんなことされたから、妙に意識しちゃつてるのか……

麗奈がす(じ)く大人に見えてしまつた……

そつまるで朝に夫の朝食を用意する妻のよう……

変な感じだ……

健斗は顔を洗い、ため息をつきながら制服に着替えて、また居間へと降りていった

居間にはちやぶ台が出されていて、麗奈はそれに朝食を置いていた。健斗は恐縮しながらゆっくりと座り、目の前に並べられた朝食を手につけた

今日は味噌汁とご飯に、卵焼きだった

朝にしては充分だった。

「 いただきます」

健斗は箸をとつてまず味噌汁を飲む……

……

「 美味しい？」

「 ……美味しい」

麗奈も座つて、ご飯を食べながら訊いてきた

正直な感想だった。普通の豆腐の味噌汁だったけど、美味しかった。

「 お前つて、本当に料理上手だな」

「 えへへ 」

と麗奈は顔を赤らめていた

健斗はそんな様子を見ながら卵焼きを口に運ぶ

「これもまた美味かつた。ちなみに卵焼きは甘い味だった

健斗は塩味の卵焼きに慣れてたから、ちょっとびっくりしたけど……問題なく美味しかつた

「美味いっ

「そ、そんなに言わないでよ~」

麗奈は恥ずかしそうに言つのを、健斗は可笑しそうに笑つた

「でも美味いんだもん。お前スゲーな」

「卵焼きなんて誰でも作れるよー」

「俺……作れないんだけど」

健斗が言つと麗奈は可笑しそうに笑つた

「料理ダメなんだ」

「料理と言えないもんなら作れるよ」

「何それ。まあ確かに健斗くんそういうの苦手そうだよね」

「悪かつたな」

健斗はむつとした感じで言つて、麗奈は笑いながら卵焼きを食べた。

「知つてゐる？料理出来る人つてモテるんだよ？」

「……だから？」

「だから健斗くん料理上手になつたら、結衣ちゃん気が替わるかもよ？」

「余計なお世話」

健斗はふんつと不機嫌そうに言つた

「もう諦めてんの一？」

健斗にそう訊いてきた麗奈は残念そうだった。健斗はそんな麗奈を見て、呟くように言つた

「お前……俺の恋愛見て楽しんでんだろ？」

「え……まあ、それなりに……」

健斗はそれを聞いてカチンときた

不機嫌そうに味噌汁を飲みながら言つた

「とにかく、もう俺はきつぱり諦めましたから。残念でした」

「え～？何で～？」

「早川に好きな人いるからだよ。しかも相手はあのサッカー部の主将だぜ？学校一イケメンって言われてんのに……勝てるわけねえだろ」

健斗は味噌汁を置いてご飯を口にした

「それこ、やう思つてなきややつてらんねえよ……」

そんな健斗を見て麗奈は呆れるようにため息をついた

「まつたく……君つてやつは……」

「何だよ」

「何でもない。『やがれやがれ』

麗奈は食器を片付けて、キッチンの方へと歩いていった

「何だよ。言いたい」とあんだつたら言えよな

健斗は不機嫌そうに立つて麗奈は健斗を見て言つてきた

「そんなことより、早く朝ごはん食べて、学校行く準備してよ。遅れたら健斗くんのせいだからね。けやんと歯も磨いて……早くしてね

麗奈は急に大人びた口調になるととつとと居間から出ていった

健斗はそれがたまらなくむかついた

苛々が込み上げきた

「あつ

廊下から麗奈が顔を覗かせた

「ちゃんと食器洗つてよね」

それだけ言うと麗奈は階段を上つていった

わーい!! みんなへりやう

健斗は何か急に悔しい気かして苛々していた

健二はふくわ一人言を言つたが「朝」はんを養々と食へてした

「……ちくしょう!! 本当に美味しいこれっ!!」

と、麗奈の卵焼きを悔し紛れに一気に口の中に入れた

「鍵閉めたか？」

健斗は自転車を壇の外まで持つていきながら、麗奈に訪ねた

麗奈は鍵を持つて健斗の元に走ってきた

「大丈夫」

と言つていつも通りに、自転車の後ろに座る。

「よし…学校まではしゃつぱあ～つ…」

と元気良くそう言つてきた。そんな麗奈を見て、健斗は可笑しそうに笑つとめりくじと自転車を漕ぎ始めた

いつもの道をいつも通りに漕いでいく。けど何だか妙な感覚がした。
昨日、一人で自転車を漕いだから……

寂しさを感じた

けど今は麗奈が後ろに乗っていることが、安心感をもたらさせていたことに気づいてはいなかつた

麗奈は後ろで鼻歌を歌いながら風を感じていた

「気持ちいい」「

いつも脇へよづいた

気持ちいい……か……

確かに気持ちよかつた。風を感じると、何だか心地よかつた

「やっぱ楽しいなあ」「

「今更何言つてんだよ」

「だつて昨日ヒロへんこ送つてもひつたんだもん」「

健斗はそれを聞いて不思議そうに言つた

「俺もヒロも変わんないだろ?」

「変わるよ

と麗奈は即答してきた。健斗はまた不思議に思つて、後ろを振り返つた

麗奈はとびっきりの笑顔を見せていた。それが何だか可愛くつて健斗は笑つた

「何が変わるんだよ~」「

「ん……なんか、健斗くんじゃないと安心感がない」

「何だそれ……そんなに俺を信じきつてんの?」

と冗談を加えて麗奈に聞いてみた。すると麗奈は当然どこかうつむいて健斗に言った

「信じてるよ」

麗奈は微笑みながらうつ笑ってきた。健斗はそれを聞いて何だか気恥ずかしくなつて、ブイッと前を向いた

「……3割は」

「はあ?」

健斗はまた後ろを振り返った

「あと7割は何だよ」

「7割は……不安と心配」

「同じじやねえかよ」

「同じじやないよ。健斗くんが途中で転ばないかなっていう心配でしょ? あと健斗くんがゆっくりし過ぎて遅刻しないかなっていう不安」

「何だよそれ。わけ分かんねえ」

と黙つて健斗は可笑しそうに声を上げて笑つた

麗奈も可笑しそうに笑つていた

「だつたら不安と心配無くしてやるよー…ほりやー…」

と言いながら健斗はグングンとスピードを上げていった。麗奈は焦りながら健斗にしがみつく

「ちょつ……早いつ……早いつ…ばあつ…」

「遅れたくないんだり…？」

「やだつ…・・・ちょつ…・・・アハハ 危ないよつ…・・・」

「転ばない」ことを教えてやるよ。俺の高等テクを薦めんなよ…・・・」

健斗と麗奈は笑いながら、スピードをつけていつもの道をこいでいった

麗奈は笑いながら悲鳴を上げて、そんな麗奈が可笑しくつて大笑いする健斗…

何だかす」く楽しかつた

前よりも何倍も、何百倍も仲がよくなつていた。この感じ……前もどっこいで…

そう、翔もそうだったな。何回も何十回も喧嘩したけど、そのあとは必ずと黙つていいほどスゲー仲良くなつていた

それを繰り返していくたら、翔は俺の中でスゲー大切な存在になつていたんだ

麗奈も同じなんだと思つ……といつより、そつなつてゐることに今更ながら気がついた

あんなに麗奈を気にしていたことも、自分で徐々に麗奈が好きになつていつたからだ。

それは早川のように、恋愛として好きとは違つた

ただ、麗奈という人間が好きになつたんだと思つ

だから今ならはつきりと言えた

「麗奈……」

「ん~!~?」

風に乗りながら、健斗は大きな声で言つた

「俺さつ……お前の」と好きかもつ……」

「えつ!~?」

麗奈は驚いたような声をあげた

健斗は可笑しそうに笑つた

「勘違いすんなよつ！？お前のバカで能天氣で、おつひよーひよーで、マジで訳分かんねえところが好きだつてことつーー。」

そりなんだ。

もつ自分で麗奈は

一人の家族で

一人の親友で

スゲー大切な存在になつていたんだ

それに気がついたとき、俺はもつと麗奈のことが好きになつていた

麗奈という人間が、スゲー大切な人になつた

「……健斗くん」

麗奈は嬉しそうに笑つていた。本当に嬉しそうだつた

健斗は照れ臭かつたからに何も言えなかつた。すると麗奈は健斗の背中を叩いてきた

「もつ、嬉しいと言わないのでよつーー。」

「……悪かつたなつーー。」

「ありがとうーー。」

「別にいいって。せひ、ちゃんと捕まつてくれよ。」

健斗はせりてスピードをあげて学校へと向かっていった

健斗は途中の「コンビニ」で麗奈を下ろすことなんてわすれていた

忘れていたし、気にする「こと」をやめた

だつて麗奈は俺の家族なんだから。

誰かに誤解されたって気にする「ことはない

それが例え早川だとしても……麗奈は家族なんだから関係ねえよ

二人は笑いながら、学校へと続く坂を下り、さらにスピードをつけ
ていった。すると、田の前自転車を押しながら歩いている早川と佐
藤が見えた

麗奈もそれに気がついたらしくて大きな声で呼びかけた

「お~い結衣ちやあ~ん、マナ~ーーー！」

麗奈の呼びかけに一人は通り過ぎていく麗奈に気がついてしばらぐ口を開けて唾然としていた

「……一人が自転車に乗りながら登校してくるなんて……珍しいね」と、佐藤が不思議そうにそう言つてきた

けど早川は嬉しそうに笑いながら頷いた

「一人とも付き合い始めたんじゃない? ねえ結衣

「ああ?」

早川はクスクスと笑つていた

「昨日はあんなに仲悪かったのに……分かんない人たちね」

佐藤が呆れながらそういうと、ふうっとため息をついた

けど早川はゆつくりと微笑みながら、走つていく健斗と麗奈を見ていた

「よかつた……一人とも元通りになつて」

「え?」

佐藤は早川の言つたことが聞こえなかつたらしくつて聞き返してきた

「何でもないよ」

と早川は「機嫌そうに歩いていった。そんな早川を見て、佐藤はまた不思議そうに首をかしげた

「結衣も変……」

いつもより早く学校に着いて、健斗たちは自転車を駐輪場へと置いていった

「ふあ～っ……」

麗奈は爽快そうに自転車を降りた

「いつもより早く着いたな

と健斗は笑いながら言った

「「」のペースで毎日来ればいいな

「え～…やだよそんなの～」

「でも楽しかつたろ?」

「そりゃそりだけど、結構掴まってるのも大変なんだからね」

と麗奈はクスクスと笑っていた

健斗も笑つて、麗奈と共に校舎の方へと歩いていった

麗奈と喧嘩して、健斗は麗奈に対する素直な気持ちを吐き出せた

それがすく爽快で気持ちよかつた

やつと素直になれたんだ

それが何だか色んな意味で嬉しかつた

健斗は、機嫌そうに校舎の方に駆けていく麗奈を、笑いながら見ていた

ずっとこんな生活が続くと、本当に思つていた

そして願つていた

翔が死んでから、俺は毎日生きることが辛かつた

本当のことと云つて、生きるのが嫌になつてたときもあった

けど麗奈が来てくれてから、日々が変わり始めていた

最初は戸惑つてたけど、最初は嫌だつたけど……麗奈が俺に必要以上に関わつてきてくれたことに、本当に心が救わっていたんだな

麗奈がいたから、翔との過去を思い出すずにすんだんだ

だから麗奈には感謝をしていた

健斗は思い出していた

麗奈がこの町に来た日のことを……

びっくりするくらいの美少女で、それに最初はめちゃくちゃ嫌いだつた

こいつといると疲れるし、受け入れるのが嫌だつた

けどこいつの寂しそうな表情は忘れられなかつた

それから学校が始まり、毎朝こいつを後ろに乗せていくのがすげく嫌だつた

邪魔だつたし、スゲー嫌だつた……

おまけに俺に野良猫だのと言つてきて、そんな俺が好きと言つてた。訳が分からなかつたけど、本当はすげく嬉しかつた

それこいつはこいつなりに色々考えてるんだなつてことが分かつ

た。

能天氣で迷惑なやつばかりだと思つていたけど、自分が迷惑にならないようにと考えてたり、すぐ見直した

自転車の練習をしてる麗奈を見てすぐ感動した。イメージと全然違つことに気が付いた。

いつしょに練習して、10秒くらいだけ自転車に乗れた麗奈を見て嬉しかつたし、すぐ楽しかつた

買い物にも付き合わされたな……

そして……ここでの母さんのことも聞いた……

俺の過去を聞いて、いきなりキスしてきた麗奈には腹が立つた

けど、麗奈の大切さに徐々に気がついて……仲直りしたいって思った

俺のために泣いてくれたのは、嬉しかつた……

優しく抱き締めてくれて、今を生きて欲しいと言つてくれた麗奈が

……本当に嬉しかつた

あのときずつと持ち続けていた、心の傷が麗奈によって癒してもらつてたんだな

麗奈は俺の中でかけがえのない大切な存在だ。

翔がそうだったように……麗奈も同じくらい大切なんだ

それが今ならはつきりと言えた

大切な家族なんだ……

だから今なら胸をはれる。

空を見上げながら……翔を見た

今更だけど……翔、俺は前を向いて生きよ'うと思つ

今度は誓つよ

お前にしたことは、一生償いきれないことだけど、けど俺はお前を
忘れないから……

忘れずに、前を向いて生きていくから

今度は搖るぎのない決意で……

だから翔、見ててくれ

いつも青い空の中から、笑いながら……

それがお前にに対する……せめてでの償い……

いや、そんなことば言わないよ

俺は俺のために生きる。

それで……いいんだよな……

健斗は立ち止まって、青い空に流れる白い雲をみた

翔の……俺の大好きな空は……今でも笑っているんだな

「健斗くん」

ふと呼ばれ、健斗は前を向いた

麗奈が健斗に向かって言つてきた

「早くう~つ……」

「分かっているよ」

健斗は笑いながら、校舎の中へと向かっていった

色々な過去を背負つて、色々な支えを受け、それでも強く生きようと決めながら……

光に向かいつゝこと、堂々と笑いながら歩いていった……

End

じつは11年間で読んでくださつてありがとうございました。

11年までの物語……いかがだったでしょうか? できればこのグッラブー自身に評価や感想を頂けると嬉しいです。

さて、続きはグッラブー2にて掲載されています。そういう方も読んでもらえると嬉しいです。

では次はグッラブー2でまた会いましょう!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5728e/>

グッラブ！

2011年2月21日23時38分発行